# 考古論叢

# 神会河

# 第11集

1口(矢主) 利山(コノ) (口 fid fi+ Vノ) (又   川 1 円 / X	ΙТЩ	///
"The Great Shuffle"	田村	大計
縄文時代中期中葉における土器型式の「大攪拌」と南西関東の様	相につ	いて
aがくびつほ いしぐも 長頸壺と石鍬 ·····	渡辺	<sub>9</sub>
―神奈川県における弥生時代初頭~中期の打製石斧―		
神奈川の古代のクラ	大上	周三
小田原城における元禄期以前の陶磁器群について	井関	文明
─小田原Ⅳ期の変遷を中心に─		
小田原市小船森遺跡の備蓄銭	小池	E
平成12年度神奈川県考古学会 考古学講座	諏訪間	引川
「相模野旧石器編年の到達点」コメント集	小池	<b>H</b> ;
	鈴木	次良
	織笠	H
	砂田	佳弘
	白石	浩え
	御堂島	# I
	伊藤	俊
	五十崖	貳 章
	栗原	伸好
	他田	+ 1

平成15年(2003)4月神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は、鶴岡八幡宮文書のうち、北条時宗が文永 3年(1266)5月2日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈 河」に拠るもので、これが地名神奈川の初出文書である。

# 考古論叢 神奈河

## 第11集

平成15年5月

# \*目 次

相模野細石刃石器群の技術構成	仲田	大人	1
"The Great Shuffle"	田村	大器	39
ながく ぴっぽ しいくか 長頸壺と石鍬	渡辺	外	55
神奈川の古代のクラ	大上	周三	83
小田原城における元禄期以前の陶磁器群について ─小田原Ⅳ期の変遷を中心に─	井関	文明	107
小田原市小船森遺跡の備蓄銭	小池	聡	123
考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」コメント集	諏訪間	引順	145

# 神奈川県考古学会

# 相模野細石刃石器群の技術構成

仲 田 大 人

- 1 はじめに
- 2 細石刃石器群の技術構成
- 3 BB0層出土細石刃石器群の技術構成
- 4 L1S 層下部における石器群の諸相
- 5 相模野細石刃石器群の技術構造
- 6 おわりに

#### 1 はじめに

細石刃石器群を俯瞰してみると、石材の選択、剥片剥離、細部調整加工などが、相互に関連しながら、その組み合わせによって石器群がのこされていることがわかる。これは細石刃石器群のみに特徴的なわけではなく、石器群を構造的に理解するという立場(稲田1969、矢島1980)に立つかぎり、ごく普遍的にみてとることができる。

細石刃石器群には、細石刃製作技術、一般剥片剥離手法、礫器状石核による3つの製作技術が構造化されている(鈴木・矢島1979)。そして、その組み合わさりに応じて、廃棄形態もさまざまにあらわれる。細石刃石核に焦点が集まりがちな細石刃石器群研究にとっては、重要な視点だといえるだろう。これによって、個々の石器群を成り立たせている原則を一つの系列として理解し、石器群が有する歴史性を評価する研究の視点へと方法的な移調がもたらされることになったからである。その後、同様な見地から、細石刃石器群の構造性を明らかにする意見が提示されることはあったが(田村1989a、1989b)、細石刃石器群の全体的な構造性をもとにした議論が深化されてきたとは必ずしもいえない。

本論では、細石刃石器群にみられる特質を通時的に整理して、石器群の構造性という枠組みにもとづいた変化のありかたを跡づけてみたい。そのために、層位的出土例に恵まれている相模野台地とその周辺の細石刃石器群をとりあげ、石器群の構造性から、遺跡間の関係性を復原する手がかりをつかむことを目的とする。

# 2 細石刃石器群の技術構成

関東地方の細石刃石器群には、3つの技術系列をみることができる。これらの系列は、石材の選択から、目的とする形態の製作、廃棄に至るまで、それぞれ独自の属性群を示しているが、

系列相互の関係は必ずしも固定的ではない。以下、それぞれ構成1、構成2、構成3とよぶことにしよう。構成1は細石刃製作工程を、構成2は一般剥片剥離手法における剥片石器製作工程、構成3は礫器状石核による剥片製作工程をそれぞれあらわす。こうした見方は、すでに先学の指摘するところであり(鈴木・矢島1979、田村1989)、とりわけ、田村氏が掲げた視点に定位しながら論を進めていくことにしたい。

#### 代官山遺跡第川文化層・吉岡遺跡群B区L1H層

これらの石器群は、相模野台地では出現期の細石刃石器群として位置づけられている。まずは、古相の石器群から観察することにしよう。

#### 構成.1

細石刃核原材、細石刃核のブランク(母核)、細石刃核、細石刃、細石刃核製作調整剥片という5つの段階をふくんでいる。石材は柏峠産黒曜石にほぼ限定される。

#### 「原材・ブランクの状態]

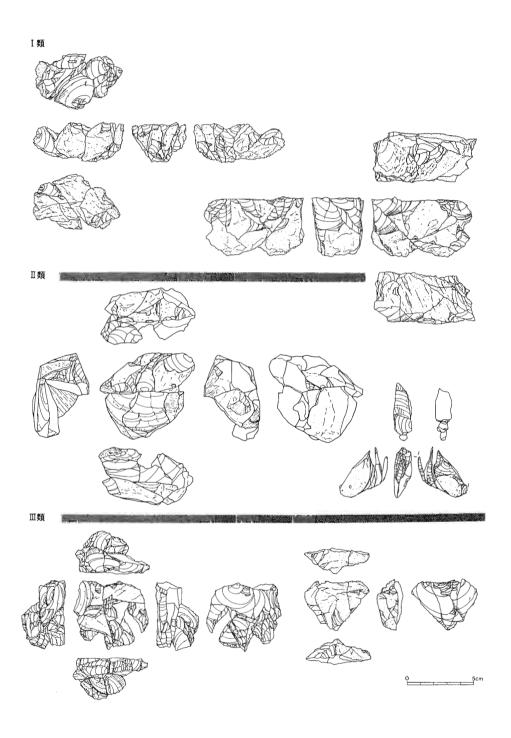
原礫の準備・搬入、分割から、細石刃剥離に至る各段階をふくむ。代官山遺跡第Ⅲ文化層、 吉岡遺跡B区は、細石刃核の製作工程を復原しうる良好な石器群である(砂田1986、砂田・ 三瓶1998)。これをもとに、出現期と目される石器群の製作技術をみてみたい(第1図)。

L1H 層上部の細石刃・細石刃核の基本的なイメージは、①打面が平坦な原礫面かあるいは一枚の剥離面であること、②打面調整が施される例はほとんど稀であり、細石刃核調整技術の適用は個体間においても顕著でない、③細石刃核側面調整が細石刃剥離の進行にともなって順次適用される、④原材が打面の条件を満たしているため、打面に接する石核側面形態もすでに具有していること、などがあげられる。おそらく、こうした諸条件を満たす素材の獲得が、この段階の細石刃核製作技術と関係しているのであろう。

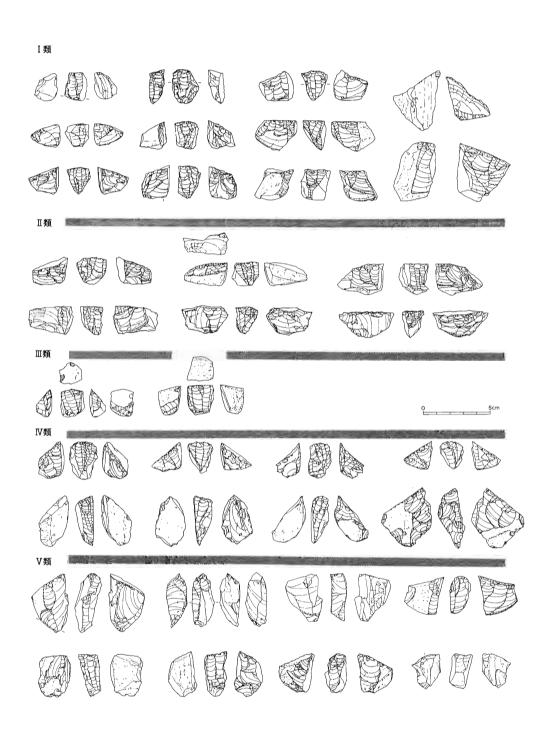
1類:細石刃核と原材・母核が1:1に対応する関係にあるパターン。直方体状の原石を原材として利用し、打面を平坦面に設定し、適宜、側面調整剥離をおこないながら、左右両側面にはさまれた小口部を作業面とする。この類型の細石刃核は、細石刃剥離を一定して連続的におこない、側面調整を施し、ふたたび細石刃剥離作業へと循環する。

2類:扁平な自然礫を素材とし、長軸または短軸方向に打撃をおこなった分割礫や厚手剥片 を角柱状の細石刃核素材とするもの。素材および細石刃核の背面もあるいは側面に、原礫分割 時の剥離面を有し、その剥離面を打面や作業面に設定する事例もある。

3類:基本的な工程はⅡ類とかわらない。砂田の指摘(1986)にもあるとおり、本類の石核素材の剥片をえるまでに最低でも2段階を経ており、素材の作出までにかかる工程数が大きく異なるようだ。素材背面に原礫面をのこす大振りの剥片を、ほぼ石核の節理に沿って分割し、さらに素材剥片を分割してブロック状剥片を細石刃核の素材とする。したがって、細石刃核素材には原礫面や節理面、分割時の剥離面が石核にのこされる。素材整形後には、原則的に打面



第1図 代官山細石刃核製作工程



第2図 代官山遺跡・吉岡遺跡B区出土細石刃核の形態

#### 相模野細石刃石器群の技術構成 (仲田)

への調整剥離はおこなわれないが、側面調整は個体ごとに偏在するようだ。

#### [調整剥片]

原材および母核形成の過程において、多数の調整剥片が生じる。調整剥片のうち、刃器状石器として石器へ転用される。この転用は、細石刃核整形過程に組み込まれている。L1H層上部石器群では、大半が使用痕のある剥片として利用される。

#### [細石刃核]

細石刃核は、代官山遺跡第Ⅲ文化層に33点、吉岡遺跡B区に74点あり、合計107点。これらはおおむね同じ形態であるが、いくらかの変異もともなう(第2図)。

唐突だが、ここで野岳・休場型細石刃核の認識について触れておきたい。結論からいえば、この石核の形態認識はあまりに拡大解釈が著しい。その要因は「野岳型細石核誕生過程想定図」(1971:180)にあると考えられる。ここでは典型的な円錐形細石核のみならず、その変異形と考えられる細石刃核までも一括して型式認定しているために、この問題は整理しておく必要がある。筆者は、AグループおよびBグループをふくめて野岳・休場型細石刃核とよぶことにしているが、「野岳遺跡でもっとも典型的な一群であり、角柱(錘)状の体形を有する」Cグループについては、別途に形態論的検討が必要であると考えている。したがってとくに断りのない限り、本論では細石刃核を以下に述べる類型によって表記する。

I類:単設の打面をもついわゆる半円錐形を呈するもの。製作工程との対応という観点から、 大体の個体は製作技術 I 類から製作される。石核形状は、ほぼ立方体で、打面長軸に対して直 交して作業面が設定されるものと、打面長軸に並行して作業面を設定するものとがある。両者 ともに打面には打面調整、打面再生はおこなわれない。

Ⅱ類:単設打面で、打面幅に比して縦軸に長い。Ⅰ類とは、側面観が長方形を呈することで区別されるが、個体数は少ない。製作工程はⅠ類が主体的である。打面は、水平なものが多く原礫面・調整打面がある。作業面は、石核長軸の端部に設定される。正面観は船底状、楔形状、D字状などが確認できる。

Ⅲ類:90度打面転位が観察されるいわゆるサイコロ状石核。形状は、立方体状を呈する。 事例数は少ない。打面の固定はゆるやかである。石核への調整過程は顕著ではない。作業面を 除いて原礫面に覆われている。

Ⅳ類:打面と細石刃剥離作業面との剥離面角(交角)が鋭角となるもの。基本的には単設打面石核。石核形態によってこれを立方体ないしは角柱状を呈するものと、やや扁平な剥片素材のものとがある。

V類:形態的にはIV類の特徴を示すが、側面観では打面/作業面の交角がやや平坦な一群。 板状剥片素材の小口面に、比較的幅の狭い細石刃剥離作業面を設定する。打面には礫面をのこ す平坦打面と調整打面の両者があり、側面調整が選択的に適用される。

#### 〔細石刃の形状〕

代官山遺跡第Ⅲ文化層では461点、吉岡遺跡B区では1022点の細石刃が検出された。細石 刃核との比率は、前者が細石刃核1点/12.8点の細石刃が剥離される計算になる。後者では細 石刃核1点/14.2点の細石刃が剥離される。両側縁が並行せずやや湾曲する細形の細石刃が多い。

構成2 一般的剥片剥離手法によって剥片石器を製作する。安山岩、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルス、硬質細粒凝灰岩を素材とし、構成1とは石材利用が異なっている。

#### [剥片剥離技術]

良好な接合資料や石核などが遺存していないが、剥片の種々の属性を総合するかぎり、以下の3つの剥片剥離手法がみられる。

I 類:打面を180度転位するもので、打面は調整打面、非調整打面の両者が確認されるが、 石核調整はほとんどおこなわれない。剥離される剥片は縦長剥片である。打面転位の過程は不 明だが、石核の周辺に沿って打点を移動させ、剥離をおこなう。

Ⅲ類:短寸の部厚い剥片の最終剥離面に打面を設定し、素材の縁辺に沿って移動しながら、 貝殻状の小形剥片を連続的に剥離する。いわゆる板状剥片石核。

Ⅲ類:厚手のブロック状剥片を素材とし、頻繁に打面の反転をおこないながら打面/剥離作業面を置きかえるもの。残核形態はサイコロ状石核である。

#### 〔剥片利用〕

この過程で剥離された剥片類は、ほとんど遺跡内には搬入された痕跡をもたない。また遺跡 内での製作も多量におこなわれた形跡がない。剥片には明瞭な使用痕および二次加工が施され るものはみられない。

構成3 礫器状のいわゆるチョッパー・コアを生じる過程で、打割具と礫表皮を背面にのこした厚手の大形剥片が製作される。この系列の認定は打割具か石核かという二者択一的な判断によって議論されることが多いが、こうした思考の背景には、単一の器種が単一の機能を担うとする先験的な理念が見え隠れしている。

#### 〔礫器 (状石核)〕

いずれの機能が主体的に発揮されるかは、この石器の置かれていた脈絡(コンテクスト)次 第で決定される。

#### [調整剥片]

当遺跡では、礫器それ自体の機能価よりも、素材剥片の使用過程に重点がおかれていた。このことは大形剥片が遺存することからも窺知できるだろう。構成1でえられた剥片の長幅比、幅厚比などの相関を調べると、構成3でえられた剥片よりも大形であることがわかる。二次加工がおこなわれる例は少なく、廃棄状態を類推するかぎりでは、選択的に遺跡内にのこされたことが考えられよう。

L1H 層上部出土細石刃石器群の特徴は次のようにまとめられるだろう。

- (1) 石器群を大別すると、代官山遺跡第Ⅲ文化層では1488点の石器群が3箇所のブロック群を、吉岡遺跡B区では4620点の資料が4箇所のブロック群をそれぞれ形成していた。これらのブロック群は接合関係から、それぞれが排他的な関係あったのでなく、同一時期の単一ユニットとして把捉することができる。
- (2) 柏峠という比較的至近な距離にある原産地から搬入された黒曜石の小礫ないしは角礫を素材とし、これを、①そのまま原材として利用する、②粗割りし、分割してえられる部厚な板状剥片を素材とする、といった素材獲得作業を遺跡内でおこなっている。素材は、適当なものが選択されて細石刃剥離が開始される。細石刃剥離に供された残核はその形態は変異にとんでいる。したがって、細石刃核の形態変異は細石刃剥離進行によるものではなく、石核素材の製作過程と関連するもと予想される。
- (3) これとはまったく別に、安山岩、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスなどを利用した一般剥片剥離手法がある。石器の廃棄形態には2種類あり、①剥片が遺存するもの、②石核のみが遺存するものがある。剥片は、基本的に縦長剥片で、遺跡内にはごく少量しかのこされない。後者はあまり良質でない石材を適宜割って、矩形・横長あるいは貝殻状などの剥片を製作する手法で、縦長剥片のみが製作されるような単相的なブロックは見当たらない。
- (4) 礫器状石核の一群は、いわゆる「野岳・休場型」細石刃石器群の典型とされる綾瀬市報 恩寺遺跡(鈴木・矢島1979) にて最初に注意が喚起された。報恩寺遺跡の石器群出土 ピークは BB0層上部であるから、さらに古い段階の石器群に同様な構成が認められた ことは、この技術系列が相模野細石刃石器群の出現段階から連綿とつづく可能性を暗示していよう。

L1H 層上部細石刃石器群は、石器石材、剥片剥離技術、二次加工技術、石器形態、廃棄パターンなど石器群の内部において対照的な属性群に分けられる。これらは、各技術系列内において組織化されており、それぞれ自立した製作工程をもっている。細石刃石器群はすでに出現段階において、さまざまな石器群の構成が観察されていることが理解できる。だとすると、これらの変異をうみだす技術構成を各系列に還元して考えた場合、地域的・時間的な変容の様相とはどのように理解されるのだろうか。つぎに、BB0層における石器群に視点を転じて、観察を進めることにしよう。

## 3 BB0層出土細石刃石器群の技術構成

まず大きな特徴として、黒曜石利用の様相が激変することがあげられよう。至近な距離に位置する伊豆・箱根系産地から神津島系産地へと石材利用の図式が転換する。さらにいえば、原産地利用をとりまく行動自体にも当然ながら、変化がみられるわけである。

海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IV文化層では、神津島産の黒曜石が多量に搬入され、全374点の黒曜石は、いずれも神津島 I 群である(望月1997)。すでにみたように、代官山・吉岡遺跡では伊豆・柏峠を産地とする黒曜石が好まれて用いられていることを考えると、この段階には石材採取活動の領域が拡大・浮動化するといえる。

#### (1) 柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層

出土層位は、L1H 層~L1S 層におよぶ層厚にまたがるようであるが、配石や大形遺物の出土レベルがおおむね L1H 層上部であることから、吉岡遺跡 B 区や代官山遺跡第皿文化層と近似した時間に位置づけられる可能性をもつ。ただし、細石刃製作に使用されている黒曜石はいずれも神津島 I 群であり、産地組成の異なりは対照的だといえよう。石器組成は、細石刃、細石刃核、細石刃核原形、スクレーパー、楔形石器、加工痕のある剥片、微小剥離痕のある剥片、礫器、石核、剥片・砕片である(第3図)。

#### 構成1

#### [原材およびブランクの状態]

4点の細石刃核原形が出土している。細石刃関連資料は、いずれも神津島産黒曜石の集約的な利用がみられるが、いずれも分割された厚手剥片を素材とし、若干の石核調整が施された状態で廃棄されている。このうち3点は、細石刃、細石刃核を同一個体にふくむ。

#### [調整剥片]

黒曜石個体18においてスクレーパー、楔形石器、微小剥離痕を有する剥片が際石刃製作関連資料として、素材供給がおこなわれている。段階的な細石刃製作と刃器への適宜おこなわれる素材供給が、構成1の主要な技術系であることがわかる。

#### 〔細石刃核〕

細石刃核は、II類・V類が識別される。黒曜石製のやや厚みをもつ剥片を分割し、その小口面を作業麺に設定する資料と、 $180^\circ$ の打面転位をおこなって細石刃剥離を進行するものとに分けられる。基本的には、素材剥片の性状を上手に利用するものであり、いわゆる「野岳・休場」型の円錐形細石刃核はみられない。

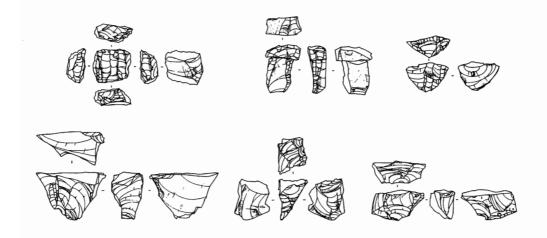
#### [細石刃の形状]

細石刃は155点出土しているが、そのうち1点のみチャート製の細石刃がのこされていた。 堤の集計によれば、細石刃の遺存状態は頭部→末端部→完形→中間部の順に遺跡内には遺存し ており、量的比率を考慮してもさらに倍近い数量の細石刃が剥離されていたことを窺わせる。

#### 構成2

#### 〔剥片剥離技術〕

一般剥片剥離手法は、ガラス質黒色安山岩製の石核4点、剥片1点、ホルンフェルス製の加工痕のある剥片1点、硬質細粒凝灰岩製の楔形石器1点がみられる。このうち、石核と分類さ



柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層の石器組成 MB MC MCM Sc Uf Rf Pie 計 С Ch 黒曜石 166 374 硬質細粒凝灰岩 56 50 3 113 軟質細粒凝灰岩 10 粗粒凝灰岩 9 2 11 輝緑岩 21 11 32 ガラス質黒色安山岩 31 18 54 ホルンフェルス 98 12 110

第3図 柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層出土石器

2

269 271

717

れた資料は、厚さ1.0cm~2.0cm程度の比較的厚手の剥片を素材とした板状剥片石核であり、素材背面の縁辺を打点に設定し、1~2回程度の小形の鱗状剥片を剥離するものがある。幅広剥片が剥離される。これとは別に、ブロック状の剥片を素材とした石核素材もみられる。打面縁辺にわずかに調整がみられるが、剥片剥離の痕跡は著明ではない。このような2種類の剥離技術が、この遺跡にはのこされている。このほかに、楔形石器が組成しており、やや縦長の剥片剥離の痕跡がみられるものがある。ごく僅かな点数であるが、剥片剥離作業に関連する資料として注意したい。

#### 〔剥片利用〕

未分類

155

遺跡内には顕著にのこされていないので、不明な点が多い。石核を有するガラス質黒色安山 岩製の石器群には、いわゆるツール類はふくまれない。いっぽう、硬質細粒凝灰岩製の資料は 石核をともなわないが、剥片を多く遺存しており、そのなかには便宜的に加工痕のある剥片な どがふくまれていた。石核の持ち出しや剥片類のみを搬入することなど、構成2は資料的には 僅少であるが、構成1と同様に、複雑な動態を示している。

#### 構成3

#### 〔礫器 (状石核)〕

礫器は硬質細粒凝灰岩製である。刃部自然面には器体の長軸に直交するように、線状痕が観察できるという。3分割されているが、事故による破損の可能性が高い。

#### [調整剥片]

ホルンフェルス製の中・大形剥片は、背面・打面に自然面を有しており、本体は遺存しないが、礫器製作に関わる調整剥片であることが指摘される。扁平な円礫を素材として、交互剥離されており、微小剥離痕を有する剥片、加工痕のある剥片がこれにふくまれる。また、剥片のなかには鋭い縁辺を保持するものもあり、刃器としてそのまま利用されていることも、当然示唆されよう。

#### (2) 宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第 || 文化層

第Ⅱa 文化層の組成は、礫器、敲石、剥片で、いずれも単体資料。石材は硬質細粒凝灰岩、 安山岩など居住地近傍の早戸川、中津川の礫床において採集される石材を利用している。礫器 は片刃礫器。礫器の刃部再生過程に生じる剥片は選択され、刃器類の素材となる。構成3。

第Ⅱb文化層は、細石刃、細石刃核、細石刃核原形、スクレーパー、使用痕のある剥片、剥片・砕片、礫器、敲石。石器群は、2つのブロックから出土している。石材は、黒曜石と硬質砂岩・頁岩・硬質細粒凝灰岩などの近傍産石材とに分けられる。黒曜石は、細石刃、細石刃核、スクレーパーなどの刃器類製作へ、近傍石材は、礫器および敲石などに用いられる。石器群は構成1と構成3による。

#### 構成1

226点の黒曜石は、異なる原産地ごとに4個体に分類されている。それぞれ、和田峠(2個体)、麦草峠(1個体)、柏峠西(1個体)である。消費のされかたをみると、原石段階から遺跡内に搬入し細石刃製作が開始される資料と、石材消費の途次をあらわす資料がある。柏峠産黒曜石は単体資料で、おもに細石刃核に利用される。

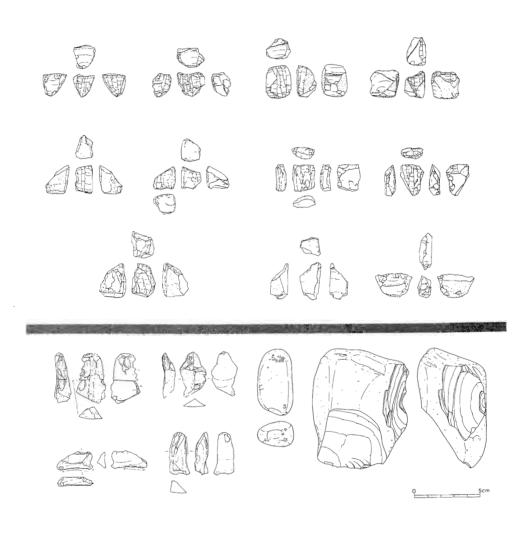
#### [原材およびブランクの製作]

細石刃石核原材・原形と複数の良好な接合資料がえられている。原石5cm未満の小形で薄手の角礫や、厚手の板状剥片素材などが用いられる。代官山・吉岡B区から観察された3種類の工程がここでもみられる。調整剥片には、素材の自然面をのこすものが多く、礫素材を分割したのち打面形成や再生・側面調整などがおこなわれている。

#### [調整剥片]

調整剥片は、刃器の素材となる。スクレーパーや使用痕ある剥片は、これらの剥片から製作

#### 相模野細石刃石器群の技術構成 (仲田)



ササフン / (NO.12)(風)	W 26 II	שאוו	が回りた	1 404 40	1100										
	MB	MC	MCM	Po	Sc	Uf	Rf	Pie	F	С	Ch	Ax	Ham	Со	計
黒曜石	67	12	3		2	12			40	84					220
硬質砂岩													2		2
頁岩													1		1
硬質細粒凝灰岩											1				1
	67	12	3		2	12			40	84	1		3		224
												_			

#### サザランケ(No.12)遺跡第 II a文化層の石器組成

	MB	MC	MCM	Po	Sc	Uf	Rf	Pie	F	С	Ch	Ax	Ham	Co	計	
安山岩													2		2	
黑色頁岩											1				1	
硬質細粒凝灰岩									1		3				4	
									1		4		2		7	

第4図 宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅱ文化層出土石器

される。このうち黒曜石製の剥片は、縁辺が鋸歯状に調整されており、その調整加工が器体内 部に達していることから、剥片素材石核の機能をも兼備していたと考えたい。剥離される小形 剥片も刃器への転用がある。

#### [細石刃核]

細石刃核は I、Ⅲ、Ⅳ類の 3 つある。 I 類には、単設の打面長軸に並行して作業面を設定するものが 2 点あり、打面転位をおこなう上下両設打面石核と考えられる。Ⅲ類は、打面の固定がゆるやかな打面置換の石核で、打面・作業面との交角は鋭角。Ⅳ類との共通性が窺える。

#### 構成3

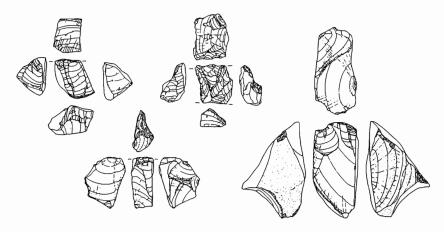
礫器は片刃礫器で、これから剥離された調整剥片は状況に応じて刃器製作に供出された可能性が高い。

#### (3)代官山遺跡第Ⅱ文化層

細石刃、細石刃核、スクレーパー、楔形石器、ナイフ形石器、使用痕のある剥片、二次加工のある剥片、剥片・砕片、敲石、磨石がある。石材は、黒曜石(神津島砂糠崎産)、ガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩、ホルンフェルス、チャート、頁岩。構成1である(第5図)。

#### 構成1

細石刃製作には、黒曜石、硬質細粒凝灰岩、頁岩、チャートが使用される。黒曜石は、放射



代官山遺跡第	Ⅱ文化層	の石器組成

	MB	MC	MCM	Po	Sc	Uf	Rf	Pie	F	С	Ch	Ax	Ham	Со	計
黒曜石	6	3				1			16	326					352
安山岩							1		19	8					28
凝灰岩		1				1	2		8	1					13
ホルンフェルス							2		21	10					33
頁岩	3					1	1			2					7
玢岩													2		2
チャート	2					2				1			_		5
	11	4				5	6		64	348			2		440

第5図 代官山遺跡第Ⅱ文化層出土石器

化分析による化学組成の判別分析から、神津島産の組成比が算出されている。個体別資料では、 黒曜石製のものは素材整形後、遺跡内に搬入されて細石刃製作が連続的におこなわれるのに対 して、凝灰岩製、頁岩製、チャート製の細石刃核や細石刃は製品が搬入される。

#### [調整剥片]

黒曜石Ⅱは、遺跡内での細石刃核整形および細石刃製作関連資料である。側面調整剥片が刃器に転化されており、段階的な細石刃核製作は、剥片類の刃器への供給をも石材消費にくみこんでいた。凝灰岩Ⅱでは、細石刃核、スクレーパー、二次加工剥片などが製品化されて遺跡内に搬入される。細石刃製作の各段階において、剥片類の転換利用が観察されるが、遺跡内での廃棄に至るまでの脈絡には大きな隔たりがある。

#### [細石刃核]

細石刃核は、黒曜石・凝灰岩に区別される。黒曜石製の細石刃核はいずれもIV類。これらと同一母岩の側面調整剥片がのこされる。凝灰岩製の単体資料は幅約1.5cm程度の厚手の剥片を素材とする。V類。原材は、平坦面を保持する厚手剥片、ないしは板状礫などが選択される。

#### [細石刃の形状]

黒曜石製細石刃は、いずれも黒曜石Ⅱに属するようで、細石刃核とはまた異なった廃棄のありかたを示している。頁岩製、チャート製細石刃は搬入品であり、細石刃核およびこれらの母岩別資料にふくまれる剥片・砕片は遺跡にのこされない。

#### (4) 月見野遺跡群上野遺跡第Ⅲ文化層

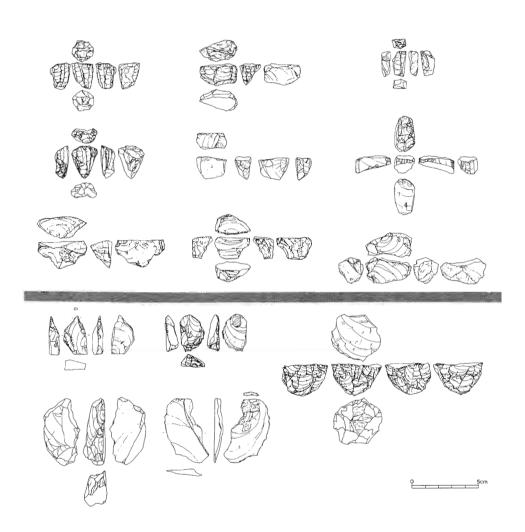
第皿文化層では、第 $I \sim III$ 区という3つの調査区の調査が実施された。石器群の分布もこれとほぼ重畳するようであり、それぞれI群、II群、II群と称されている。これらはさらに細分が予想されるが、記載どおり、これらのユニット群を分析の単位としよう(第 $6 \cdot 7$ 図)。

#### Ι群

分布密度の高い集中区Aと、散漫な集中区Bとにわかれる。集中区Aでは、細石刃、細石刃 核、細石刃核原材、石錐、鋸歯縁石器、スクレーパー、使用痕ある剥片、二次加工のある剥片、 礫器、剥片・砕片、石刃核が検出された。黒曜石製石器が多数あり、ほぼこれに収斂するよう だ。放射化分析によれば、巨視的には麦草峠(蓼科系)と神津島系に分けられるという(二宮・ 大沢1988)。黒曜石による構成1の石器群である。

#### 構成 1

黒曜石は23個体に識別される。このうち黒曜石6は、細石刃石核打面再生剥片、石錐、使用痕を有する剥片、剥片をふくむ。黒曜石製剥片は、素材の原礫面を有することが多く、遺跡内での剥片製作の痕跡は乏しいが、細石刃石核製作工程の第2段階、すなわち、打面形成・側面調整時の調整剥片の転化が一般的である。この石器群で注意したいのは、報文中で「石核」とされた資料である。分割礫を素材とする半球状の石核で、作業面はほぼ全周している。形態



上野遺跡第	mサル屋	「マッザ/	カ左架組は

	MB	MC	MCM	Po	Sc	Uf	Rf	Pie	F	С	Ch	Ax	Ham	Co	計
黒曜石	203	4	3		3	14	5		189					1	422
チャート		1							18						19
凝灰岩									2						2
粘板岩						1			9						10
玄武岩									36						36
流紋岩									1						1
砂岩									2					2	4
	203	5	3		3	15	5		257					3	494

第6図 月見野遺跡群上野遺跡第Ⅲ文化層Ⅰ群出土石器

#### 相模野細石刃石器群の技術構成 (仲田)

的にはいわゆる「船野型」細石刃核に通じる要素を備えており、これを細石刃核とみなすこと に不都合はない。

#### [細石刃核]

いずれも $5\,\mathrm{cm}$ 前後の小角礫を素材とし、それを分割した剥片や、わずかに調整を加えた分割礫を細石刃核の素材とする。第 $2\,\mathrm{類}$ の製作技術にもとづいており、素材が遺跡内に持ち込まれる。細石刃核には $I\,\mathrm{類}$ 、 $II\,\mathrm{類}$ 、 $IV\,\mathrm{類}$ がある。「船野型」に類する細石刃核は単独個体であり、 $I\,\mathrm{\sim}V\,\mathrm{類}$ のいずれにも分類されず、これを $VI\,\mathrm{類}$ としておく。

細石刃核はいずれも単独搬入で、黒曜石とチャートの2種類が利用される。チャート製石器群は、付近の河床礫を採取していると考えられ、その細石刃は遺跡内に遺存していないようだが、石材選択や素材提供の過程など、細石刃製作体系の各段階において、さまざまな製作技術が行使されている。黒曜石以外の石材を細石刃製作体系に取り込む過程は、よくわからない。

#### 構成 2

#### [剥片利用]

この系列を示す資料として、粘板岩製の部厚な剥片を素材としたスクレーパーがある。それ 以外では明瞭な資料はみられない。

このほかに硬質砂岩製の礫器、鋸歯縁石器がのこされており、構成3に帰属する可能性が高い。しかし構成2・3は資料不足であるために、本石器群は、ほとんど構成1を主体とするものであると措定しておきたい。報告では、I 群を構成する個体別資料はⅡ群・Ⅲ群との個体間の共有は知られておらず、ユニット内での石材消費が完結しているようだ。単独で搬入される石材や製作段階の中途で搬入される器種の来歴に関しては、遺跡間を単位とした視点が必要とされる。

#### Ⅱ群

遺物密集の高い集中区Aと4箇所の遺物散在区からなる。細石刃、細石刃核、細石刃核原形、 石錐、スクレーパー、使用痕のある剥片、礫器、石核、剥片・砕片がある。

#### 構成.1

黒曜石が細石刃製作に用いられる。各製作工程は段階的に追跡が可能であるが、ブランクは ブロック外からの搬入品である。ブランクから細石刃核の製作にいたる工程も、素材整形段階 に搬入されて細石刃製作が開始されるものと、細石刃のみが遺跡内に搬入されるものがある。

黒曜石製石器群に関しては、剥片製作がほとんど観察できず、チャート製・玄武岩製石器群とは対照的である。また、注意したいのは凝灰岩製石器群であろう。この石器群は、合計しても15点程度の組成であり、細石刃、使用痕ある剥片、剥片、石核、礫器がふくまれる。基本的に構成2と構成3であるが、わずか1点のみの細石刃の存在にも気をつけておきたい。全体的には構成2+構成3である。

#### [原石とブランクの製作]



上野遺跡第Ⅲ文化層2区Ⅱ群の石器組成

	MB	MC	МСМ	Ро	Sc	Uf	Rf	Pie	F	С	Ch	Ax	Ham	Co	āt
黒曜石	99	4	2		2	18	3		101		9				238
チャート						1			34		13				48
凝灰岩	1					1			10		2			1	15
玄武岩									16						16
砂岩									4		1				5
	100	4	2		2	20	3		165		25			1	322

第7図 月見野遺跡群上野遺跡第Ⅲ文化層Ⅱ群出土石器

素材面がすべて剥離面によるものであり、素材作出段階に①原礫の粗割、②粗割でえられる剥片の分割、という2工程を経て遺跡内もたらされたことが推測される。

#### 〔調整剥片〕

スクレーパー、石錐、使用痕のある剥片など属性選択の過程を媒介として、石器器種への素材供給がなされる個体がある(個体別資料No.25、35など)。この段階の石器組成はほとんどの場合、細石刃製作と関連する。

#### [細石刃核]

細石刃核は5点出土している。これらはI類、IV類、V類にそれぞれ分類される。とくにV類とした細石刃核は、背腹両面を素材の主剥離面によって挟まれた剥片素材の小口面を細石刃剥離作業面に設定する。

#### 〔細石刃〕

凝灰岩製の細石刃末端部がのこされていた。母核の存在は知られていないが、遺跡間の連動 を考えるうえで無視できない。

#### 構成 3

#### 〔礫器 (状石核)〕

凝灰岩製の石核であり、大きさはだいたい握り拳程度の素材を打面・作業面を交互に入れ替えながら、やや幅広の縦長剥片を剥離する。いわゆる礫器状石核に類似する。また、凝灰岩製の礫器が遺存しており、こちらはやや幅広剥片の剥離がおこなわれる。これらに付随する剥片は確認されていない。

#### Ⅲ群

3つのブロック群があるが、構成3のみの単相的な石器群である。細石刃、細石刃石核原材、 使用痕のある剥片、二次加工剥片、礫器、礫器調整剥片、剥片・砕片である。

#### 構成3

礫器および礫器状石核の認識については報告者である堤によって述べられており(堤1986)、これに付け加えることはない。堤はこれを礫器としての機能から逸脱しないことを主張して、礫器を3類に区分する。すなわち、①片刃礫器であるもの、②両端に刃部が設けられるもの、③片側は礫器で相対する端部には敲打痕が確認されるもの、である。こうした機能複合が一般的であることは、この種の石器の性格が臨機的な性格を帯びている根拠にもなろう。

#### (5) 報恩寺遺跡 BB0層

構成1+構成2+構成3を典型的に保持する。構成1と構成2は同一の技術系列に構造化され、近傍産石材利用形態には相対的に異なる2つの技術適用が指摘できる(第8図)。

#### 構成 1

細石刃製作には、黒曜石と珪岩が用いられる。黒曜石には神津島系と箱根系がある。産地組成の割合は神津島1群が182点、箱根畑宿が11点ある(望月1999)。黒曜石と珪岩の比率はおおむね1:0.72であり、ほぼ近似する。細石刃製作にかかった珪岩の資料数は135点あり、全体の91.8%がこれに該当する。このうち、個体別資料チャート5・7・8は、一般剥片剥離手法との個体が共有されている。両者は自立的に器種製作をおこないながら、同時に、製作技術間の連動をも、時として示すことがある。

#### [原材とブランクの製作]

珪岩製のブランクが1例ある。単独個体である。平坦打面を有する厚手の剥片であり、背面は基本的に複数の剥離面や礫面で構成されることが多く、分割礫を素材とした原材確保が想定される。3類による製作技術であろう。

#### [調整剥片]

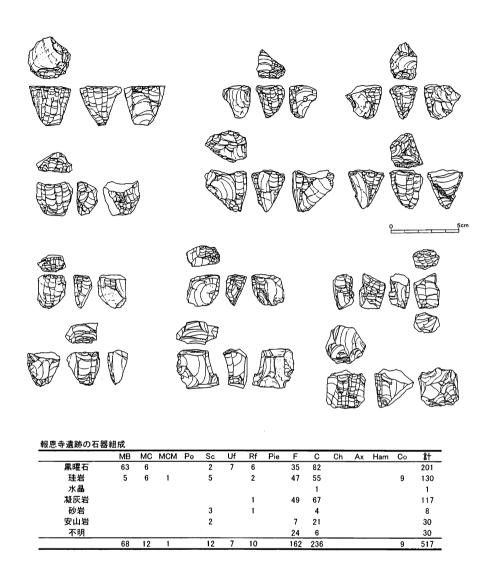
珪岩石器群は、一般剥片剥離手法も内包し、礫面を有する刃器類(スクレーパー、揉錐器、使用痕のある剥片、二次加工剥片など)などは、調整剥片からの転化と考えてよい。黒曜石製のものは、器種のイメージと素材の属性に応じて選択され、その結果、揉錐器や使用痕のある剥片、二次加工剥片などに転化される。

#### [細石刃核]

細石刃核は合計12点出土している。Ⅰ類、Ⅲ類、Ⅳ類、Ⅴ類に区分されるが、全体的に打面転位が頻繁である。また打面調整・頭部調整などの石核調整が個体に選択的に適用される。

#### 構成 2

#### [素材剥片]



第8図 報恩寺遺跡BB0層出土石器

一般剥片剥離手法を示す資料は、総じて小形の印象を受ける。素材は分割礫である。剥片剥離作業は2種みられる。1つは、製作される剥片の種類はやや幅広の矩形剥片であり、石核素材の最終剥離面を打面として、おもに素材縁辺を周回しながら連続的に剥離を進行するもの。もう1つは、素材の礫面をそのまま打面として作業面と打面とを交互に入れ替えて作業をおこなう石核で、残核はチョッパー・コアになる。また、サイコロ状の角柱形になるものもあり、作業過程に応じた、多様な残核がみられる。

#### 〔剥片利用〕

遺跡内に遺存するものをみる限り、刃器への素材として供出される。

#### 構成3

#### 〔礫器 (状石核)〕

扁平な長円礫を素材とし、礫面から直接打撃を加えて打面調整(同時に刃部形成も兼ねる) をおこなう。さらに連続的な調整加工から剥片剥離を繰りかえして刃部作出が施される。礫器 の刃部に観察される刃潰れや破損、磨耗などは程度の低いうちに再生される。

#### [調整剥片]

礫器本体とは分布が離れており、選択された調整剥片が刃器として利用されたと考えられる。 目的剥片としてスクレーパーへの転化が示唆されるが、接合関係は認められない。また、構成 2と比較して、二次加工は僅少である。

#### (6) 三ノ宮・下谷戸遺跡第川文化層

FBL 層から L1H 層下部にかけて出土した石器群で、総点数4390点。西相模では最大規模の細石刃石器群である(第9図)。

黒曜石は2220点が出土し、そのうち1090点について産地分析がおこなわれた。神津島産1003点(92.5%)、畑宿産47点(4.31%)、柏峠西産23点(2.1%)、霧ヶ峰産11点(1.01%)、高原山産1点(0.01%)である。これに次いで、ガラス質黒色安山岩が、1259点。石材採取にかかるコスト面を考慮すると、黒曜石(遠隔地/神津島):ガラス質黒色安山岩(近傍系)という利用石材が生じる。この2つの石材の段階的な消費過程について触れておこう。

#### 構成 1

#### [原材とブランクの製作]

原石の粗割が想定される。資料の提示が不十分であるのでここでは留保せざるを得ない。細石刃核原材または母核などの報告・記載はない。

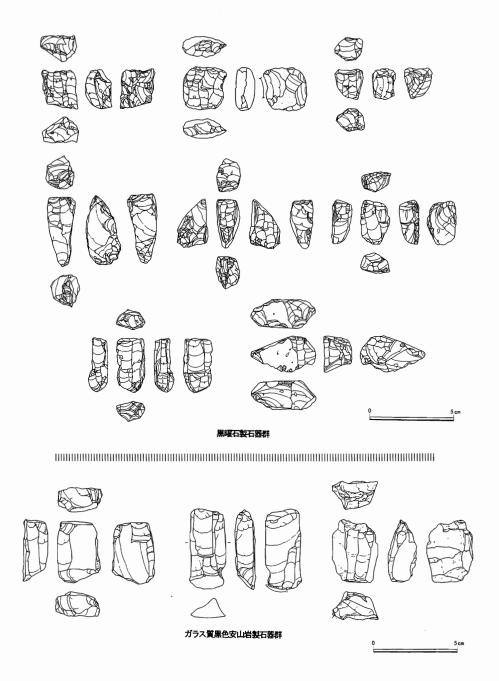
#### [調整剥片利用]

実数のカウントがおこなえないので、正確な組成がつかめないが、黒曜石製(神津島系)の 楔形石器が数点存在するようだ。細石刃核調整剥片からの転化と考えられるが、基本的には小 形石核の製作と、小形剥片による刃器の製作がさらに樹枝状に分岐したものとみられる。これ に加えて、調整剥片は刃器(二次加工剥片など)への選択も図られる。

#### 〔細石刃核〕

細石刃核は36点が検出されている。32点が黒曜石製で、ガラス質黒色安山岩製2点、チャート製1点、碧玉製1点である。黒曜石製のものでは神津島産が23点(71.9%)と圧倒的に多く利用されている。 I 類~V類までの細石刃核がみられる。ガラス質黒色安山岩製の細石刃核は皿類とV類であり、とくにV類に分類されるものは部厚の縦長剥片の小口を作業面に用いる簡便な石核だといえよう。

#### 構成2



第9図 三ノ宮・下谷戸遺跡第Ⅲ文化層

#### 〔剥片利用〕

石核は、縦長剥片を剥離する石核と、矩形・幅広剥片剥離をおこなう板状剥片とがある。これらから剥離された剥片が刃器類への素材となっている可能性は否めない。ただし、刃こぼれ 状の微細剥離痕を有する剥片がある。

#### 構成.3

#### 〔礫器 (状石核)〕

敲打痕をもつ片刃礫器がある。礫器には複数枚の調整剥片が接合する。調整剥片の縁辺には 磨耗や刃潰れなどはほとんどみられない。また、礫器自体にも作業時の破損がみられず、一過 的な使用に供された可能性が高い。調整剥片類を刃器に転用している例は報告されていない。

ユニット出土の石器群構成を概観すると、以上のように構成1+構成2+構成3という遺跡 類型であることが明らかである。

#### (7) BB0層石器群の性格

相模野台地 BB0層の細石刃石器群をみると、石器群を構成する技術的な系列の組み合わせは、実にさまざまである。いまこれを、南関東をとりまく遠隔地系黒曜石を主体とする石器群と、西相模・丹沢山塊産石材を多く利用する石器群と振り分けてみよう。次のような事実が浮かびあがってくる。

信州系黒曜石石材を用いるサザランケ遺跡、神津島系黒曜石を大量に消費していた三ノ宮・下谷戸遺跡では、黒曜石利用を示す構成1が示すように、原石の搬入から細石刃製作までの段階的な細石刃製作によって細石刃が量産される。この製作体系は、均質な塊岩状の石器石材として選択され、遺跡内へ搬入されることが前提になっており、とりわけブロックへの供給形態は原材ないしは母核整形段階のものによって大部分が占められ、構成1のほとんどが、ブランク段階からの製作工程をのこしている。

黒曜石は、細石刃核の製作とともに多量の個体が集約的に消費され、ほぼ限定的に分布する。 しかし、代官山遺跡第Ⅱ文化層や報恩寺遺跡では、集約的な母岩消費をおこなう黒曜石石器群 とともに、ごく少量の非黒曜石製の細石刃ないしは細石刃核が、分布を違えながらブロック内 に遺存していることも注意したい。これらの製作工程を追跡することは、資料的な制約からむ ずかしく、断定はできないが、いずれも既製品として遺跡内に搬入されたものと理解できる。 黒曜石石器群がブロック内での母岩の消費工程を選択しているのとは対照的であり、非黒曜石 細石器群は石器石材と剥片剥離および廃棄パターンに、差異がみてとれる。

また、近傍石材の石材消費によって刃器への素材供給をする剥片剥離がみられる。ほとんどの場合、幅広の鱗状剥片である。残核は、板状剥片石核や打面転位石核が多く、縦長剥片を製作する石核はのこされていない。幅広剥片は、スクレーパー、石錐、使用痕のある剥片、二次加工剥片などの素材となり、細石刃石器群の内部において確実に構造化されている。しかし、

遺跡内での母岩消費が確認できる個体はほとんどなく、石核ないし幅広剥片、刃器の段階的な 製作過程が観察されることはない。

構成2や構成3では、礫器が打割具として、または石核として機能するようだ。しかし、こうした機能的要請は活動のコンテクストに依拠しており、行動によっては単一の機能的発現にかたよることも予想される。石材は、硬質細粒凝灰岩、安山岩、硬質砂岩などが選択されており、遺跡が立地する至近河川を採取地とし、遺跡内へ搬入される。

これらを総括すると、以下のようにまとめられる。

- (1) 石器群はL1H層上部において観察されたように、基本的には構成1、構成2、構成3 という3種を抽出できるが、遺跡ごとにその複合のありかた、樹状状に内在する技術構 造の発揮パターンはそれぞれで異なっている。
- (2) 構成1には、信州系とともに神津島系、箱根系黒曜石が安定的に選択される。黒曜石利用については、特定原産地が主体的に用いられる場合、複数の原産地組成を示す場合など、その組み合わせにはいくつかの類型が設定できるようだ(堤・望月1997)。黒曜石は母岩を単位とした、段階的な石材消費がおこなわれる。その結果、多量の剥片・砕片類が遺跡内に遺存することになる。すなわち、①原石の粗割り、②母核(ブランク)の作出と整形、③打面形成・再生、側面調整などの細石核調整過程は個体ごとに偏在的におこなう、④細石刃剥離という一連の手続きが復原される。作業④は作業③と適宜手順を組み替えて、細石刃を企図的に製作する。
- (3) 細石刃製作は、段階をふまえて規格化された剥片剥離手法が適用される。②および③の 過程で生じる調整剥片は素材の有する属性の選択を媒介として刃器類製作へ供出される。 これらは通常、二次加工剥片の素材となる。また、二次加工を経てスクレーパー、石錐 などの器種へと分化することもある。このほかに、代官山遺跡第Ⅱ文化層で注目された ような楔形石器の製作がみられ、小形剥片が製作される。
- (4) 石材利用をみると、黒曜石と対照的なのがチャート、硬質細粒凝灰岩、頁岩を用いた細石刃石器群の一群である。これらが遺跡内に既製品として単体搬入されていることはすでに述べた。
- (5) 非黒曜石製の細石刃石器群は、細石刃製作と連動して一般剥片剥離手法による幅広・矩形剥片製作をも技術構造の内部に組織化している。石核形状、製作される剥片の形態などを勘案すると、構成2と共通する属性が看取される。遺跡内、ブロック内にはこの一般剥片剥離手法を段階的に復原する資料は見当たらないために、搬入形態など不明な点が多い。これに従えば、細石刃製作と同様の母岩であることだけを根拠に、細石刃製作に集約した母岩であると認識することはむずかしくなる。
- (6)構成2は、石器群ごとにあらわれかたに変異がみられる。しかし、通常は、幅広剥片製作にともなう板状剥片石核と求心状石核が剥片製作の基本構成であり、遺跡よって①石

核のみ搬入、②石核と横打剥片が搬入、③剥片(多くは刃器への転化後)のみの搬入というありかたがみられる。この差異は、遺跡の廃棄パターンとも通底する。

(7) 一般剥片剥離手法とは別に、構成3による礫器調整剥片が刃器類への素材供出を兼用することが往々にしてある。これは遺跡内部の微視的な分布でも明らかであり、剥片のみが密集帯からやや離れて出土していることからも、剥片が二次加工をへて刃器として再利用されることも予想される。

この段階には、石器石材の側面から2つに大別される石器群がある。それを端的にいえば、 構成1を黒曜石のみで構成するグループと、構成1に少量の近傍石材をともなうグループであ る。この両者は、石材消費に著しいかたよりが看取される。これがこの石器群の大きな特徴と いえる。

従来の編年では、この2つの石器群は石材利用の多角化を、時間的経過をあらわすものとして認識する傾向があった(堤1987、砂田1993、1994)。しかし、この段階の細石刃核は、製作技術上の特性からみても、基本的に厚手の剥片を分割し、立方体または角柱状、類船底状に整形して、細石刃製作を進行させるといったように、形態的にも、技術的にもかなりの類似性が指摘される。また、打面調整や側面調整などの結びつきかたからも、これらの細石刃核が時間的に変遷を遂げるといった理由を捜しだすことは困難なようで、基本的には細石刃核の形態区分というより、石器群の出土層位にもとづいた上下差を石器群の時間的推移とともにパラレルに考えているようにもみえる。ここでは、これらの石器群の関係性を、相互に対位する属性群が、対照的に機能しているものと捉えたい。このことは、石器製作技術の総体におけるこの両者の関係は、種々の属性群の「相補的集合」(安蒜1984)の振幅内に位置づけることのほうが合理的であるという立場にたつものである。すなわち、黒曜石の石器製作への非黒曜石石器群の組み込まれかたによって、石器群の位相がより多様化しているとみえているだけなのではないだろうか。集合の振幅の一端をもって石器群・遺跡群を評価することは慎みたい。

#### 4 L1S層下部における石器群の諸相

さて、上記の仮説が成立するかどうか、ここでは座間市栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層と大和市相模野№149遺跡 L1S 層下位の石器群をとりあげて、考えてみたい。

#### (1) 栗原中丸遺跡第 || 文化層

第Ⅱ文化層からは12基のブロックが検出されている。このうち1号~11号ブロックと12号ブロックは約80m離れた分布を示しており、両者に層位的な懸隔は認められない。しかし、内容をみるとブロックを構成する石器群は相互に弁別できる内容である。構成1と構成3による石器群と評価される(第10図)。

#### 1号~11号ブロック

報告では、11基のブロック群は4つのユニットに区分される。ユニット間をまたがる個体別 資料はなく、各ユニットは独立性を有する。構成1・3の石器群。

#### 構成1

#### [原材とブランクの製作]

黒曜石を用いており、内容的には細石刃に偏在する。細石刃核用素材は2点検出された。また単独個体でチャート製の調整剥片が1点ある。素材は、いずれも部厚な剥片あるいは角礫を分割し素材に提供されている。素材の平坦面に連続した微細調整が観察され、細石刃核の打面部に相当すると思われるが、細石刃剥離はおこなわれていない。これらは同一母岩に分類された細石刃をふくんでいるが、製作の痕跡はなく、ブロック外からの搬入が想定される。

#### 〔調整剥片利用〕

調整剥片は、刃器および楔形石器への転化が図られる。黒曜石製のものとチャート製の二者が存在するが、両者は明らかに搬入品である。構成2に属する剥片類もあり、この識別はあくまで相対的なものである。

#### [細石刃核]

細石刃は黒曜石、チャート、硬質細粒凝灰岩のものがある。黒曜石製のものを除いて、いず れも単独個体である。

#### 構成 2

#### 〔剥片剥離〕

いずれも黒曜石製である。これらは①打点を回転させる回転系石核から剥離された厚手の剥 片の小口に小形剥片剥離作業面を設定するもの、②器体の左右両面を求心状剥離面で構成され る置換系石核、③厚手の剥片の分割面を打面として小形の貝殻状剥片を剥離するもの、の3種 に識別できる。

#### 〔剥片利用〕

短寸の剥片や貝殻状剥片が製作される。これらは刃器類への転化が図られるが、構成1における調整剥片の転化との識別はむずかしい。

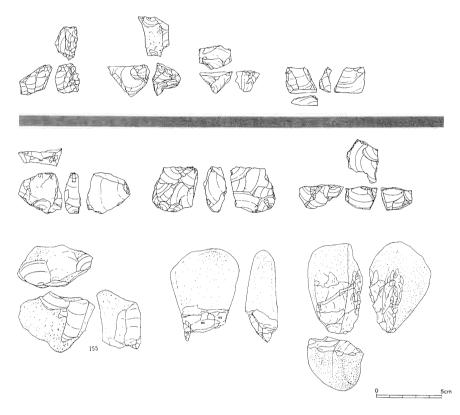
#### 構成3

#### 〔礫器 (状石核)〕

礫器には火山礫凝灰岩、粘板岩(ホルンフェルス)、細粒凝灰岩、硬質砂岩、輝緑岩など相 模川やその支流の目久尻川など近傍の礫床から採取される礫が素材となる。扁平な円礫や楕円 形状の円柱形の礫などが選択されるようだ。調整剥片との接合率は高く、遺跡内での使用と再 生のサイクルが頻繁であることが示唆される。

#### [調整剥片]

調整剥片は、スクレーパーや二次加工剥片に選択される。



栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層の石器組成

	MB	MC	MCM	Ро	Sc	Uf	Rf	Pie	F	С	Ch	Ax	Ham	Co	富士
硬質砂岩									1	15	13		3		32
珪質粘板岩										1	1				2
粘板岩					9	7	7		150	269	12		2	10	466
凝灰角礫岩									3	2	2				7
細粒凝灰岩	6								8	21	5		1		41
粗粒凝灰岩						1				15	2				18
角礫混粘板岩									4	4	3				11
輝緑岩									1	1	2		1		5
黒曜石	108	1	2			6		2	40	142				4	305
チャート	3					1		1	3				1		9
火山礫凝灰岩										1	4				5
閃緑岩									1						1
	117	1	2		9	15	7	3	211	471	44		10	14	904

第10図 栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層出土石器

#### 12号ブロック

細石刃、細石刃核、削器、敲石、打痕礫、二次加工剥片、使用痕のある剥片、剥片・砕片という組成である。礫石器類を除いて、黒曜石製と、粘板岩(ホルンフェルス)製とに区分が可能である。構成1+構成2の石器群。

#### 構成 1

#### 〔細石刃核〕

細石刃核は1点のみ出土している。Ⅲ類に属する資料で、打面/作業面を交互に置きかえする細石刃核である。

#### 構成2

#### 〔剥片利用〕

スクレーパー、剥片類はいずれも個体別資料№30に属しているが、これの母核となる石核、砕片類は検出されていない。剥片の背面構成、打面の性状から求心状に打点を移動する板状石核である可能性が示唆される。

#### (2) 相模野No.149遺跡

この石器群は、ガラス質黒色安山岩を主要石材とし、ごく少量の凝灰岩質頁岩、黒色頁岩、 チャートが用いられる(第11図)。

#### 構成1

#### [原材とブランクの製作]

凝灰岩質頁岩、チャートが用いられる。母岩別資料分類の詳細は不明だが、細石刃の石材組成とも対応することから、石核ないしは素材の段階で遺跡内にもたらされたことが示唆される。

# 〔調整剥片〕

スクレーパー、使用痕のある剥片など刃器への素材供給がみられる。報文中で削器とされる 資料は長さ約8cmほどの大振りの剥片を素材とし、その腹面側の縁辺に沿って鱗状剥離が連続 して施されており、スクレーパー・エッジとは異質に映る。おそらく、板状剥片石核と類推さ れるが、ここでも構成1と構成2が母岩によって偏在的に共有されている事実が浮かんでくる。

#### 〔細石刃核〕

細石刃核は11点出土している。Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類がみられる。細石刃核への石核調整は顕著であり、とくに打面調整が頻繁に適用される。このほか90度打面転位を繰りかえす細石刃核が特徴的である。

#### 構成2

#### 〔調整剥片利用〕

黒色頁岩のスクレーパーが4点。そのうち2点は、部厚な剥片を素材とする板状剥片石核とここでは考えておく。この石材の石器はいずれも素材の一部に礫面を留めており、段階的な母岩消費の初期工程で生じる剥片の転化が予想される。石核は遺存しない。これとは別に、硬質細粒凝灰岩では接合関係が確認されている。剥片剥離の工程は大振り剥片の節理面を素材とし、反転させて原礫面側から直接加撃をおこなって連続的に剥片を剥離し、最終的に90度打面転位して剥片を作出した段階で廃棄されている。

#### 構成3

#### 〔調整剥片利用〕



相模野149遺跡の石器組成

	MB	MC	MCM	Po	Sc	Uf	Rf	Pie	F	С	Ch	Ax	Ham	Со	計
凝灰岩質頁岩	45	10			2	1			191						249
チャート	16	1							12						29
安山岩	1														1
黑色頁岩					4				13						17
硬質砂岩									2	2					4
粘板岩									3						3
	62	11			6	1			221	2					303

第11図 相模野№149遺跡L1S層下位出土石器

刃部作出剥片のみ6点出土している。刃器への転化は認められない。

栗原中丸遺跡では、黒曜石は構成1と構成2の双方に用いられ、遺跡内での剥片剥離作業に供される。それ以外の4種の石材は、それぞれが単体資料で、地点内での石材消費の痕跡が黒曜石とは対照的である。また、相模野№149遺跡では、凝灰岩質頁岩、チャート、黒色頁岩などの石材消費は確認され、凝灰岩質頁岩では最低でも2個体分の消費がおこなわれていた。黒曜石の遺跡内での消費がほとんどみられないことを勘案すると、消費される石材に違いこそあれ、遺跡内で消費される個体と遺跡外から搬入される個体という石材利用の図式は共通している部分がある。それ以外では、独自の石材種によって構成されていることがわかる。この事例は、L1S層の細石刃石器群に特徴的であり、BB0層のそれには近傍石材が主体となる石器群がいまのところ明らかでないことを考え合わすと、まったく対照的な石材消費の傾向であることが指摘されよう。

学史を振り返れば、こうした石材利用の差異は、時間的な変遷の根拠としてとらえる見方が 通有的であったようにも思われる。この両者の時間的な位置づけをめぐっては、より厳密な判 断が要求されるだろう。しかし、層位の上下差こそあれ、観察される石器群間変異はほとんど 看取されておらず、自然層の区分によって石器群の関係性を切断し、時間的階梯に振り分けよ うとする思考法とは別に、石器群のもつ構造性を強調するのであれば、あながち時間差ばかり にこれらの石器群を環元することができるのであろうか。

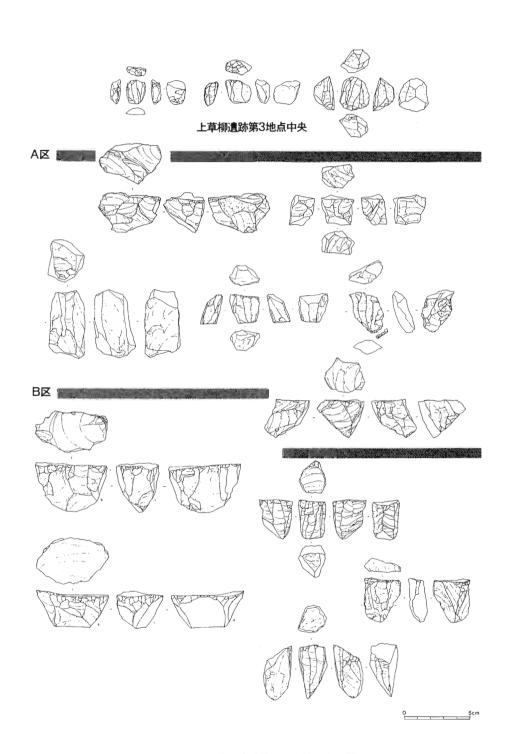
さらに、石材による剥片剥離あり方と遺跡内での廃棄パターンに対照性があることを述べたように、これらの石材消費の差は、本地域の石器石材および技術系列の全体的集合を構成しているのであり、個別の廃棄単位はそれを織りなす部分集合に相当すると考えられる。少なくとも、BB0層における各廃棄単位(=石器群)は、各集団の来歴を示している可能性が高く、その過程で獲得した石材種、別の遺跡から持ち運ばれた石器などの集合体から構成されていることを評価すれば、この集合の振幅とは、遺跡がもつ機能性の差異が表出したものだとみなすことができるといえよう。

#### (3)「船野型」または「海老山型」に関連する細石刃石器群の様相

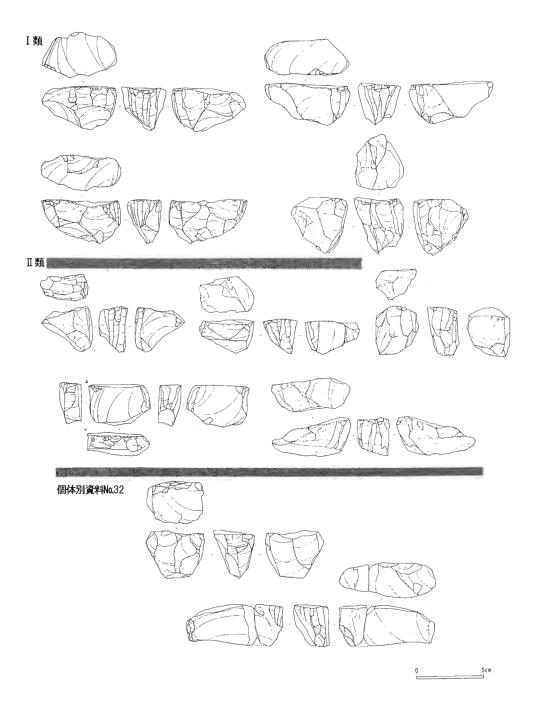
こうした構造性をさらに別の石器群に照射してみて、再度、考えてみたい。そこで、いわゆる「船野型」、「ホロカ型」、「海老山型」などと評される細石刃核をもつ石器群をみておくことにしよう。大和市上草柳第1地点第 I 文化層(第12図)、同下鶴間長堀遺跡第 I 文化層(第13図)、同上和田城山遺跡第 I 文化層(第14図)の石器群を参照してみたい。

まず、細石刃製作技術(構成 1)は、つぎのように概述されよう。細石刃石核・細石刃石核素材を石核整形とそれにもとづく形態的特徴によって 2 つに区分される(堤1984a・b)。つまり、「石核形態が船底形に整形されるもの」(I 類)、「石核原形の形成に一定のあり方が認められず、形態的にもバラエティをもつもの」(I 類)に分類される。このうち、I 類に相当するものは「船野型」であるとか「ホロカ型」などとよばれてきたが、筆者はこれを限定的な意味の「船野型」ととらえたい。反対に、I 類は、本論において I  $\sim$  V (VI) 類として区分した形態変異がふくまれ、型式認定や個別名称を付与することがむずかしい一群でもある。

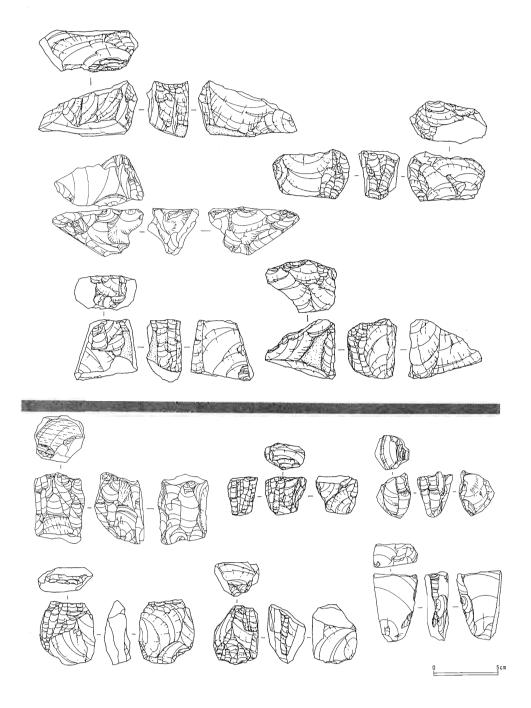
ここで問題とするのは、 I 類 (「船野型」) と II 類を石器石材・製作形態・廃棄パターンによって識別することにある。便宜的ではあるが、 I 類・ II 類が同一の石材、同一の母岩から製作されている遺跡(A:下鶴間長堀・上和田城山)、 I 類と II 類では選択される石材と廃棄パターンが対照的な遺跡(B:上草柳第 I 地点例)と分けてみることにしよう。石器群Aは、硬質細粒凝灰岩のような近傍産石材を主とした細石刃石器群で、 I 類・ II 類ともに凝灰岩やチャートの志向性がつよい。同様に、石器群Bでは I 類細石刃核に近傍産石材、 II 類に黒曜石が用いられる。石器群A・Bは、廃棄パターンにも石材ごとに独立しており、前者は遺跡外搬入、後者は遺跡内製作という対比が際立っているようにもみえる。 黒曜石は、神津島、畑宿、柏峠西と



第12図 上草柳遺跡第1地点第1文化層



第13図 下鶴間長堀遺跡第 I 文化層



第14図 上和田城山遺跡第6区第1文化層

いう産地組成が判明していることから(望月・堤1997)、居住地近傍の石材種のみならず、相模野台地から140km も離れた遠隔地の神津島系黒曜石も断続的に入手し、消費活動を繰りかえしていたことが推測される(堤2002)。

ここでいうAとBの関係は、石材消費活動の部分的集合とみなすことによって、共時的関係 のなかの双極性としても考えられるものである。むろん、石材組成に反映されるタイムラグは 熟慮せねばならない。厳密な時間軸における共時態を括弧に括っておくとすれば、こうした見 方もあながち無意味とはいえないだろう。

これまでの議論をまとめておこう。

- (1) いわゆる「野岳・休場型」細石刃石器群や、「船野型」細石刃石器群にしても、マクロ 的な視点から鳥瞰すれば、この両者の石器群は構成1、構成2、構成3という異なる技 術系列を保有し、それらは遺跡の機能性およびコンテクストの役割によって単相的ある いは複合的にあらわれる。
- (2) したがって、一見複雑にみえる細石刃石器群は遺跡ごとの技術の表現型である。相模野台地を通観すると、その基本構成は構成1ないしは構成1+構成3という組み合わせであり、構成2も構成1に融合する場合がある。
- (3) 構成2は、いずれも居住地近傍産石材を利用し、板状石核や置換系石核、またはそこから製作された刃器類のみが遺存し、原石獲得段階からの階梯的な石材消費の把握は困難である。ブロック外または遺跡外からの継起的な搬入によって石器群に構造化される。
- (4) 各構成内においても、石材消費は分極化の傾向を示す。膾炙している図式に則れば、「遠隔地:近傍系」ということになろうが、それはただ単に石材産出地の性格にとどまるものでなく、遺跡内での廃棄形態にも顕著な対照性が理解される。
- (5) 極言すると、「野岳・休場」あるいは「船野」といった、細石刃核の型式学的特徴に区分された石器群の変異をこえて、この両者には石器群の表出形態と、石材消費をも律する石材消費戦略の選択という二重の側面において、技術構造上の同質性がつよく意識される。

## 5 相模野細石刃石器群の技術構造

編年的に最古段階に位置づけられていた代官山遺跡第Ⅲ文化層、吉岡遺跡 B 区 L1H 層出土石器群の再検討と、その後につづく細石刃石器群が抱える技術論的な問題について紙面を費やしてきた。本論での石器群分析の基本的視点は、石器群に認められる複数の属性を相互に対照しながら、各技術系列を措定してそのコードの内部にふくまれる属性群を分節化する作業を試みるものであった。

すなわち、細石刃石器群をそれぞれ技術系列にわけ、構成1 (細石刃製作技術)、構成2

(一般剥片剥離手法)、構成3 (礫器状石核による剥片製作)とよんで、遺跡にのこされる技術属性のあり方について観察してきたわけである。石器製作とは、原石の入手にはじまり、諸般の階梯をふまえながら進められるという経過をもつ。観察の対象にさらされている石器群とは、じつはこれらの段階的な継起性が組織化された技術系列の複合体にほかならない。こうした視点にもとづいて、相模野細石刃石器群をとらえなおすと、各遺跡・各地点において石器の遺存状態には対照的な2つの資料群が識別される。すなわち、母岩別・個体別資料分類によって、遺跡内での石器製作と消費過程をトレースできる資料群と、石器製作や消費過程が断片的にしか復原されない資料群である。この両者は廃棄パターンのみならず、各母岩別に適用される石器製作技術、その内部に組織化されている段階的な石材消費までにも観察できる(第15図)。

さらに、本論でいう構成1~構成3までの石器製作の系列は、各遺跡において等質的にのこされていないことも明らかとなった。すなわち、各構成とは、細石刃石器群を構造的に把握した場合に抽出される技術系列であり、遺跡内での活動のありようを示準化石のように硬直した概念でとらえるのではなく、どのような器種の製作のために、石材消費行動もふくめた実践がとりおこなわれていたかをあらわすものである。石器組成にもとづく遺跡の類型化という従前のセトルメント理解から、道具立てとそれに適用される技術的な実践のありかたとを把握することによって、当該石器群の連鎖と技術の適応の様式を判別することができる。このような視点に立てば、相模野台地の細石刃石器群は、構成1+構成2+構成3のすべてを遺跡内にのこすパターン、構成1+構成2がのこされるパターン、構成1+構成3をのこすパターン、構成3のみのパターンといった廃棄パターンの類型化が図られる。これらの構成は、遺跡内での石材消費のみられるものと、石材消費が段階的に遡及できないものという対照的な石器群の内容だけでなく、石器製作技術の偏在性と石材消費のありかたとも兼ね合わせて評価すると、遺跡のユニット(廃棄単位)の組み合わさりかたによって、石器群の構造性を表出するセトルメントパターンに接近することが可能であるともいえるだろう。

BB0層細石刃石器群の成立、すなわち神津島系黒曜石の搬入という石器石材獲得活動の変化を境として、石器群の様相には画期がみられる。すなわち、吉岡遺跡B区や代官山遺跡では、石器石材に黒曜石(柏峠西産)を一括して大量搬入し、遺跡内での消費が著しい。これは構成1においてもっともよくみられる事象である。ただし構成2においては近傍石材による石核や剥片がブロック外搬入されており、この両者は対照的な廃棄パターンを示していた。構成2は、明らかにこの地域のいずこかからかの搬出が想定されるが、その存在はよくわからない。細石刃製作を遺跡内で遂行するありかたをみると、これらの遺跡は細石刃製作に限定する限り、拠点的性格を有しており、細石刃製作の全体的集合が観察される。

L1H 層上部段階では、代官山遺跡第Ⅲ文化層、吉岡遺跡群B区などの大規模遺跡が細石刃製作の場であり、ここを起点として、各作業集団が分散・展開していたことが推測される。またBB0層以降の黒曜石原産地は、信州系・神津島系など相模野台地を基点すると、直径140km

考古論叢 神奈河 第11集

石器群	細石刃製作技術 (構成 1)				一般剥片剥離技術 (構成2)				礫器製作技術 (構成3)	
	а	b	С	d	a	b	С	d	а	b
L1H層										
代官山亚文	•	•	•	•		0	0	0	+	+
吉岡AL1HU	•			•			0			
吉岡BL1HU	•	•	•	•		0	0	0		
柏ヶ谷長ヲサⅣ文		•	•	•		0	$\circ \bullet$	0	+	+
BB0層										
サザランケⅡa文									+	+
サザランケ II b文		•	•	•			•	•	+	+
上和田城山4 I A			(●)	•			0	0		
上和田城山4IB		•	•	•		0	0	0		
上和田城山4 I C						$\circ \bullet$	$\circ \bullet$	0		
月見野上野1Ⅲ文1群	•	•	•	•		0				(+)
月見野上野1Ⅲ文3群									+	+
三ノ宮Ⅲ文	(●○)	ulletO	ullet	•0	(O)	0	0	0	+	
中村I文		0	ullet	•0	0	0	0	0		
上草柳1- I A	•	•0	•	•0						
上草柳1- I B	•	ulletO	ullet	•0	$\circ \bullet$	$\circ \bullet$	$\circ \bullet$	0	+	
月見野上野1 🎞 文2群	•	•	•	•0				•	+	
かしわ台駅前I文		•	ullet	•0			$\circ \bullet$	0		
代官山I文		ullet	ulletO	•0			0	0		
長堀北Ⅲ文				•0				0		
台山I文		$\bullet$ O	ullet	•0		0	0	00+	+	+
深見諏訪山 II 文			•	•0				) (+)		
報恩寺		$\bullet$ O	$\bullet$ O	•0		0	0+	0+	+	+
L1S層下部										
下鶴間長堀 I (a)	(0)	0	0	0	0	0	0	0	+	+
新戸				•0		0	0	0	+	
栗原中丸Ⅱ文1~11	•	ullet	•0	•0		•	$\bullet \circ$	•0	+	+
栗原中丸Ⅱ文12			•	•			0	0		
相模野No.149		0	0	0			0	0		+

構成1・構成2

 a:原石の搬入
 b:石核(素材)の搬入
 a:素材の搬入

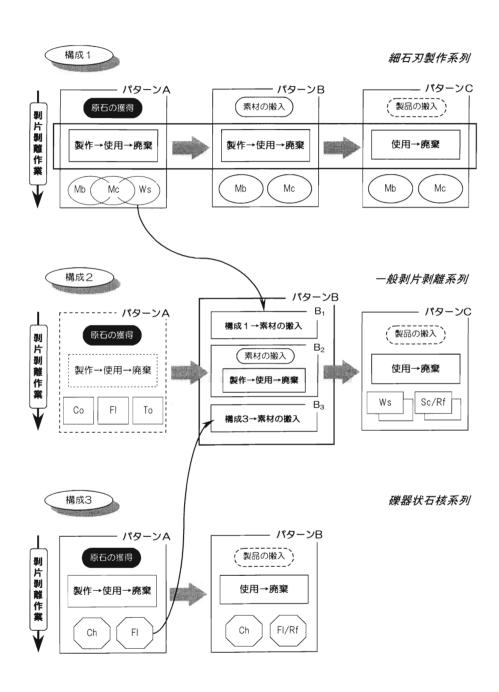
 c:石核類の搬入
 d:製品の搬入
 b:製品の搬入

構成3

●: 黒曜石(産地は不問) ○: 非黒曜石 +: 非黒曜石(構成3のみ)

第15図 相模野細石刃石器群の技術構成

の範囲まで石材獲得圏が拡大したことが想定される。この石材獲得圏は、彼らの活動領域とほ ぼ対比されるべき空間的拡がりに相当すると考えられる。むろん、これを交易網とみなすこと もできるが、主だった証拠がえられないので留保しておく。基本的には信州系および神津島系 黒曜石を利用し、近傍地の伊豆・箱根系黒曜石を適宜補充する黒曜石利用が観察されるように なるとともに、いわゆる在地的な石材をも石材消費活動に組み込むようになる。細石刃製作に も在地石材の利用は認められる特徴がある。一般剥片剥離工程には継続的に在地系非黒曜石石



第16図 技術構成の相互関係

材が選択されている。このように、南関東地方における当該期の遺跡間比較をおこなうと、ほ ぼ均質な剥片剥離工程を遺跡内で遂行している様態がみてとれる。

細石刃製作は、一般的に、ほとんどすべての遺跡・石器群において、斉一性を有しており、各遺跡内でその跡づけが可能のようだ(第16図)。これを母岩別あるいは個体別資料に還元して再度、石器群をみなおしてみると、L1H上部段階の石器群とはやや異質なことがわかる。その最たる特徴として、遺跡内で原石を搬入して搬入原料を消費(細石刃製作)完了する段階的石材消費活動がほとんど確認されないことが挙げられる。そのことが、母岩別資料を原石状態にまで復原することを困難にさせているといえよう。遺跡内での細石刃製作は、通常、細石刃石核素材の搬入ないしは整形後の細石刃核の搬入によって開始されることが一般的であり、さらに搬出の機会に応じて製作品の携行も想定される。相模野台地にのこされた細石刃石器群のほとんどは、こうした不完全なアセンブリッジでしかない。

こうした現象は、地理的・時間的枠組のみによっては解釈できないため、おそらく、石器群の行動論的な説明が必要とされるであろう。L1H上部段階では、各遺跡においてほぼ等質的に細石刃製作が遺跡内でおこなわれ、きわめて豊富な細石刃を日常的に製作していた。それに比べ、BB0層からL1H層下部にいたる層準に位置づけられる遺跡では、原石の獲得、素材の製作、細石刃核や細石刃の搬出にいたる各工程で、工程レベルの差に応じて製作痕跡が異なっている可能性が高い。これは細石刃製作のみに限定された事象ではなく、一般剥片剥離手法においても同様の事実を指摘できるであろう。この技術系列も遺跡内での原石の段階的消費が完全にトレースされる資料がふくまれておらず、石核や素材剥片が搬入される。利用される石材種は近在地の流域河川での採取が容易な素材を選好するにもかかわらず、遺跡内での消費過程を追及してゆくことはむずかしい。

当該期以降、細石刃石器群の遺跡規模が縮小するということは、これまでにも経験的に知られている。規模の小型化という事態を、技術の発現様式と結びつけて考えると、相模野台地にのこされた細石刃石器群はその多くが作業内容に同質の遺跡類型をのこしながら、かなりの広域(信州原産地や神津島原産地)を往還する、いわゆる「振り子」式の移動型の戦略を採用していた可能性を指摘できよう。おそらく、遠隔地黒曜石の採取に際して、生業地内を周遊する過程において、適宜、近傍産石材を獲得し携帯するという石材利用戦略が組織されていたものと考えられる。このような視点からみると、在地石材が細石刃製作や一般剥片剥離手法に適用される状況にも一定の説明がつくと思われる。つまり、この時期の信州には、学史的に著明な矢出川遺跡群や鷹山遺跡群などの大規模な遺跡群を形成する場合があるが、関東平野では、大規模な細石刃製作遺跡が三ノ宮例を除いてほとんど皆無であるという経験則にもとづくと、南関東の集団が直接信州や神津島など遠く原産地まで赴いて石材を獲得するような移動形態を採用していた蓋然性が俄然、高まってくる。移動戦略における石材消費活動の様態については、いまだ不明な点が多いが、いま一応の見とおしをたてておくことにしよう。

#### 6 おわりに

細石刃石器群を構成する技術系列に分解し、それぞれの技術の発現を詳細に観察すると、さまざまな過程の個別技術の組み合わさりが看取される。それは単に石器製作という行為にのみ限定されるのではなく、生業・居住形態や移動パターンなどと相互に作用して、生態的・社会的条件に対応を図る技術的組織の部分的な表現型であることが理解される。

すなわち、L1H層上部層に主たる生活面を有する石器群では、代官山遺跡や吉岡遺跡など柏峠西産黒曜石を選択し、遺跡内での段階的消費が顕著な遺跡をのこすことがある。つぎに、BB0層からL1S層下部相当層から出土する石器群では、黒曜石は信州系、神津島系、伊豆・箱根系など多様な産地の石材が利用されるほか、遺跡足下の近傍産石材も好んで利用される。石器製作は、遺跡間にまたがる石材消費の傾向が認められ、単一の遺跡内において段階的な石器製作の痕跡をトレースしうる例はみられなかった。石材産地と併せて考えると、かなりの広範囲を生活領域とする居住形態である。L1S層以降のいわゆる削片系細石刃石器群では黒曜石をまったく用いない在地石材志向に一変してしまう状況とは大きな隔たりがある。さらに、この石器群では、両面体尖頭器製作を恒常的におこない、石器群は基本的に両面調整技術を主体とした製作技術の総体を呈するが、細石刃技術と尖頭器技術は相互に並列化している特徴がある。長堀北遺跡、月見野遺跡群上野遺跡、勝坂遺跡などはみなこれに相当しよう。ただし、詳細については稿を改めることにしたい。

本論で観察してきたように、L1H 層上部の石器群とBB0層~L1S 層下部の細石刃石器群とは原産地の異なる黒曜石の利用という現象以上にきわめて共通的な石器製作構造が観察される。本論の視野に収めるところは、細石刃石器群を担った集団や個人の属した文化や社会構造の復原であった。とはいえ、ここで呈示した石器群構造が一足飛びに社会や集団性に読み替えられるわけではない。過去の社会や文化をさぐるためには、先験的に措定された諸型式や諸技術の集合体の表象としてこれをとらえるのではなく、技術の特徴や変容過程の地域的差異あるいは技術相互の選択性や構造性を明らかにすることによって、当時の社会単位へのアプローチを可能にしてゆく必要がある。そして、そのような技術的発現を行使させた理由を生態的・社会的・文化的背景と関連づけることが、旧石器時代研究全般の課題であるといえよう。

本論を草するにあたり、諏訪間順氏、山口剛志氏、大島慎一氏、佐々木健策氏、砂田佳弘氏、 堤隆氏には有益なご指導をいただきました。また、編集の田村良照氏には原稿提出が大幅に遅れ、たいへんご迷惑をおかけしたことをお詫び申しあげます。

#### 考古論叢 神奈河 第11集

#### 引用・参考文献

- 安蒜政雄 1984「日本の細石刃文化」『駿台史学』60、133-159頁。
- 織笠 昭 1984「細石器文化組成論」『駿台史学』60、71-93頁。
- 加藤晋平 1984「日本細石刃文化の出現」『駿台史学』60、38-56頁。
- 佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』、柏書房。
- 佐藤宏之 1993「北方系削片系細石刃石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29、55-83頁。
- 杉原荘介 1953「日本における石器文化の階梯」『考古学雑誌』39-2、21-25頁。
- 鈴木次郎 1983「細石器 (関東地方) ―関東・中部南部を中心に―」『季刊考古学』4号、67-69頁。
- 鈴木次郎・矢島国雄 1979「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の石器群」『神奈川考古』第6号、1-53頁。
- 鈴木忠司 1971「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8、1-13頁。
- 鈴木忠司 1979a「中部地方南部の細石器文化」『駿台史学』47、99-119頁。
- 鈴木忠司 1979b「東海地方の細石刃文化」『日本古代学論集』、1-34頁、平安博物館。
- 砂田佳弘 1988「相模野の細石器―その発生と展開に向けて―」『神奈川考古』第24号、31-64頁。
- 砂田佳弘 1993a「細石器の出現—相模野の検証—」『細石刃文化研究の新たなる展開 I 細石刃文化研究の諸問題』、21-59頁、佐久考古学会・八ヶ岳旧石器文化研究グループ。
- 砂田佳弘 1993b「相模野細石器の出現―器種変遷と石材流通―」『國學院大學考古学資料館紀要』第11 輯、1-41頁。
- 砂田佳弘 1994「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』第30号、1-20頁。
- 砂田佳弘 2001「相模野細石器編年の到達点」『平成12年度神奈川県考古学会考古学講座 相模野旧石器 編年の到達点』、73-90頁、神奈川県考古学会。
- 諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について―層位的出土例の検討による石器群の段階 的把握―」『神奈川考古』第24号、1-30頁。
- 諏訪間順 1991「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」『中ッ原第5遺跡 B 地点の研究』、 250-268頁、八ヶ岳旧石器文化研究グループ。
- 諏訪間順 1993「相模野台地における細石刃石器群と尖頭器」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ 細石 刃文化研究の諸問題』、67-74頁、佐久考古学会・八ヶ岳旧石器文化研究グループ。
- 田村 隆 1989a「二項的モードの推移と巡回―東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相―」『先 史考古学論集』第2集、1-52頁。
- 田村 隆 1989b「第2節 先土器時代」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1―佐倉市御塚山・ 大林・大堀・西野・芋窪遺跡― (本文)』、99-580頁、住宅都市整備公団、首都圏都市開 発本部、財団法人千葉県文化財センター。
- 堤 隆 1991「相模野台地の細石刃石器群」『大和市史研究』第13号、1-43頁。
- 堤 隆 1991「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』第17号、1-32頁。
- 堤 隆 2002「信州黒曜石原産地をめぐる資源開発と資源需給―後期旧石器時代を中心として―」『國 學院大學考古学資料館紀要』第18輯、1-21頁、國學院大學考古学資料館。
- 戸沢充則 1967「先土器時代石器群研究の方法」『信濃』17-4、1-14頁。
- 望月明彦 1997「蛍光 X 線分析による柏ヶ谷長ヲサ遺跡出土黒曜石製石器の産地推定」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡 相模野台地における後期旧石器時代の調査』、411-439頁、柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査 団。
- 望月明彦・堤隆 1997「相模野台地における細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」『大和市史研究』 第23号、1-36頁。
- 矢島国雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第1号、1-30頁。

《研究ノート》

# "The Great Shuffle"

縄文時代中期中葉における土器型式の「大攪拌」と南西関東の様相について

田村大器

- 1. はじめに
- 2. 前 提
- 3. 大攪拌

- 4. 関東西南部
- 5. 共有化
- 6. おわりに

#### 1. はじめに

まず始めに断っておかなければならないのは、筆者は遺物の分布論や土器型式論について専 門に取り組んできた研究者ではないということである。筆者は本来縄文土器の用途・機能を究 明するための手段として、あるいは縄文時代の土器生産システムを解明するための手がかりと して、1980年代以来一貫して縄文土器の複製及び製作した土器を用いた実験的研究を行っ てきた (註1)。 しかしながら、縄文土器をより厳密に複製するために、複製しようとする出 土土器の各個体に含まれるさまざまな属性や、その土器が含まれる「型式」あるいは「様式」 の実体については極力正確に、また広範囲に把握しよう努めてきたつもりではある。筆者の調 査・研究のフィールドは、本来東京都西部から神奈川県東部にかけてのいわゆる多摩丘陵南部 を中心とする地域であったが、この度縁あって北陸・信越およびその周辺の土器をつぶさに実 見する機会を得て、そのダイナミックな在り様と、技術・造作の多様性に改めて感ずる処があ り、またそれら土器群の錯綜した状況を掘り下げて認識することによって本来の研究領域にい くらかでも資するものがあれば、と本稿をまとめる事を思い立った次第である。浅学故の無知、 誤謬等多々あろうと思われるが、各位にあってはご寛恕願いたい。また縄文中期の土器編年と その周辺領域における研究は、方法論的なものを別としても地域別、段階別に過去膨大な蓄積 があり、本来であれば、学問的にはそれら研究を正しくあとづけ、吟味して学史を語らなけれ ばならないということは承知している。しかしながらそれら圧倒的な情報量を前にして、筆者 はなにをどう整理してゆかなければならないのか戸惑うばかりである。ただ1970年代に始ま る、首都圏をはじめとするあまたの大規模開発が膨大な量の出土土器の蓄積を生み、結果とし て80年代前半における優れた資料集成を産み出した皮肉については、多くの先学の指摘する とおりであるし、またその後の資料の増加とあらたな土器類型の検出を受けて、各地の個性あ

#### 考古論叢 神奈河 第11集

る土器群の編年的位置付けと分布状態に関する確認作業も近年活発化しつつあると認識している。本稿をまとめるにあたって、主として利用させていただいたそれら意欲的な集成・研究と報告について列記し、研究史に代えたいと思う。

神奈川考古同人会 1980「シンポジュウム 縄文時代中期・後半の諸問題 - とくに加曽 利 E 式と曽利式土器の関係について-」 神奈川考古 第10号 別冊 米田明訓 1980「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」甲斐考古第40号

増子康真 1981「東海地方西部の縄文文化」

『東海先史文化の諸段階』

(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 「縄文中期土器群の再編」 研究紀要(別冊) 南 久和 1985『南久和著作集第1集-北陸の縄文時代中期の編年 他9編』 転形書房 三上徹也 1986「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への 移行」 長野県考古学会誌 第51号

伊藤富治夫・中山真治 ほか 1987 『中山谷遺跡 -第9次~11次調査-』 小金井 市中山谷遺跡調査会

赤山容造 1990 『三原田遺跡 第2巻』 群馬県企業局 縄文セミナーの会 1998 『第11回 縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』 新潟県考古学会編 1999 『新潟県の考古学』 高志書院 長谷川福次ほか 2001 『道訓前遺跡』 北橘村教育委員会

# 2. 前 提

縄文時代中期中葉という過渡的な時期を理解するための切り口はそれこそいくつもあるだろう。しかしながら現時点においてその理解の方向性は、より微細な土器編年を用いた時期区分の方向に強くシフトしつつあるように筆者には感じられる。このような流れに対して宮崎朝雄氏は、埼玉県に所在する中期後半を主体とする三箇所の遺跡から出た土器の分析と相互比較を試みた論考の中で、縄文土器の編年研究の現状について以下の様な認識を示しておられる。

「これらの集成やシンポジュウム等で示された縄文土器型式編年網は、型式細分や地域型式間関係において研究者でかなりの相違が見られ、最近は、研究者間の齟齬が拡大する傾向にあり、縄文土器研究が閉塞的な状況に陥っている。このような現況は、編年網の枠組を構成する地域型式に捕らわれるあまり、地域の型式細分と編年整備だけが目的化し、編年網としての体系性を欠き研究が滞留していることに一因があると思う。(中略)編年網の整備がある程度果たされ、各地域における縄文土器の動態が時間的にも、空間的にも極めて連鎖的で、地域間の土器群が複雑に連動することが確認された今日こそ、編年網を基盤としながらも、さらに編年網の枠を越えた広域的、多角的視点からの総合比較の方法や理論の探求が求められていると言

えよう。総合比較の方法や理論の構築を実践する中で、改めて、縄文文化研究における縄文土 器型式編年網の位置付けや、縄文土器研究の方向性を再考することが必要と考える」(宮崎 1999)

筆者の能力ではとても「総合比較の方法や理論の構築」などできそうもないが、本稿の中ではせめて「編年網の枠を越えた広域的、多角的視点」から、関ヶ原以東の本州東部に分布する各土器類型のあり方を捉え直し、各論的部分にあえて拘泥することなく「空間的にも極めて連鎖的で、地域間の土器群が複雑に連動する」該期の土器群の様相を把握し、筆者なりの認識・見解を提示することによって「縄文土器研究の方向性を再考すること」への一助としたいと思うのである。

本稿で扱う主たる時期は、従来の編年観に従えば大木系土器は大木8a式及びその前後の段 階、中部高地系土器は井戸尻Ⅲ式から曽利Ⅰ式段階、北陸土器編年では上山田Ⅱ式から古府Ⅰ 式段階ということになる。しかしながらこの時期の、ことに深鉢形土器は地域ごとに極めて多 様な在り方を示しており、近年では東関東の「中峠式土器」、北関東の「三原田式土器」ある いは中部高地方面で「焼町土器」がそれぞれその実態を明らかにしつつある。また良好な出土 例の増加してきた「火炎型土器」「類火焔型土器群」(註2)や、いわゆる「唐草文土器」(註3) の他、東海地方の諸型式を含めて実に多彩な要素によって形成されている。あらためて見渡す と、この時期本州東部(関ヶ原以東)の土器群はまさに百花繚乱の感がある。しかしながら小 林達雄氏の定義する「様式」としての推移がたどれる大木系・中部高地系・北陸系という三つ の系統以外の、近年あきらかになりつつある各「型式」・「類型」・「様式」等は編年的位置を含 めてその存在を懐疑視するむきも多い。その大きな理由の一つは「標識遺跡」と「示準資料」 がもうひとつ明確でないということであろう。たとえば現在「三原田式」と称されている一群 の土器は、常に他の型式と共伴して出土しており、純粋に「三原田式」のみの出土によって形 成されている住居址等は見られないようである。前出道訓前遺跡の報文中には「中空状突起を 連続する『三原田型深鉢』でも(中略)『勝坂系』・『焼町類型』と組成をなす例と(中略)加 曾利EI式との組成を果たす例が認められる。これは時期差も勘案しなければならないが*、* 『三原田型深鉢』の特有の組成と見ることができないだろうか」として、「三原田型深鉢」が他 の類型の土器と常に混在する状況を看取されている。また「焼町土器」や「中峠式」、あるい は「火炎形土器」などに関しても同様の状況が見られ、このためこれらの土器類型が独立した 「型式」として成立するための諸条件にはいくぶん不安定な状況が伴っているといえる。しか しながら、これらは型式学的には個性ある土器の一類型として確かに存在しており、今後遺跡 あるいは遺構の中で土器群をどう解釈して行くかということを含めて、いま一段の研究の深化 が求められるであろう。それゆえ本稿では便宜的に、比較的短期間に土器の消長が推移する在 地性の強い土器群を、大村裕氏の土器呼称概念(註4)も視野にいれつつ、以下「○○型土器 (深鉢)」と呼び、従来から土器群の編年的実態が比較的明らかで、また広域的かつ長期的に時

間経過 (型式変化) が辿れる土器のまとまりを「〇〇系土器」、もしくは「〇〇様式」と記述することとする。すなわち、大木系土器、井戸尻・曽利系土器、勝坂(関東)系土器、阿玉台系土器、加曽利E系土器、北陸系土器(上山田~古府式)以外の土器群は、型式としては一旦棚上げし(註5)、各々を「個性ある土器群」として還元し、その在り方を探ってみたいと思う。

# 3. 大攪拌

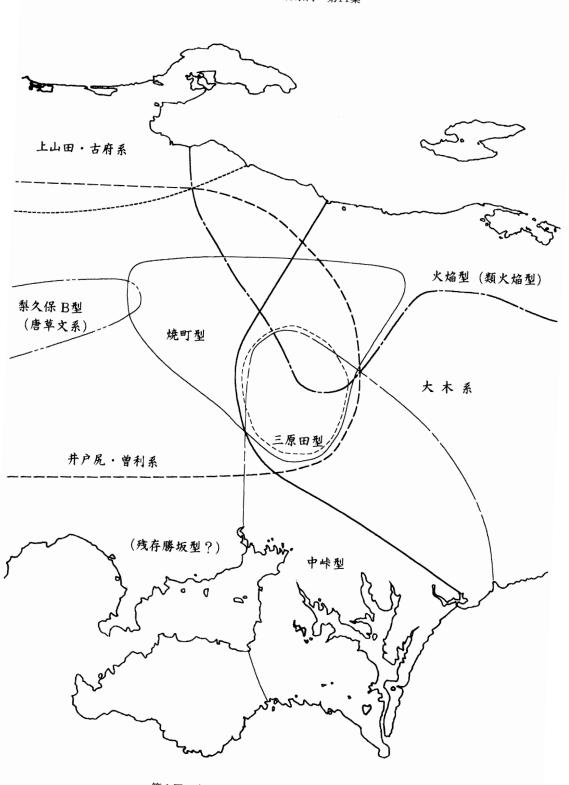
いきなり卑近な例で恐縮である。「モーニング娘。」という十代を中心とする少女たちによっ て作られているアイドルグループがある。安倍なつみとか加護亜衣などというメンバーが所属 しているというが、筆者のように四十を超えた男にはメンバーの顔と名前などはとてもではな いが覚えられないし、いちいち把握しようとも思わない。彼女たちは歌も踊りも決して上等と は思えないが、ここ数年安定した人気を獲得し続けている。「モーニング娘。」は結成当初より メンバーの加入・脱退を重ねて現在十数人のメンバーが参加しているらしい。このグループを 構成する個々のメンバーは、いくつもの小グループ(ユニット)を形成し、たとえば「ミニモ 二」であるとか、「プッチモニ」あるいは「カントリー娘。」といったさまざまなユニット名で CD をリリースするという複雑な活動を行いつつ「モーニング娘。」としてのフレームは維持 しているのである。さらに面倒なことには、それぞれのユニットは恒常的に離合集散を繰り返 し、時には一人のメンバーが複数のユニットに所属していたり、一過的なユニットが随時結成 されたりといった「グループ内の流動化」あるいは「重層化」が意図的に行われている。これ を同グループのプロデューサーであるつんく氏は、「メンバーをシャッフルする」と称して面 白がっているようなのである。特に断る必要もないが、筆者は別に「モーニング娘。」のファ ンでもなければアイドルフリークでもない。筆者が語りたいのはあくまで縄文時代の中期中葉 と呼ばれる時期の土器群についてである。

前述の如く、東日本の縄文時代中期中葉はかなり錯綜した状況にあることが近年多くの調査事例とその分析によって明らかになりつつある。東日本の各地域の中でそれぞれの土器群は、器形、文様構成、施紋技法が相互に影響しあい、また諸要素を交換しつつ地域ごとの独自のムーヴメントを生み出し、自己を主張・展開していた。その状況は東日本という大きなフレームの中で各土器様式もしくは土器群に含まれる諸要素が極端に「流動化」あるいは「重層化」しているということのあらわれなのである。そしてそれら土器群の在り様は、あたかも「モーニング娘。」というグループの、個々のメンバーの活動する様と酷似している、と筆者には感じられるのである。

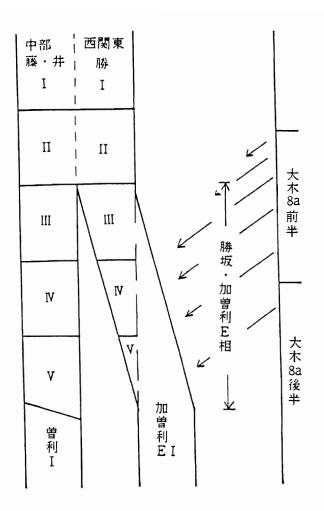
東日本における様式及び土器群の分布範囲はおおよそ図1の通りである(註6・註7)。一見して分かる通り、各「土器群」はかなり広い領域でその分布範囲を相互に重複させているが、 大局的に見れば大木系土器と井戸尻・曽利系土器の接触地域、具体的には多摩丘陵北側から利

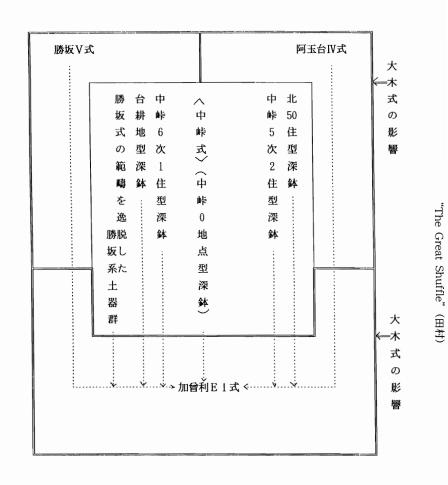
根川上流域、及び三国峠を越えた新潟県魚沼地方において、三原田型土器や類火炎型土器を含 む多様な土器群が混在していることが看取できるであろう。またこれらの地域の中では大木系 土器の強い影響力の下に成立した中峠型土器(註8)と、井戸尻系土器の分布圏に北陸系の土 器勢力が波及・転生したと思われる焼町型土器がお互いにせめぎ合っている、と見ることもで きるであろう。この時期の錯綜した様相について、南関東地域の東部を大村裕氏が、西部につ いては三上徹也氏がそれぞれ認識を概念図にまとめられている(第2・3図参照)。ことに三 上氏は、「以上の事柄をまとめたものが第4表(本文中の第2図・筆者註)である。(中略)④ のような経過(大木8a式の古い段階における関東に対する急激な浸透・筆者註)を経て加曽 利E系土器が成立してゆくのであるが、一方で同時にまだ勝坂式土器も作られていたのである。 これを、現象的には勝坂式土器と加曽利E式土器の共伴として把えることができる。こうした 相前後する、しかも型式的に大きな相違のある2者が同時存在するという独特な時期を迎えた のであった。このような現象は、『相』の概念をもってあてることがふさわしいと考える。(中 略)勝坂式と加曽利E式が共伴する時間帯を『勝坂・加曽利E相』として理解したい」と述べ ている。つまり従来一つの型式が廃れた結果、次の型式が勃興してくるという前提で語られて きた土器型式の変遷が、この時期においては特殊なプロセスの下に何かイレギュラーな状況の 下へとシフトしてゆくと三上氏は認識されているようであり、そういった状況を氏は「相」と いう概念で把握されようとしておられる。

先に触れたように、この時期は同じ遺跡・遺構の中であっても、異なった類型の土器が相互 に並存しているケースが一般的である。それだけではなく、出土資料のなかにみられる複数型 式の「折衷型」、「あいの子」あるいは「○○もどき」である土器もけして希ではないというこ とが言えるのである。例えば、福島県の会津地方には火焔型土器の影響を強く受けた大木8 a 段階の土器が知られているし、また南関東においては阿玉台様式後半段階における勝坂Ⅲ式土 器との「折衷型」がそれほど珍しくない。いずれにしても各土器群あるいはそれら土器を製作 する集団は、隣接する地域から、場合によってはかなり遠距離の集団からも土器の器形、紋様 要素、装飾技法、雰囲気等の影響を受けつつ、また相互に干渉しあいながら、大きな潮流を形 成していったと見ることができるのである。そしてこの状況は、あたかもそれまで各地域の中 で形成されてきた各「型式」の枠が崩壊し、各々に内在していたエネルギーが一気に噴出して いったかのようである(註9)。しかしながらその巨大な潮流は東日本の中期中葉というフレー ムを完全に逸脱してしまうことはない。たとえば文様モチーフにおいては「横S字文」や 「多重渦状文」の盛行、装飾技法においては粘土紐貼り付けによる隆帯の多用や特殊な半裁竹 管を用いた半隆起線技法の採用またはこれを模倣したとみなされる平行線文の使用、四単位を 基本とする口縁の分割意識や胴部下半における縦位施文の重視、さらには立体的把手や大型突 起の採用等、器形やプロポーションの差異はありつつも非常に多くの部分でその共通意識を認 めることができるのである。つまり前節で「個性ある土器群」として規定したあまたの土器類



第1図 東日本中期中葉における土器の分布圏

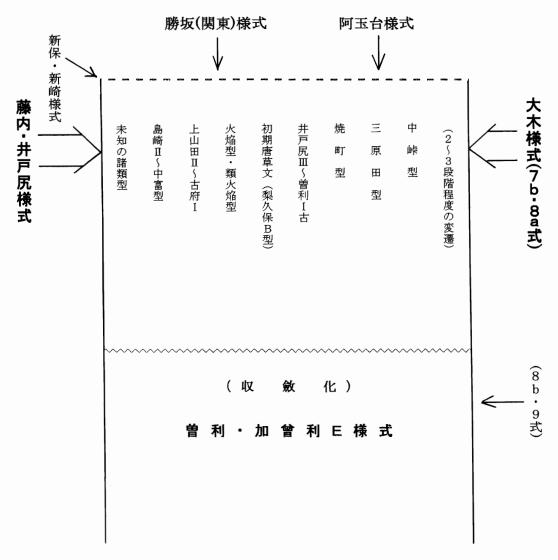




第2図 中期中葉土器形式推移のモデル (三上 1986)

第3図 勝坂・阿玉台式末期から加曽利E式(南関東)初頭の状況 (大村 1998)

# 《東日本縄文時代中期における土器様式の関係性概念図》



第4図 東日本中期における土器類型の関係性概念図

型や土器様式の集合体が、ほとんど垣根の取り払われた東日本という巨大なフレームの中で、強烈なエネルギーによって大撹拌されていると見ることができるのではなかろうか(第4図参照)。このような状況を筆者は密かに、中期中葉段階における土器型式の「グレートシャッフル」(The Great Shuffle=大攪拌)と呼んでいる。さらに中期中葉における「グレートシャッフル」の期間は、たとえば新潟県の阿賀野川中流域や群馬県赤城山麓あるいは長野県天竜川流域など、それまで人間活動の痕跡が比較的希薄であった地域に突如として確固たる集落遺跡が形成され始める時期と軌を一にしているのである。そしてこのような状況を現出せしめた「強烈なエネルギー」の実体とは、はたして何だったのかという事を、今後さまざまな機会を捉えて究明しなければならないと考えている。

# 4 関東南西部

南関東には、五領ヶ台遺跡、勝坂遺跡、阿玉台遺跡、加曾利貝塚という四つの縄文中期の標識遺跡が所在している。神奈川県における土器型式の変遷は山内清男氏等による初期の編年案より、五領ヶ台→勝坂→加曽利E、という各様式を辿って後期に至る、という一見単線的かつスムーズな移行のありかたとして理解されてきた。一方東京湾を挟んだ東関東においても五領ヶ台→阿玉台→加曽利Eという、やはり単線的な土器型式の推移が考えられてきた。確かに個々の様式間の変遷は、細分に関する見解の対立などを除けばこの地域における型式の在り方について山内清男氏の編年大綱制定以来大きな混乱は無かったといえる。しかし永きにわたって平穏無事であったというこの状況こそを、今まさに問題としなければならないのである。

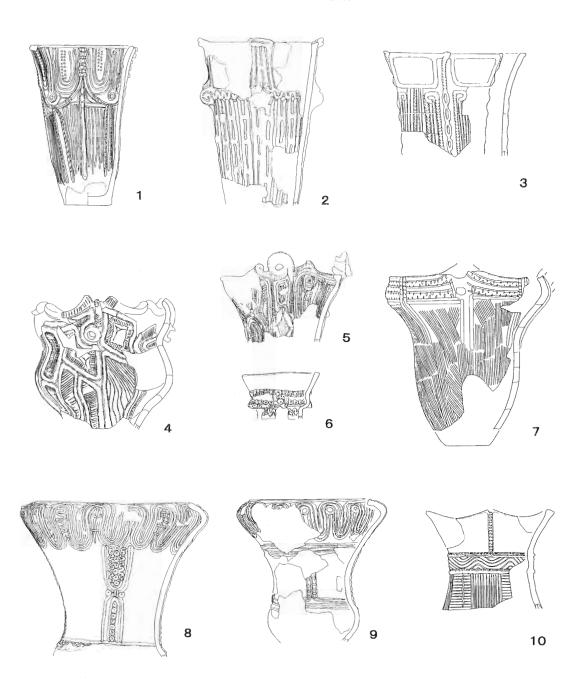
下総考古研究会等による「中峠式」の提唱以来、中期中葉における土器型式の変容のありかたは、汎東日本的な、もっと大がかりな別の動きが垣間見える状況を現出させた。そしてこのことは、南西関東の縄文中期前葉から後葉への変化は暫移的かつスムーズであるというそれまでの常識に反して、東日本全体の大きなうねりから見れば、むしろこの南関東地域の状況は局地的な例外に属するのではないか、という根源的な疑問に突き当るのである。つまり前述の四つの標識遺跡が存在するばかりに、それらから抽出された土器群があまりにも直線的に結びつけられ編年として普遍化されすぎたきらいがあるのではないか。そしてそれは「中峠式は成立するのか否か」という命題と共に、山内氏によって制定された初期の編年体系とその後の評価が正しいか否か、という問題も孕みつつ大きな議論に発展すべきであろうと思えるのである。

では関東南西部(神奈川県地域)における中期中葉、ことに加曾利EI式段階の土器は、はたしていかなる状況であるのか具体的に見てみたい。前出の神奈川考古同人会によるシンポジュウム資料の土器集成図によれば、加曽利EI段階の土器はわずか11遺跡12例である。このうち宮之原例の2個体はむしろ曽利系土器の範疇で捉えられると考えられるので、実質10個体ほどが1970年代までに神奈川県内で報告された加曾利EI式段階の土器のほぼ全てとい

うことになる。さらにこのシンポジュウム以降、勝坂期に集落の形成を開始し、加曽利E式の 後半段階まで消長が辿れる集落遺跡の良好な調査事例が増加してきているにもかかわらず、相 変わらず加曽利EI段階の土器は良好な出土資料が増えないのが現状である。1980年代以 降に報告書が刊行された「新戸遺跡」(御堂島 1988)、「川尻遺跡」(御堂島他 1992)「三 ケ木遺跡」(御堂島・恩田 同)、「青野原バイパス関連遺跡群」(伊沢 1995)、「原東遺跡」 (天野・桜井 2000)、また神奈川県ではないが隣接する東京都町田市の「高ヶ坂南遺跡」(金 子・岡田 1987)などまとまった数量の土器が検出された集落遺跡の調査結果からも同様の 傾向が明らかである。ことに青野原バイパス関連遺跡群の大地開戸遺跡の報文中には、「この 段階(勝坂Ⅲ式期・筆者註)の資料は古い様相を示すものが多く、曽利、加曽利E式にスムー ズにつながるもの(勝坂Ⅲ式期の新しい様相を示す物・原註)は少ない。よって次のⅧ段階に 移行するにあたって断絶感は否めない。また、加曽利EI式の資料も極めて少なく、勝坂3式 との共伴関係を捉えられることもできなかった」(伊沢 前出)とあり、この地域における典 型的な状況を顕在化させているといえる。その他には1987年刊行の「厚木の考古資料」 (厚木市教育委員会 1987) における、過去に調査・検出された遺物の資料集成などにも全く といってよいほど該期の土器は見あたらない。一方、早川天神森遺跡(岡本・鈴木ほか 1983) や、山王平遺跡(戸田・小林 1988)等の低位丘陵や台地縁辺部の大規模集落は、加曽利E Ⅱ式もしくは曽利Ⅰ式期後半段階から本格的な集落形成が開始されている例が目立つし、多摩 丘陵と相模野台地を隔てる境川流域の集落遺跡の分布状況をまとめた拙論でも同様の傾向が明 らかであった(田村 1999)。かたや東京都の多摩丘陵以東の地域においては、多摩ニュータ ウンNo.300遺跡 (可児他 1994) や小金井市の中山谷遺跡 (伊藤・中山他 1987) などでの 加曽利EI式土器の良好な検出例や、埼玉~北関東方面での中峠型深鉢の出土数の順調な増加 が見られる。また最近の研究成果として東日本各地で中期中葉の各土器類型が編年的に数段階 に細分されつつあるという現状に対して、神奈川県域においては伝統ある加曽利EI式の細分 もままならないという状況が現出してしまっているのである。東日本全体のダイナミックな土 器類型の勃興と大撹拌の中で、神奈川県域において、あたかも取り残されたかの如くエネルギー を喪失してしまったかのような土器の在り様は、また該期社会の様相を端的に示していると見 ることもできるであろう。

ところで神奈川県域で加曾利E系の土器がほとんど使用されなかったこの時期、関東南西部においてはどのような人間集団の活動の状況が現出していたのであろうか。考えられる可能性は二つである。一つはこの地域から土器生産者あるいは使用者たる該期縄文人が、なんらかの要因によって離散し、人口密度が極端に低下してしまったというケース、もう一つは土器型式上いくぶん断絶するような印象がありつつも三上徹也氏の説くように、実際には勝坂=井戸尻系の土器を他地域と比較して相当長期間にわたって生産・保持し続けた、というケースである。後者の場合、関東南西部における勝坂系の土器は、汎東日本的なありかたとして地域的ごとに

#### "The Great Shuffle" (田村)



1. 新戸 J4号住(加曽利E I 式と共伴)2. 川尻 J-29号住3. 早川天神森包含層4. 高ヶ坂南3号住5. 川尻 J-10号住6. 新戸 J3号住7. 早川天神森12号住8. 川尻 J-28号住(井戸尻皿式と共伴)9. 川尻 J-1号住10.早川天神森21号住(各土器のスケールは統一されていないが、概ね縮尺 1/5 である)

第5図 関東地方西南部の土器

展開するさまざまなモーメントを包摂しつつ広義の曽利・加曽利E系土器に収斂されてゆく段階(曽利I式後半あるいは加曽利EII式期の初頭)まで、大きな変容を遂げることなく継続して使用されたということであって、たとえば第5図の1から3までの、やや在地化したような勝坂系土器(1は加曾利EI式と共伴している)が一類型をなして長期間存在していた、という可能性はある。

しかしながら加曽利E系土器の生産あるいは使用が活発でなかったからといって、神奈川県地域に「グレートシャッフル」はまったく波及していなかったということではない。例えば第5図の4や5は従来勝坂様式の範疇で捉えられていた土器であるが、円形突起の付きかたやパネル状区画内の曲線化した沈線の充填などに、また5は口縁部の装飾や器形などに焼町型の影響を看取することができる。また7の胴部に施文されている地紋の条線(撚糸紋?)を縄文に置き換えれば中峠型深鉢ということになるだろうし、6の器形は三原田型のものである。さらに8~10はモチーフといいプロポーションといい、これは初期唐草文(梨久保B)型そのものである。現時点で筆者の管見に触れた資料はまだ散発的ではあるが、多摩丘陵西部や房総半島南部の資料なども含めて検索すれば、このような類例はさらに増加するであろう。関東地方における加曽利式E様式土器の成立のいきさつも含めて勘案するならば、関東南西部における中期中葉の土器の中にも「グレートシャッフル」のダイナミックなエネルギーは確実に感知しうるのである。

# 5. 共有化

前節まで見てきたように、筆者は東日本という大きなフレームの中で、多くの土器類型が複雑に混じりあい重層化する「グレートシャッフル」という現象をある種の仮説として提示してきた。そして関東南西部における中期中葉の土器群は、多くの概説書にあるがごとく、五領ヶ台→勝坂→加曽利Eという、確固たる編年序列に基づいて単純かつスムーズに移行しているわけではない、という考え方も示してきた。更に筆者は神奈川あるいは南関東の縄文土器研究の中で多用される「中期前半における」、とか「中期後半段階では」、という言い方の陰にあって、ひとり存在を主張し得ない「中期中葉」の置かれた皮肉な状況についても、同時に思いをいたさざるを得ないのである。すなわち東日本の多くの地域において「百花繚乱」とも形容すべき、時代を彩る多様な土器群を欠如していると考えられるに至った関東南西部の状況を「スタンダード」ではなく「レアケース」として認識しなければならなくなってきているということを、研究者間の共通認識として獲得しなければならないように思うのである。いずれにせよ、土器製作技術のひとつの段階としての、あるいは先史時代の文化階梯としての「中期中葉」を、研究者間で共通の言葉として語れる認識基盤あるいはパースペクティブが、今必要とされているように筆者には感じられる。

佐藤雅一氏は、新潟県の中期後半「沖ノ原式」土器について検討される中で、土器型式の設定 について以下のような見解を述べられている。「一方、共有化される考古時間の枠組みを考え る必要がある。遺構の切り合いから並べることの時間変遷がある。また、文様変遷モデルに沿っ た主観的文様変遷観を背景とした時間変遷がある。どちらも分類することは可能であり、しか る手続きが行われているならば可能性のひとつとして認定されるであろう。しかし、それが多 くの研究者が共有することのできる考古時間として認定されるかを考える必要がある。また考 古時間の枠組みとして表現したが、その枠が碁盤目の方眼のように等質である前提そのものに 疑問が抱かれてきている」(佐藤 2003)まさに慧眼であるといえる。しかしながら同時に 「現状における新潟県の縄文土器研究の水準から判断して、大木7a式から大木10式までの 6型式分類に対比される段階区分を基本に、その中を2~3細分することがどうにかできる程 度である。特に、提示された資料群を対象とした検証作業を反復することが不可能の場合が多 い。したがって、現段階において中期を最大で18段階区分する時間幅が考古時間として一般 共有化できるものと考える」(佐藤 前掲) として中期における型式の細分を意図されている が、「中期を最大で18段階区分する」前に、どこからどこまでを中期中葉段階として弁別す るのかというフレームと、中期中葉とは縄文時代という長い時間経過の中でどのような意味を 持った時期であったのかということを確認・明確化し、「一般共有化」することこそ先決では ないのかと筆者は思うのである。そしてそのことが、中期中葉をはさむ前後の段階に対するよ り深い理解にも繋がってくるはずである。

# 6. おわりに

「下手の横好き」という言葉がある。今、この言葉は筆者のためにあるのではないかと思っている。本稿冒頭でも述べたが、本来この分野の門外漢である筆者が、いま編年研究の中でも最もホットな分野に土足で踏み込むがごとき振舞いに、我ながら身の縮む思いである。また乱暴な推論を元に大仰な物言いをすることについても、この分野での問題解明に専心されている各地の先学諸氏に不快な思いをさせてしまうことを考えれば、なんとも申し訳がないという気持ちで一杯でもある。しかしながら筆者が縄文土器と関わり合いを持つようになって以来、いつかは縄文中期・東日本の土器のダイナミックな動きと、その背後にある該期人間集団のエネルギーについて描いてみたいと考えていたのもまた事実であり、本稿でどれ程それに接近し得たかは、はなはだ疑問ではあるにしても、少なくとも東日本全体の中の巨大な潮流の中で関東南西部の状況を把握しなおそうという試みを通じて、そのダイナミズムの一端なりとも感じていただければ、と思うのである。

筆者は今、故あって新潟県に住んでいる。生まれは東京の品川であるが、幼少期の生活と大学卒業後の現場稼業は、かなりの時間神奈川県で過ごしている。本稿はそんな「神奈川人」と

して筆者の、関東に対する惜別でもある。

本稿をまとめるに当たっては、いつもながら有益な助言を与えてくれた畏友・小池聡氏、それに図版作成や文章の校正等に多忙な中お骨折りいただいた㈱野上建設興業文化財調査室の小 熊晋介・真壁鈴子・金内元の各氏に、文末ながら厚く御礼申し上げたい。

#### 註

- (1)田村大器 1993「有孔鍔付土器の構造と機能について」 長野県考古学会誌 第79号 ほか
- (2)長谷川福次氏は、「道訓前遺跡」報文中で、「火焔土器」と強い関連性を持ち、また「馬高類似土器」と呼ばれたこともある、群馬県域に主体的に分布する一群の土器に「火焔形系土器」の名称を与えられ、編年的位置や分布圏に関する分析を行っている。また福島県会津地方にはかねてより大木8 a 式の中に「火焔形土器」の影響を受けて成立した「火焔形類似土器」が存在することが知られている。本稿では新潟県を分布の中心とするピュアな「火焔形土器」以外の「火焔的な」土器を便宜的に一括して「類火焔形土器」と総称することにする。将来的には「火焔形系土器」と「火焔形類似土器」との比較検討の中で、より相応しいフレームが形成できるかもしれない。
- (3)いわゆる「唐草文土器」についての定義は基本的に米田明訓氏の見解に従っているが、三上徹也氏は 1972年の梨久保遺跡の調査において、宮坂光昭氏が曽利様式とは異なる独自性を持った土器に対して「梨久保B式」の名称を与えていたこと、曽利式との継続的な相違点が明瞭であることを挙げて「唐草文土器」は「梨久保B式」と呼称すべきことを指摘している(三上 1998)。筆者も同感である。「唐草文」とか「火焔」といった一般名詞を型式名に付するのでなく、あくまで標識遺跡名を型式名として採用すべきだと考えるからである。そういった意味では現状で用いられている「火焔形土器様式」という用語も、詳細な検討を加えた上で「馬高1号式」なり「笹山式」なりの型式名称に統一されてゆくべきであると考える。いずれにせよここでは初期唐草文土器を「唐草文(梨久保B型)土器」と表記することとする。

#### (4)大村 1998

- (5)この時期の東日本の縄文土器は、あえて「型式規定の枠」に閉じ込めなくてもよいのではないかと思う。例えば現段階で型式要件を満たしていない土器群については「型式の概念が通用しない存在」であり「土器類型以上のものではない」という可能性もあるだろう。かといって「土器型式でないから無視して良い」ということにはならない。当面「○○型土器」などの呼称で、大きなフレームの中でのファジーな捉え方をしておくのがベターであると思う。
- (6)本図において表示している各土器群の占位領域は前述の各報文などに示されているものを参考にして線引きしているが、あくまで住居址等の生活跡が、地域の中で連続的な「面」として認識できる現段階での範囲を想定している。よって土器の出土が「点」でしか出土地が認定できないものについては「領域外」としている。
- (7)本図の下敷きにした白地図は、道訓前遺跡報文の中で使われているカラー図版(立体CG図)をトレースして使用させていただいたことを明記しておく。
- (8)中峠型土器は大木系土器の強い影響を受けて東関東で成立したと考えられるが、大村裕氏によれば現在 「中峠式土器」として一括されている土器群は、台耕地型深鉢、北50住型深鉢、中峠5次2住型深鉢、中

#### "The Great Shuffle" (田村)

峠6次1住型深鉢等に類別できるという。(前出、大村1998) またこの中で本来の「中峠式」は「中峠 0地点型深鉢」として峻別されなくてはならないとしている(第3図参照)が、本稿では広義の「中峠 式」として扱われてきた従来の概念を踏襲して「中峠型」土器という呼称を用いることとする。

(9)従来より土器型式の分布圏=集団相互の通婚圏という考え方がある。中期中葉において土器型式の分布圏があいまいになり、かなり遠較地にも他型式の土器が流入する事を考えれば、単純な通婚圏の拡大という考え方にはかなり無理があるように感じる。また小林康男氏によれば、縄文時代中期に入ると石器組成に地域ごとの差異が序々になくなり、本州東部は最終的に利根川下流域と伊勢湾岸以外の「大地域圏」を形成してしまうという(小林 1983)。交易や物流システムも含めた新たなモデルの形成が求められているように思う。

#### 引用・参考文献

(文中で明記したものの他に以下の文献を利用させていただいている)

厚木市教育委員会 1987 『厚木の考古資料 I 先土器時代・縄文時代』 厚木市文化財調査報告書第 30集

阿部恭平・菅沼 亘 1999 『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 笹山遺跡発掘調査報告書』 新潟県十日町市教育委員会

天野賢一・櫻井真貴 2000 『かながわ考古学財団調査報告書79 原東遺跡』 財団法人かながわ考古 学財団

井沢 純ほか 1995 『かながわ考古学財団調査報告書 5 青野原バイパス関連遺跡』 財団法人かなが わ考古学財団

上野佳也 1986 『縄文コミュニケーション』 海鳴社

大村 裕・下総考古学研究会 1998 「中峠式土器の再検討」『第11回縄文セミナー 中期中葉から後 葉の諸様相』 縄文セミナーの会

岡崎文喜・新津健 1983 『遺跡研究論集Ⅲ-下総地方における縄文時代中期貝塚集落址の一形態・海 老ヶ作貝塚を中心として-』 遺跡研究会

小林謙一・岡本孝之ほか 1987 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書 2 早川天神森遺跡』 神 奈川県立埋蔵文化財センター

各務光洋・田村大器 1985 『祖師野遺跡発掘調査報告書』 岐阜県金山町教育委員会

加藤晋平・小林達雄・藤本 強 編 1987 『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』 雄山閣

高ヶ坂南遺跡調査会 1987『高ヶ坂南遺跡』

小林安男 1983 「組成論」『縄文文化の研究 7 道具と技術』 雄山閣

佐藤雅一 2003 「沖の原式土器について」 『第16回縄文セミナー 中期後半の再検討』 縄文セミナーの会

田村大器 1999 「境川流域における縄文時代集落遺跡の展開-水との関わりを中心として-」 大和 市史研究第二十五号

東京都埋蔵文化財センター 1994 『東京都埋蔵文化財センター調査報告書第16集 多摩ニュータウン遺跡-No.3 0 0遺跡-』

#### 考古論叢 神奈河 第11集

戸田哲也・小林義典ほか 1988 『山王平遺跡発掘調査報告書 縄文時代編』 山王平遺跡発掘調査団中村龍雄編 1980 『中部山地 縄文土器集成 諏訪湖周辺の考古学(2)』

三上哲也 1996 「縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」 長野県考古学会誌51号

御堂島 正 1988 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書17 新戸遺跡』 神奈川県立埋蔵文化 財センター

御堂島 正 1992 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書23 川尻遺跡』 神奈川県立埋蔵文化 財センター

御堂島 正・恩田 勇 1992 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書26 三ヶ木遺跡』 神奈川 県立埋蔵文化財センター

宮崎朝雄 1999 「縄文時代中期後葉土器群の動態について一埼玉県行司免遺跡・古井戸遺跡・将監塚 遺跡の比較分析からー」『縄文土器論集』 縄文セミナーの会

美山町赤根遺跡調査団 1998 『東京都八王子市 美山町赤根遺跡』

山口逸弘 1991 「『新巻類型』と『焼町類型』の文様構成 ~群馬県の縄文時代中期中葉の二者~」土 曜考古 第16号

山内清男 1967 「日本遠古之文化」 山内清男・先史考古学論文集・第一冊 (新刷)

米田明訓 1978 「曽利式土器編年の基礎的把握」 長野県考古学会誌 第30号

# 長頸壺と石鍬

# -神奈川県における弥生時代初頭~中期の打製石斧-

渡 辺 外

1. はじめに

- 4. 弥生時代初頭から中期にみる打製石斧の変化
- 2. 所謂「石鍬」研究の変遷
- 5. まとめ
- 3. 神奈川県における様相

## 1. はじめに

弥生時代石器の研究では、これまで打製石斧を一括して土掘具に位置付けてきた。弥生時代、もしくは弥生時代文化そのものを規定する要因の一つに、水稲耕作を中心とした主たる生業としての食料生産があげられる。遺物の様相から弥生時代における農耕を考えるとき、打製石斧は低地遺跡で発見される木製の鍬・鋤等と対比させて、主に台地上等での陸耕のための耕作具として評価されている。「石鍬」という呼称にはその形状以外にも畑作の痕跡を示す遺物としての認識が含まれているが、実際の遺跡にみる弥生時代の打製石斧はそれぞれ出土状況も異なり、時期により規格・形態も一様ではない。使用に際しては着柄して耕作に用いられたものと想定されているが、打製石斧の基部に着柄可能な痕跡が認められるものがあることが形態・製作技法の分析から推定されているのみで、実際の遺跡における出土例や模作品による使用実験等の裏付けが為されている訳ではない。機能については掘削に適した形態であることは間違いなく、また使用痕の分析から土掘具であることの検証がなされているが、未だその用途に関する議論が解決した上で研究が進んでいるとは言い難いのが実状である。

弥生時代開始期における社会を考察するには、その前段階として該期の遺物全体の変遷を把握する必要がある。本稿ではそのための基礎作業として、まず本県における弥生時代前期~中期の遺物の中で、その様相を継続して追うことの出来る壺形土器を軸に、打製石斧との伴出状況や様相の変化についての整理を試みる。

# 2. 所謂「石鍬」研究の変遷

神奈川県域の遺跡にみる弥生時代打製石斧の実態について触れる前に、冒頭で述べた弥生時 代石器研究における打製石斧の位置付けを把握し、「石鍬」研究の意義と問題点について押さ えておきたい。

農耕と石鍬 八幡一郎氏による「石鍬」の報告が為されて以来、弥生時代の打製石斧は石製農具としての評価に基づいて検討され続けてきた(八幡1941)。もともとは打製石斧が弥生時代に存在することが認識された時点で、既に石器と弥生時代生業論とを関連付けて考える下地が出来上がっており、そうした点では縄文時代以前の打製石斧とは研究の契機と展開そのものが違っている。しかし奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡の調査を契機として低地遺跡における木器の出土事例が相次ぎ、その中で鋤・鍬類をはじめとする農具類の存在が全国的に認識されると、弥生時代の生業については水稲耕作と木器を中心とした議論へと移行していく。

そうした中で藤森栄一・神村透両氏は中部高地における弥生時代の打製石器と農耕との関連性について論じた。実際の遺跡と遺物の様相から水稲耕作以外の農耕についての可能性を検証すると共に、低地における弥生集落では木製農具を用いた水稲耕作が行われたのに対し、台地・丘陵上の高燥な立地の集落では硬質土壌を耕して畑作を行う必要性があったために石製農具が併用されることになり、石鍬が用いられたと考えた。また石製鎌や石庖丁を収穫具として位置付け、集落の立地により農耕の存在を示す遺物の組成には違いが見られることを示した(神村1985ほか)。しかし今日に至るまでの発掘調査事例の中には、打製石斧の水田址付近での出土例や、居住址・生産址を全く伴わない山間部等での出土例もあり、耕作とは別の土掘具として評価する意見も出てきている。

集成と形態分類 平井勝氏は弥生時代の石器についてまとめた著作の中で、打製石斧の全国的な分布と地域性について指摘した(平井1991)。打製石斧についてはその形態から短冊形・撥形・分銅形のほか有肩形に分類し、地域毎に継続時期と分布傾向について違いが認められることを述べている。時期を同じくして各県・地域でも石器の集成と分類作業が進み、打斧についても弥生時代の遺跡における組成の実態が知られていった(中鉢1994・松井1995ほか)。

製作技法と使用痕研究 こうして弥生時代打製石斧についてのデータが蓄積されていく中で、 打斧の製作技法そのものは縄文時代の延長線上にあり、それを継承したものであるという認識 が広まっていった。その一方で打斧の製作技法についての再検討を行い、生業とは一旦切り離 した上で新たな研究手法を模索する試みが行われてきている(角田2002ほか)。

また収穫具などを含めた石器の使用痕研究は、これ迄は一部の地域においてのみ局所的な深化が見られるだけであったが、第7回石器使用痕研究会において農具とみられる弥生時代石器と使用痕についての各地域の様相と研究の方向性についての検討が行われた(石器使用痕研究会2002)。しかしこれ迄の研究の流れを総体的に見ると、形態分類と機能論、そして使用痕観察による分析は同じ遺物を対象とした研究として十分に関連付け出来ているとは言えない。特に使用痕分析については今後も分析方法と研究の進展が見込まれ、従来からの弥生時代打製石斧研究への援用が期待される分野である。

こうした状況を踏まえた上で、次節では神奈川県域の弥生時代前期~中期における遺物の様



第1図 県内の弥生時代打製石斧(前・中期)出土地点の分布 [六十万分の一]

相を、打製石斧を中心に概観していきたい。

# 3. 神奈川県における様相

県内の弥生時代前期~中期の遺跡で打製石斧を出土している例は、現在報告書などで確認されているだけで20遺跡程度、約100点を数える(第1表)。

第1図には本県における弥生時代前期~中期の遺跡の内、打製石斧が出土している例の位置と分布を示した。時期別に見ていくと、図中の遺跡Noで1・2が縄文晩期末~弥生時代前期、3~6が前期~中期前葉、7・8は中期中葉、10~18が中期後葉に該当する。9の池子遺跡群No.1-A地点例だけは、後述する理由から前期~中期中葉の時間幅の中に含まれる。遺跡の立地や様相は、前期~中期初頭は山間部や山塊端に隣接する丘陵地帯が多く、中期前~後葉になると平野部や河川沿いの段丘上、低地部分でも検出されるようになる(註1)。遺跡数の上で

も時期が下るにつれて若干増加し、中期後葉で急増する点で該期の遺跡全体の傾向をそのまま 反映している。逆に言えば打製石斧の出土傾向は該当する時期の遺跡の検出傾向に比例してお り、我々が打製石斧として扱っている遺物は、弥生時代前期~中期の遺跡において普遍的な存 在であったことを示していると言ってよい。

本節では、時間的な変遷に沿って各遺跡の出土遺物について簡単に触れ、該期の打製石斧と伴出遺物の実態を明らかにしていきたい。

#### (1)前期併行~中期前葉

清川村宮ヶ瀬遺跡群(No.1)上村遺跡(第2図1~9)

上村遺跡は県北部の愛甲郡清川村の山間部に所在し、相模川の支流、中津川沿いの河岸段丘上に立地する。ピット群と遺物包含層を検出し、前期前半の土器と打斧3点のほか磨石類や剥片等が出土した。1~9はピット群とその周囲の遺物包含層から出土した遺物である。

1は壺の胴部破片で、横斜方向の条痕を施す。2は小型壺の破片。横方向に羽状の沈線を3段以上重ねて描いている。津久井町三ケ木遺跡出土例(第11図5)に類するものと考えられる。

3~6 は甕。3 は砲弾形を呈し、全体に横斜方向の条痕を施す。口唇は押捺が巡る。4 は胴上半に最大径を持ち、横方向の条痕を全体に施す。5 は頸部で縊れて口縁が外反する器形で、胴部に斜方向の条痕を施した後、口縁下に縦位の条痕を加えている。口唇部は押捺。6 は口縁部に縦羽状、胴部以下に横方向の条痕を施す。7・8 は打製石斧。7 は節理面で縦方向に細長く割れた石材を用いた短冊形の打斧で、表面に礫面を残す。裏面が節理面で、若干の擦痕が認められる。側面全体に細かい剥離を加えている。8 は石斧刃部側の断片。刃部は裏面から細かい剥離を加えることで形成される。9 は礫器。片側からの剥離により刃部を形成している。大井町矢頭遺跡(第2図10~14)

矢頭遺跡は県北西部の足柄上郡大井町に所在し、丹沢山塊南端の緩斜面上に立地する。弥生 時代前期とみられる焼土址(炉址)1基と土坑2基が検出され、周囲から土器片が出土した。

10~14は1号炉址及び2号土坑の周辺から出土した遺物である。10は壺の頸部~胴部の破片。胴中位に横方向の、下半に縦斜位の条痕を加える。胴上半には頸部との境に浮線的な表現による複数段の横位沈線を、下位に下向きの連孤文を加えている。11・13は甕。11は口縁下に斜方向の条痕を、胴部以下は底面まで縦位の条痕を施す。口縁部には押捺が加えられる。13は精製甕の胴上半部の破片で、浮線文甕の影響によるもの。12は浅鉢の口縁~胴部破片。口縁はレンズ状の押捺が加えられる。口縁下に横線が巡り、胴部に10の壺と同様の連弧文が上下に対向するように配されている。これらの土器は縄文晩期末の精製土器に見られる浮線文手法の影響を色濃く残しながらも、文様そのものは沈線を用いて表現している。こうした浮線文と沈線文との中間的な様相から、これらの土器は「浮線文直後」の段階とされ(谷口1997)、弥生時代前期初頭に位置付けられる。14は報文で打製石器とされているが、打製石斧の断片と考えられる。基部側を欠損しているため、全体の規模は分からないが、縦長の剥片から作ら

#### 長頸壺と石鍬 (渡辺)

# 宮ヶ瀬遺跡群上村遺跡 10cm 6 10cm 7~8:打製石斧 10 cm 9:礫器 矢頭遺跡 13 [拓影は1/6] 14: 打製石斧 11・13:甕 12:浅鉢

第2図 上村遺跡・矢頭遺跡出土遺物 [土器実測図1/8、拓影・石器1/6]

れており、刃部側の側面近くに礫面を残している。その他の側面は入念に細かい剥離が加えられている。

# 山北町堂山遺跡(第3図)

堂山遺跡は県北西部の山北町に所在し、山間部の河岸段丘上に立地する。土坑95基の他、 遺物包含層から前期後半~中期初頭の土器と石器が多量に出土した(第3図1~26)。

1~10は壺である。1は口縁に刻目付の突帯を持ち、胴部に山形の条痕を施す。2は胴下半に横位条痕を施し、縄文を加える。3は胴部に横位条痕を、頸部には縄文地に横線と山形を描き、内側に短線を加える。口縁は刻目付の突帯。4は算盤玉形の壺で、工字状の突帯に刺突を加える。5は横位条痕を施し、間に波状文を加える。6・7は縦羽状の条痕を施し、横位の条痕を加える。8・9は縦羽状と横位の条痕の間に、同原体による短線を加える。10は小型壺。地文の縄文を十字又は工字状に磨消して主文様としている。中井町中屋敷遺跡例(第11図6)と同様の手法をとり、群馬県上久保遺跡例(第11図7)などに類例が認められる。一個体の土器に条痕・縄文・箆描沈線の3種の文様要素が個々に含まれる点は、この段階の特徴である。

11~16は甕。11は口縁に縄文を、胴部以下に横斜方向の条痕を施し間に無文帯を作る。12は縄文地に沈線文を描くもの。横線をひき、間にB字・逆B字状文を加える。13・14は口縁下縦位、胴部に横斜位条痕を施す。14は縦位・横位条痕の間に波状条痕を巡らせる。15は口縁下に横位、胴部以下に縦羽状条痕。16は全面横位条痕。17・18は浅鉢である。17は縄文地に上下に横線をひき、間に縦長の長方形と、変形工字文が崩れたような形が交互に繰り返される。18は工字形を上下二段に組んで描き、工字形の中央に短線を加える。

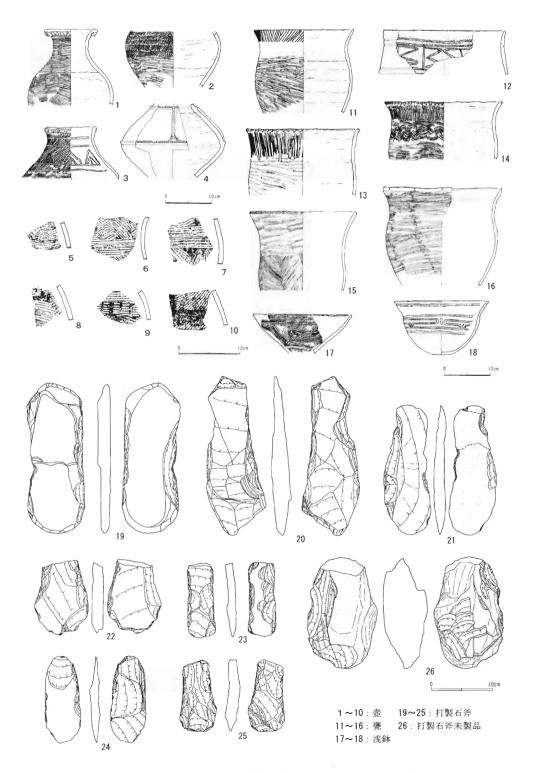
19~25は打製石斧である。19は短冊形で刃部先端は円みを帯びている(以下、曲刃と記す)。 20は撥形で刃部先端が尖るように作られている(以下、同様に尖刃と記す)。表面の基部側に節理面が残る他は、大小の剥離で整形される。21は裏面の殆どの部分に礫面を残す。刃部の調整が僅かに認められる他は使用痕も無く、未製品の可能性も考えられる。22は撥形の中型品で、基部側を欠損している。表面刃部側の一部に礫面を残す。23・24は短冊形で共に片面に礫面を多く残しているが、23が平らな刃部(以下、平刃と記す)であるのに対し、24は曲刃である。25は撥形で、基部側の一部を欠く。26は打製石斧の未製品と報告されたもの。21の例や石器の出土した量なども併せて考えると、本遺跡で石器を製作していた可能性も考えられる。

これらの打製石斧については包含層からの出土であり、時期的な特定は難しい。ここでは同じ包含層から出土した土器群と同じく前期末~中期初頭の範囲に含まれるものとする。 厚木市及川宮ノ西遺跡(第4図)

及川宮ノ西遺跡は県央地域の厚木市及川に所在する。相模川の支流、小鮎川と荻野川に挟まれた低位の河岸段丘上に立地する。弥生時代の土坑9基が検出された。土坑は内部に土器が複数収められており、報告では再葬墓として扱われている(以下、文中ではYSKと表記)。

 $1 \sim 3$ は YSK-05から出土した。 1は胴長で口縁に刻目付の突帯を持つ大型の条痕壺。 2は

# 長頸壺と石鍬 (渡辺)



第3図 堂山遺跡出土遺物 [土器実測図1/8、拓影・石器1/6]

全面に横斜位条痕を施す壺。胴上半に山形又は弧状の条痕を加える。3は小型壺で、胴上半に 変形工字文が崩れたような沈線文を描く。胴下半は縄文のみ。

4~9は YSK-02から出土した。4は短頸で胴の張る壺。上半に縄文を施し、箆状工具により横方向のナデ消しを加える。5~7は甕口縁部の破片。5は縄文地文に、口縁下に数本の横線を加える。6は縄文地文で頸部側に箆状工具によるナデ消しを加える。これらの土器は前期後半~中期初頭段階に比定される。1は北西関東の、3は東北地方南部の系譜をひく土器である。

10~17は遺構外又は他時期の遺構覆土から出土した石器である。10~16は打製石斧。この内10~14は撥形を呈する。10・11は大型品で平刃のもの。12・14・15は中型品の曲刃で、13は10と同様に直線的な平刃の大型品である。16は基部側の欠損がひどく、器形は判別できない。刃部は曲刃で、幅から推定すると大型品と考えられる。17は削器。片側に細かい剥離によって刃部が形成される。全て遺構外出土のため、土坑出土土器に伴うものかは断定できない。

また遺構外出土遺物には抉入柱状片刃石斧も含まれ、中期中葉の石器群である可能性も考えられる。ここでは前期~中期中葉の範囲に含まれる資料としておく。

#### 二宮町天神谷戸遺跡(第5図1~27)

天神谷戸遺跡は県西の沿岸部、二宮町に所在する。丘陵南端と葛川に挟まれた谷戸状地形に 立地する。弥生時代の遺構は検出されず、包含層から土器片148点と打製石斧が出土した。

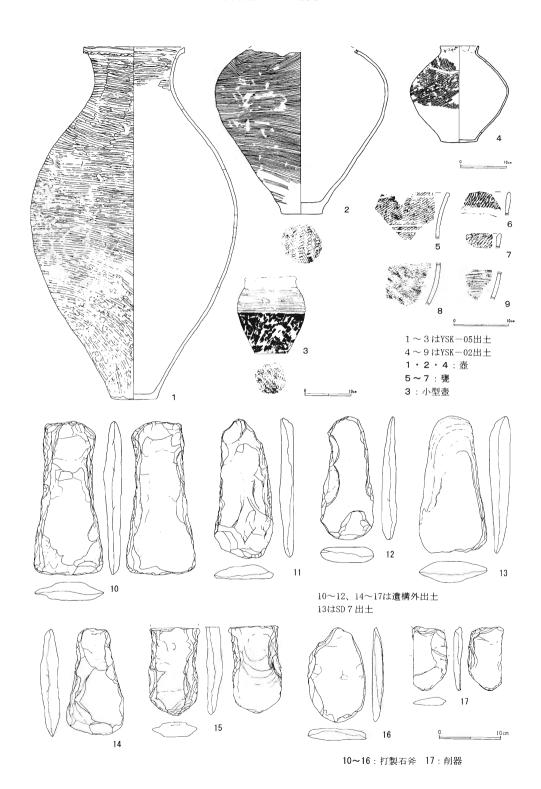
1~9は前期末~中期初頭に属する。1~3は浅鉢。口縁下に変形工字状の沈線文を施す。4~6は筒形の破片。長方形が縦に重畳する沈線文を施す。9は堂山遺跡例(第3図10)と同じ小型壺。10~26は中期前葉段階の土器で、10~19は壺。10~12は頸部に条痕原体による横斜位の短線を加える。13・18・19は横位と山形の条痕を数段加える。群馬県七日市観音前遺跡例(第11図18)と同じものであろう。15~17は頸部~胴上半に横位条痕を数段施し、間に縦羽状の条痕を加える。埼玉県前組羽根倉遺跡例(第11図14)や七日市観音前例(第11図17)と同じ類型のものである。20~25は甕。20は沈線文を施すが、その他は条痕施文のもので、恐らく第11図15に類するものと考えられる。27は撥形の打製石斧で、平刃の大型品。刃部に使用痕を残す。

これらの遺物は前期末~中期前葉に属し、打斧もその範囲に含まれるものと推定される。

#### 秦野市草山遺跡(第5図28~36)

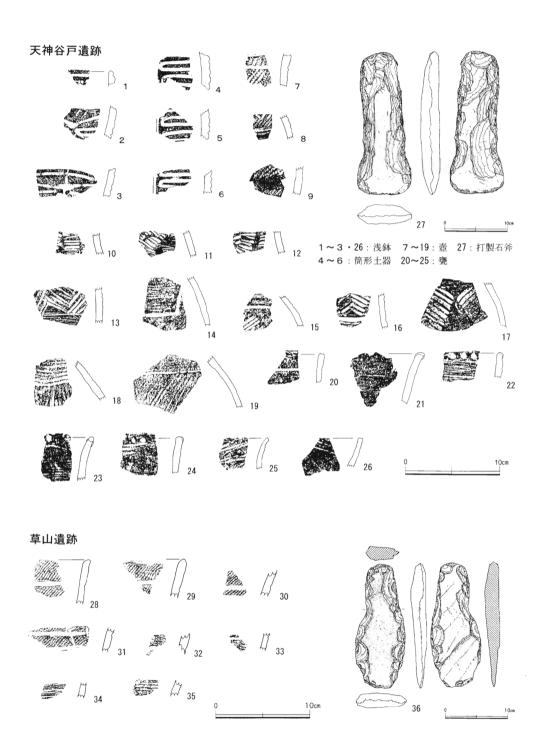
草山遺跡は県西部秦野市に所在し、秦野盆地の東端に位置する。地形としては、金目川沿いの丘陵上に立地している。数次にわたり調査されているが弥生時代の遺構はなく、平成12年度の調査では遺構外から土器数点と共に打製石斧が出土している。28~33は縄文地文に沈線文を施される甕。破片のため原型を推定するのが難しいが、第11図9や同図19のような、北西関東の前期後半~中期前葉に見られる有文甕との関連が伺われる。34・35は条痕甕の胴部破片。36は打製石斧。曲刃の中型品で、若干形の歪んだ撥形を呈する。薄手の大型剥片を素材とし、表面側に節理面を多く残す。側縁には両面からの細かい剥離が加えられている。

これらの遺物は報文では弥生時代初頭とのみ記されているが、土器の様相は前期末~中期前



第4図 及川宮ノ西遺跡出土遺物 [土器実測図1/8、拓影・石器1/6]

#### 考古論叢 神奈河 第11集



第5図 天神谷戸遺跡・草山遺跡出土遺物 [土器拓影1/4、石器1/6]

葉のものと考えられる。打斧が必ずしも共伴するものとは限らないが、時期的にはその範囲に 含まれるものとして位置付けておきたい。

#### (2)中期中葉

# 平塚市王子ノ台遺跡(第6図1~27)

王子ノ台遺跡は県西部の平塚市に所在し、金目川沿いの台地縁辺部に立地する。中期の住居 址9(+1)軒と土坑7基を検出しており、これは後述する戸室子ノ神遺跡と共に、現在報告さ れている範囲で県内最古段階の弥生時代集落の発見例である。

第6図にはその内3軒の住居址から出土した遺物を提示している(註2)。土器は所謂須和田式の中でも新しい様相を持つ。古い様相のものは秦野市平沢北ノ開戸出土例(第11図20~23)が有名で、県内の資料では三浦市遊ヶ崎出土例(第11図24~26)が後続する(註3)。本遺跡の資料はその遊ヶ崎例よりも更に新しい要素を持っている。その顕著な例としては、長頸壺には文様帯構成の変化が見られ、口縁付近が地文のみで、頸部以下に沈線文をもつもの(1・2・13)や、刻目付の突帯・貼付けと沈線文を組み合わせた例(10・11)、短頸化して縄文地文に刻目付の貼付けを有するもの(16)などが存在する。甕は口縁に縄文・胴部に縦位条痕のもの(5)、口縁下に縦位・胴部に横斜位条痕(6)、全面斜位(14・18)など、堂山遺跡の甕の系譜をひくものが存在する。また図示していないが、この他に東海地方からの新しい要素とみられる横羽状条痕を施す甕も認められ、中期前葉以前の様相と中期中葉以降へ繋がる要素の両者が混在する。

このほか広口壺(4)、小型の丸底埦もしくは鉢(17)など、土器の器種組成とバリエーションは豊富になり、これに高坏が加われば後続する宮ノ台式土器の組成とほぼ同じになる。

土器と伴出している石器は、太型蛤刃石斧(24)や磨石(7・21)・砥石(9・22・25)などと共に打製石斧(23・26・27)も認められる。23は平刃で短冊形の中型品。24の太型蛤刃石斧や25の砥石と共に住居址から出土した。26・27は遺構外から出土したもので、26は平刃・撥形の刃部断片。27は平刃で短冊形の中型品。基部側と側面の一方を欠く。

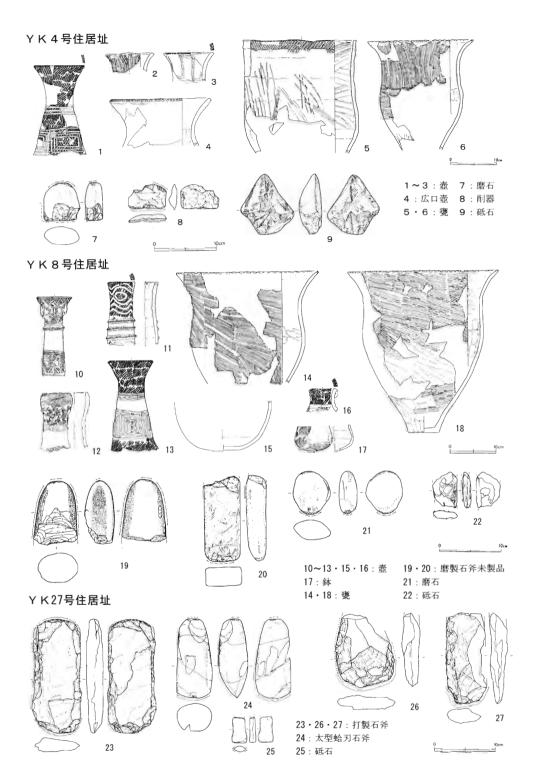
### 厚木市戸室子ノ神遺跡(第7図1~25)

戸室子ノ神遺跡は県央地区の厚木市に所在し、小鮎川付近の台地上端部に立地している。該期の住居址7軒と土坑(報文中では再葬墓)1基が検出されている。

第7図1は土坑から完形で出土したもので、本遺跡の中期の土器の中では比較的古い要素を持つ長頸壺である。口縁・頸部~胴上半まで横方向の文様帯がほぼ均等に重畳し、下半に条痕を残す点は遊ヶ崎出土の長頸壺(第11図24)と共通する要素であり、同じか近接して後続する段階ではないかと考えられる。戸室子ノ神遺跡の集落から出土した土器には新古の様相が見られ、第7図では1~6が古い段階に属し、12~17・19~24が新しい要素の認められるものである。

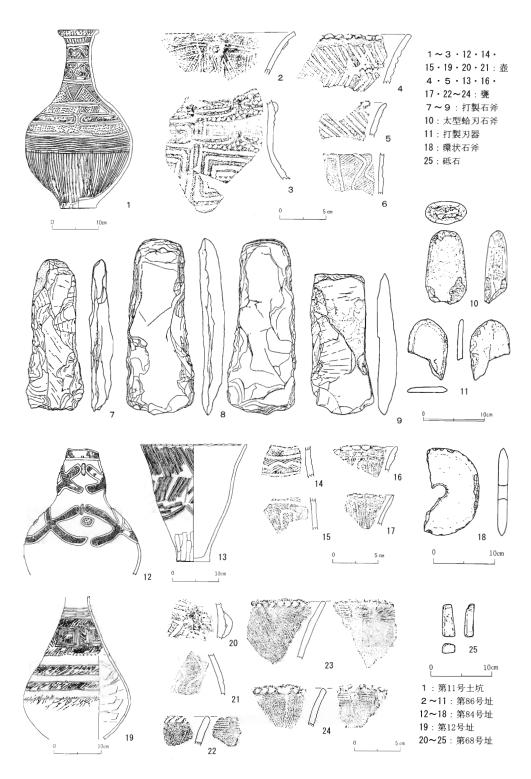
2~6 は第86号(住居)址から出土した。2・3は同一個体の壺で、口縁~胴上半にかけての破片。円形の貼付けや重四角等を基調とした沈線文を施し、文様内部を工具による刺突で充填する。4・5 は甕で、横羽状の沈線を施す。12~17は第84号址から出土した。12は瓢形の器

#### 考古論叢 神奈河 第11集



第6図 王子ノ台遺跡出土遺物 [土器実測図1/8、石器1/6]

#### 長頸壺と石鍬 (渡辺)



第7図 戸室子ノ神遺跡出土遺物 [土器実測図1/8、拓影1/4、石器1/6]

#### 考古論叢 神奈河 第11集

形の壺で口縁と底部を欠く。縄文帯による×字状文と貼付けを持つ。13・16・17は甕で、横羽状の条痕を施すもの(13)、口縁下に縦位条痕を施すもの(16・17)が存在する。

20~24は第68号址から出土したもので、20・21は瓢形の壺であろう。頸部に貼付を持ち、三角形・弧状を基調とした意匠文を描く。22~24は口縁内部に櫛目鎖状文を持つ条痕甕。口唇は何れも工具による刺突を加え、外面は縦位(22)・斜位(23・24)の条痕を施す。但し、23・24については横羽状条痕の可能性もある。櫛目鎖状文は宮ノ台式土器の古手の甕に見られる要素であり、本址の例は中期中葉~後葉の過渡期的な様相を示すものであろう。19は第12号址から出土した壺で、最大径位が胴下半にあり、胴~頸部にかけての縊れが全くない特異な器形である。細描沈線による重四角や横線と縄文帯を用いた文様は、要素・構成共に中期中葉の従来の壺形土器のそれとは異なり、12の壺と共に本遺跡の資料の中でも異質な存在である。

石器については第86号址からまとまった資料が出土している。7~9は打製石斧である。 全て平刃の大型品で、7・8は撥形、9は短冊形である。10は太型蛤刃石斧の断片。刃部側 を欠損している。11は扁平な礫の一端を片面から加撃して刃部を作り出している。

王子ノ台・戸室子ノ神両遺跡の資料を概観して思えることは、土器・石器双方共に前段階から継承している様相を色濃く残しながらも、一方では新しい段階へと継続する要素も顕在している点である。これが中期中葉新段階の遺跡における共通要素なのかどうかは断定するべくもないが、今後の新資料の増加と検証がこの問いを解決してくれる可能性に期待したい。 逗子市池子遺跡群No.1 — A 地点(第8 図 1 ~22)

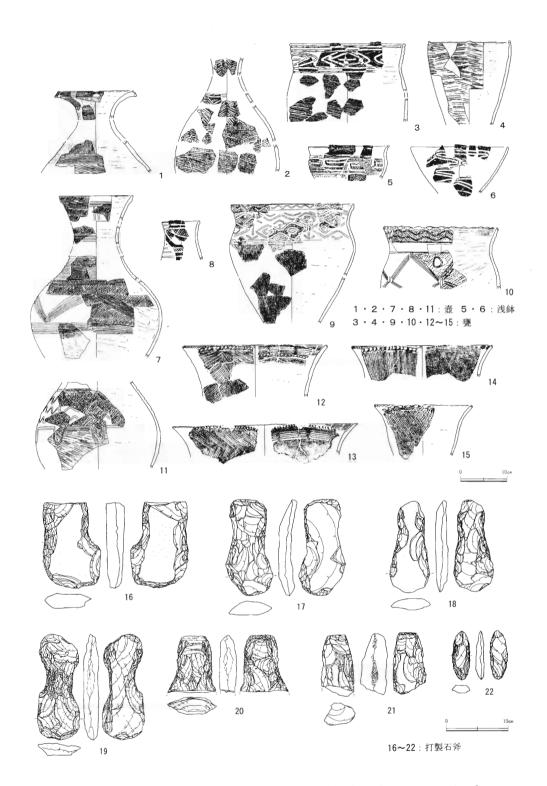
池子遺跡群は三浦半島の付け根にあたる逗子市に所在し、No.1 - A地点は丘陵に挟まれた谷戸部分の低地に立地する。弥生時代中~後期の集落に隣接して旧河道が検出され、その最下層から縄文晩期末~中期中葉の遺物が出土した。

1~6は中期初頭~前葉の土器である。丸子式の壺(1)や条痕文壺(2)のほか、有文甕(3)、条痕甕(4)、沈線で変形工字文を描かれた浅鉢等、堂山・及川宮ノ西・天神谷戸で見られた要素が認められる。7~10は中期中葉段階の土器である。7は古手の様相を持つ長頸壺。8は短頸化した小型壺の口縁部。9・10では有文の甕であるが、この段階のものは本県でも類例は少ない。11~15は戸室子ノ神遺跡の新段階と同じ、中期後葉との過渡期段階の資料である。

12~14は口縁内面に櫛目鎖状文を持ち、外面の条痕は縦羽状(12)・横羽状(13)・縦位(14)の ものがある。15は斜位条痕が施される小型のもので、櫛目鎖状文を持たない。どの甕も口唇 は工具による刺突を加えられる。

16~22は最下層から出土した打製石斧である。16は片側に肩を持つ平刃の大型品で、基部側を欠く。17・19は分銅型で曲刃の中型品。18は撥形で曲刃を持つ。20・21は基部側の断片。

22は槍先形を呈する小型品で特殊な例である。この地点では縄文時代の土器も同じ層位から出土しており、時期的に縄文晩期末~弥生時代中期のどの段階に該当するものなのかは判別できない。県内の弥生時代打製石斧には類例のない分銅形や、特殊な形の小型品等については、



第8回 池子遺跡群No.1-A地点 旧河道最下層出土遺物 [土器実測図1/8、石器1/6]

縄文時代の石器の可能性も考えられる。

#### (3)中期後葉

\*\* の かみ 小田原市山ノ神遺跡(第 9 図 1 ~21)

山ノ神遺跡は県西部の小田原市に所在し、酒匂川と久野川に挟まれた丘陵上の端部に立地する。工事発見を契機とした緊急調査が行われ、宮ノ台式土器と石斧数点が出土した。

2・3は中期中葉の土器で、第8図7と同様の長頸壺である。1・4~18は中期後葉の宮ノ台式土器に該当する。1・4~10は壺。櫛歯状工具により擬流水文(8・9)・波状文(7・10)等が描かれる。11は縄文帯を用いた結紐状文を描く。12~18は甕。口縁内面に櫛目鎖状文を持つ例が多く、外面には斜位(12)・縦位(13)・縦位羽状(16)等の条痕を施すものや、刷毛目の上に横羽状の沈線を描くもの(14・17)がみられる。19は打製石斧。平刃で撥形の中型品で工事中に発見された遺物である。20は太型蛤刃石斧で、刃部を欠損している。21は扁平片刃石斧の刃部側の破片。土器は宮ノ台式の中でも古い様相を示す資料である。石器、特に打斧は厳密な意味で伴出資料とは言い難いが、中期中葉~後葉の範囲に含まれるものである。

### 鎌倉市手広八反目遺跡(第9図22~38)

手広八反目遺跡は県域東部の沿岸、鎌倉市と藤沢市の市境近くに所在する。柏尾川と丘陵に挟まれた谷戸状地形の場所に立地し、中期後葉の住居址3軒が検出された。第9図22~31は第15号住居址から出土した遺物である。壺は僅かに短頸化傾向が認められ、櫛描による擬流水文(23)や波状文(22・24)を施す。甕は口縁内面に櫛目鎖状文を持ち、横羽状(25)の条痕や縦斜位状に崩れた沈線(27)を施す。これらの土器の様相は山ノ神遺跡例と同じであり、宮ノ台式土器の中でも古い段階に位置付けられる。32~38は遺構外出土の石器である。太型蛤刃石斧(32・33)や柱状片刃石斧(34)、扁平片刃石斧(35)の刃部破片が見られる。36~38は打製石斧。36は撥型で曲刃を持つ大型品。刃部の一部と基部側を欠損する。37・38は撥形の中型品。37は平刃、38は曲刃を呈する。縄文時代の石器として報告されているが、報文中には弥生時代竪穴住居の覆土から出土した例も縄文時代の打斧に含めたとあり、規模・形態共に弥生時代の石斧としても遜色無い資料である。但し3点共詳細な出土状況は不明であり、断定する程の根拠にも欠けるため、ここでは弥生時代中期後葉に属する可能性を指摘するに留める。

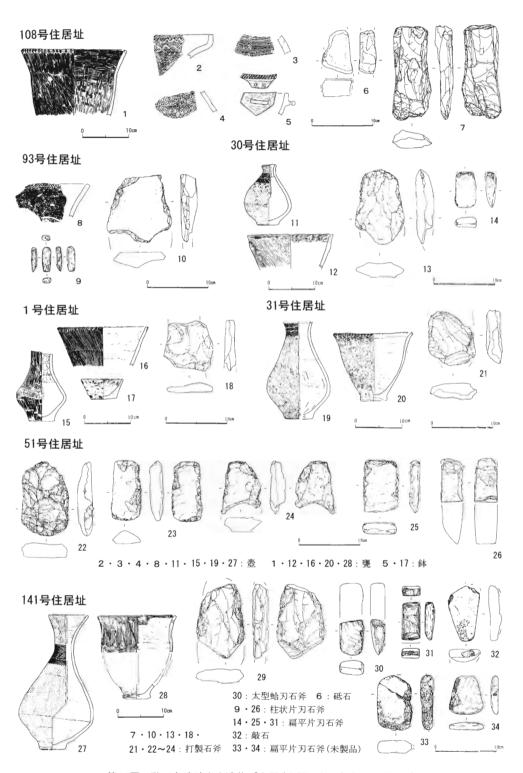
# 秦野市砂田台遺跡(第10図1~34)

砂田台遺跡は県西部の秦野市に所在し、前出の王子ノ台遺跡と同じ台地の北側端部に立地する。本遺跡では弥生時代中期後葉の住居址93軒を検出した。中期後葉には環濠集落を形成しており、出土している土器は宮ノ台式の新古両方の様相(註4)にまたがっている。

第10図には住居址から出土した打製石斧と、その伴出資料を示した。  $1 \sim 7$  は108号住居址の掘り方から出土した遺物である。 7 の打製石斧は短冊形で平刃を持つ大型品である。 刃部の一部を欠損している。  $1 \sim 6$  の土器は、櫛描きの擬流水文(3)や波状文(4)の壺などの古い様相のものと、受口状口縁の壺(2)や全面縦方向の刷毛目を施す甕のような比較的新しい様相の

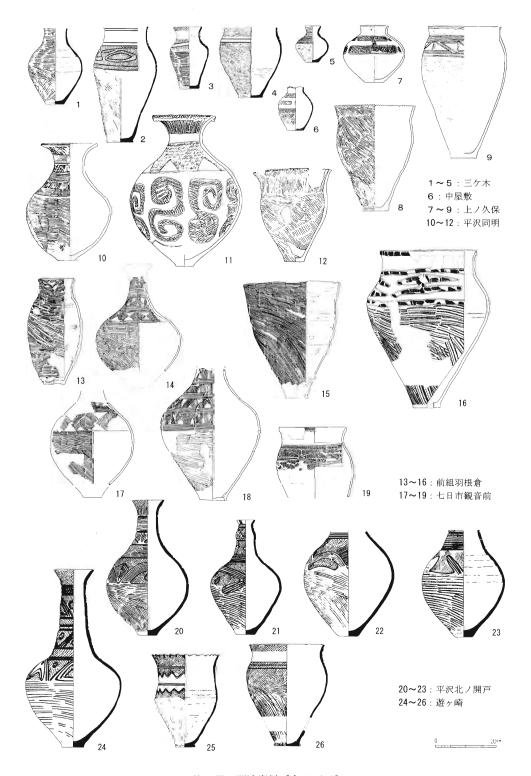


第9図 山ノ神遺跡・手広八反目遺跡出土遺物 [土器実測図1/8、拓影・石器1/6]



第10図 砂田台遺跡出土遺物 [土器実測図1/8、拓影・石器1/6]

# 長頸壺と石鍬 (渡辺)



第11図 関連資料 [全て1/12]

ものを含む。以下 8 ~34は中期後葉の中でも新しい様相の土器と打製石斧が伴出している住居址の資料である。壺は文様の簡素化が進み、頸部に羽状縄文を帯状に施すもの(11・27)や刷毛目とミガキだけで無文のもの(15)がみられる。甕は口縁が緩やかに外反する器形で、全面に縦位または斜位の刷毛目を残すもの(16・20)がある。打製石斧は撥形の大型品(10)や中型品(13・18・21・29)の断片が目立ち、短冊形で曲刃を持つ中型品(22)や、平刃を持つ小型(23)も存在する。また51号住、141号住それぞれの打斧出土例は太型蛤刃石斧(30)や扁平片刃石斧(25・31)等の大陸系といわれる磨製石斧と共伴している。

弥生中期後葉ではこの他に、横浜・川崎市域の鶴見川流域で大塚遺跡(第1図13)・千年伊勢 山台遺跡(同図14)・観福寺北遺跡(同図15)・折本西原遺跡(同図16)から、大岡川流域では三殿 台遺跡(同図17)から出土している。

主として台地上の集落内における住居址からの出土例が多く、砂田台遺跡の例も含め、該期の集落に打製石斧が存在すること自体はそう珍しいことではない、と考えてよい。

また小田原市国府津の低湿地に立地する三ツ俣遺跡(第1図18)では、遺構外や他時期の遺構から打製石斧が9点出土している。この遺跡からは宮ノ台式土器の新古両方のものが断片的に出土している。中期後葉段階の低地における様相は未だ不明な部分が多いが、台地・丘陵上だけでなくこうした立地の遺跡からも打製石斧が出土していることには注目しておきたい。

# 4. 弥生時代初頭から中期にみる打製石斧の変化

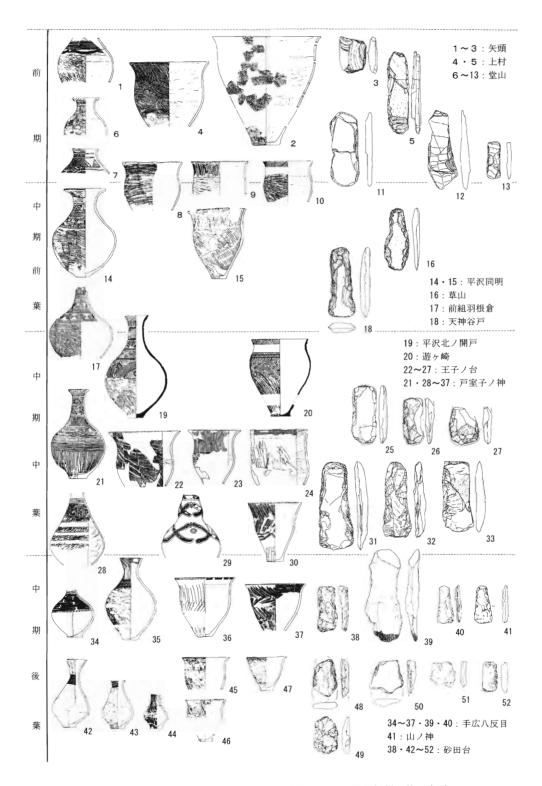
県内での弥生時代打製石斧の初現は前期併行の矢頭遺跡例に遡り、程なくして上村遺跡で大型品が出現する。前節では、これ以降中期前葉~後葉にかけての時期でも、打製石斧はその在り方を変えながらも石器の一つとして存在し続けていることが明らかとなった。

第12図は、時間の変遷に沿って県内出土の打製石斧とその伴出遺物を並べたものである。 ただし土器のうち時期・段階の判別しやすい資料については、遺存状態の良好な類例を加えた。 前期併行の時期については縄文時代晩期末に後続する段階と、中期初頭の土器様相に繋がっ

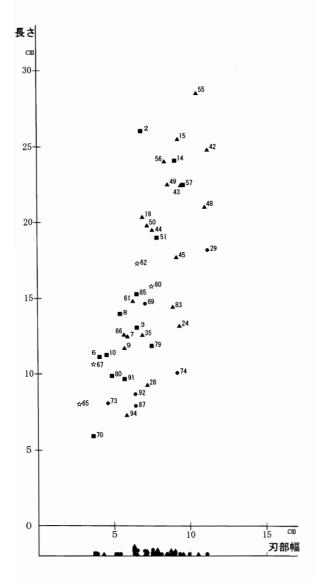
ていく段階に大別される(註 5)。第12図では 1~5の資料を、縄文時代晩期末の土器の影響下にあり、かつ継続する段階に位置付ける。この段階では、壺は浮線文手法の影響を色濃く残すもの(1)や三ケ木遺跡例(第11図 5)のような横羽状の沈線文を持つ小型品が存在する。甕は全面条痕施文で口縁下縦位・胴部が横斜位のもの(4)と口縁下が斜位のもの(2)があり、他に浮線文甕の変容した例もみられる。打製石斧は幅の狭い短冊形の大型品(5)が上村遺跡から出土しているが、県内では他に類例のない特異な形状を呈している。

 $6 \sim 13$ は前期 $\sim$ 中期初頭段階の資料である。この段階の土器は堂山遺跡の他、及川宮ノ西遺跡出土土器の一部が含まれるが、打製石斧については堂山遺跡出土例 $(11\sim 13)$ 以外、明確にこの段階のものとして示せる例はない。

#### 長頸壺と石鍬 (渡辺)



第12図 神奈川県域における弥生前~中期の壺形土器と打製石斧の変遷



■:短冊形 ☆:分銅形又は特殊形

▲:撥形 ●:不明

\*ドットのNo.は表中の通し番号に対応する

第13図 打製石斧の計測値と集合

壺は東海条痕文系のもの(6)や、条痕・縄文地に沈線文を加えるといった、複数地域の影響が取り込まれているもの(7)がある。甕は8~10のように中期中葉段階の祖型となるものが出現する。打製石斧は大型品の短冊・撥形が目立つが、13のような中型品も大量に出土している。

第13図は県内出土の弥生時代打製 石斧について、器長と刃部幅の相関 を示したものである。なお断片例で あっても刃部幅が判明しているもの については横軸底面に点を記してい る。この図における堂山遺跡出土例 は5~11が長さ10~15cmの中型品に 含まれ、14~35が15cm~25cmの大 型品である。それぞれの群には大き さに差はあっても長/刃部幅比が近 い比率を示すものと、個々に違った 比率を示すものの両方が混在する。 つまり打製石斧に大型・中型の二群 が存在することよりも、器形にある 種の共通性を持つものとそうでない ものの二つの傾向が認められる点が、 この段階の打斧の特徴として指摘で きる。

次の中期前葉段階の土器にも、中 期初頭から継続する様相の甕(第12図

15)が認められ、また中期中葉段階の壺の祖型となる長頸壺(同図17)が出現する。先に土器様相の変遷だけを追っていくと、こうした条痕文しか施文されない長頸壺(第5図13・15~18、第11図14・17・18)の一群が、縄文や篦描沈線文等の文様要素・構成を取り入れることにより第12図19の様な「平沢型」の長頸壺が生成されるものと考えられている。

中期中葉段階では、長頸壺は更に色々な文様要素を取り込み(21)、甕は前期末~中期前葉を通じて存在した複数の類型を継承している(22~24)。但しこれらの甕にもそれぞれの消長があ

り、最後には横羽状条痕の甕(第12図30)に席巻され姿を消すことになる。長頸壺は最後には文 様帯の構成が変わり、櫛描文を中心としたものへと変化していく。

中期前葉段階の打製石斧は確実に土器と共伴する例に欠け、前期末~中期前葉という時間幅の中でしか把握できない資料(第12図16・18)が散見されるだけである。第12図18は大型品で平刃の撥形を呈する例としては県内最古の例である。この形態は次段階の中期中葉の大型品の打斧にも共通する非常に特徴的な要素であり、長/刃部幅比も近い数値をとっている。

仮にもしこの天神谷戸遺跡例(第12図18、第13図と第1表では49)が中期前葉の条痕文長頸壺に伴うとすると、壺や打斧といった複数の要素において同じタイミングで次段階との強い繋がりを見せていることになり興味深い。ただそうした推論の展開にはより多くの確証が必要であり、該期の土器との共伴が明確な資料が新たに発見されることを待ちたい。また現段階での資料については製作技法や石材の選択、使用痕分析等の更に詳細な検討を加えて行くべきであるう。ここでは中期前葉段階に打製石斧の類型化が始まった可能性を指摘するだけに留める。

中期中葉の段階では、打製石斧の大型品が戸室子ノ神遺跡第86号址から出土している(第12図31~33、第13図・第1表では55~57)。個々の打斧で大きさは若干異なるが、長/刃部幅比はある程度の纏まりを見せている。池子遺跡群№1-A地点の旧河道最下層からは中型~大型品の打斧が出土しており、中には分銅形も見られる。しかしこれらの打斧は縄文晩期末~弥生中期中葉の土器と混在しており、帰属時期を限定出来ない。分銅形の打製石斧(第13図60・62)については他の打斧が長さ約6~15cmで刃部幅3.6~9.3cmの比較的規模の小さい一群と、長さ17.7~28.5cmで刃部幅が6.9~11.2cmの範囲の大型に相当する別の一群とに分かれているのに対し、丁度その二群の間に位置している。つまり形状だけでなく、規格についても他の例とは全く違うものであり、県内では弥生時代打製石斧の中にこの2点以外の分銅形の明確な例が存在しないことも含めて、縄文時代晩期の資料である可能性も考えられるのではないだろうか。この段階の打製石斧については、大きさは個体毎にまちまちであっても大型・中型共に長さ/刃部長比にはある程度の規則性が見られる。

中期後葉の宮ノ台式の時期になると、大型品はほぼ消失し、打製石斧自体が激減するものと思われていたが、実際には断片的ながらも組成している事が分かった。宮ノ台式の中でも古い様相のものについては伴出例が明確ではない。土器は櫛描による擬流水文(34)や波状文(35)の長頸壺がみられ、甕は横羽状文と櫛目鎖状文を指標としている。打製石斧は山ノ神遺跡に撥形で平刃の中型品(41)が認められる。

後葉の新しい段階では、壺・甕共に文様が簡素化し、より画一化が強まっている。打製石斧は残存幅から見て大型に類するもの(第12図48~51)と中型品(52)が存在し、規模の分かるものについては第13図で言うところの比較的規模の小さい一群に全て含まれる。打製石斧に限定して言うなら、中期中葉段階に対して実態はあまり違いはないかもしれない。但し大型品の遺存率が何故か低いため、一概に中葉段階との比較は出来ない状況である。

# 5. まとめ

前節では、弥生時代前期併行~中期後葉の土器と打製石斧との変遷を通時的に追った。その結果、どちらも前期末~中期前葉段階に一つの大きな画期が認められることがわかった。遺物の様相や細かい時間的な位置付けが不明瞭な段階であるが、壺形土器については中期前葉が新古の様相の転換期になっている。前期~中期初頭にかけて、本県で出土する壺形土器には文様要素や文様の形、文様帯構成など複数のレベルで東海・東北南部・北関東等周辺地域の影響が認められる。中期前葉段階では一つの土器の中に別々の要素が取り入れられたものと他地域からの搬入品が混在している。しかし同じ中期前葉のうちに条痕文長頸壺が出現すると、壺形土器は殆ど長頸壺一色に塗り変えられるといってよい。

打製石斧については前述の通り、中期前葉の様相は明らかでない。しかし、天神谷戸出土例 以降に大型打製石斧の定形化が認められ、堂山遺跡例に代表される前期~中期初頭の打製石斧 の様相とは一線を画している。

こうした壺形土器と打製石斧の様相の変化には、両者に直接の因果関係が認められる訳ではない。むしろ逆に、弥生時代前期~中期段階の社会における文化様相の転換が、当時の人々にとっての器や道具の変化となって反映されているのではないだろうか。もちろん本稿では土器と打製石斧にみる各種属性の組列をもとにした「遺物並べ」を行っているに過ぎず、その様相の変化が何に起因しているのかは試論の段階に過ぎない。今後は遺物にみる各種属性の変化そのものを追求していきたい。

本稿提出にあたっては、筆者の遅筆のために編集担当の田村良照氏に様々な点で御配慮と御 尽力を賜った。この場を借りて自身の不明を恥じると共に、深くお詫び申し上げたい。

また執筆にあたり、大勢の方々より御指導・御教示をいただいた。有形・無形の刺激を受ける事がなければ、本稿提出は覚束なかったに違いない。文末ではあるが、皆様の御名前を記す ことで謝意を表したい。

飯塚美保、伊丹 徹、大島慎一、久保信乃、谷口 肇、御堂島正、村上吉正、吉田政行(敬 称略·五十音順)。

#### 長頸壺と石鍬 (渡辺)

#### 註

- (1)県西部における弥生時代初頭(前期併行)の遺跡は山間部で発見されることが多く、中期前葉以前の遺跡では、竪穴住居址などの居住施設は殆ど検出されていない。こうした状況から該期の遺跡はキャンプ地的な評価を受け易い傾向にあるが、実は弥生時代だけでなく本県における低地遺跡そのものの実態は未だ把握されていない状態にある。今後の発見例如何によっては時代全体の評価が大きく塗り替えられる可能性も充分にあり、「まだまだこれから」(谷口1999)という状況にあることに注意したい。
- (2)王子ノ台遺跡の資料の内YK27号住は、報文中では土器を伴出しない事と住居の平面形態を理由に弥生時代後期の住居に位置付けられている。しかし遺物としては第6図23の打斧の他、太型蛤刃石斧と砥石等が共伴している状況を評価すれば、本址は中期の竪穴住居址に含めるべきものと考えられる。
- (3)かつて神沢勇一氏は南関東地方の弥生式土器の中に地域相が認められることを示し、相模湾沿岸域と東京湾沿岸域を対比させた土器編年を提示した(神沢1968)。その編年における弥生中期では、相模湾沿岸地域は堂山→中里→小田原、東京湾沿岸地域では三ヶ木→須和田(遊ヶ崎)→宮の台、という並行した型式変遷が提示されている。地域相に着目した点は評価されるべきであるが、現在ではその型式概念や編年観については修正を要するものとなっている。もちろん本稿での年代観も神沢氏の編年に沿っている訳ではないが、弥生中期社会の解明という視点において堂山・三ケ木・遊ヶ崎等の個々の資料が持つ意義は少しも損なわれるものではなく、むしろ今後はこれらの資料の再評価が必要になってくるであろう。
- (4)ここで言う宮ノ台式土器の新古の様相とは、安藤広道氏の一連の宮ノ台式土器の細分における画期を元にしている。具体的には東海西部の影響から壺の文様要素に櫛描文が盛行する時期(SiV~Ⅲ段階)を古い様相、文様構成が変化して縄文帯を主体とする時期(SiIV~V・SaIV~Ⅵ段階)を新しい様相とした。
- (5)但しこの二つの段階は連続するものか、もしくは間に中間的な段階が存在するものなのかは断定出来ない。前後の時代・時期と比較して、相対的に新古の異なる様相が認められるという意味での段階設定に過ぎないため、ここでは前期の前半・後半といったような安易な位置付けは行わない。以降の時期についても同様である。

#### 参考文献

- 安藤広道 1990 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分ー遺跡群研究のためのタイムスケールの整理-」『古代文化』第42巻6・7号
  - 1991 「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』田原本唐古整理室〇B会
- 大島慎一 2000 「第IV章第1節 出土遺物の分析」『王子ノ台遺跡』第Ⅲ巻弥生・古墳時代編 東海大 学校地内遺跡調査団
- 神村 透 1985 「石製耕作具」『弥生文化の研究』第5巻 道具と技術 I 雄山閣
- 神沢勇一 1968 「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」『神奈川県立博物館研究報告』 第1巻第1号 神奈川県立博物館
- 石器使用痕研究会 2002 『弥生文化と石器使用痕研究~農耕に関わる石器の使用痕~』第7回石器使 用痕研究会発表要旨
- 田口明子 2001 「弥生時代の大形打製石斧は農耕具か-山梨県出土事例をもとに-」『研究紀要』17 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 中鉢賢治 1994 「第VI章第2節 瀬名遺跡の打製石斧について」『瀬名遺跡皿(遺物編I)』静岡県埋蔵 文化財調査研究所調査報告第47集 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 谷口 肇 1996 「編年編 神奈川県地域(弥生前期~中期中葉)」『YAY! 弥生土器を語る会20回到 達記念論文集』弥生土器を語る会

- 1997 「第V編第2章 縄文時代末期~弥生時代初期」『宮畑(No.34)・矢頭(No.35)・大久保(No. 36)遺跡』かながわ考古学財団調査報告25 かながわ考古学財団
- 1999 「「かながわ」における弥生文化形成期の様相について」『公開セミナー 弥生時代の幕開け-縄文から弥生への移行期の様相を探る-』発表要旨 (財)かながわ考古学財団
- 角田真也 2002 「研究史 弥生時代の石鍬」『石斧の系譜 打製斧形石器の出現から終焉を追う 』第 10回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集 岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員 会
- 橋口尚武 1998 「付編 I 丹沢・箱根山麓・伊豆地域の石鍬・石包丁・石鎌について」『子ノ神(IV)』 厚木市教育委員会
- 平井 勝 1991 「石鍬」 『弥生時代の石器』 ニューサイエンス社
- 松井一明 1995 「弥生時代の石鍬について(上)」『弥生文化博物館研究報告』第4集 大阪府立弥生文 化博物館
  - 2002 「石鍬の分布と形態-形態から見た用途について-」『弥生文化と石器使用痕研究 ~ 農耕に関わる石器の使用痕研究~』第7回石器使用痕研究会発表要旨集
- 八幡一郎 1941 「石鍬」『考古学雑誌』第31巻第3号 日本考古学会

#### 挿図引用文献

矢頭 西川修一・天野賢一 1997 『宮畑(No.34)・矢頭(No.35)・大久保(No.36)遺跡』かながわ考古学財団調査 報告25 かながわ考古学財団

上村 鈴木次郎・坂口滋皓 1990 『宮ヶ瀬遺跡群 I 』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21 堂山 安藤文一 1988 『カラス山・堂山遺跡』山北町カラス山・堂山遺跡調査会

谷口 肇 1990 「「堂山式土器」の再検討」『神奈川考古』第26号 神奈川考古同人会 及川宮ノ西 日野一郎・香村紘一ほか 1996 『及川宮ノ西遺跡』 国道412号線遺跡発掘調査団 天神谷戸 村上吉正・中田 英ほか 2000 『天神谷戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告75 草山 村上吉正・井関文明 2000 『草山遺跡』かながわ考古学財団調査報告105 王子ノ台 宮原俊一ほか 2000 『王子ノ台遺跡』第Ⅲ巻 弥生・古墳時代編 東海大学校地内遺跡調査団戸室子ノ神 望月幹夫・山田不二郎ほか 1983 『子ノ神(Ⅱ)』厚木市教育委員会

1998『子ノ神(IV)』厚木市教育委員会

池子No.1-A 地点 山本輝久・谷口 肇 1999『池子遺跡群 X No.1-A 地点』かながわ考古学財団調査報告46 山ノ神 杉山博久 1970『小田原市山ノ神遺跡発掘調査報告』小田原市文化財調査報告書第三集 手広八反目 永井正憲ほか 1984『手広八反目遺跡発掘調査報告書』手広遺跡発掘調査団 砂田台 宍戸信悟・上本進二 1989『砂田台遺跡 I 』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20

宍戸信悟・谷口 肇 1991『砂田台遺跡Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
 三ヶ木・遊ヶ崎 神奈川県立博物館 1969『神奈川県考古資料集成』1 弥生式土器
 中屋敷 吉田 格 1958「神奈川県中屋敷遺跡一所謂土偶形容器発掘遺跡の考察−」『銅鐸』14
 平沢同明・平沢北ノ開戸 日野一郎・伊東秀吉・杉山博久 1985『秦野市史』別巻考古編 秦野市上ノ久保 柿沼恵介 1986「上ノ久保遺跡」『群馬県史資料編2』原始古代2 群馬県史編さん委員会前組羽根倉 書上元博・柿沼幹夫ほか 1986『前組羽根倉遺跡発掘調査報告』前組遺跡発掘調査団 七日市観音前 井上 太 1994『七日市観音前遺跡』富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

井上 太・若狭 徹 1994「富岡市観音前遺跡の弥生中期の土器」『群馬考古学手帳』 4

# 長頸壺と石鍬 (渡辺)

# 第1表 県内出土の弥生時代打製石斧(弥生時代前期~中期)

単位はcm・()内の数値は残存値、一は不明なものを示す。

M-	· * 9+ 47	油拌力	_	77 ## +F			<b>-</b> -1-					ーは不明なもの	2小9。
No.	遺跡名	遺構名	長	刃部幅	厚	重量	長/幅	形態	時	期	石 材	備考	
	矢頭	遺構外	(12.0)	8.5	2.9	353.0	_	_		Я	結晶片岩	破片	第2図14
	上村	遺構外	26.0	6.8	2.7	759.0	3.8	短冊形		男	凝灰質泥岩	完形	第2図7
	上村	遺構外	13.1	6.5	2.7	263.0	2.0	短冊形	前期		軟質細粒凝灰岩	_	
	上村	遺構外	(9.8)	7.5	3.3	(220.1)	_		前期	Я	粗粒凝灰岩	刃部破片	第2図8
	堂山	遺構外	(9.0)	5.2	3.8		_	_	前期末~中	中期初頭	粗粒凝灰岩	破片•刃部欠損	
	堂山	遺構外	11.1	4.1	1.5	112.0	2.7	短冊形	前期末~中	中期初頭	結晶片岩	完形	第3図23
7	堂山	遺構外	12.5	5.9	1.8	151.0	2.1	接形	前期末~中	中期初頭	粗粒凝灰岩	完形	
8	堂山	遺構外	14.0	5.4	1.6	160.0	2.6	短冊形	前期末~中	中期初頭	粗粒凝灰岩	完形	第3図24
9	堂山	遺構外	11.7	5.7	1.8	196.0	2.1	接形	前期末~中	中期初頭	粗粒凝灰岩	完形	第3図25
10	堂山	遺構外	11.2	4.6	2.1	109.0	2.4	短冊形	前期末~中	中期初頭	細粒凝灰岩	完形	
11	堂山	遺構外	(9.6)	3.7	2.0	_	-	短冊形	前期末~中	押初頭	安山岩	破片	
12	堂山	遺構外	(8.1)	_	1.7	-		-	前期末~中	中期初頭	結晶片岩	破片•刃部欠損	
13	堂山	遺構外	(7.2)	-	1.4	_		-	前期末~中	中期初頭	粗粒凝灰岩	破片・刃部欠損	
14	堂山	遺構外	24.1	9.1	3.8	774.0	2.6	短冊形	前期末~中	中期初頭	結晶片岩	完形	第3図19
15	堂山_	遺構外	25.5	9.3	2.9	864.0	2.7	撥形	前期末~中	中期初頭	結晶片岩	完形	第3図20
16	堂山	遺構外	(21.6)	7.8	1.9	521.0	-	短冊形	前期末~中	中期初頭	半花崗岩	完形	
17	堂山	遺構外	(18.3)	7.5	2.0	399.0	-	短冊形	前期末~中	P期初頭	結晶片岩	破片・刃部欠損	
18	堂山	遺構外	20.4	6.9	1.9	417.0	3.0	撥形	前期末~中	中期初頭	輝緑岩	完形	第3図21
19	堂山	遺構外	(11.4)	8.6	1.9	_	_	接形	前期末~中	中期初頭	粗粒凝灰岩	破片	第3図22
20	堂山	遺構外	(9.0)	(7.5)	1.3	127.0	_		前期末~中	中期初頭	結晶片岩	刃部破片	
21	堂山	遺構外	(7.8)	9.3	2.1	_	-	-	前期末~中	中期初頭	結晶片岩	刃部破片	
22	堂山	遺構外	(6.0)	(5.1)	1.2	_	_	_	前期末~中	中期初頭	火山礫凝灰岩	刃部破片	
23	堂山	遺構外	(3.0)	5.4	1.5	_	_	-	前期末~中	中期初頭	結晶片岩	刃部破片	
	堂山	遺構外	13.2	9.3	3.9	697.0	1.4	撥形	前期末~中		結晶片岩	完形	
	堂山	遺構外	(13.5)	8.4	3.6	534.0	-	撥形	前期末~中		粗粒凝灰岩	刃部破片	1
	堂山	遺構外	(5.4)	8.7	3.4	_	_	_	前期末~中		粗粒凝灰岩	刃部破片	1
	堂山	遺構外	(9.0)	9.0	3.0	_	_	_	前期末~中		粗粒凝灰岩	刃部破片	
	堂山	遺構外	(8.1)	11.1	2.5	_	_		前期末~中		火山礫凝灰岩	刃部破片	
	堂山	遺構外	18.2	11.2	7.1	1,702.0	1.6	_	前期末~中		粗粒凝灰岩	未製品	第3図26
	堂山	遺構外	(8.1)	9.9	3.5	_	_	_	前期末~中		斑糲岩	基部破片	7,1,0,2,0
	堂山	遺構外	(12.0)	8.1	1.9	_	_	_	前期末~中		結晶片岩	刃部破片	
	堂山	遺構外	(10.2)	8.7	3.0	_	_	:服形	前期末~中		火山礫凝灰岩	刃部破片	1
	堂山	遺構外	(4.8)	6.3	1.9	_	_		前期末~中		結晶片岩	刃部破片	
	堂山	遺構外	(6.6)	8.8	1.1	_	_	_	前期末~中		細粒凝灰岩	刃部破片	1
	堂山	遺構外	12.6	6.9	3.2	357.0	1.8	接形	前期末~中		結晶片岩	完形	1
	堂山	遺構外	(9.9)	- 0.9	2.6	337.0	-	19X /12	前期末~中		粗粒凝灰岩	基部破片	_
													+
	堂山	遺構外	(12.6)		3.1		_	撥形	前期末~中		粗粒凝灰岩 含雲母軽石	基部破片	+
	堂山	遺構外	(6.3)		1.6		_		前期末~中			基部破片	
	堂山	遺構外	(9.9)		2.5			_	前期末~中		粗粒凝灰岩	基部破片	
		遺構外	(10.0)		1.9		_	_	前期末~中		粗粒凝灰岩	基部破片	
	堂山 ひょう 不	遺構外	(13.5)	11.0	4.4	010.0		40 m/s	前期末~中		結晶片岩	基部破片	第4図10
	及川宮ノ西	遺構外	24.8	11.2	3.0	910.0	2.2	接形	前期末~中		粘板岩	完形。到第一部名	1
	及川宮ノ西	遺構外	22.5	9.5	2.4	570.0	2.4	接形	前期末~中		ホルンフェルス	完形・刃部一部欠	第4図11
	及川宮ノ西	遺構外	19.5	7.5	2.4	500.0	2.6	接形	前期末~中		ホルンフェルス	完形	第4図12
	及川宮ノ西	遺構外		9.2	3.0	570.0	1.9	接形	前期末~中			完形	第4図14
$\overline{}$	及川宮ノ西	遺構外			2.4	(470.0)	_	短冊形	前期末~中		粘板岩 ************************************	破片	第4図15
-	及川宮ノ西	遺構外	(15.0)		1.8	(360.0)		授形	前期末~中		粘板岩 ********	破片	第4図16
-	及川宮ノ西	遺構外	21.0	11.0	3.3	-	1.9	接形	前期末~中		粘板岩 中 4 2 2 2 2 2	完形、生田安东	第4図13
_	天神谷戸	遺構外	22.5	8.6	3.1	778.5	2.6	接形	前期末~中		中粒凝灰岩	完形•使用痕有	第5図27
	草山	遺構外	19.8	7.2	2.4	-	2.8	接形	前期末~中		安山岩	完形	第5図36
	王子ノ台	YK27住	19.0	7.9	2.7	575.0	2.4	短冊形	中期中		粘板岩	完形	第6図23
	王子ノ台	遺構外	(14.8)		2.5	(269.0)		短冊形	中期中		ホルンフェルス	破片・基部欠損	第6図26
53	王子ノ台	遺構外	(11.6)	9.5	2.2	(320.0)		接形	中期中	P.葉	ホルンフェルス	破片・基部欠損	第6図27

	= + 7 .44	52 B H	(C, 1)	0.5				AFR TEC	do #10 do ##1	et in th	To describe the	
	戸室子ノ神	57号址	(6.4)	6.5	1.5			接形	中期中葉	粘板岩	刃部破片	Mr. at Tile
55	戸室子ノ神	86号址	28.5	10.5	3.3	-	2.7	撥形	中期中葉	片岩	完形	第7図8
56	戸室子ノ神	86号址	24.0	8.4	3.6	832.0	2.9	撥形	中期中葉	砂岩	完形	第7図7
57	戸室子ノ神	86号址	22.5	9.6	3.0	1,025.0	2.3	短冊形	中期中葉	安山岩	完形	第7図9
58	戸室子ノ神	96号址	(7.6)	7.2	2.4	-	-		中期中葉	片岩	刃部破片	
59	池子No.1−A	旧河道	(13.8)	8.4	2.5	(467.2)	-	接形	晚期末~中期中葉	根府川石	破片	第8図16
60	池子No.1-A	旧河道	15.8	7.5	2.7	301.8	2.1	分銅形	晚期末~中期中葉	ホルンフェルス	完形	第8図17
61	池子№.1-A	旧河道	14.8	6.3	2.1	220.3	2.3	接形	晚期末~中期中葉	ホルンフェルス	完形	第8図18
62	池子№1-A	旧河道	17.3	6.6	2.5	356.5	2.6	分銅形	晚期末~中期中葉	硬質中粒凝灰岩	完形	第8図19
63	池子N₀.1-A	旧河道	(9.3)	-	2.7	(186.9)	-	接形	晚期末~中期中葉	ホルンフェルス	基部破片	第8図20
64	池子№1-A	旧河道	(10.1)		4.1	(276.6)		_	晚期末~中期中葉	ホルンフェルス	基部破片	第8図21
65	池子№1-A	旧河道	8.0	2.7	1.3	35.7	3.0	槍先形	晚期末~中期中葉	ホルンフェルス	完形	第8図22
66	山ノ神	表採	12.6	5.7	1.7	_	2.2	撥形	中期中葉~後葉	緑色凝灰岩	完形	第9図19
67	大塚	Y23住	10.7	3.7	2.7	96.9	2.9		中期後葉	輝緑凝灰岩	完形	
68	千年伊勢山台	3号住	7.5	3.9	1.8	-	-		中期後葉	_	完形	
69	観福寺北	25号住	14.7	7.0	3.8	496.0	2.1	_	中期後葉	粗粒石英砂岩	完形	
70	折本西原 I	12号住	5.9	3.6	1.5	46.4	1.6	短冊形	中期後葉	硬砂岩	完形	
71	折本西原I	14号住	(4.8)	4.3	1.3	33.0	_	撥形	中期後葉	千枚岩	破片	
72	折本西原Ⅱ	Y33号住	(5.0)	_	1.3	_	-		中期後葉	粘板岩?	破片	
73	三殿台	306C住	8.1	4.6	1.5	69.0	1.8	_	中期後葉	ホルンフェルス	完形	
74	三殿台	306C住	10.1	9.2	2.8	232.0	1.1		中期後葉	ホルンフェルス	完形	
75	砂田台	1号住	(8.3)	8.0	1.8	(136.7)	_	接形	中期後葉	ホルンフェルス	破片•刃部欠損	第10図18
76	砂田台	30号住	(12.1)	7.8	2.7	(305.8)	-	撥形	中期後葉	輝緑岩	破片•刃部欠損	第10図13
77	砂田台	31号住	(8.8)	7.6	2.7	(229.2)	-	_	中期後葉	粘板岩	破片·基部欠損	第10図21
78	砂田台	51号住	(9.0)	6.3	2.3	(148.9)	_	撥形	中期後葉	粘板岩	破片•刃部欠損	第10図24
79	砂田台	51号住	11.9	7.5	2.4	324.6	1.6	短冊形	中期後葉	硬砂岩	完形	第10図22
80	砂田台	51号住	9.8	4.9	2.0	132.6	2.0	短冊形	中期後葉	<b>疑灰質尼岩</b>	完形	第10図23
81	砂田台	77号住	(7.2)	(4.9)	1.4	(57.0)	_	搬形	中期後葉	ホルンフェルス	破片•基部欠損	7,770,2120
82	砂田台	77号住	(4.2)	7.0	(1.7)	(64.3)	_	搬形	中期後葉	ホルンフェルス	破片	
83	砂田台	88号住	14.5	8.7	3.7	497.8	1.7	搬形	中期後葉	凝灰質泥岩	完形	
84	砂田台	93号住	(10.7)	10.5	2.6	(347.8)	_	撥形	中期後葉	輝緑岩	破片•刃部欠損	第10図10
85	砂田台	108号住	15.3	6.5	2.6	340.0	2.4	短冊形	中期後葉	結晶片岩	完形	第10図7
	砂田台	108号住	(7.2)	7.2	3.4	(246.9)		-	中期後葉	粘板岩	破片・刃部欠損	NATAGE!
87	砂田台	137号住	7.9	6.4	1.8	130.1	1.2	_	中期後葉	蛇紋岩	完形	1
88	砂田台	141号住	9.3	7.3	2.8	174.9	1.3	搬形	中期後葉	硬質中粒凝灰岩		1
89	砂田台	3号溝	(12.2)	7.7	2.4	(304.2)	_	接形	中期後葉	凝灰質砂岩	破片	第10図29
90	三ツ俣	SI06	(2.1)	(6.0)	1.1	(15.0)	_	-	中期後葉	片麻岩	破片•刃部欠損	жим
91	三ツ俣	SI42	9.7	5.7	1.6	144.0	1.7	短冊形	中期後葉	片麻岩	完形	
92	三ツ俣	SI44	8.7	6.4	2.2	140.0	1.4	AZ 110 /12	中期後葉	粘板岩	完形	+
93	三ツ俣	SI51	(4.1)	(6.9)	(2.3)	(63.0)	-		中期後葉	砂岩	破片・刃部欠損	1
94	三ツ俣	SD24	7.3	5.8	2.8	146.0	1.3	撥形	中期後葉	砂岩	完形	+
95	三ツ俣	SD24	(5.7)	7.0	2.1	(102.0)	- 1.3	19X //>	中期後葉	砂岩	-	+
96	三ツ俣	SD24	(5.7)	6.5	1.2	(42.0)				15.14	破片・刃部欠損	-
97	三ツ俣	SD24	(211)			,,			中期後葉	粘板岩	破片	
	三ツ俣		(4.5)	7.1	2.4	(87.0)	_		中期後葉	粘板岩	破片•刃部欠損	
98	ニノ俣	SD24	(1.6)	5.1	(0.5)	(8.0)		_	中期後葉	片麻岩	破片•刃部欠損	

# 神奈川の古代のクラ

大 上 周 三

はじめに

- 3. クラの特色
- 1. 近年の考古学的研究成果
- 4. 今後の課題

2. クラの様相

# はじめに

古代の掘立柱建物のうち側柱式建物の機能や性格は、発掘資料からだけではなかなか見極めがつかないのに対し、総柱式の掘立柱建物や礎石建物は、基本的に構造的特徴からクラに絞り込むことが可能である。とりわけ高床倉庫に象徴される郡衙正倉は一棟一棟の規模の大きさ、構成数の多さ、それにもまして高い計画性による整然とした配置は、律令国家の強大な収奪装置を目の当たりにした古代人はもちろん、遺構群として接する我々にとっても圧倒的存在であり、クラのシンボル的存在ともいえる。

一義的に余剰物資を収納するクラは、階級社会においては特に富・権力を具現化したものとされている。かかる性格を具備するクラから古代の官衙、集落研究を行うことは、律令国家の在地社会に対する支配・収奪のあり方、在地社会の階層性・自立度の究明が可能であり、大きな期待が研究者にかけられている。

こうした認識の高揚が最近の数々の優れた研究に顕れている。なかでも山中、松村氏らの一連の論考と、奈良国立文化財研究所主催の研究集会の成果は、研究の到達点と今後の課題を明らかにし、牽引的役割を果たすものとして評価される。

ここではこうした優れた成果に学びつつ神奈川の古代のクラの諸相を概観し、今後の官衙・ 集落研究の備えとしたい。

# 1. 近年の考古学的研究成果

クラの研究は考古学、文献史学、民族学、建築史学などから多角的になされ、今日に至るまで幾多の成果が蓄積されていることは言を俟たない。ここでは近年の研究成果のうち主だった ものを考古学の分野に絞って簡単に振り返ることにしたい。

まずはじめに、クラを切り口に集落構造のあり方に取り組んだ研究を取り上げる。1976年 鬼頭氏は古代家族の自立性を、集落全体の再生産構造のどの過程における自立性であるかを、 クラのあり方から探った。そしてクラには古代家族が保有するものと、集落全体が管理する二者があると具体的に論じた(鬼頭1976)。3年後、氏は『律令国家と農民』に、1976年論文に対する批判に応える形で、集落全体が倉庫を管理するとした部分を村落首長が管理すると修正した(鬼頭1979)。鬼頭氏の上記2編の論考に関しては掘立柱建物の倉庫認定並びにその時期比定に疑義が発せられている(都出1978・89)が、在地社会を構成する基礎単位、さらに在地社会そのものの自立度を倉庫の存在形態から推し量ろうとしたことは、集落研究に新たな可能性をもたらした点で評価される。

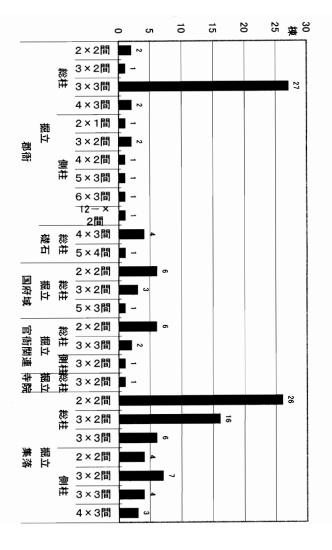
広瀬氏は、剰余生産物収納機能の倉を重要な基準の一つにして、西日本の古墳時代集落の類型化(広瀬1978)、さらに1990年には畿内の古代集落の類型化(広瀬1990)を図り、単位集団の階層分解、集落間の支配 – 被支配の関係を読み取った。鬼頭氏と目指すところは異なるが、倉庫の本来的な性格を基軸に据えた研究といえる。

ついで、松村氏は6世紀中頃の黒井峯遺跡の屋敷地、建物群構成を具体的に復原し、一般農民層の自立度を論じた。それによると、屋敷地の規模によって内部の建物構成(=竪穴住居1棟と平地建物と高床倉庫)に差がみられる。ただこれらを形成する最小の建物小群においても高床倉庫を含み、平地住居と高床倉庫の棟数が一致している、このことから「屋敷地を所有する家族単位に動産所有がなされ、さらにそれが小家族単位に管理されていた可能性があること、有力家族の成長が認められる」(松村1996)と指摘した。

その一方で、倉自体についての研究も活況を呈し、多くの成果が上げられている。1983年 松村氏は、史料にみられる倉の属性分析と発掘資料の比較検討から①稲を収納する倉には穀倉と穎倉、それに屋がある。②史料上の穀倉と穎倉には構造上差がみられず、発掘遺構の平面形態からそれを判断することは不可能である。③穎屋は掘立柱建物としては一般的な規模の建物である。④官衙の正倉は4×3間、3×3間、3×2間の規模に集中する傾向があり、特に4×3間の倉は、正倉の中核をなす倉である。⑤集落の稲倉は穎稲倉で、標準房戸に必要な規模の穎倉は、桁・梁行とも3.6m(12尺)程度の2×2間の倉である(松村1983)、ことなどを指摘した。1994年には山中氏が『古代地方官衙遺跡の研究』の中で、郡衙正倉の種類と収納物、建築構造と規模、空間的構成、形成過程を、考古学成果と文献史料を用い体系的に論じられた(山中1994)。

個人研究に呼応するかのように、シンポジウム・研究集会が実施され、1991年には大阪市 法円坂の大型倉庫群の発見を機に実施された講演・シンポの成果を収めた『クラと古代王権』、 そして 奈良国立文化財研究所が開催した1998年の"古代の稲倉と村落・郷里の支配"(奈良 国立文化財研究所1998)と2000年の"郡衙正倉の成立と変遷"(奈良国立文化財研究所2000)の研究集会の成果が公表された。とりわけ奈文研の研究集会は、全国レベルでのクラ研究の気 運の高さを物語ると共に、考古学・文献史学の両者が最新の発掘・研究成果の共通理解と共通 の基盤に立つ役割を果たした点で大きな意義を有するものであった。これらの中で山中・石毛 氏は、豪族居宅の倉庫群を取り上げ、郡衙正倉・正倉別院や集落の倉庫との比較から、次のよ うな特徴を指摘した。①豪族居宅に伴う倉庫は、総柱建物の倉が大部分を占めるが、側柱建物 の屋もあった可能性が高い。②礎石建物はみられず、いずれも掘立柱建物で、柱掘りかたは、 直径または一辺が30~80cmの円形・楕円形か隅丸方形がほとんどである。③平面形式は、2 ×2間のものが圧倒的に多い。④平面積は、20m以下に集中する集落内の倉庫と同様の傾向 を示す。⑤柱間寸法は、5尺ないし6尺のものがもっとも多く、柱間が等間にならないものも あり、規格の点でも郡衙正倉に劣る。⑥倉庫の棟数は、1棟のみが主屋を含む建物群の一角に あるもの、2・3棟のみで直列の配置をとるもの、5棟以上が直列の配置をとるものの、3タ イプがある。⑦居住空間との位置関係では、居住空間の主屋・副屋等と倉庫とが一体的に構成 されているもの、居住空間の西側或いは北側に隣接して複数のクラが置かれているもの、居住 域と倉庫域とが溝などの区画施設によって区別されているものの、3類型に分類できる。⑧主 屋との位置関係は、主屋の西側に倉庫が配置される場合が圧倒的に多く、その次に北と南が多 い。⑨倉庫は、短期間での廃絶または大幅な変化を示す。⑩集落の稲倉の収納物と同様、主に 穎稲が収納されたと推定でき、豪族居宅の稲倉は穎倉あるいは穎屋を主体とする。⑪穎倉の全 てが居宅に集中して設けられたわけではなく、居宅以外の場所にも穎倉・穎屋を設けていた。 これらの内容は、豪族居宅に付属する倉庫を抽出する際の基本的指針を示(山中・石毛1998) したもので、研究上画期となるものである。また、山中氏は地方官衙付属の高床倉庫群の特徴 とその性格を検討し、これとの対照から山城・寺院・荘園・宮などの収蔵施設の特徴やその機 能についても概観された(山中1991)。松村氏は1983年論文にそった内容を発表された(松 村1998)。植木氏は建築史の立場から弥生時代以降の高床式倉庫の変遷をたどり、7世紀以降 官衙遺跡を中心に梁間3間の高床式倉庫が普及するが、柱構造は側柱に比べ束柱が細く、掘形 も浅い「束柱・通し柱構造」と側柱と束柱の掘形の大きさ・深さ・柱の太さに差がない「総束 柱構造」をとるものがあり、柱掘形の形状により柱構造が異なる点を指摘した(植木1991)。さ らに7世紀中~末にかけて、官衙では米の収納方法が穎稲中心から穀稲中心に収蔵方法が変化 することにより柱構造が前者から後者に変遷する(植木1998)、などの指摘を行っている。高島 氏は関東の集落遺跡で検出される側柱の掘立柱建物の中には収納施設としての「屋」が存在し た可能性がある(高島1998)ことを指摘している。荒木氏は郡衙正倉の変遷をまとめている (荒木2000)。

以上のように、先学によって地方官衙から集落にいたるクラ研究のための細かな指針が提示され、かつ体系化が図られた。今後はこれらの成果を礎としてそれぞれの地域レベルでの実態 把握と解明が求められることになった。その上で改めて、地域ブロック、あるいは全国レベルでの比較検討・総合化に進むことが次のステップと考えられる。本稿はその第一歩としてこれを実践しようとするものである。



第1図 遺跡の性格別基礎・柱列・平面形式数

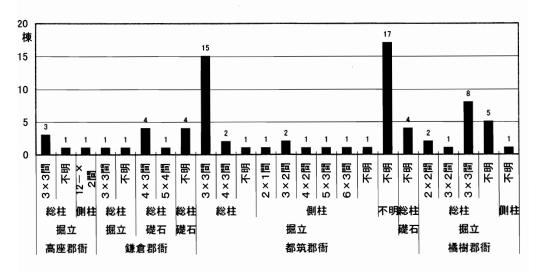
# 2. クラの様相

式的特徴が把握できたのは130棟である…。 下それぞれ『掘立総柱』、『掘立側柱』、 官衙関連、寺院、集落遺跡のクラを、掘立柱総柱建物、掘立柱側柱建物、礎石建総柱建物 わせにより、 と表記されていた 柱式をとるものがある。 先学の研究からクラには、 本稿で俎上にのせる資料は、 それぞれが個性を主張し、 (山中1994)。 そして総柱式の高床倉庫は「倉」、土間ないし低床の側柱式は「屋」 掘立柱と礎石建の基礎構造をとる建物で、 クラは基礎構造と柱列構造、それにさまざまな属性の組み合 管見に触れた170棟 (表1) 『礎石総柱』と略す。) 機能・性格を顕現している。 バとに概観することにする。な ÿ そのうち平面形式および形 11 柱列構造が総柱式と側 こでは郡衙、 国府域、  $\Xi$ 

# ①郡衙のクラの様相

郡衙、横浜市長者原遺跡・馬頭観音遺跡<sup>®</sup>で武蔵国都筑郡衙、川崎市千年伊勢山台北遺跡で 礎石総柱 4棟、 柱1棟、 同橘樹郡衙(第4図1) 県内では茅ヶ崎市西方A遺跡で相模国高座郡衙 掘立側柱1棟を数える。 今小路西で掘立総柱2棟、 掘立柱建物だが柱列構造が不明なもの17棟®、千年伊勢山台北で掘立総柱16 が確認され、 礎石総柱9棟、長者原で掘立総柱18棟、 正倉が検出されている。 (第4図2)、 西方Aで掘立総柱4棟、 鎌倉市今小路西遺跡で同鎌倉 掘立側柱7棟、 掘立側

# a)掘立柱総柱建物



第2図 郡衙別基礎・柱列・平面形式数

40棟確認され、うち平面形式・規模が明らかなものは32棟である。西方Aでは4棟確認されており、3棟が3×3間で桁行6.5×梁行5.4m、面積35.10㎡である。柱穴形態は方形で、規模も大きい。掘形平面形態(以下、『掘形』と略す。)は坪掘である。残る1棟も同様の平面形式をとると推測されるが、掘形は布掘である。これら4棟は柱筋を揃え、東西方向に並列している。時期は7世紀末から8世紀初頭とされている(村上2002)。

今小路西では2棟確認され、うち1棟は $3 \times 3$ 間で桁行 $6 \times$ 梁行5.4m、面積32.40㎡である。 掘形は坪掘である。柱穴形態は隅丸方形で、規模は一辺1 mほどを測る。

長者原では18棟確認された。うち平面形式・規模の明らかなものは17棟である。 $3 \times 3$ 間が15棟で圧倒的多数を占める。桁行 $5.4 \sim 6.2 \times 2.2 \times 2.2 \sim 6.2$ m、面積 $28.02 \sim 41.54$ mである。 $4 \times 3$ 間は2棟あり、相似した規模で、平均値は桁行 $10.2 \times 2.2 \times 2.2 \times 2.2 \sim 2.2$ 加、面積 $28.02 \sim 41.54$ mである。掘形は2棟あり、相似した規模で、平均値は桁行 $10.2 \times 2.2 \times 2.2 \times 2.2 \sim 2.2$ 加、面積 $28.02 \sim 41.54$ mである。 掘形は2棟が布掘で、10棟が坪掘である。布掘の形態はそれぞれの相対する側柱間を一直線につながるタイプである。基本的に布掘のものが坪掘のものより古いとされている(水野1990)。

千年伊勢山台北では16棟確認され、10棟の平面形式・規模が明らかである。 $2 \times 2$ 間は2棟で相似した規模で、平均値は桁行 $4.75 \times$ 梁行4.65m、面積22.11mである。 $3 \times 2$ 間は1棟で桁行 $6.45 \times$ 梁行4.65m、面積29.99mである。 $3 \times 3$ 間は8棟と最も多く、桁行 $5.9 \times 6.9 \times 2$ 2である。47.61mである。柱穴規模は多くが一辺1m以上だが、47.61mである。柱穴規模は多くが一辺1m以上だが、47.61mである。左からは第1期が47世紀第4四半期、第47.61mが47.61mが47.61mである。これらは第47.61mが47.61mが47.61mである。これらは第47.61mが47.61mが47.61mである。これらは第47.61mが47.61mが47.61mである。これらは第47.61mが47.61mが47.61mである。これらは第47.61mが

また大半が側柱と束柱の規模がほぼ同じ束柱式であるが、千年伊勢山台北5号は、唯一束柱が小さい通し柱式である。

#### b)掘立柱側柱建物

掘立総柱に比べると少なく 3 郡衙で 9 棟確認された。西方A 1 号は桁行12間以上×梁行 2 間、桁行長33m以上の長大な建物である。掘形は坪掘で、柱穴形態は長方形を呈するが、その規模は掘立総柱より小ぶりである。時期は掘立総柱と同じ 7 世紀末から 8 世紀初頭とされている(村上2002)。長者原では  $6\times3$  間、 $5\times3$  間、 $4\times2$  間、 $2\times1$  間が各 1 棟、 $3\times2$  間が 2 棟確認できた。相対年代では礎石総柱より古い(水野1990)。その他詳細は不明である。千年伊勢山台北 7 号は桁行 3 間の布掘の建物である。柱穴形態は方形を呈し、規模は最大長 1 mを測るが、1 期の掘立総柱に比べると若干貧弱である。時期は 8 世紀後半以降とされている(河合2000)。

#### c)礎石建総柱建物

#### ②国府域のクラの様相

国府域 $^{(4)}$  では $5 \times 3$  間が1 棟、 $3 \times 2$  間が3 棟、 $2 \times 2$  間が6 棟の計10 棟の掘立総柱が確認された。

#### a)掘立柱総柱建物

特筆すべきものに坪ノ内遺跡第5地点の建物がある。 $5 \times 3$ 間に復元され、桁行 $12 \times$ 梁行8.1 m、面積97.2mの規模を誇り、柱間寸法も桁行が8 尺、梁行が9 尺である。柱穴形態は隅丸方形で、規模も最大長2.7mと非常に大きい。時期は9世紀後半代とされている(明石1996)。最も多いのは $2 \times 2$  間の6 棟で、桁行 $3.8 \sim 4.1 \times$ 梁行 $3.0 \sim 3.9$ m、面積 $11.4 \sim 16.77$ mを測る。 $3 \times 2$  間は3 棟で、桁行 $5.1 \sim 6.6 \times$ 梁行 $3.6 \sim 4.3$ m、面積 $18 \sim 28$ mを測る。

掘形は、諏訪前A遺跡第9地点1号が布掘となる他は坪掘である。柱穴形態は諏訪前A第9地点1・5号、七ノ域遺跡第2地点2号、四之宮諏訪前A遺跡7号、真土六ノ域遺跡R4地区4号が方形を呈する。柱穴規模は真土六ノ域R4地区4号、神明久保遺跡第1地区1号、諏訪前A第9地点1号が最大長1.5mを測る。一方、四之宮諏訪前A3・7号は0.6~0.7m台である。

#### ③官衙関連遺跡のクラの様相

掘立柱建物 9 棟が確認でき、1 棟の側柱建物を除き、他は総柱建物である。

#### a)掘立柱総柱建物

平面形式は、延命寺遺跡、蓮乗院北遺跡(第4図4)の2棟が $3 \times 3$ 間で、小荷谷遺跡、上台遺跡(第4図5)の6棟が $2 \times 2$ 間である。平面規模は、前者が桁行約 $6 \times$ 梁行 $4.6 \sim 6$  m、

面積27~36㎡を測り、後者は桁行・梁行とも3~4m台で、面積は10㎡台である。

柱穴形態は蓮乗院北1号、上台3号が方形、延命寺19号が隅丸方形を呈する。柱穴規模は 蓮乗院北1号が最大長1.7mに、上台3号が1.4mである他は、1m未満と小さい。掘形はいず れも坪掘である。上台15・16号は東西方向に並列している。

#### b)掘立柱側柱建物

上台の1号(第4図5)だけである。平面形式は3×2間で桁行6.3×梁行4m、面積25.2 ㎡である。柱穴形態は隅丸方形で、規模は特段大きいものではない。掘形は坪掘である。上台2・3号と雁行配置をとる。

### ④寺院のクラの様相

掘立総柱(5)の3棟だけである。

#### a)掘立柱総柱建物

国分尼寺北方遺跡 7 次 2 号は  $3 \times 2$  間で、桁行 $6.3 \times$  梁行4.8m、面積30.24mを測る。柱間寸法は桁行 7 尺、梁行 8 尺である。柱穴形態は隅丸方形で、規模も  $1 \sim 1.3$ mと大きい。掘形は坪掘である。下寺尾遺跡群、影向寺遺跡のものは、部分的な検出に留まっており、詳細は不明である。

#### ⑤集落のクラの様相

集落では掘立総柱51棟と掘立側柱18棟の69棟が確認された。平面形式が明らかなものは前者が48棟、後者が18棟である。

#### a)掘立柱総柱建物

平面形式は  $2\times2$  間が26棟、  $3\times2$  間が16棟、  $3\times3$  間が 6 棟である。平面規模は  $2\times2$  間が桁行 $3.3\sim5.26$ ×梁行 $2.8\sim4.9$ m、面積 $11.1\sim25.48$ m、  $3\times2$  間が桁行 $4.38\sim7.30$ ×梁行  $3.6\sim5.4$ m、面積 $17.95\sim35.77$ m、  $3\times3$  間が桁行 $5.3\sim7.5\times4.4\times7.0$ m、面積 $23.32\sim52.50$  ㎡である。

柱穴形態は大半が円形だが、西大竹小原遺跡99A2-4号が方形、三ツ俣遺跡6号、向原遺跡4号、原口遺跡5号、石田・細谷遺跡、及川寺ノ上遺跡2号、中ノ原遺跡C地点8号、本郷遺跡KE15号、同RC3号、同MPS1号、上ノ町遺跡4号、受地だいやま遺跡5号が隅丸方形を呈している。柱穴規模は1m未満が過半数を占めるが、1mを越えるものも目に付き、なかでも3×3間の向原22・27号は1.5m以上になる。西大竹小原99A2-4号、尾尻西立野遺跡97B1-17号、及川寺ノ上2号の3者は通し柱式である。掘形が布掘を呈するものは9棟で、側柱と側柱の間が布掘になる尾尻西立野97B1-17号、及川寺ノ上2号、西部212遺跡8号と、側柱と東柱の間が布掘になり、相対する側柱間が一文字状の三ツ俣6号、向原16号、隣り合う梁行2本間が布掘になる向原27号など、規則性はみられずバラエティがある。

三ツ俣 G 地区 6 号、向原65号、原口 5 号、鳶尾遺跡81号、本郷 KOE 2 号、上浜田遺跡21号などは中央の側柱、束柱が片方に偏り、柱間寸法は均衡を欠いている。

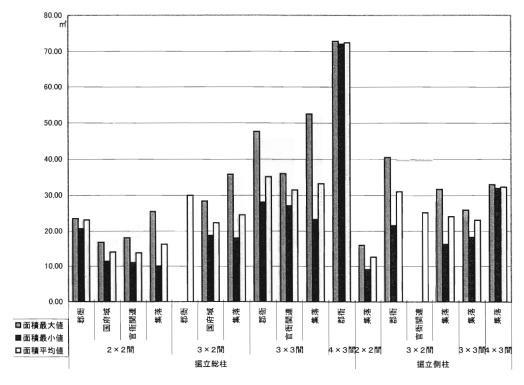
#### b)掘立柱側柱建物

平面形式は $2\times2$ 間が4棟、 $3\times2$ 間が7棟、 $3\times3$ 間が4棟、 $4\times3$ 間が3棟で、 $3\times2$ 間が最も多い。平面規模は $2\times2$ 間が桁行 $3.1\sim4.7$ ×梁行 $2.94\sim3.6$ m、面積 $9.11\sim15.98$ m、 $3\times2$ 間が桁行 $4.5\sim6.6$ ×梁行 $3.6\sim4.8$ m、面積 $16.2\sim31.68$ m、 $3\times3$ 間が桁行 $4.8\sim5.4$ ×梁行 $3.8\sim4.8$ m、面積 $18.24\sim25.92$ m、 $4\times3$ 間が桁行 $6\sim6.4$ ×梁行 $5\sim5.5$ m、面積 $32\sim33$ mである。

柱穴形態は原口 2 号、南鍛冶山遺跡5-67号が方形を、南鍛冶山5-51・68号が隅丸方形を呈する。柱穴規模は向原28号、西部212-7号、本郷 KE 6 号が一辺 1 m以上の他は 1 m未満である。掘形は原口 2 号、本郷 RC 7 号、南鍛冶山5-51・67号が布掘である。布掘の位置はそれぞれ個性がある。

#### c) クラの配置

発掘調査が広域になされた集落の中にはクラを含めた建物群に特色ある配置が窺える例が見受けられる。例えば、大型の建物群の一角にクラが伴う尾尻西立野97B1-29号、草山遺跡150号、向原16・22・50・65号、原口2・3・5号、本郷RC7・KE6・KE15・KOE2号、受地だいやま8号、竪穴住居や掘立総柱・掘立側柱が隣接して直(並)列に配置される向原27・28号、西部212-7・8号、南鍛冶山3-2・3-3・5-58号、南鍛冶山5-51・5-52・5-57・5-67・



第3図 基礎・柱列・遺跡の性格別クラの規模

5-68号、鳶尾70・72・73号、不動原遺跡7・8号、竪穴住居と併列する向原17号などである。 その他竪穴住居群内に配置されている受地だいやま5号などである。これらについては後ほど 少し詳しくみることにする。

# 3. クラの特色

クラの中のクラとして存在感を示す郡衙正倉のクラの特徴をまず列記し、それとそれ以外の クラを比較することで、それぞれの特色を描き出すことにする。

#### ①郡衙のクラの特色

正倉は郡衙の一角を構成する正倉域に集中的に造営された集中型正倉と数郷に別置された分 散型正倉に分けられる(山中1994)。今回確認された79棟はいずれも前者に分類されるもの で、企画的配置に大きな特徴がある。掘立柱建物が8割を占め、うち掘立総柱が過半数となっ ている。平面形式では、掘立総柱は2×2間、3×2間、3×3間、4×3間、掘立側柱は2  $\times 1$ 間、 $3 \times 2$ 間、 $4 \times 2$ 間、 $5 \times 3$ 間、 $6 \times 3$ 間、12間以上 $\times 2$ 間、礎石総柱は $4 \times 3$ 間、 5×4間が検出されている。最多は27棟の3×3間で、全体の6割強となり、掘立総柱の中 で占める割合となると8割強に達する。郡衙正倉は、 $4 \times 3$ 間、 $3 \times 3$ 間、 $3 \times 2$ 間の規模に 集中し、とりわけ各郡衙に共诵してみられる4×3間の倉は、正倉の中核をなす倉(松村 1983) とされているが、4×3間は今小路西で礎石総柱が4棟、長者原で掘立総柱が2棟確 認されているだけで、地域的特性の一端が現れている。片や西方Aで発見された桁行12間以 上の長大な掘立側柱®は、神奈川県内ではもちろん初例であり、全国的にも事例の少ないもの で注目される(<sup>1)</sup>。ちなみに各平面形式の平均値は掘立総柱では2×2間が桁行4.75×梁行4.65 m、面積23.11㎡、3×2間が桁行6.45×梁行4.65m、面積29.99㎡、3×3間が桁行6.03× 梁行5.79m、面積35.12m、4×3間が桁行10.2×梁行7.1m、面積72.4mである。柱間寸法は 数値が公表されているものでは完数尺のものが目に付く。柱上部構造は8世紀後半以降とされ る千年伊勢山台北5号が唯一通し柱式で、柱間寸法の規格性も乏しい。柱穴形態は方形、隅丸 方形が多く、その規模も大型である。ただし8世紀後半以降とされる千年伊勢山台北5・6号 は1m未満と小振りである。掘形は坪掘の方が多い。

企画的な配置をとる正倉の築造のあり方については、長者原では重複関係から布掘が最も古いことが確認され(水野1990)、千年伊勢山台北1期の3棟の掘立総柱の変遷観においても、布掘→布掘+坪掘→坪掘という流れがたどれ、最終的に併存していた(河合2002)とされている。この掘形に関してはかつて筆者も考察を加え、古代においては布掘がまず官衙を中心に取り入れられ、相対的に坪掘より古いタイプになりうるとの見通しをたてた(大上1991a)。また文献史学サイドから渡辺氏は、『越中国官倉納穀交替記』、『和泉監正税帳』の分析から、正倉は「蓄積が進行し、満倉になるに従って順次稲穀倉が築造されていく」(渡辺1998)と指

摘されている。このように郡衙正倉は必要に応じて企画性を念頭に築造されたと考えられる。 かかる視点で柱筋を揃え直線的に並列する西方Aの正倉をみると、千年伊勢山台北同様、布掘 の5号築造後坪掘の2~4号が築造され、最終的に同時併存したと想定することも可能である。

礎石総柱は、今小路西で9棟、長者原で4棟検出されている。この礎石建物は郡衙でしか確認されていない。今小路西では最も新しい10世紀初頭に、長者原でも時期の特定はされていないものの、掘立柱建物より新しいとされており、8世紀後半以降になると礎石建物の比率が東国では増すとの指摘(山中1994)に合うものである。今小路西をみるかぎり礎石総柱は掘立総柱より規模が大きいと指摘できるかもしれない。

正倉の位置を政庁を基準にみると西方 A は北約90mに、長者原では谷戸を挟み西側の台地に設けられている。配置は西方 A では4棟が東西方向に柱筋を揃え、今小路西の5期の礎石総柱は、東西に80mの間隔をとり、西側は南北に直列、東はL字形に、千年伊勢山台北の1期は3棟が品字形に、2期は東西に柱列を揃える正倉が南北に2列、3期も基本的に2期の位置を踏襲する形で柱筋を揃え、一定の間隔を保ちつつ計画的になされている。千年伊勢山台北1期は別として、正倉域にあって重要な役割を担う中庭を形成するよう計画的に配置されていると指摘できる。

#### ②国府域のクラの特色

国府域では  $2 \times 2$  間、  $3 \times 2$  間が主体で、集落遺跡に近いあり方をみせている。平均値は前者が桁行 $3.98 \times$ 梁行3.5m、面積13.97m、後者が桁行 $5.63 \times$ 梁行3.93m、面積22.33mで、郡衙のものより約10mも少なく一線が引ける。ただ柱穴形態は方形基調で、郡衙に近い様相といえそうである。国府域は国衙、曹司、国衙工房、国司館、官人居宅、国衙を底辺で支える人々の住まい等々の施設からなっている。  $3 \times 2$  間、  $2 \times 2$  間はいずれかのクラであろうが、国衙関連のクラの可能性は低いように思われる。

一方、9世紀後半とされる坪ノ内の $5\times3$ 間の掘立総柱は100㎡近くに達し、柱間寸法も完数尺である。この時期当該地域に相模国府が存在していた蓋然性は高く、かつ大住郡衙が存在していたことも考えられる。この建物は先ほどの $2\times2$ 間、 $3\times2$ 間に比し、格段の規模、柱間寸法の規格性から国衙あるいは郡衙関連のクラの可能性が高いといえるが、9世紀後半という時期、 $5\times3$ 間という規模、それに古東海道ルート沿いでかつ相模川に近いという立地的特性を勘案するなら、水運陸運の結節地点に設置された国衙の流通機構を担う収蔵施設という姿が描けるかも知れない。

#### ③官衙関連遺跡のクラの特色

官衙遺構に特有のコ字形配置をした掘立柱建物群と、竪穴住居を含まず掘立柱建物による建物群に伴うものを官衙関連遺跡のクラとした<sup>(8)</sup>。 2×2間の掘立総柱の平均値は桁行3.79×梁行3.61m、面積13.78㎡で、郡衙に比べると9㎡も少なく、柱穴規模も1m未満で、形態も円形を呈するものが多く、郡衙とは一線が引ける。3×3間の掘立総柱の平均値は桁行5.95×

#### 神奈川の古代のクラ (大上)

梁行5.3m、面積31.57㎡となり、郡衙、集落のものに比べるとその差は小さい。柱穴形態も方形基調で、規模も延命寺19号は1mに未たないがそれでも0.9mあり、蓮乗院北1号は1.7mに達する。 8 棟の掘立総柱を官衙関連遺跡のクラと一括りしたが、郡衙のクラとの比較からすると、  $2\times2$ 間と $3\times3$ 間は所属が異なることも考えられる。郡衙正倉に近い形状の $3\times3$ 間は郡レベルの、  $2\times2$ 間は郡より下位の郷レベルあるいは首長・豪族所有のクラの可能性が考えられる。ちなみに橘樹郡衙正倉の南東500mの至近に位置する蓮乗院北1号を、山中氏が指摘している借倉の一例(山中1994)とすることや、正倉の分置されたもの(河合2002)とすることも視野に入れておくことが必要かもしれない。

 $3 \times 2$ 間の掘立側柱の上台 1 号は北西約 5 mに存在する掘立総柱の  $2 \cdot 3$  号と同様の主軸方位をとるもので、雁行配置をとる倉と屋のセットと考えられる。  $15 \cdot 16$  号は柱筋を揃え 6 m の間隔をとり東西方向に並列している。上台のクラは中心施設から共に一定の距離をとり北西に位置している。特に  $2 \cdot 3$  号は約40mも離れている。

#### ④寺院のクラの特色

国分尼寺北方の3×2間の掘立総柱が唯一内容の判る例で、特色に言及できるまでの資料は揃っていない。

#### ⑤集落のクラの特色

掘立総柱51棟、掘立側柱18棟が確認され、現状では前者が多数を占める。掘立総柱では2×2間、3×2間、3×3間、4×3間が確認され、このうち2×2間が30棟、3×2間が23棟で、両者で全体の約8割を占め、集落における通有の掘立柱建物と同様のあり方を示している。郡衙で未検出の2×2間、3×3間、4×3間の掘立側柱が少数ながら確認されたが、4×3間の掘立総柱は未確認である。2×2間の平均値は掘立総柱が桁行4.23×梁行3.77m、面積16.21㎡、掘立側柱が桁行3.8×梁行3.26m、面積12.63㎡、3×2間は掘立総柱が桁行5.59×梁行4.37m、面積24.53㎡、掘立側柱が桁行5.74×梁行4.15m、面積24.11㎡である。いずれも集落における通有の掘立柱建物と大差ない。3×3間は掘立総柱が桁行6.06×梁行5.33m、面積33.25㎡で、掘立側柱は桁行5.17×梁行4.25m、面積23.11㎡である。前者は後者より10㎡程大きく、郡衙の掘立総柱とほぼ同じである。唯一南鍛冶山で検出された4×3間の掘立側柱の平均値は、桁行6.26×梁行5.16m、面積32.33㎡で、郡衙の4×3間の掘立総柱に比べ面積は1/2以下と小さく、集落、郡衙の3×3間の掘立総柱と同規模であるが、平面形式が4×3間である点に注意を払いたい。

柱穴形態は、円形を主体とする。中に方形基調のものもあるが、その多くは隅丸方形を呈し、原口2号、南鍛冶山5-67号が方形を呈する。(隅丸)方形を複数含む集落は本郷、南鍛冶山である。柱穴規模は1m未満のものが多く、1mを越えるものも、その主体は1.5m未満で全体に小規模である。こうした中にあって及川寺ノ上、向原、本郷では1.5m以上のものも存在している。柱間寸法は完数尺になるものはほとんどないようであり、しかも中間の柱位置のずれ

をはっきりと確認できるものすらあり規格性に乏しい。布掘の掘形は約2割にみられ、そのあり方はバラエティに富んでいる。通し柱式は西大竹小原と尾尻西立野の3×2間の各1棟と及川寺ノ上の3×3間の1棟だけである。

#### 集落遺跡でのクラの配置は、

1類:クラがL字形、直(並)列あるいは雁行配置をとるもの

a:基本的に3棟以上で構成されるもの

(ex.) 南鍛冶山5-51・5-52・5-57・5-67・5-68号、鳶尾70・72・73・83号

b:2棟で構成されるもの

(ex.)向原27・28号、南鍛冶山3-2・3-3・5-58号、西部212-7・212-8号、不動原7・8号

2類:大型の建物群にクラが伴うもの

a: 3棟以上のクラが伴うもの

(ex.) 本郷 RC7・KE6・KE15号

b:基本的に1棟が伴うもの

(ex.)尾尻西立野97B1-29号、向原16・22・50・65号、原口2・3・5号、本郷 K OE2号、草山150号

3類:建物群にクラが伴うもの

a:竪穴住居・(掘立柱建物)に1棟が伴うもの

(ex.) 受地だいやま8号、向原17号

b:竪穴住居群に1棟が伴うもの

(ex.) 受地だいやま5号

などに分類が可能である。

1類aの集落生成の7世紀中葉から8世紀中葉頃とされる(加藤1998)南鍛冶山5-51・5-52・5-57・5-67・5-68号(第4図6)は、前3者が4×3間、後2者が3×3間の掘立側柱で、柱穴規模も立派で、柱穴形態には(隅丸)方形を呈するものもある。ただ面積的には前者は郡衙の3×3間並みかそれ以下であり、後者も郡衙のそれより10㎡ほど小さいものだが、「建物の平面形式や細部の構造の採用にあたっては、政治的・社会的地位を反映した規制が存在したのであろう。そうした観点から、改めて東国集落にみられる桁行4間以上の建物」には注目すべき(松村1995)との指摘もある。その上、配置は建物主軸の平側が隣り合う状態で2ないし3棟が直列し<sup>(9)</sup>、かつこれらの掘立側柱には集落の南側低地から斜面を切り通して道が取り付くという特徴がみられる。かかる屋と道のあり方は、一人南鍛冶山集落内で機能を完結させるものではなく、外部世界との交通関係を物語るものである。配置状況、規模、それに律令前期の築造時期という点から郡衙正倉別院の一形態、穎屋の可能性を指摘したい。

鳶尾の70・72・73・83号(第4図3)は、東桁側に庇が付く3×2間の掘立側柱(71号)

を北西隅に、柱筋をほぼ揃えその東に  $3\times2$ 間(72号)と  $2\times2$ 間(83号)の掘立総柱、南に  $3\times2$ 間の掘立総柱(70号)と  $3\times3$ 間の掘立側柱(73号)の 5 棟でもって逆L字形に配置された建物群である。この建物群を取り囲む区画施設は未確認だが、複数の倉と屋で一院を形成している。郡衙正倉に比べ個々の建物は小さく、柱穴規模も 1 m未満で、形態も円形である点は、郡衙正倉別院の一例とするには無理があろう。ただ集落の北西に位置し、管理施設とも思える庇付きの掘立側柱を備え、総収蔵面積も80㎡を越えることから、例えば借倉、借屋も視野に郡衙関連のクラと理解したい。

1類bの向原27・28号(第4図7)は主軸方位から8世紀前半と思われる。前者が3×3間の掘立総柱で西側に、後者が2×2間の掘立側柱で東側に、2mの距離をとり柱筋を揃え東西に並列する。南鍛冶山3-2・3-3、5-58号はいずれも3×2間の掘立側柱である。3-2・3-3号は建て替え関係にあり、3-2・3-3号と5-58号が南北に直列する。3-2号からは炭化米が出土している。西部212-7・212-8号(第5図8)は、前者が3×2間の掘立側柱で南側に、後者が3×2間の掘立総柱で北側に、柱筋を揃え直列している。不動原7・8号(第5図7)は、前者が3×2間の掘立総柱で北側に、柱筋を揃え直列している。不動原7・8号(第5図7)は、前者が3×2間の掘立側柱で北側に、後者が3×2間の掘立総柱で、約6mの距離をとり雁行配置を取る。これらは倉と屋、あるいは2棟の屋でセットになっている。向原、西部212、不動原などは、他の建物群と一定の距離をおいて存在するという傾向がみられることから、建物群に所属する可能性は低く、集落あるいはムラのクラで、その性格は先学の成果(松村1983、山中・石毛1998)に学び穎倉・穎屋と考えたい。

2類aの9世紀後半の本郷のRC7・KE6・KE15号(第5図3)は、前2者が3×2間の掘立側柱、後者が3×2間の掘立総柱で、建物群内にあって北からKE15号、KE6号、RC7号の並びで、南北に直列している。KE6号の柱穴中とその周辺から炭化米が出土している。これらは9×2間以上(KE8号)、3×2間(KE4・RC2号)、2×1間(RC5号)の掘立側柱と大型竪穴住居(RC5・6号)、竪穴住居(RC10号)とで卓越した規模の大型建物群を形成し、かつ多彩な遺物を多数出土している。ただし建物配置に企画性がみられないことから地方行政機関の施設ではなく、郡司層の居宅を想定している(大上1999)。郡司層が居宅内に複数の倉、屋を所有していた様子が描ける。これらも穎倉・穎屋であろうか。

2類bの8世紀末から9世紀中頃の尾尻西立野97B1-29号は2×2間の掘立総柱で、建物群の北東端に位置している。これは97B1-19号をはじめとする複数の掘立側柱と大型竪穴住居(98B1-04号)で大型建物群を形成している(10)。

向原16、22、50、65号(第5図2)はそれぞれが個別大型建物群の一部をなしている。8世紀前半の65号は $2 \times 2$ 間の掘立総柱で、 $4 \times 3$ 間(71号)、 $3 \times 3$ 間(87号)、 $3 \times 2$ 間( $64 \cdot 68$ 号)の掘立側柱と大型竪穴住居(37号)で建物群を形成し、65号は西側の建物群の中央に位置している。8世紀末の50号は $3 \times 3$ 間の掘立総柱で、 $3 \times 3$ 間(25号)、 $3 \times 2$ 間( $18 \cdot 31$ 号)の掘立側柱と大型竪穴住居(18号)で建物群を形成し、50号は南西に位置して

いる。 9 世紀初頭の22号は  $3 \times 3$  間の掘立総柱で、  $4 \times 3$  間 (30号)、  $3 \times 3$  間 (94号)、  $3 \times 2$  間 (19・48号)、 $2 \times 2$  間 (67号)の掘立側柱と大型竪穴住居 (27号)で建物群を形成し、22号は北西端に位置している。 9 世紀中頃の16号は  $3 \times 3$  間の掘立総柱で、  $3 \times 3$  間 (15・20号)、  $3 \times 2$  間 (10・32・47号)の掘立側柱と大型竪穴住居 (16号)で建物群を形成し、16号は南西端に位置している。

7世紀末の原口2・3号は共に掘立側柱で、前者が布掘の3×3間、後者が坪掘の2×2間である。建物群の南にあって柱筋を揃え東西に並列しているが、時間差を想定したい。原口2号は桁行4間(4号)の掘立側柱と大型竪穴住居(1号)で、原口3号は7号の掘立側柱と大型竪穴住居(2号)で大型建物群を形成していたものと考えたい。7世紀末から8世紀初頭の原口5号は2×2間の掘立総柱で、桁行4間(6号)の掘立側柱と大型竪穴住居(4号)で大型建物群を形成し、南東に位置している。

9世紀頃の本郷 KOE 2 号(第 5 図 6)は  $2 \times 2$  間の掘立総柱で、 3 面庇付きの  $4 \times 3$  間 (3 号)、  $3 \times 2$  間 (6 ・ 7 号)の掘立側柱とで柱筋を揃え大型建物群を形成し、 2 号は南東隅 に位置している。

以上のようにこれらのクラは企画的配置の大型建物群の一角を構成するものである。企画的配置の一角に設けられるクラは2×2間或いは3×3間の倉か屋で、基本的に1建物群に1棟のクラであった可能性が高い。その設置位置に偏向性は窺えない。大型建物群の変遷が追える原口・向原遺跡の場合をみると、集落の成立期は屋であったものが、次の段階の7世紀末から8世紀前半では2×2間の倉に、さらに次段階の8世紀末から9世紀中頃にかけては3×3間の倉へと形式・規模が変質・拡大している。これらの建物群は地方行政の末端施設を兼備する村落首長層の居宅(大上1999)と想定しており、倉や屋はこれら建物群の一部に取り込まれていることから、村落首長層の所有の穎倉・穎屋の可能性が高い<sup>(11)</sup>。こうしたクラの変化は村落首長層自身の成長もあろうが、とりわけ神奈川の郡衙正倉の主体である3×3間へのクラの平面形式の拡大<sup>(12)</sup>は、地方行政機構との結びつきの度合いの強さを反映したものともいえよう。

9世紀後半の草山150号(第5図1)は $2 \times 2$ 間の掘立総柱で、北西端に位置している。これは $3 \times 3$ 間(137号)と $2 \times 2$ 間(125号)の掘立側柱と竪穴住居(162号)で企画性の弱い大型建物群を形成している。この建物群については村落首長層の居宅(大上1999)と想定しており、村落首長層が、居宅内に穎倉を1棟を所有していたと考えたい。

3類aの9世紀末の受地だいやま8号(第5図5)は $2 \times 2$ 間の掘立総柱で、この北に主屋と考えられる $3 \times 2$ 間の( $6 \cdot 7$ 号)と、竪穴住居(118号)で建物群を形成している。8世紀前半とされる向原17号(第4図7)は $2 \times 2$ 間の掘立総柱で、北約4mの竪穴住居(9号)と南北に直列配置をとっている。3類aのクラを伴う建物(群)は当該地域の集落において、一般的な建物群であり、一般農民層の居住施設(大上1991b)と想定している。こうした建物

(群) に倉が伴う意味については、①一般農民層も一般的に倉を所有するが、たまたまそれが掘立総柱であったので認識できた。②3類aの倉が伴うことは集落では例外的で、その建物群の居住者の所有を示すのではなく、倉に隣接し生活し、村落首長などから管理を課せられていたことを示すに過ぎない。などが考えられ(13)、現状では見解を留保しておく。

3類bの受地だいやま5号(第5図4)は2×2間の掘立総柱で、この建物を中心に南西から北西にかけてほぼ同時期とされる竪穴住居6棟が位置している。配置状況からこのなかの数棟の竪穴住居に伴うクラといえる。

# 4. 今後の課題

ここまでいささか冗長に過ぎたが、簡単に今後の課題を述べ、擱筆したい。

①実態として集落にかなりのクラが存在していた可能性が高いとの松村(松村1995)・高島(高島1998)氏らの指摘がある。これを受ける形で、広域に調査された集落遺跡を中心に、掘立側柱にも目を向け屋の抽出に心掛けた。結果として屋の抽出は、倉と直(並)列、あるいは雁行といった特徴的な配置関係にあるものに限られ、抽出例も僅かなものであった。かねてより掘立柱建物については多様な機能・用途が予測されている(石田1977)。今後は、かかる視点の作業から集落遺跡に限らず、建物の中からクラを見極めていくことが求められていよう。②集中型郡衙正倉は別として、クラの所有・管理主体者の特定をどのように把握するか。今回、クラと建物群との位置関係、建物群内でのクラの位置から類推したが、恣意的との誹りは免れないであろう。先学もこの課題に多くの時間を割いてきたが、未だ充分に説明しきれていないように思われる。この課題①と②はクラ研究を進めていく上で基本となるものである。まず共通の基準が構築されなければならないといえる。

③我々が目にする郡衙正倉の整然とした企画的な配置は、長期間に累積された最終的な姿であって、一時期における同時存在の棟数や形成過程は一様でないことが指摘(山中1994)されているが、その解明は充分になされているとはいえない。国家による一般民衆に対する収奪の度合い、在地の生産力を推量するためにも、正倉の機能分け、同時存在をどのように見極めていくかが課題といえる。

④今小路西の郡庁内で検出された3棟の掘立総柱をクラから除外し、それ以外は一応クラとした。掘立総柱の中にクラ以外のものが含まれている可能性も考えられる。構造、配置、位置関係などから再吟味が必要である。そういった意味で気になる存在として通し柱式がある。掘立総柱112棟のうちに4棟の通し柱式が郡衙と集落から確認された。郡衙正倉においては、倉の平面形態は正方形に近い傾向が指摘されている(松村1983)。この4棟は平面形式が3×2間、3×3間の2タイプであるが、長方形基調という共通点を持っている。これらの中に低床の管理施設、居住施設等他機能のものが含まれている可能性もあるのではないか。

⑤ところで、クラは剰余生産物収納の施設ととらえ、それを所有しているか否かで、優劣が判断されてきた。集落の配置パターンで3類のクラを含む建物群は一般構成員の居住施設と考えられるものである。そうした中にあって3類のクラを付属する一般構成員の居住施設はごく稀なものである。クラの基本的性格を基準にすると一般成員の中に村落首長層と同等のクラを所有していたことになり、一般成員間に階層差が存在することになる。あるいはそうであるかもしれないが、今回は別の視点、つまり行政機関あるいは村落首長など上層階層から、倉の管理をゆだねられ、クラに隣接して居住施設を構えた状況も一案とした。当否は置くとして、こうした視点からの検討もクラを理解する上で必要と思われる。

2003年1月25日の"相模の古代を考える会"例会で発表の機会を与えられ、出席者の方々から貴重な指導・教授を、また、明石 新、霜出俊浩、水野順敏、山口耕一の各氏からは資料の提供、指導・教授を受けました。記して感謝申し上げます。

なお本稿は、平成12年度科学研究費補助金(奨励研究(B))の助成を受け実施した研究成果の一部である。(課題研究 12904027)

#### 註

- 1 今小路西遺跡の郡庁域で検出された総柱建物 3 棟は、位置的にクラの可能性が少なく、楼や門に比定されているのでここでは除外した。また、掘形が円形ないしは方形を呈し、規模の小さい中世的様相を示すものは、収蔵施設とするには貧弱であり、論点をぼかす危険があるので、これらも除外した。
- 2 ここでは長者原遺跡・馬頭観音遺跡を合わせ、都筑郡衙とし、以下、"長者原遺跡"と略すことにする。
- 3 検出棟数ならびに柱列構造の判断は、シンポジウム等の資料より筆者が推測したものである。また、 側柱建物の中には管理棟が含まれている可能性も排除できない。
- 4 ここでいう国府域とは、明石氏によって想定された、平塚市街地砂州・砂丘上の四之宮・中原上宿・中原下宿を中心とする東西2km・南北800mの範囲(明石1995)に、林B遺跡を加えたものである。
- 5 このうち影向寺で確認されたものは、寺域内で確認されているのでここに含めているが、寺院に関係するものかどうかははっきりしない。また、一応総柱式として扱っているが、部分的な検出に留まっており、庇付きの建物の可能性も排除出来ない。
- 6 山中先生から現地指導の際、穎稲を収納する屋、あるいは武器庫といった教授を受けた。
- 7 この長大な建物の存在、合わせて横幅64mに達する政庁域は全国的にみても規模の大きなものであり、 これらを如何に理解するかが高座郡衙の特性把握に結びつくものと思われる。
- 8 上台15・16号はコ字形配置の建物群に伴わないとする見解(村田2000)もあるが、ここでは同一遺跡、同立地ということもあり、一括して扱った。
- 9 こうした配置の類例には、栃木県西赤堀遺跡の4×2間の南北棟の掘立側柱が5棟東西に配された例がある。構築時期から郷倉(津野1995)、あるいは郷家(井上1991)などの見解が示されている。
- 10 建物群の抽出、年代については霜出氏の教授による。

#### 神奈川の古代のクラ (大上)

- 11 向原遺跡の企画性のある大型建物群に類似した例に福島県東山田遺跡、正直C遺跡がある。これらでは建物群の西側に複数の倉が南北に直列配置されている。建物群自体は類似するものの倉のあり方に相違が見られ、性格の違いを示している可能性が考えられる。因みに東山田遺跡、正直C遺跡の倉については、郷倉、借倉(菅原2000)、郷倉(垣内2002)などの見解が示されている。
- 12 向原の $3 \times 3$ 間の掘立総柱の面積は、50号が52.50㎡、22号が30㎡、16号が23.32㎡と、郡衙正倉の規模に近い $50 \cdot 22$ 号やかなり小規模な16号と格差があるが、面積の大小にかかわらず、 $3 \times 3$ 間の平面形式で、かつ掘立総柱という形態をとる点に留意したい。
- 13 この問題を考える上で参考となる資料に栃木県多功南原遺跡がある。ここでは一辺30m四方の屋敷地に竪穴住居+掘立柱建物+井戸をセットとする建物群が30以上確認され、多功南原遺跡においては一般的な存在である。これらの中に2×2間の掘立総柱を北側に配置する2建物群(A遺構群(741・743・744掘立、737竪穴、749井戸)・G遺構群(825・826・724B掘立、820竪穴、846井戸))が確認されている(山口1999)。これら建物群は8世紀前半と中葉とされ、共に集落の北端に位置している。この倉を含む建物群は他と比べても、特段構成遺構数が多いわけでも、個々の遺構も大規模でもないので、集落内の有力者の居住施設とはいえない。また、他の建物群を観察しても、A・G遺構群の倉のある位置にそれに相当する掘立柱建物はみあたらず、恐らくA・G遺構群に限られた特異な存在といえよう。このことは倉の所有を示しているのではなく、別の側面を意味する重要な事例である可能性が考えられる。なお、多功南原遺跡のA・G遺構群のセット関係、年代観等について山口氏から懇切丁寧なご教授を受けた。

#### 引用・参考文献

明石 新 1995「発掘から見た相模国府」『國史學』第156号 国史学会

明石 新 1996「幻の相模国府をもとめて」『考古学を学ぶ』かながわ考古学同好会

荒木志伸 2000「郡衙正倉の変遷」『郡衙正倉の成立と変遷』奈良国立文化財研究所

石田広美 1977「掘立柱建物址の分析」『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会

井上尚明 1991「郷家に関する一試論」『埼玉考古学論集-設立10周年記念論文集-』埼玉県埋蔵文化財 調査事業団

植木 久 1991「高床式建築の変遷」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房

植木 久 1998「古代倉庫建築の構造」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

大上周三 1991a「掘立柱建物の掘り方形態」『青山考古』第9号

大上周三 1991b「古代集落の建物群類型について」『神奈川考古』第27号

大上周三 1999「大型建物群の性格について」『公開セミナー 古代の大型建物跡 記録集』 (財) かながわ考古学財団

垣内和孝 2002「陸奥国安積郡小川郷と東山田遺跡」『福島考古』第43号 福島県考古学会

加藤信夫 1999「藤沢市南鍛冶山遺跡」『公開セミナー 古代の大型建物跡 記録集』 (財) かながわ 考古学財団

河合英夫 2000 『千年伊勢山台北遺跡』 千年伊勢山台北遺跡発掘調査団

河合英夫 2002「武蔵国各郡の官衙及び関連遺跡 橘樹郡」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学

河野真知郎 1993『今小路西遺跡(御成小学校内)第5次発掘調査概報』鎌倉市教育委員会

河野真知郎他 1990『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

鬼頭清明 1976「八世紀の社会構成史的特質」『日本史研究』172 日本史研究会

鬼頭清明 1979『律令国家と農民』塙書房

菅原祥夫 2000「郡衙周辺からみた陸奥南部の変化」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官 衙遺跡検討会

高島英之 1998「集落と稲倉」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

都出比呂志 1978「はたして郷戸は最初の個別経営か」『日本史研究187』日本史研究会

都出比呂志 1989「古墳時代集落と階層分解」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

津野 仁 1995「栃木県の古代官衙とその周辺」『シンポジウム3 地方官衙とその周辺』日本考古学協 会茨城大会実行委員会

直木孝次郎他 1991『クラと古代王権』ミネルヴァ書房

奈良国立文化財研究所 1998『古代の稲倉と村落・郷里の支配』

奈良国立文化財研究所 2000『郡衙正倉の成立と変遷』

広瀬和雄 1978「古墳時代の集落類型-西日本を中心として-」『考古学研究』第25巻第1号

広瀬和雄 1990「畿内とその周辺の村落」『日本村落史講座』 2 雄山閣

松村恵司 1983「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』

松村恵司 1995「古代東国集落の諸相」『古代の集落-しもつけのムラとその生活-』栃木県教育委員会

松村恵司 1996「古代集落と在地社会」『土地と在地の社会をさぐる 古代から中世へ』山川出版社

松村恵司 1998「正倉の存在形態と機能」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

水野順敏 1990「都筑郡衙跡(長者原遺跡)」『シンポジウム関東官衙遺跡の検討』茨城県考古学協会

村上吉正 2002「下寺尾西方A遺跡」『第13回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』茅ヶ崎市教育委員会

村田文夫 2000「奈良末・平安初期における川崎市麻生区上台遺跡の原風景」『神奈川考古』第36号

山口耕一 1999「多功南原遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第222集 (財) 栃木県文化振興事業団

山中敏史 1991「古代の倉庫群の特徴と性格」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房

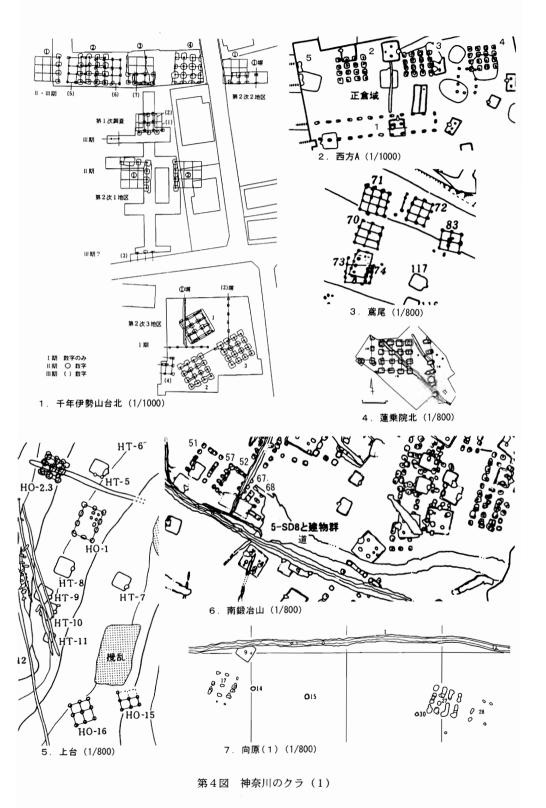
山中敏史 1994「正倉の構造と機能」『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

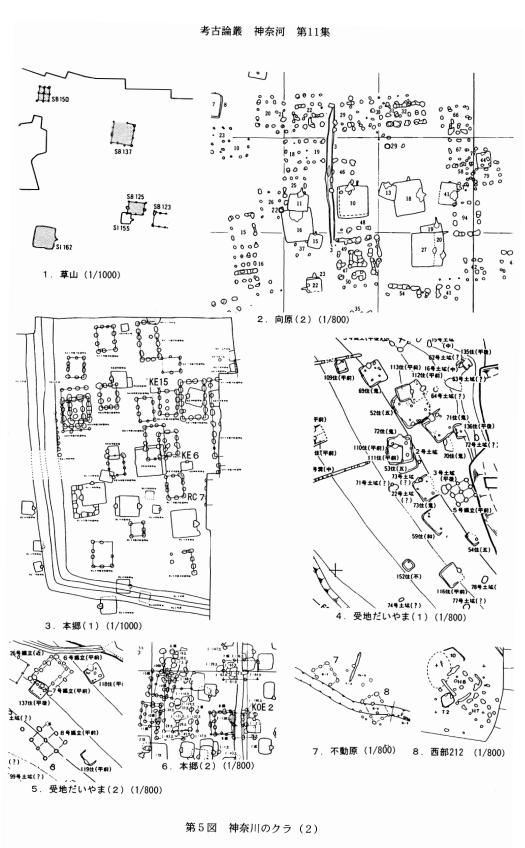
山中敏史・石毛彩子 1998「豪族居宅と倉」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

渡辺晃宏 1998「正倉の管理形態」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

〈補注〉脱稿後、千年伊勢山台北遺跡の14年度第2次調査において、規模は不詳だが2棟の掘立総柱が新たに検出された(川崎市教育委員会 2003『(推定)橘樹郡衙発掘調査現地見学会資料』)。

# 神奈川の古代のクラ (大上)





# 神奈川の古代のクラ (大上)

表1 神奈川の古代クラー覧表

<b>#</b> 0	\th.D+ /2	·申 # 77	表1			古代クラー		23h. 4-	- 1 to	10	*** ***
		遺構名				平面形式	桁行	梁行		掘形	備考
-	西方A	2号	郡衙			3×3	6.50	5.40	35.10		
	西方A	3号	郡衙			3×3	6.50	5.40	35.10	-	
	西方A	4号	郡衙			3×3	6.50	5.40	35.10		
4	西方A	5号	郡衙			1-×3				布掘	
5	西方A	1号	郡衙	掘立	側柱	12-×2					方形
6	今小路西		郡衙	掘立	総柱	3×3	6. 00	5. 40	32. 40	坪掘	隅丸方形
7	今小路西		郡衙	掘立	総柱	3-×3-				坪掘	隅丸方形
8	今小路西	西1号	郡衙	礎石	総柱	4×3					
9	今小路西	西2号	郡衙	礎石	総柱	5×4					
10	今小路西	西3号	郡衙	礎石	総柱	4×3					
11	今小路西	西4号	郡衙	礎石	総柱	4×3					
12	今小路西	西5号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-					
13	今小路西	東1号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-					
14	今小路西	東2号	郡衙	礎石	総柱	4×3					
15	今小路西	東3号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-					
16	今小路西	東4号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-					
17	長者原	1号	郡衙	掘立	総柱	3×3	6. 00	5. 80	34. 80	布掘	
18	長者原	2号	郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 80	5. 20	30. 16	布掘	方形
19	長者原	3号	郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 60	5. 40	30. 24	布掘	
20	長者原	8AB号	郡衙	掘立	総柱	3-×3		7.20		坪掘	
21	長者原	9AB号	郡衙	掘立	総柱	4×3	10. 40	7. 00	72. 80	坪掘	
22	長者原	11号	郡衙	掘立	総柱	3×3	6. 70	6. 20	41. 54	坪掘	
23	長者原	12.13号	郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 40	5. 20	28. 08	坪掘	
24	長者原	17号	郡衙	掘立	総柱	3×3	6. 20	6. 20	38. 44	坪掘	
25	長者原	18号	郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 70	5. 50	31. 35	布掘	
26	長者原	19号	郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 40	5. 40	29. 16	坪掘	
27	長者原	20号	郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 40	5. 40	29. 16	坪掘	
28	長者原	21号	郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 80	5. 80	33. 64	坪掘	
29	長者原		郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 50	5. 30	29. 15	布掘	
30	長者原		郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 90	5. 60	33. 04	坪掘	方形
31	長者原		郡衙	掘立	総柱	4×3	10.00	7. 20	72. 00	布掘	方形
32	長者原		郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 50	5. 50	30. 25	坪掘	
33	長者原	4号	郡衙	掘立	側柱	4×2	9. 20	4. 20	38. 64	坪掘	
34	長者原	7号	郡衙	掘立	側柱	5×3	9. 80	5. 20	50. 96	-	
35	長者原	10号	郡衙			2×1	5. 40	3. 70			
36	長者原	14号	郡衙	掘立	側柱	3×2	8. 10	5. 00		-	
37	長者原		郡衙	掘立	側柱	6×3	17. 20		137. 60		
38	長者原	31号	郡衙	掘立	側柱	3×2	5. 40	4. 00	21. 60	坪掘	
39	長者原	33 <del>号</del>	郡衙	掘立	側柱	1-×2				布掘	
40	長者原	1号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-					
41	長者原	2号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-					
_	長者原	3号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-				_	
43	長者原	4号	郡衙	礎石	総柱	2-×2-				ļ	
44	長者原	5号	郡衙	掘立							

番号	遺跡名	遺構名	遺跡性格	基礎	柱列	平面形式	桁行	梁行	面積	掘形	備考
	長者原	6号	郡衙	掘立		·					
_	長者原		郡衙	掘立		6×3ホカ					
	長者原		郡衙	掘立		6 × 3 ホカ					
	長者原		郡衙	掘立		6×3ホカ					
	長者原		郡衙	掘立		6 × 3ホカ					
	長者原		郡衙	掘立		6 × 3 ホカ					
	長者原		郡衙	掘立		6×3ホカ					
	長者原		郡衙	掘立		6×3ホカ					
53	長者原	34号	郡衙	掘立							
54	長者原	35号	郡衙	掘立							
55	長者原	36号	郡衙	掘立							
56	長者原	37号	郡衙	掘立							
57	長者原	38号	郡衙	掘立							
58	長者原	39号	郡衙	掘立							
59	長者原	41号	郡衙	掘立							
60	長者原	42号	郡衙	掘立							
61	馬頭観音		郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 80	5. 70	33. 06	布掘	
62	馬頭観音		郡衙	掘立	総柱	3×3	5. 70	5. 70	32. 49	布掘	
63	千年伊勢山台北	1号	郡衙	掘立	総柱	×3		6.30		坪掘	方形
64	千年伊勢山台北	2号	郡衙	掘立	総柱	3×3	6.30	6.30	39.69	坪掘	方形
65	千年伊勢山台北	3号	郡衙			3×3	6.60	6.60	43.56	坪掘	方形
	千年伊勢山台北		郡衙			3×3	6.75	6.75		坪掘	
67	千年伊勢山台北 	5 <del>号</del> 	郡衙	掘立 	総柱 	3×2	6.45	4.65	29.99	坪掘 	通し柱式  方形
60	千年伊勢山台北	6무	郡衙	堀立	₩ <del>t</del> t	3×3	6.45	6.30	40.63	拉堀	隅丸方形
-	千年伊勢山台北		郡衙			2×2	4. 60	4. 50			隅丸方形
	千年伊勢山台北		郡衙		-	2×2	4. 90	4. 80	23. 52	_	14-4 × 1/3 /12
	千年伊勢山台北 千年伊勢山台北		郡衙		-	3×3	6. 90	6. 90		坪掘	方形
	千年伊勢山台北		郡衙			3×1-	6.90	0.00	17.01	布掘	方形
	千年伊勢山台北		郡衙			2-×1-	0.00			坪掘	73.112
	千年伊勢山台北		郡衙	掘立	-	2-×1-				坪掘	
	千年伊勢山台北		郡衙	-		3×3	6. 00	6. 00	36. 00		方形
	千年伊勢山台北		郡衙	-	_	3×3	5. 90	5. 80	34. 22	_	方形
	千年伊勢山台北		郡衙	-		3×3	6. 00	6. 00	36. 00		方形
	千年伊勢山台北		郡衙	_		2×1-				坪掘	
	千年伊勢山台北		郡衙		側柱			5.25		布掘	方形
80	坪ノ内		国府域	掘立	総柱	5×3	12.00	8.10	97.20		隅丸方形
81	真土六の域	4号	国府域			2×2	3.80	3.40		坪掘	
	四之宮諏訪前A	3号	国府域		$\overline{}$	2×2	4.30	3.90		坪掘	
	四之宮諏訪前A		国府域			3×2	5.20	3.60	18.72	坪掘	方形
	諏訪前A第9	1号	国府域	掘立	総柱	2×2	3.90	3.60	14.04	布掘	方形
85	諏訪前A第9	5号	国府域	掘立	総柱	2×2	4.10	3.30	13.53	坪掘	方形
86	七ノ域第2	1号	国府域	掘立	総柱	2×2	3.80	3.00	11.40	坪掘	
87	七ノ域第2	2号	国府域	掘立	総柱	3×2	6.60	4.30	28.38	坪掘	方形
88	神明久保第1	1号	国府域	掘立	総柱	2×2	4.00	3.80	15.20	坪掘	

# 神奈川の古代のクラ (大上)

番号	遺跡名	遺構名	遺跡性格	基礎	柱列	平面形式	桁行	梁行	面積	掘形	備	考
89	林B第4	11号	国府域	掘立	総柱	3×2	5.10	3.90	19.89	坪掘		
90	延命寺	19号	官衙関連	掘立	総柱	3×3	5.90	4.60	27.14	坪掘	隅丸方	形
91	小荷谷	1号	官衙関連	掘立	総柱	2×2	3.62	3.46	12.52	坪掘		
92	小荷谷	3号	官衙関連	掘立	総柱	2×2	3.34	3.30	11.02	坪掘		
93	蓮乗院北	1号	官衙関連	掘立	総柱	3×3	6.00	6.00	36.00	坪掘	方形	П
94	上台	2号	官衙関連	掘立	総柱	2×2	3.50	3.30	11.55	坪掘		
	上台	3号	官衙関連	掘立	総柱	2×2	4.10	3.60	14.76	坪掘	方形	
	上台	15号	官衙関連		総柱	2×2	3.90	3.80	14.82	坪掘		
	 上台	16号	官衙関連			2×2	4.30	4.20	18.06			$\neg$
	上台	1号	官衙関連		側柱	3×2	6.30	4.00			隅丸方	形
-	一二 下寺尾	1号	寺院	掘立		3-×2-				坪掘		
-		2号	寺院			3×2	6.30	4.80	30.24		隅丸方	形
	影向寺		寺院	掘立		3-×1-				坪掘		
-	三ツ俣	6号	集落	掘立		3×2-	5.60		_		隅丸方	形
	ニッパ 三ツ俣G	6号	集落	掘立		2×2	3.60	2.80	10.08			
	草山	150号	集落	掘立		2×2	3.70	3.00	11.10			$\neg$
	西大竹小原	95A2-4号	集落	掘立		2×2	3.97	3.75	14.88			$\neg$
	西大竹小原	95A2-6号	集落	掘立	-	2×2	3.98	3.85	15.32			$\neg$
	西大竹小原	97A1-2号	集落	掘立	-	2×2	3.78	3.22	12.17			$\neg$
	西大竹小原	97A1-11号		掘立	_	2-×2-	0.70	0.22	12.17	坪掘		$\neg$
	西大竹小原	99A2-4号	集落			3×2	4.38	4.10	17.95		通し柱:	式・
											隅丸方	形
110		97B1-10号	集落	掘立	総柱	2×2	3.75	3.40	12.75	坪掘		
	尾尻西立野	97B1-17号				3×2	5.75	4.00	23.00	布掘	通し柱:	式
112	尾尻西立野	97B1-29号		掘立	総柱	2×2	3.90	2.90	11.31	坪掘		
113	下大槻峯	34号	集落	掘立	総柱	2×2	4.70	4.00	18.80	坪掘		
114	向原	4号	集落	掘立	総柱	3×2	5.20	4.10	21.32	坪掘	隅丸方	形
115	向原	16号	集落	掘立	総柱	3×3	5.30	4.40	23.32	布掘		
116	向原	17号	集落	掘立	総柱	2×2	4.40	4.40	19.36	坪掘		
117	向原	22号	集落	掘立	総柱	3×3	6.00	5.00	30.00	布掘		
118	向原	27号	集落	掘立	総柱	3×3	5.30	4.50	23.85	布掘		
	向原	33号	集落	掘立	総柱	3×2	7.30	4.90	35.77	坪掘		
_	向原	50号	集落			3×3	7.50	7.00	52.50	布掘		
121	向原	65号	集落	掘立	総柱	2×2	4.60	4.60	21.16	坪掘		
122	向原	28号	集落	掘立	側柱	2×2	4.70	3.40	15.98	坪掘		
123	原口	5号	集落	掘立	総柱	2×2	4.79	3.76	18.01	坪掘	隅丸方	形
_	原口	2号	集落		-	3×3	4.80	3.80	18.24	布掘	方形	
	原口	3号	集落	掘立	側柱	2×2	3.10	2.94	9.11	坪掘		
	上粕屋·三本松	4号	集落			2×2	4.20	4.20	17.64	坪掘		
	神戸·上宿	4号	集落			2×2	3.50	3.40	11.90	布掘		
	東富岡·北三間	5号	集落	掘立	総柱	2×2	4.70	4.00	18.80	坪掘		
	石田·細谷		集落	_	_	2×2				-	隅丸方	那
	鳶尾	70号	集落	_	-	3×2	4.60	4.60	21.16	坪掘		
	鳶尾	72号	集落	_	_	3×2	4.65	4.10	19.06	坪掘		
	鳶尾	81号	集落	_	_	2×2	4.42	3.50	15.47	坪掘		

番号	遺跡名	遺構名	遺跡性格	基礎	柱列	平面形式	桁行	梁行	面積	掘形	備考
133	鳶尾	83号	集落	掘立	総柱	2×2	4.12	4.10	16.89	坪掘	
134	鳶尾	92号	集落	掘立	総柱	3×2	6.75	4.60	31.05	坪掘	
135	鳶尾	111号	集落	掘立	総柱	3×2	5.87	4.24	24.88	坪掘	
136	鳶尾	73 <del>号</del>	集落	掘立	側柱	3×3	5.30	4.60	24.38	坪掘	
137	及川寺ノ上	2号	集落	掘立	総柱	3×3	5.40	4.50	24.30	布掘	通し柱式・ 隅丸方形
138	橋本	9号	集落	掘立	総柱	3×2	5.10	5.10	26.01	坪掘	
139	田名塩田原	6号	集落	掘立	総柱	3×3	6.90	6.60	45.54	坪掘	
140	田名塩田原	19号	集落	掘立	総柱	3×2	5.50	5.40	29.70	坪掘	
141	中ノ原C地点(第2地点)	8号	集落	掘立	総柱	2-×2-				坪掘	隅丸方形
142	宮久保	14号	集落	掘立	総柱	2×2	5.08	3.84	19.50	坪掘	
143	本郷KE地区	15 <del>号</del>	集落	掘立	総柱	3×2	6.24	4.24	26.45	坪掘	隅丸方形
144	本郷RC地区	3号	集落	掘立	総柱	3×2	5.70	4.26	24.28	坪掘	隅丸方形
145	本郷KOE地区	1号	集落	掘立	総柱	2×2	4.00	3.62	14.48	坪掘	
146	本郷KOE地区	2号	集落	掘立	総柱	2×2	5.26	4.64	24.40	坪掘	
147	本郷MPS地区	1号	集落	掘立	総柱	3×2	5.35	4.25	22.73	坪掘	隅丸方形
148	本郷RC地区	7号	集落	掘立	側柱	3×2	6.10	3.90	23.79	布掘	
149	本郷KE地区	6号	集落	掘立	側柱	3×2	5.92	4.48	26.52	坪掘	炭化米
150	上浜田	21号	集落	掘立	総柱	2×2	3.30	3.20	10.56	坪掘	
151	大谷向原	13号	集落	掘立	総柱	3×2	5.77	4.25	24.52	坪掘	
152	上ノ町	4号	集落	掘立	総柱	2×2	4.00	4.00	16.00	坪掘	隅丸方形
153	西部212	8号	集落	掘立	総柱	3×2	6.00	4.20	25.20	布掘	
154	西部212	7号	集落	掘立	側柱	3×2	5.60	4.00	22.40	坪掘	
155	南鍛冶山5次	51号	集落	掘立	側柱	4×3	6. 40	5. 00	32. 00	布掘	隅丸方形
156	南鍛冶山5次	52 <del>号</del>	集落	掘立	側柱	4×3	6. 00	5. 50	33. 00	坪掘	
157	南鍛冶山5次	57号	集落	掘立	側柱	4×3	6. 40	5. 00	32. 00	坪掘	
158	南鍛冶山5次	67号	集落	掘立	側柱	3×3	5. 40	4. 80	25. 92	布掘	方形
159	南鍛冶山5次	68号	集落	掘立	側柱	3×3	5. 20	4. 60	23. 92	坪掘	隅丸方形
160	南鍛冶山3次	2号	集落	掘立	側柱	3×2				坪掘	炭化米
161	南鍛冶山3次	3号	集落	掘立	側柱	3×2				坪掘	
162	南鍛冶山5次	58号	集落	掘立	側柱	3×2	6.60	4.80	31.68		
163	池子No.5	3号	集落	掘立	総柱	2×2	4.60	3.70	17.02	坪掘	
164	池子No.5	4号	集落	掘立	側柱	2×2	3.60	3.60	12.96	坪掘	
165	池子No.5	6号	集落	掘立	側柱	2×2	3.90	3.20	12.48	坪掘	
166	不動原	8号	集落	掘立	総柱	3×2	5.40	3.60	19.44	坪掘	
167	不動原	7号	集落	掘立	側柱	3×2	4.50	3.60	16.20	坪掘	
168	受地だいやま	5号	集落	掘立	総柱	2×2	4.20	3.80	15.96	坪掘	隅丸方形
169	受地だいやま	8号	集落	掘立	総柱	2×2	5.20	4.90	25.48	坪掘	
170	北川表ノ上	27号	集落	掘立	総柱	2×2				坪掘	

<sup>※1</sup> 斜体数値は、筆者測定値。

<sup>2</sup> 備考欄の形態名は柱穴形態で、長方形は方形と表記。未表記は円形、楕円形。

# 小田原城における元禄期以前の陶磁器群について

# ─小田原IV期の変遷を中心に─

井 関 文 明

はじめに

- 1. 小田原編年研究の現状と課題
- 2. 小田原IV期の編年的様相

- 3. 小田原Ⅳ期の遺構と遺物
- 4. 元禄期以前の陶磁器群の変遷 おわりに

# はじめに

小田原城とその城下は、戦国時代から江戸時代末までの約500年の間、歴史的に重要な役割 を担った史跡及び遺跡として知られている。その変遷過程は、古絵図や文献史料以外に、近年 までの発掘調査による遺構と遺物から、考古学的にも裏付けられるようになってきた。この考 古学的な裏付けの過程で特に重要な役割を担ったのは中世末から近代までの出土陶磁器群の研 究を中心に組まれてきた「小田原編年」(塚田・諏訪間・大島1988、大島1990、山口1991、 諏訪間1993 b・c・1995・1996・1997、上石1997、佐々木2002等)と考えられる。この 小田原編年は中世末から近代まで途切れることなく続いてきた新出陶磁器を含む一括遺物から なる遺構の廃棄(遺棄)年代を基礎に画期が設定されていることから、現在の小田原市域の考 古学研究ばかりか、県内の考古資料による該期の文化的様相を把握する上で必要不可欠な指標 と思われる。筆者は近年小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点(木村・村上・井関2002) の調査をする機会に恵まれた。すなわちその調査によって編年研究をする上で重要と考えられ る元禄期を中心とする17世紀中葉~18世紀前葉までの良好な遺構に伴う一括資料について報 告する機会を得た。これにより、従来の近世前半を中心とした小田原編年の内容(組成と年代 観)に検討を加える必要性を感じると同時に、これまでの調査成果と研究を踏まえた上で、こ れらの細分を試みたいと考えた。そこでまず本稿では小田原Ⅳ期を相前後する時期とのつなが りの中で細分することを目的とする。

# 1 小田原編年研究の現状と課題

今日では順次検討が加えられた結果、大別7期、細別11段階となった小田原編年は当初、

生産地や小田原以外の他の消費地での出土状況から概ね出現時期がとらえられる陶磁器を含む遺構の一括資料の中で、最も年代が下る新出陶磁器を指標として構築された。1988年塚田順正氏・諏訪間順氏・大島慎一氏の三氏による共同研究の成果として『貿易陶磁研究』№8に発表されたのを嚆矢とする(塚田・諏訪間・大島1988)。そこでは15世紀~18世紀までの中国染付(II期)、志野・唐津(II期)、伊万里磁器(IV期)、伊万里くらわんか碗(V期)を I期~V期の指標となる新出陶磁器と捉え、更に II 期をいわゆる「万暦様式」染付の出現以前(II a期)と以後(II b期)で細分し、大別 5 期、細別 2 期(段階)とした。その後1990年に大島氏はかわらけ・漆器・瓦等も小田原編年を補完する対象に扱うと同時に19世紀以降の瀬戸染付(VI期)の出現を区別した(大島1990)。続く1991年に山口剛志氏はかわらけを本格的に分析し、小田原編年 I 期~VI期への時期別・形態別の帰属関係を明らかにすると同時にかわらけのみによる変遷過程(1 期~4 期)を抽出し、その歴史的背景を論じた(山口1991)。1993年に諏訪間氏は明治10年代から大正初頭までの印判染付(VI期)の出現を小田原VI期から区別した(諏訪間1993 b)。また諏訪間氏は1993年に戦国時代から近世初頭の陶磁器群を分析し、その変遷過程からII a 期を3 段階(II a 古・II a 中・II a 新)に区分し、III 期を唐津・志野(III a 期)と総部(III b 期)の出現する時間差をもって 2 細分した(諏訪間1993 c)。

なおここまでの小田原編年研究の成果は諏訪間氏によって『小田原市史 別編 城郭』における「小田原城の考古学的調査の成果」の中の「小田原編年の概要」(諏訪間1995) や『貿易陶磁研究』№16 (諏訪間1996) で公表された。更にその後も小田原編年は上石統子氏によって瓦の変遷過程が明らかにされたり(上石1997)、佐々木健策氏によって中世から近世にかけての出土遺物の歴史的変遷が明らかにされたり(佐々木2002)と新たな方向性を導入したり、調査事例を再検討することで、その内容を豊富なものとし、今日に至っている。

このように小田原編年は資料の増加に伴う検討や、新視点の導入によって発展過程にあるのが確認された。しかし上記以降、小田原編年は新出陶磁器による新たな画期の設定(細分)や新視点の導入による編年枠の再構築に至らなかった。こうした現状を本稿では課題とし、小田原IV期の細分を試みたいと考える。

# 2 小田原IV期の編年的様相

前節で確認したとおり小田原IV期はこれまで細分されなかったが、本節ではIV期設定の指標となった新出陶磁器を含む考古資料の本稿までの編年的な内容を確認する。しかし相前後する時期の編年的な内容もIV期を理解する上で重要と判断されるため、以下ではⅢ b 期の内容を確認することから始める。

### (1) Ⅲ b 期の様相

Ⅲ期は志野、唐津、織部の出現をもって画期とされ、その年代は16世紀末葉から17世紀前

葉で、文禄から寛永頃に比定され、後北条氏滅亡後の同年に、家康の家臣大久保忠世が入城し、続く忠隣が改易され、その後阿部正次が入封する前期大久保氏の時代から番城の時代に相当すると言われている。その後半期に位置付けられるⅢ b 期は織部出現をもって区別され、番城の時代に相当すると言われ、伊万里磁器出現までの元和年間から寛永10年代(1615~1630年代)が下限に設定されている(塚田・諏訪間・大島1988、大島1990他)。

このⅢ b 期の遺構では欄干橋町遺跡第Ⅱ地点34号土坑・同36号土坑、二の丸中堀住吉橋橋台盛土等が知られている(大島1990、諏訪間1995・1996)。Ⅲ期の遺物は、美濃の志野・織部、唐津の碗・皿類以外に、中国(明)染付の碗・皿、天目茶碗、灰釉皿、擂鉢、常滑の甕、かわらけ等があげられ、瓦、漆碗、曲物、漆の漉殻、下駄、鉄製小札等の出土も確認されている(塚田・諏訪間・大島1988、大島1990他)。この内のⅢ期頃に出現すると言われる瓦(コビキB)がⅡ期との画期を示す指標として注目される(諏訪間1996)他、かわらけは灯明皿としての用途の観点から志野皿に代用されたと類推され、Ⅲ期では量的に激減する傾向が指摘され(大島1990、山口1991)、流通を考える上で画期(かわらけ3期)の指標とされている(山口1991)。なお明染付(大島1990)や美濃灰釉皿(諏訪間1995・1996)はⅢ期ではほとんどなくなる傾向が指摘されている。ここで確認すべき重要なことは、Ⅲ期の編年的な内容においてⅢ b 期がⅢ a 期と区別されたのが、織部を伴うか否かの違いだけであるということである。

### (2) Ⅳ期の様相

IV期は伊万里磁器の出現をもって画期とされ、その年代は17世紀中~末葉、寛永から貞享 頃に比定され、城主稲葉正勝の小田原城入討及びその子正則によって、城郭中心の近世化工事 の推進された時期(1632~1685)に相当するとされている。遺構では、欄干橋町遺跡第Ⅱ地 点9号土坑・同1号土坑・同3号土坑、大久保雅楽介邸跡第Ⅱ地点1号土坑・同第X地点3号 土坑等があげられる。遺物は伊万里の染付・白磁・青磁の碗・皿・鉢・水指の他、前期と同様 に志野・織部・唐津、中国染付の碗・皿、天目茶碗、灰釉皿、瓦、漆碗等がみられ、キセル、 櫛等の出土も確認されている(塚田・諏訪間・大島1988、大島1990、諏訪間1995・2003他)。 本期の陶器は瀬戸美濃の灰釉・鉄釉等の連房式登窯製品が多いとされる一方、擂鉢は瀬戸美濃 一辺倒の組成から丹波・信楽系の製品を含むことが知られている。以上のことから本期の陶磁 器群は、多様な産地の所産であると認識されている(諏訪間1995・1996)。この陶磁器群と は別に、キセルの出土は本期頃とされている(塚田・諏訪間・大島1988、大島1990)。この ため本稿ではキセルもⅢ期との画期を示す指標として注目される。かわらけは本期に再び増加 する傾向が指摘され、ロクロ成形(大島1990)で、器壁が直線的に外に開き、丁寧なナデ調 整が施され、焼成が硬質で良好といった本期以前(Ⅱb期の特徴)のものとは質的に異なる特 徴が抽出されている。このようなかわらけの特徴は、Ⅳ期・Ⅴ期(かわらけ4期)を通じて識 別されることから、近世的な様相を示す要素とみなされると同時に近世化整備工事の進行によっ

て再編された生産・流通の所産であったと推察されている(山口1991)。瓦は二の丸住吉堀を中心に、寛永9年(1632)直後の普請(寛永普請)からV期の宝永火山灰降下まで続く特徴として軒平瓦における巴の尾と圏線が接する重線表現や、小菊瓦における明瞭な外区を持たない点等が抽出されている(上石1997)。もちろんこれらの特徴はIV期のそれとして扱うことも可能と考えられる。繰り返しになるが本期は、国内生産開始の元和2年(1616)以降(矢部1985)に出現すると言われている伊万里磁器で区別される。そして近年まで寛永普請頃と年代が概ね設定がなされている二の丸住吉堀の石垣裏込や他の小田原城とその城下の遺構に出現直後の伊万里磁器(初期伊万里)を含み同年代頃の陶磁器で構成される一括資料が得られていないこと(大島1990)。これに加えて熊本県人吉城(人吉市)の調査事例(和田1989)から伊万里磁器の国内流通が、寛永末(1640年代)まで下がる可能性が確認されていること等の理由で、本期の上限は、概ね1640年代以降とされてきた。しかし山口氏によってその後欄干橋町遺跡第Ⅱ地点9号土坑は、1630~1640年の間に廃絶されたことが、再評価され、小田原城とその城下における伊万里磯器の出現が1630年代まで溯ることが明らかとなった。そこで本期の年代は1630~1680年代までの約60年間と割り出される。

なお『山川 日本史小辞典(新版)』(2001年第1版第1刷発行)によると、「元禄時代」は元禄年間(1688~1704)ばかりか五代将軍綱吉の在位した1680~1709年(延宝8~宝永6)頃を一般的にさすとなっている。従ってこれによると、本期末はこの元禄時代に含まれることになり、その時代の遺物を含むと考えられるが、本稿では本期に属する陶磁器群を「元禄期以前」と便宜的に表現した。

#### (3) V期の様相

V期はいわゆる伊万里くらわんか手の出現をもって画期とされ、その年代は17世紀末葉~18世紀末葉、元禄から寛政頃に比定され、前代城主稲葉氏転封の貞享3年(1686)後に小田原城に入封した大久保(後期大久保)氏の時代の前半に相当するとされ、その間に小田原城下が甚大な被害を被った元禄16年(1703)の大地震や宝永4年(1707)の富士山の噴火による宝永火山灰降下、天明2年(1782)の地震等による被害が小田原城とその城下を見舞ったと言われている。遺構では法雲寺跡1号溝、欄干橋町遺跡第Ⅱ地点25号土坑、三の丸藩校集成館跡64号土坑等があげられる。遺物ではそれまで高級品の位置を占めていた伊万里磁器から碗・皿類をはじめとする伊万里くらわんか手の磁器が加わることで磁器の日常雑器化とともに薄手上質等の高級品化する傾向が指摘されている(塚田・諏訪間・大島1988、大島1990、諏訪間1993 a・1995・1996)。このくらわんか手は法雲寺跡の調査によって宝永火山灰に覆われた溝(1号溝)中から出土したことにより、宝永4年(1707)までには出現していたことが確認されている(大島1990)。くらわんか手の碗・皿類以外の磁器では、18世紀中葉頃の廃棄年代が考えられている藩校集成館跡64号土坑例のように、磁器では元禄頃の鍋島、上手の南川原窯の皿、鉢、碗の蓋、段重、香炉、徳利などの染付・白磁・青磁があり、陶器では肥



(1)欄干橋町遺跡第Ⅱ地点(2)大久保雅楽介邸跡第Ⅱ地点(3)杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点第1図 小田原Ⅳ期の遺跡〔約1/10,000〕(『小田原城三の丸・大外郭』1988より抜粋)

前の京焼風碗・皿・蓋、唐津刷毛目碗・三島手皿、瀬戸美濃灰釉皿・鉄釉灯明皿、堺擂鉢、土器では焼塩壷、火入れ等があることから、本期の陶磁器類は多様な産地の所産であると同時に器種の多様性にも特徴付けられる。この内鍋島は蘭の花を描く色鍋島の他、桜を描く例と蝶と白爪草を描く例、七宝紋の角皿があり、蘭と桜の例は七寸皿の10枚組みであったことが同一部位の発見から確認されている。なお1996年当時に東京の江戸上屋敷跡や京都の公家屋敷跡、九州の城跡でしか発見例がなかった鍋島の小田原城における出土は、その流通を考える上で貴重とされた(諏訪間1995・1996)。上記以外の遺物の内、かわらけのIV期と比べ器壁が直線的に外に開いて立ち上がる一群には口径に比べて底径が小さくなり、器壁の立ち上がりがより緩やかになる傾向が識別されている(山口1991)。瓦は宝永火山灰降下を境に分けられる傾向が指摘されている(上石1997)。以上小田原IV期を中心に皿り~V期の編年的な概要に触れた。

# 3 小田原Ⅳ期の遺構と遺物

本節では、これまで小田原IV期に位置付けられた遺構とその遺構から出土した一括資料について陶磁器を中心に確認すると同様に近年報告書が刊行された小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡

第Ⅲ地点のIV期に所属すると判断された事例について紹介する。なお、提示する資料の縮尺は 陶磁器は1/6、瓦は1/12とし、それ以外の資料については陶磁器と同じ縮尺に統一した。

### (1) 欄干橋町遺跡第Ⅱ地点

小田原城下の東海道筋にある欄干橋町中で、小田原宿の宿老を勤めたとされる外郎家の屋敷地跡内にあった調査地点で、本地点の調査成果は小田原IV期とV期の基準資料になったことで注目される(諏訪間1993 a、井上1993 a)。

### 1号土坑出土遺物 (第2図1~48)

調査区東側の北東隅で検出され、切り合い関係から後述する 3 号土坑よりも古いことが確認された 1 号土坑からは中国染付、伊万里磁器、瀬戸美濃の志野・織部、灰釉、擂鉢の他、常滑の甕、かわらけ、キセル、土製品、金属製品、瓦等の計196点の遺物が出土しているとされる。中国染付( $1\sim6$ )は小坏( $1\cdot2$ )と皿( $3\sim6$ )があり、その年代は16世紀末 $\sim17$ 世紀前半までとされる。

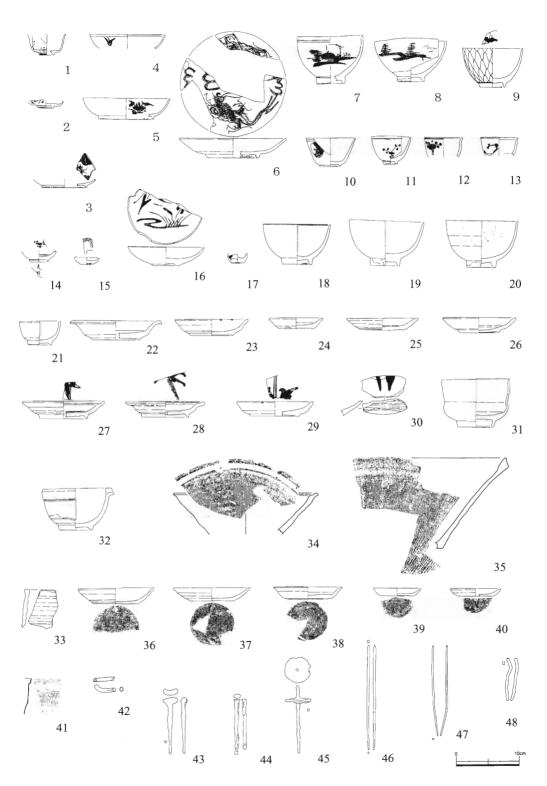
伊万里磁器 (7~20) は、染付の碗 (7~9)・小坏 (10~15)・皿 (16)、色絵瓶 (17)、 白磁碗 (18)、青磁碗 (19・20) が確認され、その年代は17世紀中葉が中心とされている。 陶器 (21~35) には灰釉碗 (21)、灰釉皿 (22~24)、志野皿 (25・26)、灰釉鉄絵皿 (27・ 28)、志野鉄絵皿 (29)、唐津鉄絵皿 (30)、無釉碗 (31)、鉄釉片口鉢 (32)、鉄釉香炉 (33)、 瀬戸美濃 (34) と丹波 (35) の擂鉢があり、志野・灰釉・鉄釉は瀬戸美濃で占められ、その 年代は17世紀前半が中心とされている。他にかわらけ (36~40)、キセル (42)、金属製品 (41・43~48) が確認できる。

なお1号土坑の廃絶時期は伊万里磁器の年代が1640~1650年代とされていることにより、 小田原IV期の中でも前半に位置づけられる。

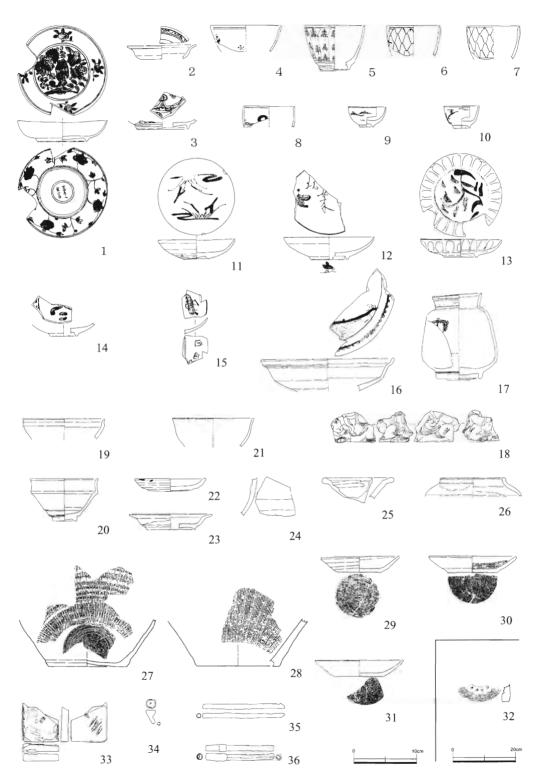
#### 3号土坑出土遺物 (第3図1~32)

調査区東側の北壁で検出され、切り合い関係から前述した 1 号土坑よりも新しいことが確認された 3 号土坑からは、中国染付、伊万里磁器、瀬戸美濃の天目・志野・灰釉・擂鉢、丹波の擂鉢、常滑の甕、かわらけ、キセル、金属製品、瓦等の計153点の遺物が出土しているとされている。中国染付( $1\sim3$ )は皿のみで、年代は16世紀までとされている。

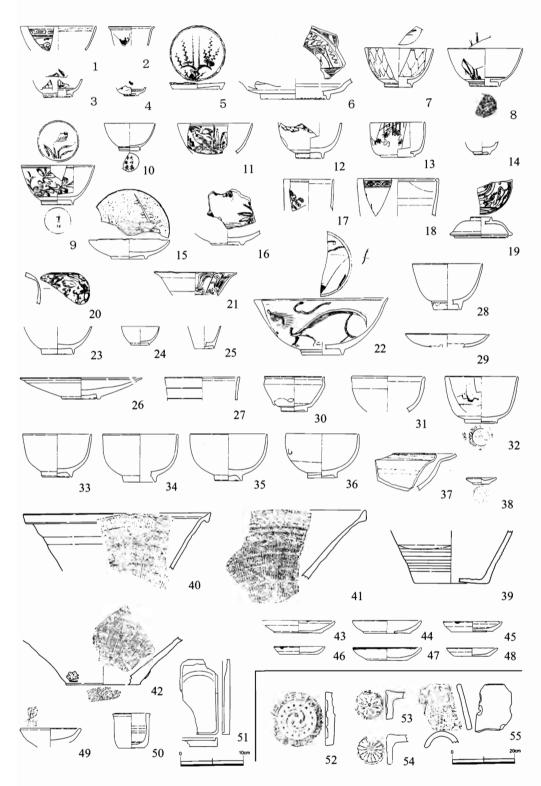
伊万里磁器  $(4 \sim 18)$  は、染付  $(4 \sim 17)$  と白磁水滴 (18) があり、染付は、碗  $(4 \sim 8)$ ・小坏  $(9 \cdot 10)$ ・皿  $(11 \sim 16)$ ・壷 (17) で構成されている。またこれら磁器の年代は、4 が1670年代とされたが、全体では17世紀中葉とされている。陶器  $(19 \sim 28)$  は、天目茶碗  $(19 \cdot 20)$ 、灰釉碗 (21)、志野皿 (22)、長石釉皿 (23)、鉄釉壷 (26)、瀬戸の笠原大鉢 (25) 等の瀬戸美濃系  $(19 \sim 23 \cdot 25 \cdot 26)$  と唐津壷 (24) 等の肥前系に分かれる他に、丹波の擂鉢 (27) 等が出土している。天目の内、20は白天目で、擂鉢の内28は産地不明とされる。なおこれら陶器の年代は17世紀代とされている。またこれら以外ではかわらけ  $(29 \sim 31)$ 、



第2図 欄干橋町遺跡第Ⅱ地点1号土坑出土遺物



第3図 欄干橋町遺跡第Ⅱ地点3号土坑出土遺物



第4図 大久保雅楽介邸跡第Ⅱ地点1号土坑出土遺物

瓦(32)、キセル(34)、砥石(33)、金属製品(35・36)が確認できる。

3 号土坑は伊万里磁器の年代が $1640\sim1650$ 年代とされることにより、1 号土坑とほぼ同じ廃絶時期が推定されている。従って1 号土坑同様に小田原IV期では前半に位置づけられる。

### (2) 大久保雅楽介邸跡第Ⅱ地点

三の丸の大手門跡の北側に位置し、稲葉氏が城主の時代には家老の塚田氏の屋敷であったのが古絵図から確認されている。本遺跡の南側は杉浦平太夫邸跡と分かれるが、本地点の調査果は小田原IV期の基準資料となったことで注目され、近年の調査から第X地点3号土坑は同一の遺構と判断されている(諏訪間1993d・2003、井上1993b)。

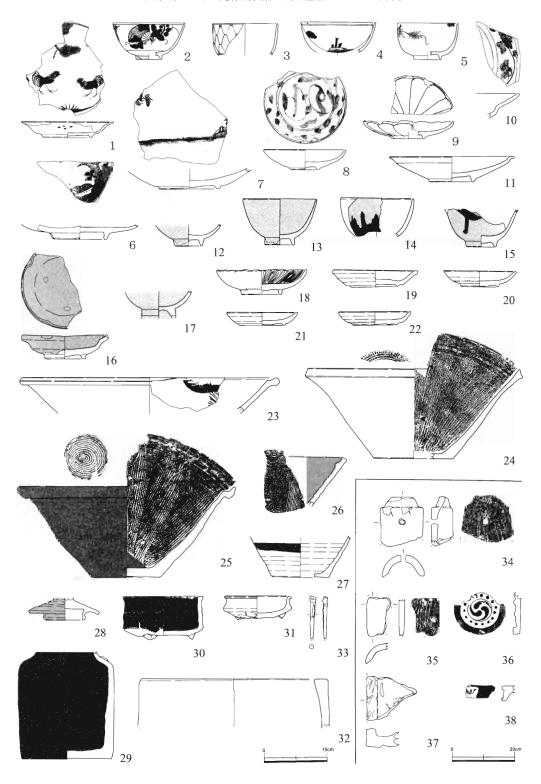
### 1号土坑出土遺物 (第4図1~55)

調査区の大部分を占める東西5m以上、南北6.8m以上、深さ1.9m規模の1号土坑からは、 遺物が計809点出土し、その内訳は陶磁器類364点、かわらけ182点、瓦203点、金属製品10 点、石製品12点、古銭3点等である。陶磁器類は中国磁器26点、伊万里磁器163点、瀬戸美 濃灰釉陶器3点、天目茶碗8点、志野16点、擂鉢19点、肥前産の京焼風陶器50点、唐津12点 の他、鉄釉11、擂鉢19、焼締甕11等と報告されている。中国( $1 \sim 6$ )・伊万里磁器( $7 \sim$ 29) はともに染付・白磁・青磁があり、伊万里磁器には、これに古九谷様式の色絵(20)が 加わる他、白磁には小杯( $24 \cdot 25$ )もみられる。中国染付( $1 \sim 6$ ) には碗(1)・小坏  $(2 \sim 4)$  ・皿  $(5 \cdot 6)$  があり、その年代は17世紀初頭が主体とされる。伊万里磁器では、 染付(7~19・21・22)は碗(7~13)・小坏(14)・皿(15・16)・蓋物(17)・香炉 (18) ・蓋(19)・鉢(21・22)と多様であり、色絵(20)は瓶のみだが、白磁(23~27) は碗(23)・小杯(24・25)・皿(26)・香炉(27)と染付と同様に多様で、青磁(28・ 29) は碗(28) と皿(29) がある。これら伊万里磁器の年代は17世紀初頭~末葉までと幅が みられる。陶器 (30~39) では、瀬戸美濃系 (30·31·36·38·40·42) は天目茶碗 (30· 31)、碗(36)、鉄釉蓋(38)、擂鉢(40・42)があり、肥前系(32~35・37)は京焼風 (32) や呉器手(33~35) と判断される碗と「刷毛目」鉢(37) があり、この他丹波の擂鉢 (41)、信楽の鉄釉壷(39)等があるといった特徴がみられ、磁器同様に多様な器種構成であ ると言える。陶磁器類以外ではかわらけ(43~48)、瓦(52~55)、灯明具(49)、焼塩壷 (50)、硯(51) 等が確認できる。

1号土坑の廃絶時期は、陶磁器類から $1670\sim1680$ 年代と推定されている。従って小田原IV期では後半に位置づけられる。

#### (3) 杉浦平太夫邸跡第川地点

三の丸の大手門跡の南側に位置し、大久保雅楽介邸跡と同様に家老屋敷があったとされる調査地点で、稲葉氏が城主の時代には同姓の家老屋敷であったことが古絵図から確認されている。



第5図 杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点25号土坑出土遺物

#### 考古論叢 神奈河 第11集

屋敷内の区画に関連する雨落ちと推察される1号砂利敷遺構(南砂利敷)の区画外には25号 土坑、区画内には17号・31号土坑が検出されている(木村・村上・井関2002)。 25号土坑出土遺物(第5図1~38)

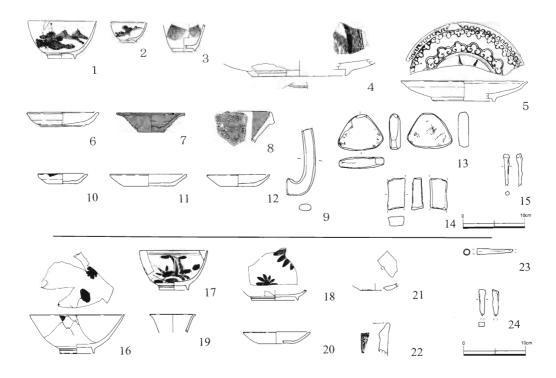
調査区(旧庁舎南区) 南側の中央の壁際で検出され、東西約0.5、南北0.2m以上、深さ0.4 m規模の25号土坑からは、遺物が500点以上出土した。内訳は、陶磁器56点、かわらけ1点、瓦16点、金属製品1点等の陶磁器類を中心とした人工遺物が計67点ある他に、獣骨・貝類等の自然遺物が500ほどある。堀内秀樹氏による産地・年代等の鑑定(以下同地点遺跡の17・31号土坑出土遺物等も同氏の鑑定)から陶磁器類は中国染付1点、肥前系(伊万里)磁器14点・陶器3点、志野2点、織部1点を含む瀬戸美濃系陶器24点他、擂鉢9点等が確認された。中国染付は皿(1)があり、その年代は16世紀末~17世紀前半までとされる。

伊万里磁器 (2~13) は染付の碗 (2~4)・皿 (6~10)の他に、色絵碗(5)、白磁皿 (11)、青磁碗 (12・13) が確認される。これらの年代は、1630~1660年代までと幅がみられるが、17世紀中葉が中心である。陶器 (14~31) では、瀬戸美濃系 (14・16・18~23・25・26・29~31) は、志野皿 (21・22)、総織部輪花皿 (16)、鉄釉碗 (14)、灰釉菊皿 (18)、灰釉皿 (19・20)、灰釉鉄絵皿 (23)、鉄釉擂鉢 (25)、鋳釉擂鉢 (26)、鉄釉双耳壺 (29)、鉄釉香炉 (30)、灰釉香炉 (31) があり、大半を占める。この他陶器では、肥前系の銅緑釉流し掛け (15) や呉器手 (17) 等の碗、銅緑釉の蓋 (28)、丹波系の擂鉢 (24)、産地不明の鉄釉壺 (27) 等がある。呉器手碗以外の陶器の年代は17世紀中葉までの所産とされている。陶磁器類以外では瓦質土器の火鉢 (32) や瓦 (34~38)、金属製品 (33) が確認できる。25号土坑の廃絶時期は、17世紀後半の呉器手を含むものの、陶磁器類全体から1660年代までと推定される。従って小田原IV期では前半に位置づけられる。

### 17号土坑出土遺物 (第6図1~15)

調査区 (旧庁舎南区) 南側の西寄りの壁際で検出され、東西約2m、南北約0.4m以上、深さ約0.9m規模の17号土坑からは肥前系 (伊万里) 磁器17点、肥前系・瀬戸美濃系を中心とする陶器類17点の他、焼塩壷蓋、擂鉢、かわらけ、キセル、砥石、金属製品等の計123点の遺物が出土している。伊万里磁器 (1~5) は染付碗 (1)・小坏 (2・3)・皿 (5)、色絵皿 (4) 等が出土している。これらの磁器は、年代が17世紀前半~末葉とされ、色絵皿は古九谷様式の五彩手と鑑定された。陶器 (6~9) では、瀬戸美濃系は長石釉皿 (6)、錆釉壷蓋 (7)、錆釉擂鉢 (8)、御深井釉水注把手 (9)等が出土している。なおこれら陶器の年代は17世紀代とされる。他にかわらけ (10~12)、研磨痕のある瓦 (13)、砥石 (14)、金属製品 (15) が確認できる。

17号土坑の廃絶時期は17世紀末の伊万里磁器を含むものの、伊万里磁器の碗等に小田原V期以降のくらわんか手を含まないことと陶磁器類全体から1680年代頃と推察され、小田原IV期では後半に位置づけられる。



第6図 杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点17号土坑(1~15) ・31号土坑(16~24) 出土遺物

# 31号土坑出土遺物 (第6 図16~24)

調査区(旧庁舎南区) 南側の南西隅壁際で検出され、東西約2m、南北約1.5m、深さ約0.4 m規模の31号土坑からは、肥前系(伊万里) 磁器6点、肥前系と瀬戸美濃系を中心とする陶器類7点、かわらけ9点、焼塩壷3点、キセル、金属製品、瓦、火鉢等計31点の遺物が出土している。肥前系(伊万里) 磁器(16~19) は染付碗(16・17)・皿(18)、白磁小杯(19)等が出土している。これらの磁器は年代が17世紀中~末葉とされた。陶器では、肥前系は碗、瀬戸美濃系は皿、擂鉢が出土し、その年代は17世紀代と推察される。他にかわらけ(20・21)、キセル(23)、焼塩壷(22)、金属製品(24)が確認できる。

31号土坑の廃絶時期は17世紀末の伊万里磁器を含むものの、17号土坑と同様に、小田原V期以降のくらわんか手を含まないことと陶磁器類全体から1680年代頃と推察され、小田原IV期では後半に位置づけられる。

# 4 元禄期以前の陶磁器群の変遷

以上、小田原城及び城下の元禄期以前の陶磁器群を中心とする一括廃棄遺物の組成と年代に ついて論じる上で、各遺跡の事例を紹介した。そこで、これらを検討することで、小田原IV期 の変遷過程を把握することが可能であると考えられる。またその際に、小田原IV期を前半と後半に分けた方が、陶磁器群を中心とする一括廃棄の背後にある生産一流通ー消費の過程の変化をより明確に把握でき、生活用品の質的・量的な変化を認識することが可能であると思われる。これまでIV期は、城主の交替もなく、編年上では当初設定から何ら細分がなされなかった時期である。その期間は、前述したとおり17世紀中~未葉までの約60年の期間に相当する。本期以前の中世末から近世初頭に相当する16世紀から17世紀前半の時期については小田原編年においてすでに6細分され(諏訪間1993)、近接する江戸遺跡でも小田原IV期とV期に相当する時期が近年まで20年以下の単位で、編年の細分が進行されつつあるのが確認される(堀内1996他)。これらの現状に照らし合わせると、ここで細分しなければ小田原城とその城下の発展過程及びその地域的な繋がりを持つ時間軸にはなり得ないと考えられる。以下では、IV期をIV a期とIV b期に分け、それぞれの変遷過程において把握することで、その内容を明らかにする。

### (1) Na期における変遷過程

本期の磁器は中国産と肥前系(伊万里)がみられる。中国磁器では小坏と皿、伊万里磁器では染付碗・小坏・皿・壷、色絵瓶、白磁皿・水滴、青磁碗等の器種がすでに登場しているのを確認できる。陶器では瀬戸美濃系の志野・織部、天目茶碗、灰釉碗・皿、鉄釉碗・壷・香炉、擂鉢、肥前系の碗・皿・蓋、丹波の擂鉢等がある。

これまでIV期の指標とされてきた伊万里磁器は、本期において「初期伊万里」とすることで、細別の指標になると思われる。この「初期伊万里」は「磁器焼成に成功した初期の製品」で、「生掛けであること、高台径が小さいこと、ラフにつくられていることなどの特徴を有する」(堀内1996)という掘内秀樹氏の定義によるものを本稿では指し、この初期伊万里を含む主な遺構は欄干橋町遺跡第Ⅱ地点1号土坑(第2図16)・同3号土坑(第3図11)、杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点25号土坑(第5図7・8)があり、これらの遺構は陶磁器群全体の年代からも本期に属すると判断される。

なお本期においてかわらけが杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点25号土坑では少なく、欄干橋町遺跡 第Ⅲ地点1号土坑・同3号土坑では多いといった組成に占める割合に違いがみられる。この違いは城内と城下におけるかわらけの流通−消費の違いを反映しているか、さもなければ時期差による可能性が指摘される。

#### (2) Ⅳ b 期における変遷過程

本期の磁器は中国と肥前系が前期と同様にみられる。中国磁器では新たに染付碗が加わり、伊万里磁器では前期にみられた染付壷・白磁水滴が本期では確認されなかったものの、新たに染付蓋物・香炉・蓋・鉢、白磁碗・小坏・香炉、青磁皿等の器種が加わることで、器種の多様化する傾向が指摘される。また小坏には碗・皿形以外に猪口形の例(第4図25・第6図3)

も加わる。陶器では新たに瀬戸美濃系の御深井釉、肥前系の京焼風・唐津の刷毛目鉢、信楽の製品が確認される。ところで本期には伊万里磁器の中でも古九谷様式が含まれる。この古九谷様式を含む遺構では大久保雅楽介邸跡第 II 地点 1 号土坑(第 4 図20)と杉浦平太夫邸跡第 II 地点 17号土坑(第 6 図 4)があるが、資料数が 2 事例と少ないことから指標になりえないと思われる。そこで本期では、高台の断面がU字状でかつ大振りを呈し、高台径が広いという特徴を持つ「U字状高台(大)」(堀内1996・2001)が指標になると考えられる(第 4 図 9・第6図 1・16)。

また上述したこれら3つの遺構には、これまでの小田原編年研究上、その出現時期が明確でなかった焼塩壷(第4図50、第6図22等)が本期から伴うことが確認されている。このような変化にも注目して本期を前期から分けるのは生活用品の変化を考える上で重要であると判断される。この焼塩壷出現は寛永普請に始まる近世化整備工事に伴う物資の生産・流通の再編の所産とされたかわらけ(山口1991)と、何らかの関連性が考えられ、本期の細分を通じて小田原城とその城下において段階的に変遷過程が提示できるのではないかと思われる。

# おわりに

以上、小田原城及びその城下出土の元禄期以前の陶磁器群を、従来の資料に新資料を追加した上で、小田原IV期に属する一括廃棄遺物の組成と年代観から論じるにあたり、各調査事例に検討を加えた。そして、その変遷過程を明らかにし、結果的に小田原IV期を細分した。

繰り返し述べることになるが、小田原IV期における小田原城とその城下は城主の交替に見られるような政治的な影響下にはなかったとされる。その一方で小田原IV期は、江戸を中心とした文物の流通や情報網の確立によって、政治的・社会的な様式の変化が物質的、生活的な様式の変化にまで移行し、中世から近世へと脱却する時期と言われてきた(大島1990)。これについての資料的な裏付けは本期の陶磁器群を中心とする一括資料の事例を 2 つの時期、すなわち IVa 期とIVb 期に帰属させ、個々変遷過程において据え直すことで、一歩近づいたと考えられる。

なお最後になりましたが、本稿執筆にあたり、小田原市教育委員会の塚田順正氏、諏訪間順氏、大島慎一氏、山口剛志氏、佐々木健策氏と小林義典氏、掘内秀樹氏には様々な御指導・御教示を授かり、柳川清彦、大上周三、市川正史、砂田佳弘、宍戸信吾、桝渕規彰、宮坂淳一、田尾誠敏、井上由美子、木村吉行、天野賢一、冨永樹之の各氏からも多くのご教示、ご協力をいただきました。また諏訪間順氏と依田亮一氏には発表の機会を与えていただき、編集を担当された田村良照氏には期限を過ぎた原稿の提出を待っていただきご迷惑をおかけしました。以上の方々には深く感謝申し上げます。

### 考古論叢 神奈河 第11集

引用・参考文献	
上石統子 1997 「小田原城及び城下における瓦の変遷-二の丸住吉堀からみた変遷の素描-」『小E	H
原市郷土文化館研究報告』33	
井上由美子 1993a「検出された遺構と遺物」『小田原城下 欄干橋町遺跡』小田原市文化財調査報告記	書
第42集	
井上由美子 1993 b 「検出された遺構と遺物」『小田原城三の丸大久保雅楽介邸跡第Ⅱ地点』小田原市∑	文
化財調查報告書第43集	
大島慎一 1990 「小田原城とその城下の出土遺物」『小田原城とその城下』小田原市教育委員会	
小田原市教育委員会 1988『小田原城三の丸・大外郭』小田原市文化財調査報告書第23集	
木村吉行・村上吉正・井関文明 2002『小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点』かながわ考古学財団	丑
調査報告141	
諏訪間 順 1993a「VI まとめ」『小田原城下 欄干橋町遺跡』小田原市文化財調査報告書第42集	
諏訪間 順 1993 b 「VII(4)箱根口跡出土の近代陶磁器と小田原VII期の設定について」『小田原城三の	カ
丸 箱根口門跡』小田原市文化財調査報告書第40集	
諏訪間 順 1993 c 「小田原城における戦国から近世初頭の陶磁器群の様相」『考古論叢 神奈河』第 2	
集	
諏訪間 順 1993 d 「VI まとめ」「『小田原城三の丸大久保雅楽介邸跡第Ⅱ地点』小田原市文化財調3	査
報告書第43集	
諏訪間 順 1995 「小田原城の考古学的調査の成果」『小田原市史』別編 城郭 小田原市	
諏訪間 順 1996 「小田原城出土の中・近世陶磁器」『貿易陶磁研究』No.16 日本貿易陶磁器研究会	
諏訪門 順 2001 「大久保雅楽介邸跡第X地点」『平成13年度遺跡調査発表会 発表要旨』小田原市場	教
育委員会	
佐々木健策 2002 「中世終末期の小田原」『かながわの中世~鎌倉から小田原~-土器様相を中心と	
てー』神奈川県考古学会 平成13年度考古学講座	
塚田順正・諏訪間 順・大島慎一 1988「小田原城及び城下における陶磁器群の変遷」『貿易陶磁研	

- 堀内秀樹 1996 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』 1
- 堀内秀樹 2001 「関東地方 (1)―江戸遺跡出土の肥前磁器―」『国内出土の肥前磁器―東日本の流 通をさぐる―』 第11回 九州近世陶磁器学会 資料」
- 山口剛志 1991 「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』27
- 山口剛志 1994 「小田原城出土のかわらけについて」『江戸在地系土器の研究』Ⅱ 江戸在地系土器 研究会
- 山口剛志 1996 「小田原城における肥前磁器」『考古学ジャーナル』No. 410 ニュー・サイエンス 社
- 矢部良明 1985 「日本磁器の創業と様式展開」『日本磁器400年』朝日新聞社
- 和田好史 1989 「熊本県人吉城隅櫓跡の輸入陶磁器について」『貿易陶磁研究』No.9

# 小田原市小船森遺跡の備蓄銭

小 池 聡

- 1. はじめに
- 2. 神奈川県内の備蓄銭
- 3. 小船森遺跡備蓄銭の様相
- 4. 緡銭について
- 5. 小船森備蓄銭とその評価
- 6. おわりに

# 1. はじめに

筆者らは、小田原市小船森地区で計画されていた土地区画整理事業に伴って平成7年夏から 平成11年度末まで小船森遺跡の現地調査を断続的に行った。小田原市の東縁部を流れる中村 川の右岸低位台地に立地するこの遺跡の調査では、B地区と呼んだ調査範囲から、12世紀か ら13世紀を中心とし、15世紀中葉までの年代を持つ居館址が検出され、相模国武士団中村氏 の居館址の一部を成していると推定された。

それらの遺構群からやや北側に離れて、ここで考察する備蓄銭<sup>(1)</sup>を埋納した土坑(B地区第65号土坑)が立地していた。この備蓄銭は構成銭貨の総枚数4,843枚で、最古銭開元通寳(初鋳年621年)・最新銭は宣徳通寳(初鋳年1433年)である。特筆すべきは、神奈川県内出土の備蓄銭で、初めて完全な状態で発掘調査により検出された資料であること、また、曲物に納められた状態が「緡」の状態を非常に良く残していたことである。

この備蓄銭については、現地調査継続途中の平成8年に、出土銭貨研究会主催の「備蓄銭とその出土状態」(出土銭貨研究会第3回研究大会)で、構成する銭貨全剥離・判読直後の概要について報告した(小池 1996)。その後同遺跡の正式報告書を平成14年3月に刊行した(小田原市教育委員会 2002)が、構成銭貨の全拓影図・各緡銭種一覧表・銭種別集計表と短文を掲載して資料提示することが紙数や時間的に限界であった。

ここでは調査報告書の追加報告的なことをさせていただくことも多いと思われるが、報告書に掲載しきれなかった2~3の所見について述べ、調査者の一人としての責務を幾らかでも全うできればと考える次第である。

# 2. 神奈川県内の備蓄銭

小船森遺跡出土の備蓄銭について考察を加える前に、神奈川県内で出土・確認された備蓄銭 の様相について概観しておきたい。神奈川県内における備蓄銭出土例記録の初現は、幕末の文

### 考古論叢 神奈河 第11集

第1表 神奈川県内出土の備蓄銭集成

No.	出土地点	出土量	容器等	最新銭	時期	備 考
1	横浜市中区蒔田町	2,241枚		宣徳通寳	6期	勝國寺付近谷戸S13出土。 緡。
2	横浜市保土ヶ谷区今井町	約100貫		宋銭	不明	民家敷地内S30出土。
3	横浜市戸塚区新横町道浄山	約20貫	壺(常滑?)	大観通寳	不明	伝屋敷跡。畑S32出土。
4	横浜市旭区上川井町	約1,800枚		宣徳通寳	6期	民家敷地内S45出土。
5	横浜市緑区小山町	8.8賃		宣徳通寳	6期	民家敷地内M17出土。
6	横浜市港区勝田町	約45貫		不明	不明	安永年間(1772~80)、崖発見。
7	横浜市鶴見区馬場町	1,967枚	瓶子(瀬戸)	宣徳通寳	6期	民家敷地内S43出土。
8	川崎市高津区明津	約8貫	古瓶	宋銭	不明	常専寺東南約55mの畑M31出土。
9	鎌倉市浄智寺	180,000枚	甕(常滑)	永楽通寶	4期	総門手前18mからS46発見。
10	鎌倉市雪ノ下岩谷堂	不明	甕	不明	不明	民家敷地内S初年出土。
11	鎌倉市敦恩寺	不明	三耳壺(常滑)	永楽通寳	4期	境内S4発見。壺は室町期。
12	鎌倉市大町第一小学校	8,636枚	甕(常滑?)	咸淳元寶	1期	土手下S5出土。
13	鎌倉市長谷寺	約9,000枚	木箱	永楽通寶	4期	布等。S37出土。
14	鎌倉市極楽寺	101枚		皇宋通寳	不明	寺付近山林M43出土。五輪塔。
15	鎌倉市腰越	12,399枚	木箱	永楽通寶	4期	道路工事中S30発見。净泉寺前方。
16	茅ヶ崎市	不明		不明	不明	江戸時代に建中通寳出土。
17	綾瀬市早川	3,498枚		宣徳通寳	6期	宝永火山灰下60cm検出。 緡。 S59出土。
18	相模原市鵜野森	約14.3貫		朝鮮通寶	5期	烟S11出土。
19	相模湖町寸沢嵐	895枚		宣徳通寶	6期	山林中S6出土。
20	厚木市上依知	530枚		朝鮮通寶	5期	緡。S50出土。
21	厚木市下荻野	13,868枚	桶	宣徳通寳	6期	萩野郷は鎌倉寛國寺領。 緡S54
22	清川村煤ヶ谷	931枚	カマス?	宣徳通寶	6期	畑S34出土。緡
23	伊勢原市沼目	約8貫	古瓶	宣徳通寶	6期	天保6年畑出土。
24	秦野市戸川	1,291枚		咸淳元寶	1期	民家敷地内S48出土。緡
25	秦野市北矢名	199枚		宣徳通寶	6期	民家敷地内T12出土。
26	平塚市北金目	11,253枚		宣徳通寳	6期	民家敷地内出土。緡
27	平塚市土屋	2,398枚		世高通寶	7期	民家敷地内T初·S36出土。
28	平塚市上吉沢	6,857枚	甕	弘治通寳	8期	畑S26出土。
29	平塚市見付山	327枚		永楽通寳	不明	松林S19出土。
30	小田原市小船森遺跡	4,843枚	曲物	宣徳通寳	6期	H7遺跡調査。中世居館跡検出。
31	大磯町国府新宿	約6,800枚		不明	不明	民家敷地内M33出土。
32	箱根町箱根神社	約1,200枚	甕?	永楽通寳	4期	伝·芦/湖畔甕中T15?発見。
33	湯河原町宮下	約2,000枚		明銭	不明	藪を開墾中S8出土。

※竹尾集成表(竹尾 1969)に鈴木集成(鈴木 1999)を加筆・改変。Mは明治、Tは大正、Sは昭和、Hは平成を表す。

献である『新編相模国風土記稿』に記載されている大住郡柿窪村(現伊勢原市沼目付近)から 天保六年に発見された古銭(表1-23、以下表1-を省略)の記事がある(中世研究プロジェ クトチーム 1994)。その後、平塚市北金目の備蓄銭(26)をまとめた日野一郎氏は、神奈 川県内の備蓄銭15例を集成(日野 1964)している。次いで飯田 孝氏は厚木市内の備蓄銭 2例(20・21)の分析を行い、併せて神奈川県内出土備蓄銭の集成(飯田 1980)を行った。 日野氏集成15例に17例が追加され、飯田氏の集成時点で出土備蓄銭は32例となる。この時点で神奈川県内でそれまでに検出されていた備蓄銭がほぼ集成されたことになる。

その後、竹尾 進氏により集成された南関東(東京都・神奈川県・埼玉県)の備蓄銭集成表 (竹尾 1996b) では、神奈川県備蓄銭を飯田氏の集成をもとに、ここで考察する小船森遺跡 (30) を加えた33例をあげている。また、鈴木公雄氏は『出土銭貨の研究』(鈴木 1999) で、全国規模で出土枚数1,000枚を越える出土備蓄銭の集成を行っており、神奈川県出土備蓄銭の うち12例 (1・7・9・12・15・17・21・24・26~28・30) をあげ分析を試みている。

さて、神奈川県内出土の備蓄銭では、最大量出土しているのが鎌倉市浄智寺備蓄銭 (9) であり約180,000枚が常滑甕から出土している。次いで、確実に構成銭枚数が確認されている備蓄銭では、厚木市下荻野備蓄銭 (21) (13,868枚)、鎌倉市腰越備蓄銭 (15) (12,399枚)、平塚市北金目備蓄銭 (26) (11,253枚) が10,000枚以上出土の備蓄銭である。

鈴木氏による出土備蓄銭の8期区分(鈴木 1992・1999a)<sup>(2)</sup>で神奈川県内出土の各備蓄銭を時期別に概観してみると以下のようになる。皇宋元寶(初鋳年1253年)・景定元寶(初鋳年1260年)・咸淳元寶(初鋳年1265年)のいずれかの年代決定銭を最新銭とする1期(13世紀第4四半世紀~14世紀第1四半世紀)備蓄銭は鎌倉市大野第一小学校備蓄銭(12)、秦野市戸川備蓄銭(24)である。

至大通寳(初鋳年1285年)を最新銭とする2期(14世紀第2四半世紀~第3四半世紀)備蓄銭と、至正通寳(初鋳年1350年)・天定通寳(初鋳年1357年)・大中通寳(初鋳年1360年)・大義通寳(初鋳年1360年)・洪武通寳(初鋳年1368年)のいずれかを最新銭とする3期(14世紀第4四半世紀~15世紀第1四半世紀)備蓄銭は、確実に銭種判読されている神奈川県内出土備蓄銭では今のところ認められない。

成元通寳(初鋳年1403年)・永楽通寳(初鋳年1408年)のいずれかを最新銭とする4期(15世紀第2四半世紀~第3四半世紀)備蓄銭は、鎌倉市浄智寺備蓄銭(9)、敦恩寺備蓄銭(11)、長谷寺備蓄銭(13)、腰越備蓄銭(15)と箱根町箱根神社備蓄銭(32)があり、鎌倉市に集中しているようである。

朝鮮通寳(初鋳年1423年)を最新銭とする5期(15世紀第4四半世紀)備蓄銭は相模原市 鵜野森備蓄銭(18)、厚木市上依知備蓄銭(20)がある。続いて宣徳通寳(初鋳年1433年) を最新銭とする6期(16世紀第1四半世紀~第2四半世紀)備蓄銭は、ここで分析を試みる 小田原市小船森遺跡備蓄銭(30)、横浜市蒔田町備蓄銭(1)、上川井町備蓄銭(4)、小山町 備蓄銭(5)、馬場町備蓄銭(7)、綾瀬市早川備蓄銭(17)、相模湖町寸沢嵐備蓄銭(19)、 厚木市下荻野備蓄銭(21)、清川村煤ケ谷備蓄銭(22)、伊勢原市沼目備蓄銭(23)、秦野市 北矢名備蓄銭(25)、平塚市北金目備蓄銭(26)の12例が認められる。神奈川県内で検出さ れた備蓄銭のうち、確実に銭種判読されている資料では16世紀第1四半世紀~第2四半世紀 の年代が与えられる6期備蓄銭が多いという傾向が、備蓄銭集成表から読みとれる。



第1図 小船森遺跡・B地区と第65号土坑の位置

大和通寳(初鋳年1443年)・延寧通寳(初鋳年1454年)・大世通寳(初鋳年1454年)・世高 通寳(初鋳年1461年)のいずれかを最新銭とする7期(16世紀第3四半世紀)備蓄銭は平塚 市土屋備蓄銭(平安閣?)(27)が鈴木氏によりあげられている。洪徳通寳(初鋳年1470年)・ 光順通寳(初鋳年1460年)・金圓世寳(初鋳年1470年)・景統通寳(初鋳年1498年)・弘治通 寳(初鋳年1503年)・洪順通寳(初鋳年1509年)・嘉靖通寳(初鋳年1527年)・大正通寳(初 鋳年1530年)・廣和通寳(初鋳年1541年)のいずれかを最新銭とする8期(16世紀第4四半 世紀)備蓄銭は、平塚市上吉沢備蓄銭(28)がある。

神奈川県出土備蓄銭で構成する最新銭から時期決定できる備蓄銭は、今のところ23例であるが、この内小船森遺跡備蓄銭を含む6期備蓄銭が約57%で過半数を占めている傾向が認められた。6期備蓄銭は、16世紀第1四半世紀~第2四半世紀の年代が与えられている。神奈川県内備蓄銭で認められたこの傾向は、鈴木氏(鈴木 1999a)や永井氏(永井 1994)等に指摘されているように、16世紀前半の中世日本国内で備蓄銭が急増するという汎日本的な傾向と一致している。

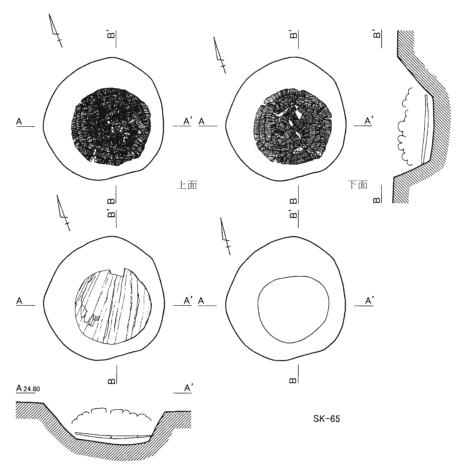
# 3. 小船森遺跡備蓄銭の様相

### (1) 遺跡の様相

備蓄銭が埋納されていたのは、B地区北側の第65号土坑である。B地区では調査範囲の南側部分を中心として区画溝・竪穴状遺構・井戸址・石敷き遺構などの中世遺構が集中して検出された。これらの各遺構は出土陶磁器から12世紀末~13世紀末と15世紀中葉ころの2時期が主体となると推定された。特に12世紀代の白磁類を組成するという陶磁器の様相から、初現は12世紀中葉ころに都市鎌倉以前に成立したと推定される武家居館址の可能性が高いと判断された。しかし、出土陶磁器類の総量が少ないことから今回の調査範囲は居館址中心域ではない(3)ように思われる。本遺跡のこのような状況は、在地有力層の存在を強く匂わせ、前述したように相模国武士団中村氏の居館址の一部であろうと考えるのは強ち無理ではないであろう。

中村氏は小船森遺跡の北側にあたる小田原市字小竹(鳥ノ久保)或いは東側の字小太郎畑に 初期居館址が推定され、応永23年(1416年)の上杉禅秀の乱で中村氏が討たれ、二宮町中村館に移ったとされている(竹見 1970)・(小田原市 1998)。調査成果からは、本遺跡が中村氏居館址の一部となると考えて良いと思われる。また、文治元年(1187年)源頼朝が義経討伐へ西行する際に中村荘で宿泊し小船と小竹間を通っていると推定され、遺構存続年代を考えると12世紀末から15世紀前半まで中村荘の一部にあたっている可能性は高いと推定されよう。そのほか五輪塔を覆土内に持つ土坑墓が15世紀以降存在し、以後近世は畑地となっていたと出土陶磁器<sup>(4)</sup>や足柄下郡小船村絵図<sup>(5)</sup>(神奈川近世史研究会 1992)から予想される。

備蓄銭の埋納されていた第65号土坑は、居館址の一部と推定された12世紀末から15世紀末 の遺構が集中して検出された地点からは、70m程北に離れている。周囲には、明確に時期決 定できない規模の小さい溝状遺構や土坑が分布する。それらの調査から判明している遺跡内容 から、備蓄銭が単独で存在していた可能性も否定はできない。



第2図 備蓄銭出土状況と第65号土坑 (S=1/40)

### (2) 土坑の形状と埋納状況

小船森遺跡の備蓄銭埋納土坑は、平面形不整な円形を呈し確認面での規模は直径約40cmを測り、坑底の規模は長径約26cm、短径約23cmを測る。土坑の壁は北側が大きく開き、断面形は逆台形を呈する。確認面からの深さは約18cmで、基本層序の第Ⅱ層である暗褐色土層で遺構確認しているが、上部に攪乱を受けた第Ⅱ層が堆積しており、備蓄銭埋納時点における土坑本来が持っていた掘り込みの深さは不明である。ただし、第Ⅱ層上部と第Ⅰ層表土層で約70cm程であり、本来それほど深い掘り込みではなかったと推定される。覆土は地山層を形成しているシルト粒子が多く混入した暗褐色土であり、土坑の掘削時に発生した土でそのまま埋めていると推定される。小船森遺跡は、多く井戸址が構築されていることを特徴として捉えられるが、中村川の右岸に発達した最低位段丘面に立地し、土坑調査時でも坑底は湿っている状況であり調査終了後には坑底に少量水が溜まるような環境である。

銭塊は土坑中央部からやや南にずれて、直径約28cmの円形に集積され、正に「蜷局」を巻

第2表 小船森遺跡備蓄銭構成銭種一覧

Na	国名	銭貨名	初鋳年	枚数	構成比	No	国名	銭貨名	初鋳年	枚数	構成比
1	唐	開元通寳	621	273	5.64	34	北宋	大観通寳	1107	46	0.95
2	唐	<b>軋元重寶</b> 当+銭	758	15	0.31	35	北宋	政和通寳	1111	151	3.12
3	唐	開元通寳紀地銭	845	8	0.17	36	北宋	宣和元寶	1119	1	0.02
4	前蜀	<b>乹徳元</b> 寶	919	1	0.02	37	北宋	宣和通寳	1119	18	0. 37
5	後漢	漢通元寶	948	1	0.02	38	南宋	建炎通寳	1127	1	0.02
6	後周	周通元寶	955	1	0.02	39	南宋	紹興元寶	1131	1	0.02
7	南唐	唐國通寶	959	6	0.12	40	南宋	淳熈元寶	1174	23	0.47
8	北宋	宋通元寳	960	20	0.41	41	南宋	紹熈元寶	1190	3	0.06
9	北宋	太平通寶	976	35	0.72	42	南宋	慶元通寳	1195	6	0.12
10	北宋	淳化元寶	990	35	0.72	43	南宋	嘉泰通寳	1201	3	0.06
11	北宋	至道元寶	995	78	1.61	44	南宋	開禧通寶	1205	3	0.06
12	北宋	咸平元寶	998	68	1.40	45	南宋	嘉定通寳	1208	13	0.27
13	北宋	景徳元寳	1004	97	2.00	46	南宋	紹定通賓	1228	6	0.12
14	北宋	祥符元寶	1009	85	1.76	47	南宋	淳祐元寳	1241	3	0.06
15	北宋	<b>祥符通</b> 寶	1009	70	1.45	48	南宋	皇宋元歐	1253	5	0.10
16	北宋	天禧通寶	1017	90	1.86	49	南宋	開慶通寳	1259	1	0.02
17	北宋	天聖元寶	1023	203	4.19	50	南宋	景定元寳	1260	3	0.06
18	北宋	明道元寶	1032	18	0.37	51	南宋	咸淳元寶	1265	4	0.08
19	北宋	景祐元寶	1034	44	0. 91	52	金	正隆元寶	1157	9	0.19
20	北宋	皇宋通寳	1038	480	9.91	53	金	大定通寳	1178	2	0.04
21	北宋	至和元寶	1054	56	1.16	54	元	至大通資	1310	3	0.06
22	北宋	至和通資	1054	19	0.39	55	天漢	天定通寳	1359	1	0.02
23	北宋	嘉祐元寳	1056	63	1.30	56	明	大中通寳	1361	2	0.04
24	北宋	嘉祐通寶	1056	86	1.78	57	明	洪武通寳	1368	210	4.34
25	北宋	治平元資	1064	83	1.71	58	明	永楽通寳	1408	653	13.48
26	北宋	治平通寶	1064	13	0.27	59	明	宣徳通寳	1433	29	0.60
27	北宋	熈寧元寶	1068	406	8.38	60	高麗	海東通寳	1097	1	0.02
28	北宋	元豊通寳	1078	476	9.83	61	朝鮮	朝鮮通寶	1423	16	0.33
29	北宋	元祐通寳	1086	367	7.58	62	日本	隆平永寶	796	2	0.04
30	北宋	紹聖元寶	1094	179	3.70		判読不能			25	0.52
31	北宋	紹聖通寳	1094	1	0.02						
32	北宋	元符通寳	1098	51	1.05			合計		4843	100.00
33	北宋	聖宋元寶	1101	171	3.53						

いた状態であった。集積された銭の高さは約 $14\sim16$ cmを測る。銭塊の取り上げ後、坑底から約5cm程浮いた状態で、杉材と推定される直径約27cm、厚さ約1cmの円形板が検出された。このことから、銭塊が直径約27cm、高さ約16cm以上の円形曲物に納められ土坑内に埋納された可能性が高いと推定される。土坑内には曲物側板と考えられる木材は残存しておらず、ジワジワと湧いてくる水の影響で曲物側板が腐敗後に曲物底板のみ残り、埋納された銭塊が曲物底径よりも約1cm程広がっていると考えられよう。その際、銭の重さで銭塊が曲物底板に沈んで

# 考古論叢 神奈河 第11集

第3表 小船森遺跡備蓄銭集計表

																						_				
銭種	看No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
開元通賓	/ 44 Jule 3 \	3	3		5	5	5	7	4	4	6	5	7	6	8	8	9	1	11	10	5	7	8	8	4	3
開元通 <u>資</u> 宋通元寳	(紀地銭)	1			_	1			1							1	2	1		_				1	1	1
太平通寶					3		1		1				2		1	3			1		4	2	3		1	
淳化元 <b>资</b> 至道元 <b>资</b>		-			1	2 1	2	1		1	$\frac{1}{1}$	6	$\frac{1}{2}$	1	1	1	-	_		$\frac{1}{3}$	1	$\frac{1}{1}$	4	2	3	3
咸平元寶		1		1	4	2	2	1					3	2	1	2	3	4	1		2	1	1		2	2
景徳元 <u>寳</u> 祥符元 <u>寳</u>		1		1	1	3	$\frac{1}{2}$	3	1	3	2	2	$\frac{1}{1}$	1	2	2	3	3	4	5	2	1	2	3	3	2
<b>祥符通寳</b>			1		1	3	2	3	1	2	3		1	1	3	3	3	1	4		1	<u> </u>	-		1	1
天禧通寳			2			2	2	1			2	2	2		2	2	1		3	3	1	1	4	1	1	1
天聖元 <u>寳</u> 明道元 <u>寳</u>		3	3	3	_1_	4	2	3	6	1	6	2	4	4	5	3	7	1		1	5	-	3	2	2	2
景祐元贇		1		1	1	1		1	1	1	1	2		1			1		1		2		1		1	1
皇宋通寶		4	4	4	5	5	9	14	13 3	14	11 2	9	12 4	10	8	12	11 2	8	6	10	11	3	11	16	7	9
至和元寶 至和通寶				1	-	-	1	1	1	1	1	1	4		2			2		<u> </u>	1	1		1	ī	
嘉祐元寶					4	1	2	1		1	3	1	1		3	1			1		3	1	1	1	3	3
嘉祐通寶 治平元寶	*			3		6	2	3	$\frac{1}{1}$	4	3		1	1	1	3	2	2	1	1	4	2	1	3	2	2
治平通寶											1							1			1				2	
熈寧元寶 元豊通寶		2	8	5	3 5	<u>8</u> 7	14 14	_ <u>5</u>	8 14	13	5 10	12	8	11 4	12 8	5 10	7	13 7	7	8 16	10 8	5 14	8 10	9	7 13	7
元祐通寳		3	3	3	8	11	5	4	7	7	5	5	5	2	10	14	8	7	3	8	4	9	10	1	Ī	10
紹聖元寳		3	2	2	1	2	5	2	3	4	5	7	4	2	6	_1_	3	6	1	5	7		3	4	2	2
紹聖通寶 元符通寶					1		1	1	-	2	1	2	2	-			-	-	-	$\vdash$	2		1	2		$\neg$
聖宋元寶		2		2	2		ī	4	4	6	Î	5	3	5	6	5	2	4	1	2	4	4	5	3	3	2
崇寧通寶 大観通寶			-		_		2		2	1	2	1	1		-	-		1	1	-		2	1	1	ī	1
政和通寳		1	2			1		6	2	2	3	1	3	6	1	4		4	î	1	2	1	5	4	4	î
宣和元寶宣和通寶		_			1						1	-	1		1					_	2				1	5
清寧通寶		_			1						-	-			1		-				-			_	1	J
咸雍通寶																										
大康元寶 大康通寶				_								_		_				-	-							$\dashv$
大安元寶 壽昌元寶																										
群昌元 <u>資</u> 軋統元 <u>資</u>								_		L										L						-
天慶元孺		-																								
建炎通寶																										
紹興元 <u>資</u> 紹興通資		_										-														-
淳熈元寶				1	1_	1				1				1						1	1				1	
紹熙元寶 慶元通寶						1.		1			1			-		1	_		_	1	ļ				_	
嘉泰通寶		1						1			1		_			1										
開禧通寶					1			1													ļ.,				1	
<u>嘉定通寳</u> 大宋元寳		<u> </u>			1		-	1		_											1				<u> </u>	
紹定通賓							1																1			1
端平元 <u>寶</u> 嘉熈通寶		-			-				L								-		<u> </u>	<u> </u>	_		-			
淳祐元寳																	1									
皇宋元寶 開慶通寶				L	<u> </u>	1	<del> </del>	<u> </u>	<u> </u>	-	-	1	-		-	ļ	-			<del> </del>		-	_	-		
景定元額									1				1													
咸淳元 <u>豫</u> 大中通 <u>資</u>					_1_	ļ	<u> </u>		_	-	1					-		ļ		_		<u> </u>		-		1
洪武通寶		1	1	3		2	2	5	1	8	3		3	3	4	3	3	7	3	1	4	7	1	4	3	6
水渠通賃		1	3	4	10	11	12	15	13	12	9	10	16	14	8	7	16	16	7	9	8	23	11	7	17	12
宣德通寶弘治通寶		1	1		2	1	-	2	1	-		<del> </del>	-	1			<del></del>	-				2	-	-	$\vdash$	2
嘉靖通寳										_	<b>.</b>															
朝鮮通貨 唐國通寶		-	-	-		1	2	1		1	1		-		_		1	-		1		-	-		2	
<b>乹徳元贇</b>								Ė												1						
漢 <u>通元寶</u> 至大通寶			-	-			<u> </u>	-	1		1	<u> </u>	-	-	-		<u> </u>		-	1	-	-	-	<u> </u>	$\vdash$	-
乹元重寶	(当十銭)								1						1					1			1			1
天定通寳																	1									
大定通 <u>資</u> 正隆元寶				-	-				-	1	<del> </del>		-	-	-		1	-	2	-				-	Н	
隆平永寶										Ė															1	
<u>海東通寳</u> 周通元寳			-		-		-	-	-		-		-				-		-	$\vdash$	-		-	_		
不明			1		3	3	1		1			2		1	1	1	1	3						E-	1	
合計		32	37	36	66	97	97	97	97	97	95	88	97			97		97	61	97	97	97	97	91		96

# 小田原市小船森遺跡の備蓄銭(小池)

26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	銭種別計
5	7	4	6	7	5	4	1	3	5	6	3	7	3	3	3	5	3	5	9	4	3	4	6	6	1	1	6	273 8
			1		1	1	1	1		_	-	1	1		1	1	1	1		1	1 2			2	2	1	2	273 8 20 35 35 78 68 97 85 70 90 203
1	2	2	1 4	1	3		2	1	2	2	2	2	2	1 2	1	2	1		1	1	1 2	1 2		2	3	1	2	35
2	1	2	1			2	1	4	3		1	3	1		2					2	-	4	1	1	1		2	68
2	3	2 2	2	1	2	2	3	3	3	1	5	2	1	2 2	6	1	3	1	3	2	2	2 3	2	3	2 2	2	3	97 85
1	1 2	2	1	1 2	2 3	1 5	1	4	3	3	2	2	2	1	1 2	1	2	2	1		1	3	3	2	4	1 2	2	70 90
2 1	6	8	3	4	3	5	5 1	5 2	1	2	5	3	6	14	4	2	2	6	3	5	7	1	1	5	4	5	6	203
1 9	12	9	8	9	1 5	1	7	1 11	0	9	8	10	7	8		1 2 13	10	1 11	6	9	9	7	11	1 6	7	1 10	8	18 44 480
1	2	3	1	1	1	2	- '	1	8			1	1	2	12	I	1	1	0	1	1	1	11	1	Ľ	3	0	56
	1	2			2	1	2	1	1	2			1 2	1	1	1 2	1	2	1	2	4			1	1	1	1	56 19 63 86 83 13 406
3	4	3	2	1	1 2	2	4	2	_2	3	2 4	$\frac{1}{2}$	1	1	1	-	2	1	3	3	2	2	1	1 4	1	3	4	86 83
9	8	10	15	4	6	6	4		10	1	9	7	12	10	8	7	2 2 7	7	1 8	8	11	8	9	4	6	8	9	13
15	3 5	7	7	10	8	12	11	5 7	12	9	5	6	11	7	10	7	9	10	12 5	11	13	9	15	8	11	9	5 7	476
10 2	2	13 3	8	9 5	13	8	7 5	3	3	1	8	6 3	11 5 2	5	7 5	3	13 4	6 4	3	7 6	13 5 3	3	6 3	5	14	12 1	4	367 179
1		1	4		4	1	2	1				2	1	1		2	2	3	1	2		1		4	1	1	2	1 51
1	4	3	1	5	4	2	4	3	3	3	3	3	5	5_	2	1	4	4	6	3	6	3	3	2	2	3	7	171
1 5	3	1	2	3	1 5	2	5	1	2	3	3	3	3	8	1 3	1	1	2	4	1 5	5	9	3	2	5	2	1	. 46 151
			_			-								- 0	J		_	_	1	Ů	_	1	1	_		2		
1					1																	1	1					0
																					_							0
				_				_	_																			0
																	_											0
															,													0
								1							1													1
			1	3		1		_			2	1			1	1	1			2				1		1		23
1						1									_	-			2				_				$\vdash$	<u>3</u>
1			_								1					1										_		3
î		2	1		1									1						1		1	1					13
	1																	1									1	6
								_											_									0
1	1						1			1														1				3 5
				1		1																						1 3
								1													1						1	1 18 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 23 3 3 6 6 3 3 3 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
5	6	4	4	3	2 11	4	7	3	8	4	4	4	4	12	4	10	4	3 17	7	2 13	5	5 14	4 17	11	3	7 8	4 16	210 653
9	16 1	11	13	15 2	2	14	15	22	23	14	18	15	10	3	12	18	10	1	14	13	1	14	11	6	1		10	29
																												0
1			1	1									2	1					1	1		1		1		1	1	16
														_														1
			1		1	1							1	1	1		2	1	2									3
			1	Ļ	1	-							1	1			٢	1	-									1
				_1					1				1			1		ĺ						2				9
			1										1															0 0 16 6 1 1 3 15 1 2 9 2
			1	1		1				1							1		1							-		1 25
97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	89	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	25 4843

いることが、曲物底板に残る緡銭の顕著な圧痕から推定される。

なお、詳細は後節で述べるが、銭塊を構成する銭は曲物の径に沿うように曲がってはいるものの本来棒状を呈していたと考えられ、所謂「緡銭」の状態で曲物に入れられていた。緡銭の遺存状況は非常に良好であり、緡銭を綴った縄が部分的に遺存していた。適度の水分により有機質が残りやすい環境であったが、その他のものは土坑内にないことから、直に曲物に銭を納めていると考えても良いと思われる。

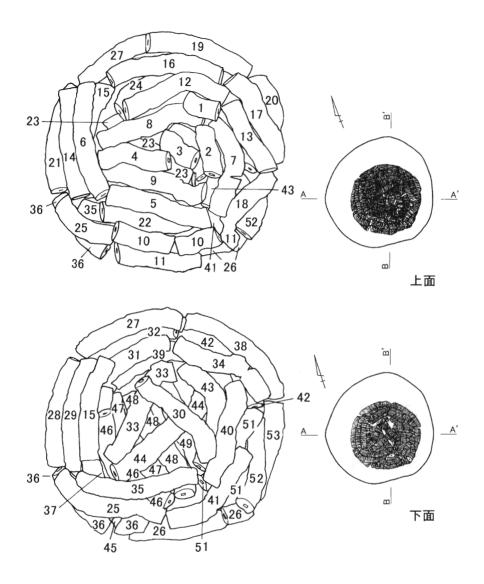
小船森遺跡備蓄銭は杉材の曲物に入れられ土坑内に埋設された備蓄銭であるが、特筆すべき点は前述したように緡銭の状態を良く残していることである。詳細は後述するが、緡銭を集積して曲物に納めており、銭塊の型取り後に上面から緡番号を付して分離した。緡の総数は53緡である。上面を構成する緡の内、緡 $No.1 \sim 4$ は明らかに攪乱を受け原位置と本来の長さを保っていないと判断された。

### (3) 備蓄銭を構成する銭の様相

小船森遺跡における備蓄銭調査方法は、銭塊上面の図化・写真撮影を行い、土坑内出土状況の型取りを行った後に緡銭の単位ごとに緡番号を付けて銭塊から分離した。基本的にすべての銭を剥離して判読する事を目的としたため、時計回りを原則として各緡の始まりを決め、緡内での銭に番号を付した。各緡銭の剥離に際しては錆を銭銘が判読できる程度に落とした後、表裏(面・背)、銭銘を記録・集計(6)した。

小船森遺跡備蓄銭の構成枚数は4,843枚で、構成銭種は62種である。平成8年の出土銭貨研究会発表で判読した第1回目判読時は宣和通寳折二銭が判読違いであり、63種としていた。総枚数は変化ない。なお、報告書整理作業で再判読した結果、不明銭が33枚から25枚(0.25%)に減った(7)。

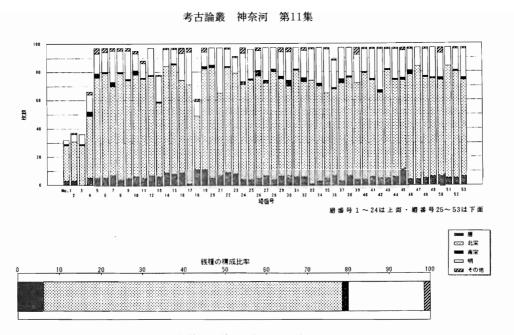
最古銭は唐銭の開元通寳(初鋳年621年)で最新銭は明銭の宣徳通寳(初鋳年1433年)である。宣徳通寳を最新銭とする備蓄銭は、鈴木編年(鈴木 1992・1999a) 8 期区分の 6 期に比定できるものであり、埋設時期の推定実年代では15世紀第4四半世紀から16世紀第1四半世紀中心が想定される。銭種構成では、最多銭は永楽通寳(初鋳年1408年)が653枚(13.48%)で10位までは、皇宋通寳(初鋳年1038年)480枚(9.91%)、元豊通寳(初鋳年1078年)476枚(9.83%)、熈寧元寳(初鋳年1068年)406枚(8.38%)、元祐通寳(初鋳年1086年)367枚(7.58%)、開元通寳(初鋳年621年)273枚(5.64%)、洪武通寳(初鋳年1368年)210枚(4.34%)、天聖元寳(初鋳年1023年)203枚(4.19%)、紹聖元寳(初鋳年1094年)179枚(3.70%)、聖宋元寳(初鋳年1101年)171枚(3.53%)である。以下20位までは政和通寳(初鋳年1111年)151枚(3.12%)、景徳元寳(初鋳年1004年)97枚(2.00%)、天禧通寳(初鋳年1017年)90枚(1.86%)、嘉祐通寳(初鋳年1056年)86枚(1.78%)、祥符元寳(初鋳年1009年)85枚(1.76%)、治平元寳(初鋳年1064年)83枚(1.71%)、至道元寳(初鋳年995年)78枚(1.61%)、祥符通寳(初鋳年1009年)70枚(1.45%)、咸平元寳(初鋳年998年)



第3図 上・下面での緡銭の状況

年)68枚 (1.40%)、嘉祐元寳 (初鋳年1056年) 63枚 (1.30%) となる。構成銭種20位までの組成は、6 期備蓄銭の典型的銭組成を示している。

構成銭種の国別銭種組成(第4図)では、北宋銭3510枚(72.48%)、明銭894枚(18.46%)、 唐銭296枚(6.11%)、南宋銭が75枚(1.54%)となる。次いで朝鮮・金・元・南唐の渡来銭<sup>(8)</sup>、 本朝銭の隆平永寳を複数枚組成している。構成銭種上位20位の組成と同様に、6期備蓄銭国 別銭種組成の典型的組成を示している。



第4図 緡銭別の銭国別構成(小池 1996より)

第4表 緡銭別の構成枚数と重量

緡番号	構成枚数	重量 (g)	緡番号	構成枚数	重量 (g)	緡番号	構成枚数	重量 (g)
1	32	110	19	97	333	37	97	334
2	37	130	20	97	330	38	97	329
3	36	125	21	97	342	39	97	336
4	66	222	22	97	335	40	97	333
5	97	337	23	91	262	41	97	339
6	97	341	24	97	341	42	97	336
7	97	331	25	96	334	43	97	339
8	97	342	26	97	337	44	97	338
9	97	342	27	97	339	45	97	327
10	95	325	28	97	336	46	97	340
11	88	300	29	97	329	47	97	345
12	97	343	30	97	335	48	97	332
13	78	272	31	97	343	49	97	333
14	97	333	32	97	330	50	97	337
15	97	332	33	97	345	51	97	340
16	97	337	34	97	334	52	97	342
17	97	340	35	97	345	53	97	326
18	61	217	36	89	308	合計	4,843	16,743

# 4. 緡銭について

# (1) 緡銭の構成

検出状況と銭塊分離作業で観察されたことであるが、銭は長さ約14~16㎝程度で銭が棒状

の「緡」を呈しており緡間にはほぼ一定の間隔が認められた。銭塊分離作業を行った結果、53本の緡銭であることが確認された。確認された各緡銭の銭構成枚数は以下のようになる。銭32枚1緡(緡番号1)、銭36枚1緡(緡番号3)、銭37枚1緡(緡番号2)、銭61枚1緡(緡番号18)、銭66枚1緡(緡番号4)、銭78枚1緡(緡番号13)、銭88枚1緡(緡番号11)、銭89枚1緡(緡番号36)、銭91枚1緡(緡番号23)、銭95枚1緡(緡番号10)、銭96枚1緡(緡番号25)、銭97枚42緡(緡番号5~9・12・14~17・19~22・24・26~36・37~53)となり、構成枚数の最少が32枚で最多が97枚である。緡銭53本中の42緡に銭97枚緡が認められ、緡全体の79.2%が銭97枚緡である。ここで留意しておきたいのは、小船森遺跡備蓄銭では、緡銭を構成する銭の枚数が決して銭97枚を越えていないということである。

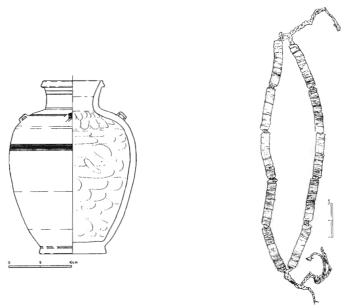
小船森遺跡備蓄銭では、銭塊の分離・取り上げの都合から緡番号1~24を上面、緡番号25~53を下面としている(第3図)が、上面・下面で比較すると、銭の枚数が極端に少ない緡番号1~3・4を含む銭97枚未満の緡は上面に偏っていること、銭97枚緡が下面の緡29緡中の27緡で93.1%を占めている。このことは、小船森遺跡備蓄銭を構成する緡銭に銭97枚を1緡とする意識が働いた結果であると言えよう。

緡銭ごとの構成銭種一覧を第3表に示した。備蓄銭全体での最多銭種であった明銭永楽通寳はどの緡銭にもほぼ均一に入っているのが認められ、構成点数上位10位までの北宋銭主体の各銭種にも同様の傾向が認められる。この傾向は第4図に示した緡銭ごとの国別銭種比率で表現したグラフで一層顕著に理解される。各緡銭間では明銭と北宋銭の比率差にばらつきが認められるが、第3表を参照して構成点数上位20位までの北宋銭を考えたとき、緡銭間での明銭と北宋銭の比率差の動きは20位までの北宋銭を多く含む緡銭に認められると理解される。各緡銭で認められた銭種比率と国別比率は銭総体での比率とほぼ一致しており、特に一定銭種を選んでいる緡銭は認められず、小船森遺跡備蓄銭を構成する緡銭の形成には銭種選別の意図は働いていないと見なしても良いと判断される。緡銭を造るとき、銭は銭種ごとに纏められてはいないということである。

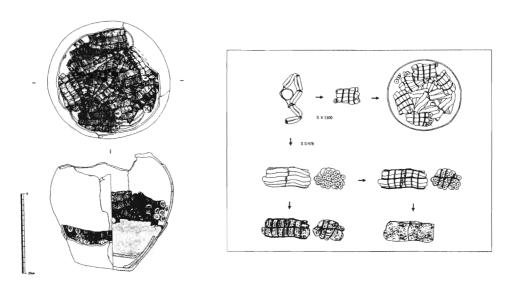
また、緡銭の各構成銭剥離の際に表裏面(面・背)の配列と銭種の配列をすべて記録しているが、銭種の配列には意識を伴うと判断されるような配列は認められず、緡銭に対して特定の一定銭種を選んでいるような意識が働いていないのと同様であると考えられるが、表裏面の配列は7枚から最大10枚程度の同一面の連続が認められ、大阪府吉野遺跡出土備蓄銭の緡分析にあたり辻本氏によって行われた実験(辻本 1996)成果からも述べられているように、7~10枚程度に束ねる行為が存在した可能性があろう。なお、各緡銭内で7~10枚ごとの表裏の連続配列がすべて認められる訳ではないので、緡銭を作る際には、辻本氏が述べているような個人差の範囲を超えるような一定の取り決めや約束事は存在していないと言ってもよいであろう。

小船森遺跡備蓄銭は、確認された53本の緡銭中に97枚緡が7割を越える42本含まれていた。

# 考古論叢 神奈河 第11集



山梨県長坂町小和田館跡備蓄銭容器と一貫緡



広島県福山市草戸千軒町遺跡S×3300の容器、5×3300:SD978緡銭復元

第5図 他遺跡の緡銭の出土状況(櫻井 1996)(福島 1996)を引用・改変

また、97枚を越える緡銭を含んでいない。このことは、小船森遺跡備蓄銭は銭100枚で百文とする「丁百法」による緡銭ではなく、銭97枚で百文とする「省陌法」による緡銭であったと推定される。

### (2) 緡銭の重量

一緡の緡銭はどの程度の重量であろう。報告書刊行を目的とした整理では、本来行わなければならない各銭の計測を行う時間面と費用面ともに余裕が存在しなかった。そのため、完全ではないがある程度の錆落とし後に緡銭単位ごとに重量を計測した。その結果得られた計測数値を示したのが第4表に示した重量である。

緡銭53本の総重量は16,743gで、緡1本の最少重量は110g、最大重量は345gである。確認された53本の緡銭には、緡番号1~4・10・11・18・23・25・36の緡のように1緡97枚よりも少ない枚数の緡が含まれている。前述した1緡97枚以下の構成枚数が少ない緡銭を除いた42本の緡銭の総重量は14,138gで、緡1本の最少重量は327g、最大重量は345gを計り、平均重量は336.6gである。緡番号10は95枚緡で重量は325g、緡番号25は96枚緡で重量は334gである。緡番号10は97枚緡より2枚銭が少なく、緡番号25は97枚緡より1枚銭が少ない緡銭であるが、ほぼ97枚緡と近い重量値を示している。95枚緡・96枚緡を加えた44緡の平均重量は336.3gで、97枚から1~2枚少ない程度では重量に大差はない。

省陌法による緡銭により構成されていると考えられる小船森遺跡備蓄銭内に、97枚緡と極めて重量の近い95枚緡と96枚緡が少量混入していることは、想像を逞しくすれば緡銭制作時の「数え違い」よるところが原因ではないか。後節で触れるが、緡銭が「結」と呼ばれる状態で流通しているのであれば、現在の我々が銀行帯封のある紙幣束を信用で数え直さないように、銭一枚を数えることなく用いることは、まして各銭の厚さが均一ではないのだから大凡の目方が近いのであれば、充分にあり得ることではないか。

#### (3) 緡銭ということ

小船森遺跡備蓄銭は、少量の備蓄銭ではあったが、省陌法による一緡97枚の緡銭状態を非常に良く残している備蓄銭として理解された。ここでは、そのほかの遺跡出土例を検討しながら、緡銭について考えてみたい。

日本国内規模で見たとき、緡銭のもっとも良好な遺存状態を残していた出土例は、山梨県巨摩郡長坂町の小和田館跡D地区第3地点出土銭、広島県福山市草戸千軒遺跡第29次調査SD978溝出土銭塊・第35次調査SX3300銭甕出土銭、長野県中野市西条・岩船遺跡群出土銭などがあげられよう。これらの内、中世貨幣流通の一形態を良く残していると考えられる小和田館跡D地区第3地点出土銭と広島県福山市草戸千軒遺跡第29次調査SD978溝出土銭塊・第35次調査SX3300銭甕出土銭を第5図に示してみた。

中世居館址と推定される小和田館跡出土銭は、古瀬戸灰釉四耳壺内に約3,000枚を入れていると考えている備蓄銭である。特筆すべき点は藁紐で束ねられた970枚の緡銭が検出された資料である。97枚緡が10本綴られた1「結」であり、5「連」単位で紐を通しており、5「連」の両端を結んで「結」としている。また、「連」と「連」間は紐に結び目を造り区切っている。確認された銭貨には永楽通寳(初鋳年1408年)以降の銭貨は認められていないことと、壺の

型式から15世紀初頭前後の年代が想定されており、3期備蓄銭の可能性がある。

小船森遺跡備蓄銭で緡と緡の間に認められた空間は、小和田例等に見られる緡の間に造られ た区切りであると推定されよう。

草戸千軒遺跡は13世紀から16世紀初頭に発達した中世集落遺跡であるが、瀬戸内交通と交易の拠点的な立地の湊及び市場となる遺跡である。第29次調査SD978溝出土銭塊は約5,000枚の銭塊である。分離されていないので詳細は明確ではないが、24緡と26緡の50緡からなり、1緡97枚緡が最も多いと観察された。5貫文を1緡ごとに折り曲げて小口を揃え菰などで包まれ、網状の藁紐で縛られているという。なお、このような梱包方法は近世では「俵緡」と呼ばれる方法であるという。

同遺跡の第35次調査S X 3300銭甕出土銭は、小和田遺跡例のような1貫文緡が折り曲げられて藁縄で3箇所縛られた状態にして、甕に入れたものである。前述した状態の緡銭は130緡であり、銭貨の総量は12,591枚である。1緡の構成銭貨枚数は、最少83枚から最大107枚まで認められ、97枚緡が最も多く含まれていたという。

また、確認された130緡は10緡を最多とする19の塊に分けられ、前述した10緡と更にバラにされた緡が入れられていたと推定されている。なお、最新銭は淳祐元寶(初鋳年1241年)であるが、1期備蓄銭であろうと推定され、13世紀第4四半世紀から14世紀第1四半世紀の年代が想定されよう。

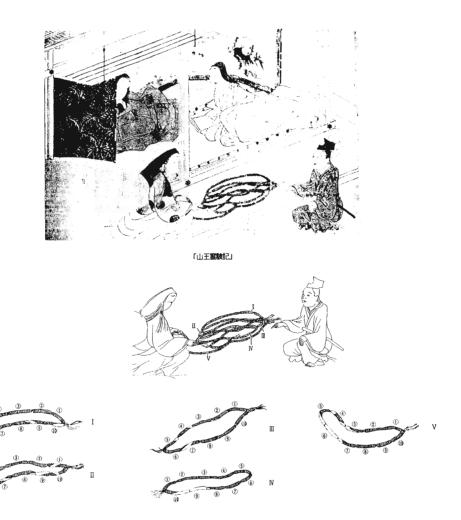
小船森備蓄銭には第35次調査S X 3300銭甕出土銭のような状態は認められないが、第29次調査S D 978溝出土銭塊からバラされている可能性はあろう。

本遺跡備蓄銭同様に、小和田遺跡・草戸千軒遺跡でも1緡の銭は97枚緡が多いことが確認されており、97枚緡で100文とする省陌法による緡銭が多いことを裏付けている。

# 5. 小船森備蓄銭とその評価

小船森遺跡出土の備蓄銭は、神奈川県内出土では初めての発掘調査により発見された備蓄銭であるとともに緡銭の良好な状態を残したものであった。小船森遺跡は12世紀後半から15世紀後半まで相模国武士団である中村氏の中心的拠点の一部として機能していた遺跡であり、神奈川県中世史を考察するとき、重要な一要素を提供している遺跡となるであろう。しかし、今回分析した小船森遺跡備蓄銭が埋められたと推定される年代ころは、その中心的場所から外れた位置にあったと推定される。後北条氏が台頭し小田原が重要な位置にくると考えられる備蓄銭推定年代ころは、永楽2年(1559年)の『小田原衆所領役帳』には、遺跡名とした「小船」または「森」の地名の記載はないが、中村郷として「下中村上町」若しくは「下中村惣領分」に含まれていた可能性が高い。そのような環境下に地中に埋められた備蓄銭であろう。

小船森遺跡備蓄銭そのものに目を転じてみると、この備蓄銭は曲物に納められた4,843枚の



第6図 『山王霊験記』の緡銭 (渡 1996) を引用・改変

銭であり、最新銭は初鋳年1433年の宣徳通寳である。従って鈴木編年6期の備蓄銭と考えられ、16世紀第1四半世紀〜第2四半世紀頃の年代が想定される。神奈川県内検出備蓄銭では、この6期に備蓄銭が増加する。この傾向は全国的にも認められる事象であり、中世末にこのような行為が増加するということの歴史的解明も重要な課題である。

小船森備蓄銭は、省陌法による銭97枚の緡銭で構成されていたと考えられる。構成枚数4,843枚を緡銭構成枚数97枚で割ると約49.93となり、大凡50緡が存在していたと考えてよいであろう。緡銭10緡を一貫文とするから、5貫文の備蓄銭であったことになる。

中世文献資料から緡銭を考察している渡氏によれば、100文相当の銭貨を紐で束ねた状態の 緡銭が「連」であり、10連の緡銭を「結」と表現していると指摘している。小和田館跡D地 区第3地点出土銭の970枚の緡銭は紐で環状に結ばれた「結」状態そのものであり、広島県福

#### 考古論叢 神奈河 第11集

山市草戸千軒遺跡第29次調査SD978溝出土銭塊と第35次調査SX3300銭甕出土銭は持ち運ぶ際、即ち流通する「結」の状態を示している。また、同氏は、室町時代に描かれたとされる絵画『山王霊験記』(第6図) に見られる5貫文即ち5「結」状態が当時流通している単位であろう(渡 1996b)とされており、このような例から、小船森遺跡備蓄銭は該期に流通している緡銭の単位である5「結」そのものを埋めた備蓄銭であると言えよう。

また、銭塊分離の際に認められた「連」の連続性は最大で5つの「連」までであった。小和田館跡遺跡の緡銭や『山王霊験記』中のⅢに認められるように、5本「連」の両端を繋いでいる「結」が存在しており、小船森遺跡備蓄銭は「結」を2分割して曲物に入れている可能性が高いと考えている。

### 6. おわりに

私事ではあるが、遺跡の調査に携わって四半世紀25年が過ぎようとしている。その間、実際に遺跡を掘っているとき、通りすがりの人或いは地主さんから必ず投げかけられた二言がある。「何か良いものが出ますか?」と「小判でも出ますか?」である。決まって返事は「良いものは出ますが、小判は、まあちょっと・・・」であるが、確かに一般的には、「掘る」、「出る」、「小判」、「ザクザク」の構図は理解しやすいものであるし血湧き肉踊るから、ポチは裏山を掘り、糸井重里も「埋蔵金」を掘るのである。しかしながら、現実にここで考察を加えた遺跡出土の「お金」は鈍青く光るものの、燦然とは輝かないものである。

閑話はここまでとして、しかしそれらを考古資料として充分輝かせることが果たしてできたか、調査報告追加の感が否めない乱文を綴ってきた筆者の力量では甚だ疑問であり、また課題も山積している。更に小船森遺跡備蓄銭や遺跡出土銭を見つめ続けていきたいと思う。

小船森遺跡備蓄銭整理と本論功を奏するにあたり、鈴木公雄、永井久美男、服部実喜、竹尾進、生田周治、堀内秀樹、島谷和彦の各氏から多大なご指導を頂いた。挿図作成・校正にあたり水野敦子、伊集院加枝、小野笑美の各氏の手を煩わせた。何よりも、筆の遅い筆者の原稿があがるのを辛抱強く待っていただいた田村良照氏と有限会社湘南グッド担当者の諸氏に文末ではあるが感謝を申し上げ筆を置きたい。

#### 註

- 1. 筆者は、中世において地中に大量に埋められた銭貨を、呪術または祭祀などの目的だけで埋納されたとは考えていない。「備蓄」という用語は行為・目的を限定するとの指摘(橋口 1990ほか)もあるが、本論功では備蓄銭と表現する。
- 2. 備蓄銭の時期区分は、鈴木編年(鈴木 1992・1999a) 8 期区分がある。そのほか、永井編年(永井 1996) 8 期区分があり、構成最新銭でずれが認められ実年代にも差が認められる。本論功では備蓄 銭の時期区分を論じることを目的としないので、神奈川県出土資料を集成し時期区分を行っている鈴

#### 小田原市小船森遺跡の備蓄銭 (小池)

木氏の時期区分とそこで提示されている推定実年代を用いておく。

- 3. 中世陶磁器の年代観・遺跡の評価については、服部実喜氏のご教授によるところが大きい。
- 4. 小船森遺跡の近世陶磁器を分析した堀内秀樹氏によれば、出土陶磁器は耕作によると推定される摩滅を受けている。
- 5. 宝永6年(1709)の富士山宝永噴火(1703年)後、幕府役人復旧状態視察の案内図で、該当すると推定される地点は畑と表現されてている。
- 6. 銭枚数の集計は、平成8年の出土銭貨研究会発表時は手計算であったが、報告書刊行の整理作業で再 判読した際は、Microsoft Excelで集計している。銭銘の誤読は認められたが、総枚数・各銭種の集 計ミスは認められなかった。
- 7. 永井久美男氏の指導によるところが大きい。
- 8. 本銭と模鋳銭の判別を行っていない。従って渡来模鋳銭・本朝模鋳銭も分別していない。また、同一 銭種の構成等の検討も今後の課題としたい。

#### 引用・参考文献

飯田 孝 1980 『厚木の埋蔵古銭』厚木市史資料叢書1 厚木市役所

小田原市 1998 『小田原市史』通史編 原始 古代 中世

尾上 実 1996 「畿内における銭緡について」 『備蓄銭とその出土状態 - 緡銭の復元・備蓄銭の 歴史背景 - 』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土銭貨研究会

神奈川近世史研究会 1992 『古絵図でみる風景 江戸時代の神奈川』 有隣堂

栗原文蔵 1992 「埋められた銭」 『季刊 考古学 特集 中世を考古学する』39 有山閣

小池 聡 1996 「神奈川県小田原市小船森地区内遺跡」 『備蓄銭とその出土状態-緡銭の復元・ 備蓄銭の歴史背景-』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土銭貨研究会

小池 聡ほか 2002 『小船森遺跡』 小田原市文化財調査報告書第102集 小田原市教育委員会

小宮山 隆 1996 「小和田館跡出土銭」 『出土銭貨』 第5号 出土銭貨研究会

櫻井晋一 1996 「福岡県における緡銭の出土状況」 『出土銭貨』 第5号 出土銭貨研究会

鈴木公雄 1992 「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」 『史学』第61巻3・4号 三田史学会

1999a『出土銭貨の研究』 東京大学出版会

1999b「備蓄銭の容器について」 『出土銭貨』 第12号 出土銭貨研究会

竹尾 進 1996a「東京都内の緡について」 『出土銭貨』 第5号 出土銭貨研究会

1996b「南関東における諸問題」 『備蓄銭とその出土状態-緡銭の復元・備蓄銭の歴史 背景-』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土銭貨研究会

1999 「大量出土銭とその容器-関東地方-」 『出土銭貨』 第12号 出土銭貨研究会

2002 「出土銭貨研究の地域的現状 関東地方」 『季刊 考古学 特集 出土銭貨研究 の最前線』 第78号 有山閣

竹田和夫 1996 「文献史学・民俗学から見た緡銭についての問題」 『備蓄銭とその出土状態-緡 銭の復元・備蓄銭の歴史背景-』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土 銭貨研究会

竹見龍雄 1970 『中村郷』 ハヤシ印刷

田中浩司 1996 「中世の収支帳簿から緡銭を考える一つの試み」 『備蓄銭とその出土状態 - 緡銭 の復元・備蓄銭の歴史背景 - 』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土銭 貨研究会

中世研究プロジェクト 1994 「神奈川県下出土の中世銭貨について」 『神奈川の考古学の諸問題』

#### 考古論叢 神奈河 第11集

かながわの考古学第4集 神奈川県立埋蔵文化財センター

辻本 武 1996 「吉野遺跡出土埋蔵銭の緡」 『出土銭貨』 第5号 出土銭貨研究会

永井久美男 1997 「備蓄銭の新資料」 『出土銭貨』 第8号 出土銭貨研究会

永井久美男編 1994 『中世の出土銭-出土銭の調査と分類-』 兵庫埋蔵銭調査会

1996 『中世の出土銭 補遺Ⅰ』 兵庫埋蔵銭調査会

橋口定志 1990 「〔研究メモ〕 『備蓄銭』の周辺」 『貝塚』44 物質文化研究会

2002 「出土銭貨研究の課題と展望 中世大量出土銭貨の性格」 『季刊 考古学 特集 出土銭貨研究の最前線』 第78号 有山閣

福島政文 1996 「草戸千軒遺跡に見る銭緡」 『備蓄銭とその出土状態 - 緡銭の復元・備蓄銭の歴 史背景 - 』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土銭貨研究会

渡 正和 1996a「中世文献資料における「緡銭」の表現について」 『出土銭貨』 第5号 出土 銭貨研究会

> 1996b「絵画に見える緡銭表現」 『備蓄銭とその出土状態-緡銭の復元・備蓄銭の歴史 背景-』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土銭貨研究会

峰岸純夫 2002 「出土銭貨の背景 中世史研究と埋蔵銭」 『季刊 考古学 特集 出土銭貨研究 の最前線』 第78号 有山閣

## 原稿の募集!!

『考古論叢 神奈河』は、みなさまで育てる会誌です。

考古学界に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが、身近かにある資料の 紹介や、研究ノートも気楽に投稿してください。

第12集の締切は、平成15年12月末日を予定しております。ふるっての寄稿 をお待ちしております。

### 平成12年度神奈川県考古学会 考古学講座

# 「相模野旧石器編年の到達点」コメント集



### 考古論叢 神奈河 第11集

### 平成12年度神奈川県考古学会 考古学講座

### 「相模野旧石器編年の到達点」コメント集

### 目次

考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」コメント集の刊行について		(147)
考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」の概要	諏訪間順	(148)
相模野旧石器編年の前提	諏訪間順	(151)
相模野旧石器編年の到達点と新地平(予察)	小池 聡	(160)
茂呂系ナイフ形石器の系譜と切出系ナイフ形石器	鈴木次郎	(164)
先土器時代文化2003相模野平成篇	織笠 昭	(168)
相模野細石器研究のこれから	砂田佳弘	(175)
相模野台地における旧石器時代の成果と課題	白石浩之	(178)
時間軸としての編年の可能性	御堂島正	(184)
相模野旧石器編年研究の到達点と未到達点	伊藤 健	(188)
相模野旧石器編年における王子ノ台遺跡出土石器群の不可視性	五十嵐彰	(191)
相模野旧石器編年と層位	栗原伸好	(195)
地域研究と時間軸	仲田大人	(197)

### 考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」コメント集の刊行について

2001年3月11日に神奈川県民センターにおいて神奈川県考古学会主催の考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」が開催されました。当日は150名を越える多数のご参加をいただきましてありがとうございました。

本講座は神奈川県考古学会の中で、白石浩之、織笠昭、小池聡、諏訪間順の四名が役員であったこともあり、旧石器に関することで講座を持つことが企画され、相模野台地の石器群の編年研究の到達点についてシンポジウムを開くこととなったものです。

本編は、当日の発表者やコメントしていた方々にシンポジウム開催後の考えを新たに執筆していただいたものです。コメント集には実に様々な問題点が提示されています。こうした一つ一つの問題点をさらに深く検討していく必要を感じているところです。

ご多忙のところ原稿をお寄せいただいた方々には厚く御礼を申し上げます。

神奈川県考古学会

平成12年度 神奈川県考古学会 考古学講座 「相模野旧石器編年の到達点」日程 平成13 (2001) 年3月11日 (日) 9:30~16:45 開場 9:30 開会 9:50 開会挨拶 9:50-10:00 神奈川県考古学会会長 寺田兼方

#### 基調報告

10:00-10:40 相模野旧石器編年の到達点 諏訪間順

10:40-11:00 相模野台地の立地と文化層 小池 聡

11:00-11:30 ナイフ形石器文化前半期の様相 鈴木次郎

11:30-12:00 ナイフ形石器文化後半期の様相 織笠 昭

12:00-13:00 休 憩

13:00-13:30 尖頭器文化〜細石器文化の様相 砂田佳弘

13:30-14:00 相模野旧石器編年の問題点 白石浩之

14:00-14:30 相模野旧石器編年の年代観 御堂島正

14:30-14:50 休

討 論

憩

14:50-16:40 「相模野旧石器編年の到達点」

司 会 諏訪間順

パネラー 小池 聡・鈴木次郎・織笠 昭・砂田佳弘・白石浩之・御堂島正

コメンテーター 堤 隆・池谷信之・五十嵐彰・伊藤 健・栗原伸好

閉会挨拶 16:40-16:45 神奈川県考古学会副会長 伊藤秀吉

## 考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」の概要

諏 訪 間 順

#### 考古学講座開催前の状況

2000年11月5日に発覚した前中期旧石器遺跡捏造事件は、我が国の考古学史上かつてない重大な事件でした。直後から、国民の関心事として、大きな話題となり、連日ニュースで大きく取り上げられました。平成12年度の考古学講座は、捏造事件に関する国民の関心も薄れてきた頃の3月11日に開催となりましたが、直前に大分県聖岳洞穴の調査担当者である賀川光夫先生の悲しい訃報にふれ、主催者側としては不安な幕開けとなりました。当日は、捏造問題への関心が高かったことも関係してか、「旧石器編年研究」というマイナーなテーマにも関わらず、約150名の参加者を得て開催されました。

#### 講座の内容

まず、寺田会長から捏造事件を踏まえながらの開会挨拶ののち、最初の発表は主旨説明を兼ねる形で、諏訪間が「相模野旧石器編年の到達点」として、今回の講座の主旨、各発表の内容のガイダンス、そして、相模野台地における研究の歩みを振り返り、編年研究の現状と展望について発表しました。捏造事件の発覚により、旧石器時代研究への信頼が大きく揺らいでいる中で、研究者の一人として、自らの足元の研究をしっかりと見つめ直し、再検討していくことが必要であることを述べさせていただきました。

相模野台地は、層位的な出土事例に恵まれ、全国的に見ても最も精緻な編年研究が行われてきた研究の歩みを振り返ると共に、こうした研究が進んだ背景についても述べさせていただきました。具体的には相模野台地における旧石器時代から縄文時代草創期までの編年を段階  $I \sim$ 段階  $X \amalg$  に区分し、その変遷を述べるとともに、石器組成や剥片剥離技術の変遷を捉えて区分されてきた編年から、これからは、遺跡の残され方や遺跡間の関係性を重視した遺跡構造編年へと向かうべきだとの提言も行いました。

続いて小池聡氏は、「相模野台地の立地と文化層」と題し、相模野の地形や遺跡立地、層位や石器の出土状況などについてスライドを用いながら解説をしていただきました。層位の認定の問題や文化層対比の難しさも論じられました。また、遺跡の層位的な増減からB2層とB0層からL1S層が遺跡数の増加が認められ、この時期が画期となるとの指摘もされました。

鈴木次郎氏は、「ナイフ形石器文化前半期の様相」と題し、相模野第Ⅰ期から第Ⅱ期(立川ローム基底部からB2L下部)までの石器群の編年が報告されました。相模野台地は層位的に恵まれていることから、立川ローム層上半部の石器群は豊富な資料があり、層位的に裏付けら

れた編年研究は進んでいるものの、AT降灰以前の立川ローム層下半部は調査機会も少なく、 資料的には恵まれていないことが指摘されました。相模野第I期はB5層を台形様石器・ナイ フ形石器の出現、L5層を石刃技法の成立、相模野第I期はB4層を台形様石器の発達と茂呂 系ナイフ形石器の出現、B3層を石刃技法と茂呂系ナイフ形石器の発達とそれぞれ捉えられる ことができるとの報告がされました。そして、相模野最古の石器群は現状では吉岡遺跡群D区 B5層の石器群であるとの指摘もされました。

織笠昭氏は、「ナイフ形石器文化後半期の様相」と題して、相模野第Ⅲ期から第Ⅳ期の石器群について報告されました。相模野第Ⅲ期の内容および層位的範囲の確定、相模野第Ⅲ期とそれに続く第Ⅳ期前葉との比較、ナイフ形石器文化から尖頭器文化にかけての相模野の特質解明について検討が加えられました。相模野第Ⅲ期の3細分が提示されるとともに、ナイフ形石器文化終末は、L2層付近にあり、B1層下部で尖頭器が出土した以降は尖頭器文化だとする自説を改めて提示されました。

砂田佳弘氏は、「尖頭器文化〜細石器文化の様相」と題し、主に細石刃の出現やその変遷について報告されました。「相模野細石器編年の到達点」として、細石器の研究史を振り返り、相模野のL2から漸移層までの石器群の石器組成と石材組成を整理するとともに、細石刃核の型式や製作技術、使用される黒曜石の原産地の変化などを層位的に検討され、5段階の変遷が認められることを提示されました。また、自説である細石刃列島自生説を開陳されました。

以上の5人の発表が相模野旧石器編年の前提や具体的な内容の提示でしたが、これらの発表 に対し、白石浩之氏と御堂島正氏によって別の角度から問題点が指摘されました。

白石浩之氏は、「相模野旧石器編年の問題点」と題し、全国的な視点に立って相模野旧石器編年の問題点を指摘されました。その中で、相模野最古とされる吉岡遺跡群などのB5層の石器群は中期旧石器時代との関係が強いことなどを指摘されました。また、数字による編年区分の問題点を指摘し、遺跡名を冠する画期を設けることを提唱されました。

御堂島正氏は、「相模野旧石器編年の年代観(14C年代測定と暦年代)」と題し、最新の年代 測定方法の現状や課題について概説するとともに、相模野での具体的な石器群の測定値及びそ の較正暦年代が示されました。その中で、較正暦年代を共通枠として使用していくことの有効 性とその問題点が示されました。

討論は、司会を諏訪間が行い、各発表者をパネラーとして、①相模野最古の石器群とは②相模野第Ⅱ期とⅢ期の連続性③ナイフ形石器文化の終末④細石刃の出現などのテーマで討論が行われました。また、その中で、実験考古学の立場から、御堂島氏から、東北の前中期旧石器の捏造問題に絡めて、「加熱処理」や「遺物の水平出土」についての解説がありました。

①については、鈴木氏はB5層からL5層までを相模野第I期としており、諏訪間の段階IはB5層のみを一段階と設定していることから、この点についての議論がありました。相模野最古の石器群については吉岡遺跡B5層石器群が層位的にも石器群の内容からも現在のところ

最古であることは一致した見解でした。

②については、相模野第II期はB2L下部もしくはB2L中部の慶応SFC第V文化層まで含むかどうかという点が議論になりました。慶応SFC第V文化層の石器群の評価は研究者によって見解が分かれており、織笠氏、白石氏は相模野第II期に対比、もしく並行する時期とするのに対し、鈴木氏、諏訪間は相模野第II期もしくは段階IV石器群に含めて評価している点が議論となりました。

③④ については、時間もなく十分な議論ができませんでしたが、ナイフ形石器文化は尖頭器の出現とともに尖頭器文化となるという織笠氏の視点や ④については、相模野細石器は代官山遺跡・吉岡遺跡群B区の細石刃石器群が最も古く、その系譜はさらに遡る可能性があることなどが議論されました。

討論の最後に、会場から静岡県の池谷信之氏、長野県の堤隆氏、東京都の五十嵐彰氏、神奈川県の栗原伸好氏、東京都の伊藤健氏からそれぞれコメントをいただき、層位や文化層、石材の問題など、相模野旧石器編年の課題や問題点などについての指摘をしていただきました。

以上、当日の概要を報告させていただきましたが、層位的出土事例に恵まれている相模野台地ではありますが、パネラーそれぞれに石器群の評価に違いがあり、大枠の編年としては共通する点が多いものの、細部にわたっては、まだまだ、統一的な見解を導き出せたとは言い難い部分も多いことがご理解できたのではないかと思います。

最後に企画段階から、十分な準備ができませんでしたが、パネラーの方々や多くの関係者の 協力があり、無事に閉会することができました。

また、シンポジウム終了後、早いうちに成果集の刊行を考えていましたが、筆者の怠慢により2年が経過してしまいました。この場をお借りしてお詫びするとともに、コメント集にご執筆いただきました方々に御礼申し上げます。

## 相模野旧石器編年の前提

諏訪 間 順

シンポジウム「相模野旧石器編年の到達点」の達成度

今回のシンポジウム「相模野旧石器編年の到達点」は、矢島・鈴木編年(1976)から24年、諏訪間段階変遷(1988)から12年が過ぎた2000年秋に企画された。この間、全国的に蓄積された石器群の時間的尺度、つまり時間軸の構成を考えるうえで、相模野台地の石器群と、層位的出土事例にもとづいて作成された上記の編年案は、南関東はもとより、各地の遺跡の相対的な位置づけを図るとき、くり返し参照・引用されてきたものといえる。相模野編年は、いわば、日本列島の旧石器時代編年を考えるうえで、ひとつのスタンダードであるといってよい。しかしながら、相模野の石器群の変遷そのものが、列島の旧石器時代遺跡に広く適用できるものと考えているわけではない。関東・中部地方に限っても、台地単位や流域単位といった地理的関係や石材環境や食料資源環境による適応のあり方として、石器群に違いが認められるのは当然のことである。それぞれの地域で、地域編年が検討され、より精査されたものが構築されるべきである。相模野編年はあくまでも、相模野台地を中心とした地域編年の一つでしかないことを強調しておきたい。

さて、相模野台地における旧石器編年は、「相模野編年」を基本として研究者間での共通した認識が持たれている。しかし、細部にわたる時期区分や石器群の評価については意見の分かれるところがあり、一見、確立した観のある相模野編年も、課題や問題点も山積している。そこで2002年春に、神奈川在住・在勤の研究者を一同に集め、相模野編年を再度見直し、どのような問題点があるのかを探るシンポジウムを企画した。今回の発表者は、神奈川のみならず、関東を代表する顔ぶれであり、それぞれが自らのフィールドとする、相模野の石器群をあらためて評価することで、相模野旧石器編年の現時点での了解と問題を明らかにすることを目論んだというわけである。

相模野編年は、層位的出土例に基づく編年であることが特色であるが、対象とする石器群の 単位の抽出や、評価・認識において、それぞれの立場の違いがよく反映されていたといえる。 それによって、評価にいたるまでの検証過程においては詰め切れていない課題も随所にみられ た。とくに、出土層位の認定、集中地点の認識、文化層の分離、生活面の設定など、調査者の 判断基準が問われる認識や評価に対する検証・論証の過程が、必ずしも明確とはいえない状況 にあることが浮き彫りとなった。このように、遺跡論ひとつをとってみても、地層堆積や遺跡 形成といった今日的な視点も取り込み、さらにそれ以上に、評価にいたる手続きの明示化とい う作業を意識することで、あらためて遺跡を捉えなおす必要性を強く感じることができた。

ここでは、現段階で筆者の考える相模野旧石器編年の前提としての層位と石器群の認識につ

いての問題点について述べ、シンポジウム後のコメントとしたい。

#### 地層塁重の法則

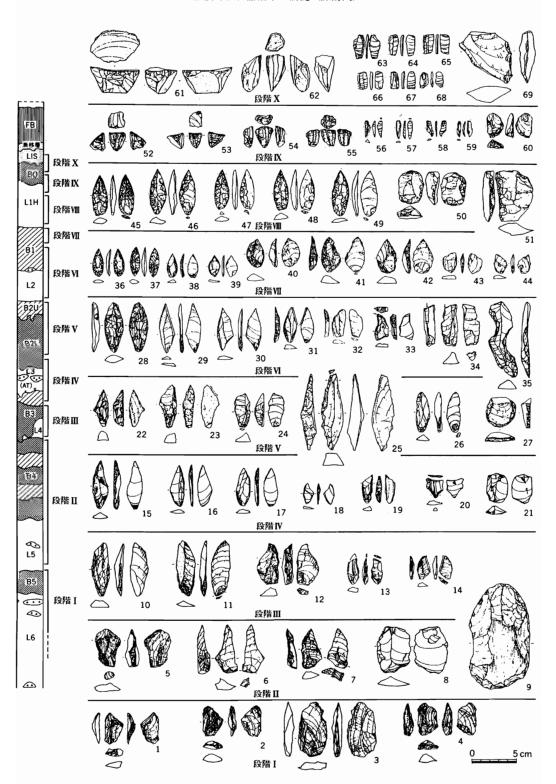
相模野台地は層位が厚く堆積しており、一遺跡内で層位的な出土例に恵まれている。このことは、地層が堆積した後に攪乱や断層などによって地層の逆転がないという前提の場合には、古い(深い)地層から出土した石器群は古く、新しい(浅い)地層から出土した石器群は新しいという地質学の基本原理に則り、相対的な年代、序列を与えることができる。相模野台地では、AT層をはじめとして、S1SやS2S、B0からB5までの6枚の黒色帯などが鍵層としての有効性を発揮し、遺跡間層序対比を可能にしており、各遺跡で出土した石器群の対比が可能となっている。まず、遺跡内での層位的な出土例を検討し、次に遺跡間の層位対比を行ったうえで、編年研究が行われている(第1・2図)。こうして、相模野の旧石器編年は地層塁重の法則に則って構築されてきたものといえる。

さて、このように、編年研究を行う際に具体的な研究材料は文化層毎の石器群である。その石器群の認定には実に様々な手続きを踏んで一石器群、一文化層が認定される。そこには、五十嵐彰氏によって指摘される、「文化層」の認識に関する多くの問題が潜んでいる(五十嵐2000)。まず、発掘調査の過程でどのような手順により調査され記録しているか、そこにどんな問題点があるのかを確認しておきたい。

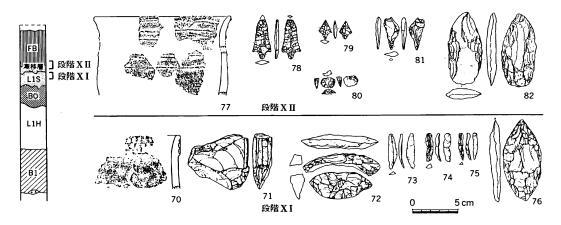
#### ローム層の分層と垂直分布投影

旧石器時代の発掘調査は、黒色土までの調査を終了させて、ローム層を上層から順番に掘り下げていく。石器が出土しはじめるとその周辺を広げ、平面分布の把握を行うことになる。その時に、その石器集中地点(以下、ブロックという)に対し、どの場所に壁を設定し、層位図をとるかが重要となる。ブロックから離れた壁面の層位を取り、それに垂直分布を投影したのでは意味がない。しかしながら実際の遺跡では、まったく、フラットな地形に石器群が残されていればいいが、多くの場合は、緩やかではあるが斜面であることが多い。それは遺跡そのものが台地の先端部や縁辺部に残されていることと無関係ではない。

また、調査時において、最初からブロックがどの程度の広がりであるかを想定することは難しいし、地形の傾斜に沿って土層断面図を作成することは困難な場合が多い。結果として、ブロックごとに的確な位置で地層との関係を捉えることができない場合も少なくない。通常の場合、出土品整理の過程では、石器の出土位置を土層断面図に投影し、垂直分布の検討をおこない出土層準を確定していく作業が行われるが、土層断面を取る壁がブロックから離れていれば、本来の出土層準とは異なる層位から出土した石器群であると捉えてしまう危険性がある。報告書で提示されたブロックの平面分布と垂直分布を検討すると同一文化層とされた石器群であっても、同一の層から出土していない状況が認められるのは、こうしたことが原因のひとつである場合も多い。



第1図 相模野旧石器変遷図 (段階 I ~段階 X) (諏訪間2001)



第2図 相模野縄文草創期変遷図(段階XⅠ~段階XⅡ)(諏訪間2001)

#### ブロックの同時性

A遺跡のx文化層の石器群が複数のブロックによって構成されているとして、ブロック同士の同時性を証明するためには、石器一点一点を石材毎に分類し、さらには同一石材内を母岩毎に分類し、接合作業を十分に行ったうえで、接合関係のある場合、あるいは母岩を共有する場合に、はじめて同時に残されたブロックであると認定できる。しかしこの場合、厳密には接合関係や母岩の共有は同時性の証明にはならない。同時性の時間幅が問題になる。数時間単位なのか、石器製作作業を行い、別の遺跡に移動した後、続きの作業をしたのかは、判断がつかない。また、遺跡(この場合、石器)が残された後、何年(あるいは数千年)も経過した時点でたまたまそこに到来した別の集団によって、再利用されたことなども可能性としては否定できないのである(御堂島1990)。

そこまでは検討の仕様もないので、編年区分される時間幅としては議論の対象外となるので あろうが、こうした点も考慮しながら石器群の分析をすべきであろうと考える。

以上、検討を加えてきたように、一文化層の石器群の抽出に際して、その出土層位の確定し、石器群単位の比較・検討を行う上で、いくつもの手続きと確認しなければならないことが理解できた。こうした検討は考古学が科学として成り立つための前提であり、今後ともより厳密に行わなければならないものと考える。

#### ローム層の分層と遺跡間の対比

次に、層位そのものの分層の問題である。相模野台地のローム層の層位は、相模考古学研究会による分布調査を通じて、あるいは、月見野遺跡群やその後の小園前畑遺跡や地蔵坂遺跡の発掘調査によって今日使われている考古学土層区分が確立してきた。1970年代までは、相模考古学研究会の鈴木次郎氏、矢島國雄氏ら数人によって遺跡の層位の分層が行われており、そ

の後、1980年代前半までは、調査担当者が互いに発掘現場を行き来し、分層についても確認を取り合っていたようだ。したがって、1980年代前半までの調査では、ほぼ同一の視点で分層が行われていたといってよい。その後、調査の増加により、さまざまな調査組織・調査担当者が調査する時代が到来した。基本的な分層の視点は同じであるはずだが、それぞれの遺跡毎の土層堆積環境の違いもあり、分層そのものが異なってきている。遺跡において明確な暗色部が認識しにくい、B0層、B1層、B2U層、B5層などは地点によって、黒色の色合いが異なっているため、その認定・分層については、特に難しい。

たとえば、B0層はクラック帯の暗色部を厳密に狭く引くという伝統に対し、色に加えて軟質部分をやや広く取る調査者もいる。砂川期と言われる石器群は、相模野ではB1層を中心に垂直分布するが、礫群や石核など重量のある資料はB1下部からL2上面に集中するため、それぞれ礫群の出土層準を生活面と捉えて、遺跡間の比較検討が行われる。しかしながら、A遺跡のB1層の下底の線とB遺跡のそれが同時代を示す保証はない。それは、遺跡の立地、偏西風の軸からの距離などによる黒色帯の形成過程の違いだけでなく、調査者の線の引き方によっても異なるためである。また、同時に、これまで明らかになってきた石器群の編年観に照らして、出土層位を推定する、という場合はないだろうか。調査者が無意識のうちに、既成の編年観に引きずられた分層が行われることは十分にあり得る。

以上述べたように、実際の遺跡に立って、土層に線を引く場合、教科書どおりに引くことは難しいということであり、研究者・調査者それぞれによって、その線の引き方にバラツキがあるのが実態であろう。現在のところ、こうした問題があることを認識したうえで遺跡間の石器群の対比が行われるべきであり、各石器群の出土層位を絶対的なものと捉え、層位だけで編年対比することの問題点があることを認識しなければならない。

#### YNo.による識別と考古学土層

相模野の立川ローム層は主に富士火山から噴出した降下火山灰の堆積によるものである。一回の噴火で飛来するテフラの量はおおむね火山からの距離の二乗に反比例することが指摘されている(上杉他1993)。相模野台地では、層厚にして7~8mの堆積し、武蔵野台地3~4mの約2倍、下総台地1.5~2.0mの約4倍の層厚がある。偏西風に乗って降下するため、相模野台地内でも海老名から相模原にかけては厚いが、藤沢市域など偏西風の軸からずれる台地南部は薄く黒色帯も不明瞭になる。

さて、相模野台地の層序区分はL(ローム)とB(ブラックバンド)による分層、いわゆる考古学土層であるが、降下火山灰1枚1枚を記載し、YNo.として識別する方法が試みられている(上本・上杉他1994)。上杉陽氏らによれば、立川ローム層は YNo.の、Y-103~141までに分層が可能で、富士東麓から西相模、相模野台地、武蔵野台地、下総台地との対比が行われている。現在までのところ、認識された YNo.と考古学土層との対応関係が整合的に示されているとは

言いがたい状況であり、黒色 帯の層位と YNo.の位置は一致 していないとの指摘がある。 宮ヶ瀬遺跡群中原遺跡第V文 化層は、二側縁加工のナイフ 形石器を特徴とする「砂川期」、 筆者の段階VIとして認識され る石器群であるが、Y-130の スコリア層直上で出土してい る。相模野台地の標準的な土 層堆積ではB1層の下底をY-132のスコリアで区分してお り、Y-130直上から出土した 中原遺跡第V文化層は、L2 層上部に相当することになる が、報告書にはB1下部に位 置づけられている。丹沢山地 と相模野台地という立地や富

第1表 相模野のAMS年代と較正暦年代(諏訪間2002)

No.	層位	遺跡名	AMS 年代 (yrsBP)	較正暦年代 (CalBP)	文献
1	L5	打木原遺跡	$30,760 \pm 230$		佐藤 2002
2	B3 下部	打木原遺跡 (土坑下底)	$25270\pm300$		佐藤 2002
3	B3 下部	打木原遺跡 (土坑下底)	$24,\!380\pm140$		佐藤 2002
4	B3 上面	吉岡遺跡	$22,\!580\pm140$	27,500	吉田 1999
5	B2L 下底	王子ノ台遺 跡(Y-123)	$23,\!700 \pm 1,\!000$		吉田 1997
6	B1 下部	宮ヶ瀬遺跡 群上原遺跡	$19,\!210\pm100$	22,800	砂田 1999
7	B1 下部	用田鳥居前 遺跡	$19,\!140\pm170$	22,725	砂田 1999
8	B1 下部	福田丙二ノ 区遺跡	$19,\!220\pm380$	22,600	砂田 1999
9	B1 上部	福田丙二ノ 区遺跡	$17,970\pm250$	21,350	砂田 1999
10	L1H 中部	用田鳥居前 遺跡	$17,\!030\pm90$	20,280	砂田 1999
11	L1H 上部	吉岡遺跡群 B区	$16,\!660\pm200$	19,850	砂田 1999
12	L1S 上面	宮ヶ瀬遺跡 群北原遺跡	$13,050 \pm 80$	15,425	砂田 1999

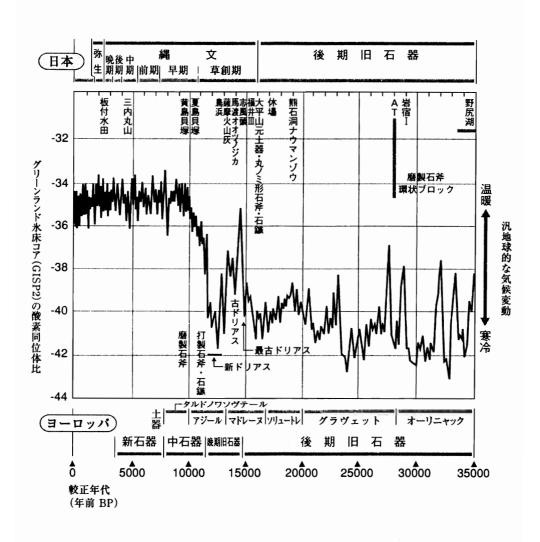
士火山との距離による違いもあるが、黒色帯の形成過程の問題とも併せ注意すべき課題である。 L1S層上部のY-139、L1H層中のY-137、B1層下底部のY-132などは比較的どの遺跡でも丹念に探せば認識できるテフラである。

こうした YNo.の認定は現在のところ、上杉・上本両氏に頼っているが、相模野旧石器研究者の共通のカタログとして、誰もが識別できるようになる必要がある。そのためには、地質研究者とのネットワークをこれまで以上に構築し、相互に YNo.に対する認識を高めるための方策がとられる必要がある。こうした点で、遺跡層序研究会などの今後の活動にも期待したい。

#### 石器群の年代

今回のシンポジウムでは御堂島氏によって相模野の石器群のAMS年代とその較正暦年代が示された(御堂島2001)。これは、砂田氏によって吉岡遺跡群の報告書の中で提示されたものである(砂田1999)。

後期旧石器時代は、地球環境変動に照らせば、ステージ3からステージ2に相当し、最終氷期最寒冷期を前後する厳しい環境変動の時代である。相模野台地で認められた石器群の変遷は、こうした環境変動のどの時期にそれぞれ相当するのかは興味がもたれるところである。最新のAMS年代及び較正暦年代を第1表にまとめてみたが、概ね齟齬がなく変遷していることが理



第3図 グリーンランド氷床コアの酸素同位体比からみた気候の変化(春成2001)

解できる。相模野台地の各段階の石器群の較正暦年代は、次のとおりである。

段階VIB1下部22,500~23,000年前段階VIIB1上部21,000~21,500年前段階VIIIL1H中部20,000~20,500年前段階IXL1H上部19,500~20,000年前段階XIL1S上部15,500~16,000年前

上記の年代は、地球環境変動の曲線(春成2001)に対比すると(第3図)、どのように読み取ることができるか、検討してみよう。まず、AT降灰年代を28,000年前に設定し、前後の年代を考えると段階IVは29,000年前~27,000年前、段階Vが27,000~23,000年前におよその較正

暦年代を与えることが可能であろう。また、編年的に新しくなる段階VIと段階VIの差は1,250年、段階VIと段階VIは930年、段階VIと段階VIと段階VIと段階XIは4,425年となる。こうした較正暦年代は未だ整備途中のものであり、そのまま採用する段階ではないが、ここで示された年代観は石器群の変遷を考える上で参考になるであろう。また、各段階の石器群の継続期間を考える上でも重要である。B4層は非較正暦年代でL5層30,760年、B3下部27,500年と5,490年もあり、その間に堆積したB4層は5,000年前後という長い期間かけて堆積した可能性がある。また、B2層も層厚70cm前後であるが、その堆積期間は3,000年前後の長い時間が想定される。さらに、細石刃石器群はL1H上部からB0層を挟んでL1S上部まで実に4,000年も続いた可能性があり、わずか30cm内外の層厚であるB0層は3,000年以上の長い時間をかけて堆積した可能性も想定することができる。

こうした黒色帯は、相模野台地でLと呼ばれる黄褐色ローム層の堆積期間と比べるとその速度は著しく遅く、その形成過程・堆積時間は時間がかかっていることが指摘できる。このことは、火山灰が連続して供給され、また、一回の降下量も多かったことに比べ、黒色帯は火山灰の供給が少なく、土壌化が進む環境であったことを推測させる。「テフラ層の厚さは時間指標にはならない」「黒色帯中の遺物のレベル差1cmは、ローム層のレベル差数10cm以上に相当する時間差を考えなければならない」(上本・上杉他1994)という指摘を追認することができる。

さて、それでは、こうした較正暦年代と地球規模の気候変動との対比はどうなるか。近年のグリーンランドの氷床コアなどによる酸素同位体の気候変動から読み取ると、最寒冷期は較正暦年代で、27,000~23,000年前までの約4,000年に相当し相模野段階Vを中心にした段階IVの後半から段階VIの時期に対応が可能であろうと考えられる。ただし、黒色帯の形成が富士黒土層などのように温暖・湿潤期に形成されるという事例もあり、B2層を最終氷期最寒冷期に対応させると矛盾することになる。

こうした点も含め、火山灰層序学や地球環境変動論などと石器群の変遷を絶えず対比させ、その都度合理的な説明を加える必要がある。

#### 石器構造編年から遺跡構造編年へ

今回、筆者は石器構造編年から遺跡構造編年へ、そして、社会構造編年へと進むべきとの提言をおこなった。それは、これまでの相模野編年というものは、層位にもとづき石器群の技術基盤を構造的に捉えた「石器構造編年」であり、これからは石器群の残され方の分析を通して、旧石器人の遊動生活の痕跡である石器集中地点のあり方を比較検討し、「遺跡構造」の変化を抽出して編年を構築するというものである。そして、こうした視点から、社会構造の変化に迫りたいという希望でもある。それは、かつて、相模考古学研究会が目指していた「第四紀総合編年」構築への再スタートでもある。たとえば、石器群だけでなく、礫群や配石、相模野では

まだ確認されていないが環状ブロック群や土坑列などはそれぞれ出現の時期や盛行する時期が限定できそうである。複数のブロック群が同時に残される時期、単独ブロックが特徴的な時期などを含め、遺跡の増減、遺跡の立地、遺構のあり方、ブロックの構成などにも注目した編年も可能であろうと考えている。筆者の当面の課題としておきたい。

以上、シンポジウム以後、考えてきたことの一端を述べてきたが、相模野ならでは、相模野だからこそ、層位に徹底的にこだわっていきたいと考えている。そして、層位そのものの認識を高めるとともに、文化層や生活面といった検討単位の整理も筆者なりに検討していきたい。その上で、石器群そのものの検討を行っていきたいと考えている。

シンポジウム開催から本コメント集作成に当たり、上杉 陽、中村喜代重、白石浩之、鈴木次郎、上本進二、織笠 昭、御堂島正、砂田佳弘、麻生順司、村沢正弘、小池 聡、伊藤 健、栗原伸好、吉田政行、大塚健一、仲田大人の各氏、石器文化研究会諸氏からご教示・ご協力を得ました。最後になりましたが、御礼申し上げます。

#### 引用・参考文献

小野正敏・鈴木次郎編 1972『小園前畑遺跡発掘調査報告書』綾瀬町文化財調査報告書第1集

矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1

諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について-層位的出土例の検討による石器群の段階 的把握-」『神奈川考古』24

諏訪間順・麻生順司 1991「相模野台地の様相」『石器文化研究』 3

上本進二・上杉陽・由井将雄・米澤宏・中村喜代重 1994「南関東の立川ローム層と考古学土層 - 富士 山東麓〜神奈川県西部〜相模野〜武蔵野〜房総半島の土層対比 - 」『神奈川考古』30

諏訪間順 1995「南関東地方AT上位石器群の変遷」『愛鷹・箱根山麓の旧石器編年 予稿集』、静岡県 考古学会シンポジウム実行委員会

砂田佳弘 1999「相模野細石器の暦年補正年代」『吉岡遺跡群IX』、(財) かながわ考古学財団

五十嵐彰 2000「「文化層」概念の検討-旧石器資料報告の現状(Ⅱ)」『旧石器考古学』60

御堂島正 2001 「相模野旧石器編年の年代観(14C年代測定法と暦年代)」 『相模野旧石器編年の到達点』 神奈川県考古学会

諏訪間順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会

春成秀爾 2001「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』40-6

諏訪間順 2002「相模野台地旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』72-2

白石浩之 2002『旧石器時代の社会と文化』、山川出版社

紙面の都合により文献の一部は省略させていただいた。

※シンポジウム予稿集で「追記」を記し、立川ローム基底部の石器群について非公式の研究グループ「X層研究会」を設立し、各地の石器群の検討を始めた。その一部は2002年9月に開催されたシンポジウム「南関東のローム層を見直す」(日本第四紀学会研究委員会共同企画)において、「南関東における立川ローム基底部の石器群」と題し、発表させてもらった。今後はさらに石器群の検討を蓄積し、一定の準備期間を経た後に、その成果を公表する機会を持ちたいと考えている。

## 相模野旧石器編年の到達点と新地平(予察)

小 池 聡

#### はじめに

供給源に近く厚い堆積のローム層と遺跡数と調査事例の多さという良好な条件に恵まれた相模野台地では、1976年に鈴木次郎・矢島國雄氏により相模野5期編年(鈴木・矢島 1976)が示され、新資料の検出に伴い補正されてきた。また、1988年には諏訪間順氏により相模野5期編年を基本として、相模野XII段階変遷案(諏訪間 1988)が提示された。

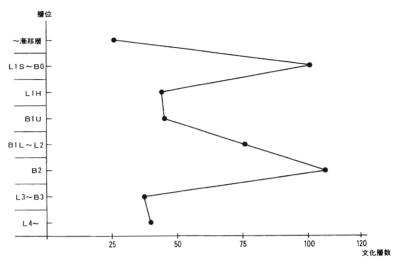
鈴木・矢島氏の相模野5期編年から25年、諏訪間氏の相模野XII 段階変遷案の提示から13年を経た2001年3月の神奈川県考古学会考古学講座では「相模野旧石器編年の到達点」と題して筆者を含む、諏訪間、鈴木、織笠、砂田、白石、御堂島の各氏により最新資料を加味して相模野編年の再検討が行われた。この講座において、筆者に与えられたテーマは「相模野台地の層位と文化層」である。相模野台地の立地や地形的特徴、自然層位と文化層について概観し、概説したものであった。筆者のように、該期遺跡の調査とその報告を繰り返している者にとって、相模野旧石器編年の到達点を考察する場に参加できたことは良い機会であった。また、その中で、改めて見直すこと・再考することの重要性を痛感した次第である。

ここでは、平素漠然と考えていることや当日及びその後考えたことについて、単なる思いつきに等しい拙い論点ではあると思われるが記してみたい。

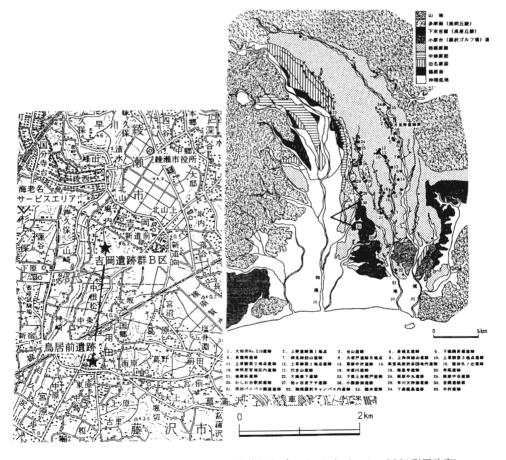
#### 編年研究の到達点とは何か

相模野台地は、重複する文化層を構成する石器群でも平面分布と出土層位の検討・個体別資料分類と接合の検討を行うことによって、比較的分離し易いこと、またそれらが厚い堆積のローム層に包含されていること、調査遺跡の殆どが複数の文化層が重複していることといった諸条件から、石器群の型式学的変遷や層位的変遷を把握し易い良好なフィールドであるといえよう。

相模野台地の各遺跡では、関東ローム層最上層の立川ローム層から複数の文化層が重複して検出される訳であるが、それらは全ての遺跡で同一層順に一様に石器群が包含されているのではなく、また、相模野台地全体に各期または各段階の遺跡・文化層が展開している訳ではないことは、改めて述べることもなく周知のことであろう。第1図に示したのは、相模野台地における各層位別の文化層数変遷である。一見して解るように、相模野第II期後半から第II期・段階IV後半から段階Vの立川ローム層B2層と相模野第V期後半・段階IX後半から段階XIに相当するB0層~LIS層の層順で文化層数が突出して増加していることが伺える。構成される文化層の突出する増加は相模野台地での遺跡数の拡大増加であり、考古資料の見かけの分布と真の



第1図 相模野台地の層位別文化層数 (小池2001より引用)



第2図 相模野台地の遺跡間接合(旧石器時代研究プロジェクトチーム 2001引用改変)

分布という要素を考慮したとしても、「ひと」の飛躍的な介在が反映された足跡の累積と捉えられようか。

さて、この飛躍的な介在はどのようなものであろう。諏訪間氏は補正された相模野段階変遷案(諏訪間 2001)の中で、現状では段階変遷を層位的に確認出来る文化層が30~35文化層であろうとした。ちなみに、これらの文化層を近年提示された較生暦年代観で相模野最古のB5層を約35000年前として、LIS層を約15000年前としてその間を約20000年間とすると、あくまでも計算上であるが、35文化層で単純に割り算すると1文化層あたり約570年間ということになる。この時間幅は旧石器時代を歴史的に叙述するとき、長いと考えればよいのか、短いと考えればよいのか。

#### 到達点と新地平

そもそも、石器型式学的研究・石器群の評価と層位対比・変遷から導き出される「時間軸」の構築を大命題とする編年研究そのものに、到達点は存在するのであろうか?常に検出され続ける資料に対応し、更に細分された精緻な編年を繰り返し構築し続けていくことが編年研究の目標到達点であろう。その中で前節において述べたような計算上の1文化層が持つ時間幅は精緻に短縮されていくことであろうが、もはや堆積の厚いローム層に包含される石器群の評価と層位対比のみでは、その限界に達してしまうのではないだろうか。

我々は旧石器時代遺跡を調査し資料化する過程の中で、石器群を構成する型式・組成・技術・石材と個体・接合などを理解し、評価して資料提示している。しかし、どれ程精密に分析され提示された資料であっても、旧石器時代を狩猟・採集と移動の時代と認識し、「ひと」を介在して搬入・搬出が繰り返されていると理解しているにもかかわらず、石器石材と個体別資料が、遺跡間・水系・台地内で帰納するかという立脚点で十分な実証を試みていたであろうか。

石器の遺跡間接合と石材個体共有の具体的な実証は、相模野台地では引地川流域で2km離れた綾瀬市吉岡遺跡群B区B1層下部と藤沢市用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡BIL層の文化層間(第2図)で3個体別資料に確認(旧石器時代研究プロジェクトチーム 2001)されたという。公共機関の調査組織内で同時に近い時期・段階の資料整理を同時に行っていたという良好な条件によるところは大きいものの、今後強力に押し進められていくべき研究の一方向性であろう。

1個体の石材がどの程度の時間で消費されていくのかという充分な研究を経なければならないとしても、「ひと」の介在する生々しい行動・移動・領域や生活サイクルにまで迫ることのできる方向性を持つといえるであろう。一つの台地の隣接する遺跡間で実証されたダイナミックな連鎖は、同一水系の遺跡と遺跡を、または同一台地内の別水系の遺跡とを結ぶ太い連鎖へ、同一台地内の更に太い連鎖へと広がることで、より鮮やかな社会を我々に提示してくれるのではないだろうか。また、更に台地間・地域間の移動や行動、石材産地と消費地との様相を描き

#### 相模野旧石器編年の到達点と新地平(予察)(小池)

出せる糸口となるのではないか。それはつまり、石材の産地から消費地への石材流通という一方向の仮説と実証だけでなく、とりもなおさず一石材における消費と消費地からの実証である。

更に、石器群の評価と包含する層位対比から同時期・段階を導き出している編年研究に対して、文化層の共時性を証明する一視点となる可能性は高いと考えたい。

#### おわりに

それらの仮説や理論の具体的な検証の実践と蓄積段階こそが、まさに旧石器時代研究到達点とそれ以後の新地平を目指すものではないのか?と考えているのは筆者だけではないであろう。また、通史的な遺跡構造研究・社会構造研究あるいは石器型式研究に囚われることのない新地平ではないだろうか。

定型的石器を持ち寄るだけでなく、遺跡・水系・台地内で帰納しない個体別資料の接合や同一個体を検証するような、台地や地域を越えた研究を各研究者間の共通認識として押し進めていくことも重要となってくるだろう。

文末ではあるが、本拙稿を草するにあたり日頃から助言・指導いただいている砂田佳弘、諏訪間順、栗原伸好の各氏に感謝申し上げる。

#### 引用・参考文献

旧石器時代研究プロジェクトチーム 2001「旧石器時代後半における石器群の諸問題 - 相模野の遺跡間接合から-」『神奈川の考古学』研究紀要6、財団法人かながわ考古学財団

小池 聡 2001「相模野台地の立地と文化層」『相模野旧石器編年の到達点』、神奈川県考古学会

鈴木次郎・矢島國雄 1976「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』 3、有斐閣

諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について-層位的出土例による石器群の段階的把握-」 『神奈川考古』 24、神奈川考古同人会

諏訪間順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』、神奈川県考古学会

長岡文紀 1989「南関東地方における縄文時代後期の遺跡分布-見かけの分布と真の分布-」『神奈川 考古』25、神奈川考古同人会

御堂島 正 2001「相模野旧石器編年の年代観 (14C年代測定法と暦年代)」『相模野旧石器編年の到達 点』、神奈川県考古学会

### 茂呂系ナイフ形石器の系譜と切出系ナイフ形石器

鈴 木 次 郎

1

相模野台地を含む南関東のナイフ形石器文化は、茂呂系ナイフ形石器(1)のあり方によって細分される。筆者は、前稿(鈴木2001)において、相模野のAT降灰以前の石器群について概観したが、それは茂呂系ナイフ形石器のあり方を鍵として時期区分を行ったもので、相模野第Ⅰ期は茂呂系ナイフ形石器が出現する前の段階、相模野第Ⅱ期は茂呂系ナイフ形石器が出現して発達する段階として整理した。ここでは、一部前稿と重複するが、相模野台地のナイフ形石器文化各時期の茂呂系ナイフ形石器について概観し、併せてその他のナイフ形石器、特に茂呂系以外の二側縁加工の切出系ナイフ形石器(2)との関係をみることによってこの地域のナイフ形石器文化の特徴と石器群変遷の背景を探るための問題提起としたい。

2

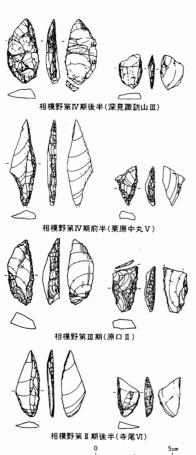
相模野台地ではB4層以下の立川ローム下部の調査資料が少なく、今のところ茂呂系ナイフ形石器の確実な出土例は知られていない。しかし、武蔵野・下総両台地の豊富な資料をみると、多くの遺跡でB4層に相当するIX層から茂呂系ナイフ形石器が出土しており、この石器はB4層の段階に出現したとみられる(相模野第Ⅱ期前半)。この時期は台形様石器によって特徴付けられ、ナイフ形石器は、基部加工をはじめ部分加工や一側縁加工とともに少数の茂呂系ナイフ形石器がみられる。そして、ナイフ形石器は石刃及び縦長剥片を剥離する剥片剥離技術と急斜な刃潰しによる細部加工、台形様石器は横長剥片や寸詰まり剥片を剥離する剥片剥離技術と平坦剥離による細部加工という対応関係がみられ、石斧を特徴的に伴う。

相模野第II 期後半のB3層中~下部では、茂呂系ナイフ形石器が数量的に増加するとともに、やはり基部加工・部分加工・一側縁加工など各種の形態がみられる。これらの石器は、伊豆箱根系黒曜石・ガラス質黒色安山岩・凝灰岩等を石材とした石刃や縦長剥片を素材とする。一方、やはり伊豆箱根系黒曜石を主要石材とする台形様石器は、数量的に減少するとともに本来の平坦剥離による細部加工が失われ、ナイフ形石器に特徴的な急斜な細部加工(刃潰し)が用いられるようになる。そして、B3層上部では、信州系黒曜石を多用した茂呂系ナイフ形石器が発達し、他の形態を圧倒するようになる。

相模野第Ⅲ期のB2層の石器群は、石刃技法が衰退して横長剥片剥離をはじめ各種の剥片剥離技術を基盤としてナイフ形石器・角錐状石器・円形掻器・鋸歯状削器等から構成される。ナイフ形石器は縦長剥片素材の基部加工と横長剥片素材の切出形が特徴的にみられ、国府型ナイフ形石器を伴う場合もあり、縦長剥片を素材とした茂呂系ナイフ形石器が少数みられる。茂呂

系ナイフ形石器の特徴は、伊豆箱根系黒曜石を多用し、素材は形状の一定しない縦長剥片を用い、このため石器の形状も不揃いで部厚いものが多い。細部加工はしばしば鋸歯状剥離が用いられることがあり、刃部側基部の加工は微細な剥離による場合もみられる。そして、基部に素材打面を残すことが多い(織笠2001)。このほか厳密には茂呂系ナイフ形石器とはいえないが、横長剥片を素材とした先端部の鋭角な二側縁加工や、基部加工で先端部と基部の加工がわずかに離れただけのナイフ形石器など茂呂系ナイフ形石器と類似するものもみられ、茂呂系二側縁加工と切出形の中間形状をなすものも存在する。

相模野第IV期前半のB1層下部では、硬質細粒凝灰岩など在地石材を主体として信州産黒曜石も用い、砂川型刃器技法を基盤とする石刃素材のナイフ形石器・掻器・削器・彫器などから構成される。ナイフ形石器は、砂川型と呼ばれる茂呂系ナイフ形石器を中心に部分加工(端部加工)・一側縁加工などがみられる。この時期には少数の槍先形尖頭器が共伴するが、その素材や細部加工など技術基盤はナイフ形石器等とは異なる場合が多い。



第1図 各時期の茂呂系ナイフ形石器 と切出系ナイフ形石器

相模野第IV期後半のB1層上部では、石材は伊豆箱根系黒曜石が主体を占め、打面転位を頻繁に行って幅広の縦長剥片を剥離する剥片剥離技術を共通の技術基盤として槍先形尖頭器とナイフ形石器などの石器が作られる。ナイフ形石器は茂呂系と小形幾何形が中心となるが、両者が共伴する石器群は少ない。茂呂系ナイフ形石器は、下九沢山谷型と呼んだ幅広で基部に素材の打面や切断面を残すものが多く、しばしば槍先形尖頭器に共通する平坦剥離による細部加工がみられる。

3

これまで各時期の茂呂系ナイフ形石器のあり方をみてきたが、この石器はB4層に出現し、B1層上部まで一貫して存続している。この間、B3層上部やB1層下部あるいはB1層上部の一部の石器群では数量的に主体を占めて他のナイフ形石器(形態)を圧倒するが、B2層やB1層上部の一部の石器群では逆に数量的に貧弱な存在である。そして、相対的に茂呂系ナイフ形石器が貧弱な石器群をみると、B4層では台形様石器、B2層では切出形ナイフ形石器、B1層上部では小形幾何形のナイフ形石器といった切出系ナイフ形石器が主体をなす。これらのナイフ形石器は、それぞれ技術基盤が異なり、し

かも時期的に連続しないことから直ちに相互の関連性を論議することはできないが、茂呂系ナイフ形石器を補完するという点では互いに共通した存在である。

それでは、茂呂系ナイフ形石器が卓越するB3層上部やB1層下部の石器群では、こうしたナイフ形石器はどのようなあり方を示すのかみてみよう。B3層上部の寺尾遺跡第VI文化層では、茂呂系ナイフ形石器が多くみられるが、切出系の小形ナイフ形石器も纏まってみられる。その素材や細部加工は茂呂系ナイフ形石器と共通し、黒曜石の幅広の石刃や縦長剥片を切断して急斜な刃潰しを行っており、茂呂系ナイフ形石器との中間的な形状をなすものもある。また、B1層下部を中心とした石器群においても、数量的には多くはないが切出系ナイフ形石器が存在する。それは、L2層の寺尾遺跡第IV文化層では比較的大形で切出形に近く、B1層中部の栗原中丸遺跡第V文化層では比較的小形で多様な形状を示し、ともに茂呂系ナイフ形石器と同じ技術基盤のもとで製作されている。

4

ナイフ形石器文化は、その初期には、台形様石器を中心に基部加工のナイフ形石器と石斧により構成される石器群が北海道を除く列島の広範囲に広がり、地域性が少ないのが特徴であったが、AT降灰期前には各地でそれぞれ地域色をもった石器群が展開するとされている。相模野を含む南関東では、B4層を中心とした相模野第II期前半がまさに前者に相当するが、茂呂系ナイフ形石器はこの時期に出現している。そして、AT降灰直前のB3層になると、茂呂系ナイフ形石器を中心とした南関東独自の石器群が展開した(相模野第II期後半)。

ところがB2層になると、石器群の構造が大きく改変され、切出形ナイフ形石器等によって特徴付けられる石器群が展開する(相模野第Ⅲ期)。これらの石器群には盤状剥片石核から横長剥片を剥離する剥片剥離技術や鋸歯状剥離という調整剥離技術と、角錐状石器や国府型ナイフ形石器などを伴うことから、瀬戸内系の石器製作技術の流入があったことを示している。それはAMS年代測定値からビュルム氷期の最寒冷期に相当し(諏訪間2002)、こうした瀬戸内系石器群の流入は東北地方から九州地方まで北海道を除く列島一円に及んでいる。しかし、この時期においても茂呂系ナイフ形石器は消滅せず、瀬戸内系の石器製作技術の影響を受けながらも少数量ではあるが確実に存続していた。

その後、B1層下部には、再び茂呂系ナイフ形石器(砂川型)を中心とした石器群が展開するが、けっして長くは続かなかった(相模野第IV期前半)。それは、前段階の後半(B2U層)に初源をみる槍先形尖頭器が普及したことによって、やがて槍先形尖頭器の製作技術がナイフ形石器の素材生産や細部加工などにも影響を及ぼし、下九沢山谷型ナイフ形石器として茂呂系ナイフ形石器の終末段階を向かえた(相模野第IV期後半)。

南関東における茂呂系ナイフ形石器の系譜をこのように辿ることが可能であるが、一方台形様石器は、B3層に茂呂系ナイフ形石器に取って代わられた後、ナイフ形石器の技術基盤の中

に取り込まれてナイフ形石器の一形態として存続したことが考えられる。それは相模野第Ⅲ期後半の寺尾遺跡第Ⅵ文化層のナイフ形石器の中にみることができ、それが相模野第Ⅲ期の瀬戸内系の技術の流入に伴って切出形ナイフ形石器となったと推定される。そして、相模野第Ⅳ期前半には数量を減じるものの、同後半には小形幾何形ナイフ形石器という姿でナイフ形石器文化終末期石器群の中心的な器種を構成した。

5

本稿では、相模野台地のナイフ形石器文化の石器群について茂呂系ナイフ形石器のあり方を中心に概観した。その結果、先端部が尖鋭で二側縁加工を行った茂呂系ナイフ形石器と、台形様石器・切出形ナイフ形石器・小形幾何形ナイフ形石器といった切出系ナイフ形石器の両者が一貫して存続すること、また各時期とも、その両者は互いに補完し合うことが明らかにされた。南関東のナイフ形石器文化がこうした二種類の石器により構成されることは織笠氏により早くから指摘されており(織笠1979)、筆者らも相模野第 II ~ IV 期というナイフ形石器文化の各時期において各種の形態が揃っていることを指摘してきた(鈴木・矢島1988)。ナイフ形石器の各形態、特に二側縁加工の二形態の関係については、相互補完的な関係をもつことの意味や技術面・機能面を含め、今後さらに検討する必要がある。

なお、本稿は、一昨年の考古学講座のコメントあるいは補遺編という性格上、細かな点について十分整理・分析することなく思いつくままに記述したものであり、今後、稿を改めて再論したいと考えている。

#### 註

- (1) ここでいう茂呂系ナイフ形石器とは、石刃及び縦長剥片を素材とし、先鋭な先端と長い刃部をもつ二 側縁加工のナイフ形石器をさし、素材の剥離方向と器体の長軸は鋭角に交わる。
- (2) ここでは、各時期の茂呂系ナイフ形石器以外の先端角が大きく長幅比の小さな二側縁加工のナイフ形石器を総称する用語として、便宜的に切出系ナイフ形石器と呼ぶ。具体的には、B4層を中心としてみられる台形様石器、B2層の切出形ナイフ形石器、B1層上部の小形幾何形ナイフ形石器等がある。なお筆者は、台形様石器は、細部加工の調整剥離が他のナイフ形石器と異なり独自の技術基盤をもつことからその名称を用いているが、一辺に刃部を残し両側縁に細部加工を行った石器であり、ナイフ形石器の一種と理解している。

#### 引用文献

織笠 昭 1979「ナイフ形石器と切出形石器」『神奈川考古』第7号、21~47頁

織笠 昭 2001「相模野ナイフ形石器文化の終焉」『相模野旧石器編年の到達点』(平成12年度神奈川県 考古学会考古学講座)、55~72頁

鈴木次郎 2001「ナイフ形石器文化前半期の様相」『相模野旧石器編年の到達点』(平成12年度神奈川県 考古学会考古学講座)、35~54頁

鈴木次郎・矢島國雄 1988「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1)(新版)、154~ 182頁

諏訪間 順 2002「相模野旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』第72巻6号、636~643頁

## 先土器時代文化2003相模野平成篇

織 笠 昭

- 1 旧石器時代ではなく先土器時代から
- 2 相模野編年の大別と細別
- 3 相模野編年における画期
- 4 最古級の石器群とは何か
- 5 ならぬことはなりませぬ

#### 1 旧石器時代ではなく先土器時代から

2001年3月11日、「平成12年度神奈川県考古学会考古学講座相模野旧石器編年の到達点」が開催された。1957年の岡本 勇氏らによる横浜市本郷遺跡の調査(和島・岡本1958)や、岡本氏および松沢亜生氏による分布調査(岡本・松沢1965)、そして相模考古学研究会による一連の調査(相模考古学研究会編1971)以来の40年以上に及ぶ研究の蓄積を、現在の視点からとらえなおし提示した成果である。

だがそこにはいくつかの問題も残された。それ自体はこうした企画にはつきものとも言うべきことであるが、問題はその社会的学問的背景との関連である。筆者はこの2年にわたり「先土器時代文化2001」と「先土器時代文化2002」を著してきた(織笠2001b・2002)。そこで考察してきた事と同様の問題が、現行の相模野編年をめぐる課題としてある。そしてその問題はおおよそ1990年代、昭和から平成に移行してから始まっている。本論は「旧石器時代ではなく先土器時代から」という視点をもって、相模野編年の二、三の問題とその根幹について触れる。本稿標題の因って来たる所以である。

#### 2 相模野編年の大別と細別

相模野は武蔵野、愛鷹・箱根山麗と並び、もっとも無理の無い形で層位と対応した編年が組まれている地域である。ただし、武蔵野と愛鷹・箱根山麗は立川ローム層相当部の上部が相模野よりも薄いという堆積上の問題が残る。一方、相模野はその良好な堆積の故に深部にメスを入れにくいという物理的問題があった。ところが相模野では、綾瀬市吉岡遺跡群を始めとして相模野B4層以下の資料が増加してきた。完備されたとは言い難いが、一貫した形で地域編年上のつながりと切れ目を検証する前提が整ってきたのである。こうした現状とこれまでの経緯を踏まえたうえで、先の考古学講座に集約された相模野編年を見直して見よう。

白石浩之氏は鈴木次郎・矢島國雄「両氏の五期区分」(たとえば矢島・鈴木1976)と諏訪間順氏による「12段階」(諏訪間1988)が、「前者は大別、後者が細別による編年区分であることは明らかであり、それ故両者の編年はかみあうことはない」とする(白石2001)。鈴木・矢

島両氏による編年の意義と問題点についてはそこで白石氏が詳細に検討されており、基本的に は異論はない。

一方、諏訪間氏による編年が細別であるという点はどうだろうか。白石氏も述べるように「層位的に上部へ向かうほど細分化が進み、下部ほど大別的な区分となっている」(白石2001)。ただ、この点は資料の片寄りという制約の故もある。また細別編年といっても、それが鈴木・矢島両氏による編年への対案として突然に提出されたものではない。諏訪間氏自身も「近年の資料の増加に伴って相模野各期の細分案が提出される状況の中で(鈴木1983、諏訪間・堤1985、鈴木1986、織笠1987a、堤1987)」提案したものであるとしている(諏訪間1988)。それらは諏訪間氏による実践を含めながら、共に相模野を学んだ人々によるいくつかの細分案を、かなり一貫した形で再配列したというところに意義がある。それ故に、層位と石器群の対応、そしてそれによる編年は実感的であり、納得しやすいものとなった。

ところが、上述の諏訪間氏の掲げた文献はすべてL2~L1S付近を対象とした研究成果である。即ち相模野第Ⅳ期以降である。諏訪間氏による段階Ⅱ・Ⅲは鈴木・矢島両氏による第Ⅱ期の二細分(鈴木・矢島1978)にほぼ並行するものだった。段階Vは、本来は野川・武蔵野編年における区分が出発地点としてある(小林・小田他1971、白石1973)。さらに筆者による相模野第Ⅲ期・武蔵野第Ⅱa期の細分案を新たな視点から提示した頃であるが(織笠1987b・c)、諏訪間氏による編年としては、近年のように、それが十分には吟味されてはいなかった。その後の資料の増加と再検討を見ると、細石器文化から土器出現に至る過程(段階IX~X I)

その後の資料の増加と再検討を見ると、細石器文化から土器出現に至る過程(段階IX~XI)は砂田佳弘氏や筆者による4~5区分(砂田1993b、織笠1994)があり、2001年の講座でもあらためて検討され示された(砂田2001)。段階VI~畑については各段階ごとの評価を別とすれば大きな動きはない。段階Vについては筆者の試み以降、「シンポジウムAT降灰以降のナイフ形石器文化」(石器文化研究会編1996・1998)に至るまで数多くの方による細分の方向性が示されている。一部にはこれに対して批判的な意見もあるが、西井幸雄氏の指摘するように、批判の「後にある文章は歯切れがあまり良くない」(西井1998)のは一般的傾向である。それ故か細分に懐疑的であった諏訪間氏も、講座では「本段階の細分は可能であるが」(諏訪間2001)としたのだろう。

以上を考慮すると、諏訪間氏の段階区分は土層堆積の薄厚にかかわらず、大別と細別の入り 混じった編年ということになる。石器群の変遷を層位に基づいて整理したのはひとつの成果で はある。だが各段階を連続した数字でつなげていくと、新資料に応じて層位名称の数字と段階 名称の数字に変更の必要性とズレの生じる場合(諏訪間2001)がある。また本来、細別的に 設定されたはずの段階Vについて「段階V石器群の成立期」や「段階Vの後半」といった表現 が、先行研究の引用無く示されることになる(諏訪間2002)。

#### 3 相模野編年における画期

数字を付した編年に矛盾の生じやすいことは研究史の証明するところである。遺跡別の文化 層設定には有効であるが、編年となると話は別である。少なくとも数字付け編年は相模野五期 区分にとどめておくのが隠当な所である。

こうした大別と細別の混在の問題を解消し克服するために、筆者は「編年は大別と細別の相関関係の中で検証されなければならない」と述べたのである。同じく、それを実現するためには「石器形態下の形態理解(安蒜1973)に基づく型式的検討の積み重ねが必要とされ」て得られるのが石器文化編年であり、「そうした試みを経たうえで、これをたとえば岩宿 II 石器文化、岩宿 III 石器文化として広く総括すべき」としたのである(織笠 2001a)。相模野における編年的大別については最新案を既に示したところである(織笠 2003)。細別については従来試みてきたが、今後なお継続する心づもりでいる。白石浩之氏も「数字による区分」を批判しており、「遺跡名を冠した画期を設けること」を主張している(白石2001)。傾聴すべき意見である。

そこで筆者はまず一遺跡のあり方を出発点に、少なくとも中部日本におけるナイフ形石器文化→尖頭器文化→細石器文化を基軸とした大別に基づく細別の検証を続けている。段階編年の基本的な問題は白石氏(白石2001)と筆者の指摘する所だが、さらに整理上の問題を別とすれば徹底した層位名による編年も必要である。層位と石器群との対応もまた多くの問題を抱えていることは周知のことだが、このときこそ相模野編年五期区分は使い方によってはひとつの目安としてきわめて有効である。その上で遺跡名を冠した編年を構成するのが今は最上の方法だろう。上述の過程はさらに様々な問題を有している。だが、それらをひとつひとつ着実に検討し解消し、その成果を積み重ねていく以外に方法は無いのである。

その上でなお、多くの人の悩む共有の問題がある。区分の基準とは何かがそれである。もっとも確実な方法は、新たな石器の出現と普及に置くことである。順に記せば、ナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、細石器が指標となる。それらの出現と普及の時期は、おしなべて石材の変化を伴なう。石器と石材の変化は地域相を変える基盤ともなる。そしてそれらの時期の間にはしばしば遺跡・遺物の激減期が介在する。このように考えれば相模野第III期をIII13上面から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III17期をIII2から、第III2から、第III3以降の問題のいくつかについては先の講座論集で触れているので参照されたい(織笠2001a)。

一方、第 I 期と第 II 期との間はなお明瞭ではないと考えるべきだろう。そこで第 I 期である。 相模野最古の事例は、現状では吉岡遺跡群D区 B 5層にある(白石・加藤1996)。そしてこれを含めた B 5・ B 4層をどう理解するかについては、白石浩之氏による積極的な発言がある (白石1996・2001)。この点を検証してみよう。

#### 4 最古級の石器群とは何か

遺跡名を冠した時期名称は、それがよく整理検討されたうえでの石器文化の把握を前提とす

る。かつて杉原荘介氏(杉原1956・1974)や戸沢充則氏(戸沢1965・1990)によって示されたそうした石器文化編年は、いまいくつかの視点から再検討されるべき部分がある。だが、その基本方針は地域-全国編年を構成する上で有意である。そしてそうした視点からの実践は少なくない。より広域を対象とした試みとしてはナイフ形石器文化における須藤隆司氏(須藤1986)、尖頭器文化では藤野次史氏(藤野1989)、細石器文化では安蒜政雄氏(安蒜1984)による試みを例とすることができる。そこでは大別と細別の区別も明解である。

相模野という地域の編年も基本は五期区分を大別としながら再構成をはかっていく必要のあることは既に述べた。ところが近年、少なくとも1996年以降の白石浩之氏による編年は、どこが大別でどこが細別であるかが解りにくい。それは特にB3層以下の評価、特に白石氏による「相模野最古級の石器群」をめぐっての問題にある。白石氏による三つの論文(白石1996・1999・2001)を見てみよう。

白石氏は武蔵野X層下部や相模野B5層の石器群を「後期旧石器時代の初頭期」であることを否定し(1999)、B5層を「中期旧石器時代終末期」(1999)「最末期」(2001)、B4層を「ナイフ形石器文化への移行期」(1996)「中期旧石器時代と後期旧石器時代の移行期」、B3層を「後期旧石器時代の初頭期」、(以上、2001)「ナイフ形石器群ないしはナイフ形石器文化(1996)」とする。こうした位置付けから生じる問題点を整理しておく。

- 1、ここでの「終末期・最末期・移行期・初頭期」はいずれも「中期旧石器時代」と「後期旧石器時代」という時代名称にかかる表現である。もちろん遺跡名を冠した名称でもない。表現法として不可能ではないのだが、それは大別や細別の原理(山内 1937)とは遠く離れた所にあることは学史が示している。
- 2、「中期旧石器時代終末期・最末期」以前の前提となる「前・中期」遺跡のほとんどが学術的な価値を失う中で、「後期」の設定は考古学的に倒錯である。ここでの「後期」は「前期」や「中期」の対概念足り得ない(織笠2002)。
- 3、1996文献に示された「中期」の資料を前提としないとすると「尖頭状石器群(1996)」 や「台形様石器群(1996・1999)」の由来はどのようにとらえられるのか。
- 4、年代が「30,000年」を越える(1996・2001)B5層は立川ローム層であるが、そこが「武蔵野ローム層の深さに近づいて出土し(2001)」ているから「中期」であるとするなら、 考古学編年と地質学編年の対比に抜本的な再検討が必要となる。
- 5、「考古学的に該期(B5層、筆者注)の石器群を上部から出土した石器群と比較すると、 後期旧石器時代よりも中期旧石器時代の石器群に親近性がある」(2001)とするが、ここで言 う「中期旧石器時代」の遺跡とは具体的に何処であるのか。
- 6、最大の問題がある。1995年以前に実践してきたはずの白石氏流の型式的実践が踏まえられていなかったように思われることである。

以上の問題を克服しない限り、「中期」の「終末期・最末期・移行期」の議論は根の無いも

#### 考古論叢 神奈河 第11集

のになる。相模野B5・4層の位置については不分明な「中期」を前提とするのではなく、「それらが間違いなくナイフ形石器文化以前なのか、あるいは同時期異相とも言うべきものなのか、十分に検討されなければならない(織笠2002)」のである。ナイフ形石器文化に先行する可能性があったとしても、長野県竹佐中原遺跡の石器群を検討中の大竹憲昭氏が指摘するように「ナイフ形石器文化の本質に迫らない限り、先行する石器文化の可能性というフレーズは取れない」のであり、たとえば「竹佐中原遺跡の石器群を検討することは、より古い石器群への探索ではなく、ナイフ形石器文化を問い直すことから始まると考えている」(大竹2002)ことは、相模野においても、何処においても共有の認識足り得る。

ちなみに吉岡遺跡群D区B5層の「ナイフ状石器」で報告書に示された5例の刃角の平均値をとると39.4°となり、これは茂呂型や国府型等の日本における代表的なナイフ形石器の刃角(織笠 1987C)にほぼ等しい(織笠2003)。なお見直すべき視点は数多くあるのである。

#### 5 ならぬことはなりませぬ

「相模野最古級の石器群」をめぐっては、何故、先のような問題が生じたのか。相模野・神奈川県域では未発見の「前・中期」遺跡が、東京・埼玉という身近な所へ迫ってきたからか。とりわけ「秩父原人」の存在は衝撃的だったはずである。そしてそうした資料に基づく華やかな議論の展開は、かつて「先土器時代」を用いた人に対してこそ「旧石器時代」へ移行させるための圧力となっていったのではないだろうか。1980年代以降の転換の理由(砂田1993a)は多様であっても決定打はあったのである。

時代呼称用語はその使用段階によって様々な表現法が有り得る。だが個人の、研究者の学問的意図は生かされなくてはならない。多様であることの認識は個別の形態的認識を前提とする。現実の多様性を、実利的便宜性によって一元化しようとするなら、そこに自由で、民主的で、学ぶ歓びにあふれた世界を構築することはできない。考古学界における多様性の実際を市民の方々に正確に伝えることなく、一定の結論のみを発信し続けるなら、社会における考古学への信頼はなお減少していくだろう。だから、ならぬことはならぬのである。

神奈川県考古学会創立時からお手伝いさせていただいた一人としての思いは尽きない。これまでの諸先輩、諸氏の学恩に答えるためにも、いつの日にか「先土器時代文化神奈川篇」を執筆させていただければと念じている。

#### 引用・参考文献

安蒜政雄 1979「関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相」『駿台史学』32 駿台史学会

安蒜政雄 1984「日本の細石器文化」『駿台史学』60 駿台史学会

大竹憲昭 2002「長野県竹佐中原遺跡」『月刊考古学ジャーナル』495 ニュー・サイエンス社

岡本 勇・松沢亜生 1965「相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究」『物資文化』6 物質文化研

#### 先土器時代文化2003相模野平成篇(織等)

究会

- 織笠 昭 1987a「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』13 大和市市役所
- 織笠 昭 1987b「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72-4 日本考古学会
- 織笠 昭 1987c「国府型ナイフ形石器の形態と技術(上・下)」『古代文化』39-10・12 古代學協會
- 織笠 昭 1994「日本列島の細石器文化」『中日古人類・史前文化淵源関係国際學術研究討論会柳州国際 シンポジューム発表要旨』別府大学
- 織笠 昭 2001a「相模野ナイフ形石器文化の終焉」『神奈川県考古学会平成12年度考古学講座相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会
- 織笠 昭 2001b「先土器時代文化2001」『石器に学ぶ』4 石器に学ぶ会
- 織笠 昭 2002「先土器時代文化2002」『長野県考古学会誌』99・100 長野県考古学会
- 織笠 昭 2003「先土器時代」『海老名市史6通史編原始・古代・中世』海老名市
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4 日本第四紀学会
- 相模考古学研究会編 1971『先土器時代遺跡分布調査報告書相模野篇』 相模考古学研究会
- 白石浩之 1973「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する-試論」『物資文化』21 物資文化研究会
- 白石浩之 1996「中期旧石器時代終末から後期旧石器時代にかけての石器群に対する新視点」

『神奈川考古』32 神奈川考古同人会

- 白石浩之 1999「相模野最古の石器文化」『吉岡遺跡群IX考察編・自然科学分析編』かながわ考古学財団 調査報告49 かながわ考古学財団
- 白石浩之 2001「相模野編年の問題点」『神奈川県考古学会平成12年度考古学講座相模野旧石器編年の到 達点』 神奈川県考古学会
- 白石浩之・加藤千恵子編 1999 『吉岡遺跡群Ⅱ旧石器時代1AT降灰以前の石器文化』かながわ考古学財 団調査報告7 (財) かながわ考古学財団
- 杉原荘介 1956「縄文文化以前の石器文化」『日本考古学講座』3 河出書房新社
- 杉原荘介 1974『日本先土器時代の研究』 講談社
- 鈴木次郎 1983「細石器 (本州地方)」『季刊考古学』4 雄山閣出版
- 鈴木次郎 1986「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現」『神奈川考古』 22 神奈川考古同人 会
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978「先十器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1 有斐閣
- 須藤隆司 1986「群馬県藪塚遺跡跡の石器文化ーナイフ形石器の型式学的考察-」『明治大学考古学博物館 館館報』2 明治大学考古学博物館
- 砂田佳弘 1993a「先土器時代石器群研究の行方-その時代史と研究の枠組み-」『かながわの考古学』3 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 砂田佳弘 1993b「細石器技法の発達」『考古学の世界古代を拡大する2関東・中部』 ぎょうせい
- 砂田佳弘 2001「相模野細石器編年の到達点」『神奈川県考古学会平成12年度考古学講座相模野旧石器編 年の到達点』 神奈川県考古学会
- 諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について-層位的出土例の検討による石器群の段階的 把握」『神奈川考古』 24 神奈川考古同人会
- 諏訪間順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『神奈川県考古学会平成12年度考古学講座相模野旧石器編 年の到達点』神奈川県考古学会
- 諏訪間順 2002「相模野旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』72-6 岩波書店
- 諏訪間順・堤 隆 1985「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層の石器群について」『旧石器考古学』 30 旧石器文化談話会
- 石器文化研究会編 1996『石器文化研究』5 石器文化研究会

#### 考古論叢 神奈河 第11集

石器文化研究会編 1998『石器文化研究』6 石器文化研究会

堤 隆 1987「相模野台地の細石刃核」『大和市史研究』13 大和市役所

戸沢充則 1965「先土器時代における石器群研究の方法」『信濃』17-4 信濃史学会

戸沢充則 1990『先土器時代文化の構造』同朋舎出版

西井幸雄 1998「V~Ⅳ下層段階の範囲と細分の可能性」『石器文化研究』6 石器文化研究会

藤野次史 1989「日本列島における槍先形尖頭器の出現と展開」『周陽考古学研究所報』4 周陽考古学 研究所

矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』 1 神奈川考古 同人会

山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1 先史考古学会

和島誠一・岡本 勇 1958「縄文時代」『横浜市史』1 横浜市

## 相模野細石器研究のこれから

砂田佳弘

三浦半島南部西海岸に位置する南北2km、東西600mの長井台地には各時代の遺跡が重複密集し、相模湾を望む「海の手」にある。打木原遺跡では、9点の細石刃核、147点の細石刃はか422点の剥片類が、長井台地 Ih 層、すなわち相模野台地 L1H 層上位相当層において隣接する径3m前後の石器出土密集部3箇所を形成していた。細石刃石器群の90%以上の資料が黒曜石製で、その大半が天城柏峠産で、僅かに蓼科冷山産が含まれる。細石刃製作工程ならびに黒曜石産地の組成は相模野台地の代官山遺跡第Ⅲ文化層と同種であり、同時期に伊豆柏峠産黒曜石の利用が相模湾沿岸を巡ることが明らかとなった。器種組成の面でもガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器作出剥片類が検出され、同段階の吉岡遺跡群B区との共通点が認められる。

35点の完形・略完形の細石刃の平均値は、長さ13.23mm、幅5.27mm、厚さ2.01mm、重さ0.09g (佐藤2002) で、長さの比較では、吉岡B区、代官山第皿に比較して10%程度長く、幅で20%以上、厚さで50%、重さで30%近くも大きく、やや幅広短小な形態となる。

また、田名塩田遺跡群の報告書が刊行されつつあり、新たな細石刃石器群の資料が提示された。 B地区第 I 文化層775点のうち細石刃核18点、細石刃107点が出土している。径1.5m前後の環状の配礫から東側へ東西 6 m、南北 4 mの範囲に石器群が分布する。21点の完形細石刃は、長さ13.9mm、幅5.1mm、厚さ1.8mm、重さ0.13g(麻生1999)の平均値を測る。これらの大きさは相模野細石器の完形細石刃の序列からは、前述の打木原よりもやや大きく、B0層下位に相当する。石器群の分布が一箇所に広がり、大形礫を配置する遺構によって構成される特徴からも B0層の下部と特定されよう。

相模野細石器の黒曜石利用原産地(流通経路)には時期ごとに明瞭な差異が認められる。伊豆系→伊豆系・信州系→神津島系→信州系・伊豆系→神津島系と、L1H層上部から B0層下部に到る急激な変遷であり、その間細石刃製作工程の打面調整、打面再生といった石核調整の手数の多さが目立ってくる。とりわけ離島である神津島系黒曜石の利用を契機にその製作工程をはじめとして、石器群や遺構の遺存の在り方に変化を認めることができ、遺跡型(砂田1997)も全てが出そろう。遺物・遺構における「なぜ」の回答は困難であり、解釈のための解釈に陥ることは遺跡捏造の一誘因の呪縛を未だ解くことのできない表明に端的である(安斎2002)。

しかし、なぜ神津島の黒曜石なのだろう。神津島産という蛍光X線分析の信頼性ではなく、 未発見の本州黒曜石原産地の有無をさしおいても、経路としての単純さを理由に、神津島産黒 曜石を携えた一群が、従来とは異なった細石刃製作工程を所持して伊豆半島に上陸し相模野へ 到ることとなった。極めて近視眼的であるが、第一派からはたして何派に及ぶかは別にして。 黒曜石の陸揚げは南伊豆東海岸あたりか、段間遺跡(金山1989)から2.5km西南の天嶺山(標高350m)からは神津島を望むことができ、逆に神津島を発つと海上からは神名備形の目標山形となる。ただし、海上交通経路や手段には何の根拠もない。縄文時代に伊豆半島周辺に神津島産大形黒曜石原材を出土する遺跡の多いのも事実だが。

神津島産黒曜石が普及する中にあっても、例えば宮ケ瀬サザランケII b文化層では信州系・伊豆系黒曜石を利用する。中部高地における同時期信州系・伊豆系黒曜石利用の検証は未だ不十分だが、山間部と丘陵部との黒曜石利用原産地の相違も考慮されるだろうし、短期間ではあるが伊豆系・信州系黒曜石群と神津島系黒曜石群が遺跡単位で同時併存した可能性がある。

また、神津島産黒曜石の利用によってはじめて完形細石刃の大きさは飛躍的に伸長することとなる。宮ケ瀬サザランケII b 文化層は、他の同時期細石刃に比較して小振りであるのは、石材の材質が要因か、あるいは伊豆系を利用した細石刃石器群と系統を同じくするためだろうか。

こうしたなぜの脈絡には、「なぜ遺跡や遺物がそこにあるのか」(津村2000:2)の疑問に答えようとする空間分析も応用すべき手だてかも知れない。従来の遺跡型の分布の考察をはじめ、地形、地質、動物相や植物相といった自然環境という名の二次元分布の思考を超越する、目に見える形の三次元分布の考察である。日照、利水、配水、障害物、緩斜面、急斜面などの勾配係数など、行動パターンと時間コスト、空間コストをも視野に容れたGISの活用である(津村前掲、2002)。陽の出ている間の活動範囲や活動領域としての陸地、山地、丘陵、平野、湿地、海浜、海洋、湖沼、河川などのコストの取り扱いなど改善すべき点は多々診られるが、コスト概念を深化しつつも、相模野細石器のさらなる解明の一手段としておきたい。

また、両面体調整石器の考察には解釈のためのモデルが多用される(佐野2002、長沼2002)。 相模野細石器終末期の解明は土器の伴出と較正年代(谷口 2002)の精査によっても、三ノ宮・下谷戸遺跡(三瓶 1999)、用田バイパス関連遺跡群(栗原 2002)の新資料も含め、勝坂45次、寺尾I、相模野 No.149、上野第1-II、上和田城山I、長堀北等の再論が不可欠となる。

さらに、細石刃の使用痕研究の進展も目覚ましいが、はじめに「溝掘り刃器」(米田2002) ありきでは、当初の意図(堤1991)から逸れて、使用痕跡研究の更なる跳躍の歯止めとなっ てしまうおそれがある。トラセオロジーの視点は忘れてはならないのである(御堂島2003)。

製作痕跡の研究では、剥離開始部(鈴木ほか2002)の観察も今後重要な視点であり、細石 刃剥離の開始部の類型化も応用の一つだろう。相模野細石器における使用痕跡研究や製作痕跡 研究はその分布状態や叩き石等の剥離具との有り様ともあいまって多くの研究が期待できよう。

使用痕跡を見つめる視点は、図上の平面的型式・形態のみで分類してきた、台形様石器やナイフ形石器の器種分類の見直しに直結し、新たな型式提示の契機にもなるはずである。

相模野細石器をはじめとする日本の細石器研究が、「細石刃」という文字通り器種名の枠組みの中の研究に終始してきたことを考えると、今一度「細石器」という名称で石器群すべてを通事的に再検討することも肝要であろうし、ひいては細石器の振る舞い方(田村2001)の解

#### 相模野細石器研究のこれから (砂田)

明につながるのではないだろうか (2003.3.31)。

#### 引用・参考文献

- 麻生順司 1999「B地区の調査」『神奈川県相模原市田名塩田遺跡群 I 発掘調査報告書』、307-337頁
- 安斎正人 2002「後期旧石器時代開始前後の石器群」『考古学ジャーナル』495、4-5頁
- 金山喜昭 1989「伊豆半島段間遺跡出土の黒曜石原石」『考古学雑誌』75-1、79-92頁
- 栗原伸好 2002『かながわ考古学財団調査報告128用田鳥居前遺跡』、824頁
- 佐藤明生 2002 『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第10集 打木原遺跡「(仮称)長井海の手公園整備計画に 伴う埋蔵文化財発掘調査」1、160頁
- 佐野勝宏 2002「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」『考古学研究』49-1、38-58頁
- 鈴木美保・五十嵐彰・大沼克彦・門脇誠二・国定貞克・砂田佳弘・西秋良宏・御堂島正・山田哲・吉田政 行 2002「石器製作におけるハンマー素材の推定-実験的研究と考古資料への適用-」 『第四紀研究』41-6、471-484頁
- 砂田佳弘 1994「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』30、1-20頁
- 砂田佳弘 1996「遺跡群の形成」『石器文化研究』5、305-320頁
- 砂田佳弘 1997「遺跡群の空間分布」『研究紀要』かながわの考古学、2、11頁
- 砂田佳弘 2001「相模野細石器編年の到達点」『考古学講座相模野旧石器編年の到達点』、73-90頁
- 谷口康浩 2002「日本および極東における土器出現の年代」『國學院大學考古学資料館紀要』第18輯、45-67頁
- 田村 隆 2001「なぜ身振りなのか」『平成13年度企画展図録 槍の身振り』、8頁
- 堤 隆 1991「細石刃に残された損傷ー中ツ原第5遺跡 B 地点出土細石刃の使用痕分析ー」『中ツ原第5 遺跡 B 地点の研究』、97-115頁
- 津村宏臣 2000「GIS を利用した遺跡環境評価の方法-考古学における空間分析(1)-」『動物考古学』 15、 1-19頁
- 津村宏臣 2002「空間コンプレックスの描出と遺跡間関係評価の方法-考古学における空間分析(2)-」 『動物考古学』18、39-54頁
- 長沼正樹 2002 「両面調整石器群研究序説 更新世終末期石器群理解の枠組み構築に向けて 」 『考古学 研究』 49-3、65-84頁
- 松村信博・山本純代 2001 『奥谷南遺跡Ⅲ 四国横断自動車道(南国〜伊野間)建設に伴う埋蔵文化財発掘 調査報告書』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集、480頁
- 三瓶裕司 1999『かながわ考古学財団調査報告55三ノ宮・下谷戸遺跡 I』、402頁
- 御堂島正 2003「石器製作の使用痕-トラセオロジー-の視点から-」『考古学ジャーナル』499、12-1 5頁
- 米田 寛 2002「細石刃の使用と場の機能-東京都多摩蘭坂遺跡と埼玉県横田遺跡の事例報告-」『法政 考古学』28、1-26頁

## 相模野台地における旧石器時代の成果と課題

白 石 浩 之

相模野台地は全国的にみても旧石器時代の遺跡数が多く、かつ石器が層位的に出土する遺跡が卓越していることから、遺跡群の実態や編年を考える上で重要な役割を果たしてきた(明治大学考古学研究室1969、矢島・鈴木1976、諏訪間1988・白石・砂田1996)。ここではいくつかの成果を紹介し、今後の課題を述べておこう。

第1点としてあげられるのは、綾瀬市吉岡遺跡群B区と藤沢市用田鳥居前遺跡の石器が約2キロメートル離れて接合したことである。ベースキャンプ地としての吉岡遺跡群B区で製作された石器が一時的なキャンプ地としての用田鳥居前遺跡に持ち込まれ、再び吉岡遺跡群B区に戻ってくる様相が把握された(吉田・栗原2001)。このことは吉岡遺跡群B区から用田鳥居前遺跡周辺に狩りに出かけて、獲物を捕って吉岡遺跡群B区に戻ってきたという筋書きを描くことが可能かもしれない。ところで吉岡遺跡群B区に隣接するC・D区ではB1層下部相当の石器群が認められるが、接合関係は認められていない。ただし用田鳥居前遺跡と接合があった黄玉石製の石器はC区でも断片的に出土していることから、今後さらに同一母岩か否か分析する必要があろう。いずれにしても吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の関連にとどまるものではなく、別遺跡との広範な関連性を持つことが予測され、より複雑な移動の形態が存在した蓋然性が高いと思われる。

第2点として吉岡遺跡群の発掘成果であろう。30万㎡に及ぶ高座丘陵の旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が明らかになったからである。とりわけ B5層~B3層にかけての良好な石器群が出土した。筆者は吉岡遺跡群の層位的出土例から、これらの石器群を後期旧石器というよりは中期旧石器時代最終末(相模野台地 B5層、武蔵野台地 X b 層)、台形様石器と局部磨製石斧の一群を中期旧石器時代から後期旧石器時代にかけての移行期(相模野台地 B4、武蔵野台地 X a ~ X 層)、そして縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器の出現とともに後期旧石器時代の開始期(相模野台地 B3層、武蔵野台地 VII 層)として捉えた(白石・加藤1996、白石1996・2002)。B5層の石器群は全国的に見ても出土層位が明瞭な最古級の石器群になってきたと言える。出土した台形様石器は細部加工が両側縁に加工されることはなく、一側縁ないしは一部のみに施されている。第一次剥離面の先鋭さを利用して側縁ないし基部に部分的な加工を施したナイフ状石器や先端が刺突形の鋸歯縁に施した削器他が組成され、石器石材や製作技術を B4層出土の石器群と大きく違えている。B4層は下部・中部・上部に大きく分かれる。下部は横長剥片を素材とした台形様石器と局部磨製石斧、中部はガラス質流紋岩を主石材とし

た楔形石器、上部が大形の打製石斧が出土する。そして B3層では切断手法を用いた二側縁加工のナイフ形石器・台形様石器などが製作される。大形の石刃を生産する石刃技法が認められる。このように B5層、B4層、B3層の石器群はそれぞれ画期として捉えることが可能であろう。

安斉正人氏は筆者の中期旧石器時代から後期旧石器の時代観を表面的であると批判したが (安斉2002)、筆者は机上の空論で組み立てたものではない。3年間にわたる吉岡遺跡群の発掘調査、3年以上にわたる出土品整理を通して当該時期のみならず、後続する石器群の調査の中で捉えられた結論である。最近の安斉氏は捏造問題が宮城県座散乱木遺跡の国指定史跡まで及んでから、視点を変えて相模野台地や武蔵野台地の最古級の石器群に注目するようになってきている (安斉2002)。これらの石器群を移行期であるとするならば、瓦解された斜軸尖頭器からの組み立てではない新たな視点が必要であろう。

第3点としてはB2層の豊富な石器群である。B2層下部から上部に至るまでに数枚の層位的 出土例によって切出形石器、基部加工のナイフ形石器、角錐状石器の型式学的変遷、石材変遷 が捉えられる。またその点と共に、吉岡遺跡群 C 区 B2L 層上部から出土した安山岩製(玄武 岩か)の磨石状石器が、破片を含めて304点出土した点は特記される。この磨石状石器は磨石、 石皿、台石、砥石、敲石状の石器を総称したものである。そのうち磨石が一番多く、261点が 認められた。これらの磨石状石器は礫群との石材とも異なっており、自然の礫とも考えがたい。 また近隣地域で採取されるような河原石でもないらしい(白石1997)。それではこの磨石状石 器の機能は何であろうか。磨石状石器は散乱して分布している場合もあるが、集積化した例も ある。分布を違えて接合し、完形の磨石状石器になる場合もある。そのことは破片の状態でも 移動していた可能性があろう。つまり破片でも磨石状石器は機能していた可能性が高い。①ボ イルストーン、または②木の実を磨りつぶす調理具、③複数の磨石状石器を組み合わせた投弾、 ④相模原市田名向原心4遺跡のような住居状遺構の域または小屋の壁をおさえる置き石、⑤綾 瀬市吉岡遺跡群 B3上面層の出土の石器打割具などさまざまな機能が想定されるが、今後さら に出土状態を含めて検討すべきであろう。

第4点としては藤沢市慶應義塾大学藤沢キャンパス内(SFC)遺跡のB2L下部から出土した(五十嵐1992)。箱根畑宿産の黒曜石を素材とした縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器、掻器の組み合わせよりなる。この石器群がB2Lの下位層のL3層(B3層上面)とどのような関連があるのか問題になる。ナイフ形石器の形態組成は寺尾期に近いようにも見える。つまりAT下位層の石器群の影響がAT上層まで継起するのか、そうではなくて寺尾期とは全く異なる所産なのかということである。ナイフ形石器の様相を捉える場合、確かに二側縁加工のナイフ形石器は類似するが、裏面基部調整が認められない。寺尾期に卓越していた端部加工のナイフ形石器が全く認められない点や円形掻器が発達している点は寺尾期と大きく異なっている。したがって寺尾期と SFC 遺跡 B2L 下部の石器群は異質のものと捉えたい。それでは

SFC 遺跡と B2L 下部ないし中部の石器群はどの程度類似するのであろうか。短形の掻器は岩宿 II 期に卓越する点や畑宿産の黒曜石を用いる点も共通する。さらにはナイフ形石器の中に基部加工のナイフ形石器が用いられる点である。それでは二側縁加工のナイフ形石器は岩宿 II 期には全く存在しないのであろうか。この点、量的には極めて少ないが存在していることも看過すべきではないであろう。

第5点として L2層が文化層として存在するのか否かという点である。言葉を換えて言う ならば、L2層の時期はこの相模野台地に人が住んでいたのか、または住んでいなかったのか という点である。藤沢市用田バイパス鳥居前遺跡のL2層では安山岩製の樋状剥離尖頭器と周 辺調整の石槍が出土したという(栗原1999)。大和市No.210遺跡 L2層上面ではガラス質黒色 安山岩製や粘板岩製の樋状剥離尖頭器がまとまって出土した(小池1995・1998)。注意され る点はこれらの桶状剥離尖頭器には角錐状石器が1点も共伴していない点である。そしてB1 層下部出土の樋状剥離尖頭器の石材が信州産黒曜石製を多く用いているのに対して、ガラス質 黒色安山岩を用いている点で異質と言えよう。この点栗原伸好氏は相模原下九沢山谷遺跡や大 和市高座渋谷団地内遺跡 B2層上部出土の左右非対称形石槍とB1層下部出土の樋状剥離尖頭 器に介在する資料として、その関連性を重視している(栗原1999)。筆者もこの点栗原氏の観 点に賛意を表したい。それは①石材の点で B2層上部出土の石槍の石材に共通性が認められる こと。②石槍の一側縁に一次剥離面ないし樋状剥離面を形成してナイフ形石器の擬似的な刃線 部を形成していること。③左右非対称形にすることなどがあげられる。ただ問題は用田バイパ スの樋状剥離尖頭器類品の先端部の形成が樋状剥離面のみならず、上部から尖らせるような調 整剥離が施されている点にみえる。このような先端部からの調整剥離は石槍製作には顕著でな く、むしろ彫器的な手法にも見えるので、栗原氏の分析に期待したい。

第6点として最も古い細石器は相模野 L1H 層上部で出土した細石器で、藤沢市代官山遺跡 (砂田1986) や綾瀬市吉岡遺跡群 B区 (砂田・仲田1998) で認められている。これらの細石器は船底状の代官山型細石核や角柱状の野岳型に類似した細石核を主体としたものである。それらの細石器に伴って少量の両面、片面、半両面加工の木葉形尖頭器が出土している。石材は細石核が神津島産の黒曜石が凌駕しているのに対して、ガラス質黒色安山岩や信州産の黒曜石を用いている。このことから細石器の出現時には在来からの石槍をそのまま伴って推移しているものと考えられる。このような状況は B0層出土の大和市下鶴間長堀遺跡の船野型細石核を主とした細石器群と同一層で約20m離れて石槍が同一層で出土している。調査者は細石器を a群、石槍を b 群として取り扱っている(堤1984、安藤1984)。また同市上草柳遺跡でも2mの至近距離で細石器と石槍が分布している(堤1984)。問題は B0層上面から野岳型細石核を主に少量の船底型細石核を出土した綾瀬市報恩寺遺跡では石槍の共伴は認められない(鈴木・矢島1979)。大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点 B0層下底~中位の細石核にも石槍は伴っていない(堤1986)。L1S 層に至ると、大和市長堀北遺跡 L1S 層中位で安山岩製の湧別技法によ

る船底型形の細石核と共に最大幅器体の中位にある木葉形尖頭器が伴っている(小池1990・1991)。そして大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点L1S層上部で削片系の細石核と石槍そして土器が伴って出土している(相田・小池1986)。これらの点から、細石器と石槍が細石器の起源および終末の段階に至るまで併存することは充分考えられる。それでは野岳型細石核のように石槍を伴わない事例をどのように考えればいいのであろうか。この点についてはかつて触れたことがあるが、本来的には細石器と石槍は別系統の石器群と考えられる。そして石槍が継起している段階に、細石器を主とした一群が急激に卓越し、石槍と対峙したものと推定される。その折りに、細石器群の中に一部石槍が取り入れ得られたものであろう。このように考えると、野岳型細石核を主とした細石器群の段階は石槍石器群が衰退したものではなく、両者併存し、より顕著に対峙していたものと考えるのが現実的な解釈かもしれない。

第7点は、相模野台地において明瞭な頁岩製の湧別技法による細石核と荒屋型彫器は明らかではない(1)。 橋本勝雄氏は1986年の論稿で、利根川以北と以南に区分し、以南は先の石器群が顕著でない点を指摘している(橋本1986)。それにとって替わるように、在地の石材を利用した船野型細石核、大形の石槍や局部磨製石斧が出土している。大宮台地や下総台地とりわけ後者の地域では、削片系の細石核と荒屋型彫器が出土している点で、相模野の状況とは大きく異なっている。問題はこれらの石器群が相模野のどの層準に当たるのか、いまいち明らかになっていない。相模野で近在地石材による湧別技法が認められるのは長堀北遺跡 L1S 層中位出土の細石核であろう(小池1990・1991)。そして大和市上野遺跡第1地点 L1S 層上部や相模原市勝坂遺跡(内川・高橋1993)では縄文土器と共に削片系の細石核が出土する。このように見ると、頁岩製の湧別技法による細石核と荒屋型彫器は土器を伴っていないことからL1S 層下部ないしは B0層上部までさかのぼる可能性が高い。佐野勝宏氏は北方系細石器が後出につれて頁岩製の湧別技法による細石核と荒屋型彫器を製作しなくなってくる点を指摘した(佐野2002)。もしその指摘が正しいならば、初期の湧別技法による頁岩製の細石核と荒屋型彫器を持つ集団は相模野台地まで及ばず、終末期段階に至って長堀北遺跡に見られるように、在地石材による湧別技法細石核がもたらせられたものと見ることができよう。

第8点として横須賀市打木原遺跡の落とし穴状遺構の発掘調査であろう(佐藤2002)。B3層中で南から北に緩く傾斜する丘陵に沿って5基の土坑が一線上で検出された。これらの落とし穴状の遺構は1986年の発掘調査で検出されていた3基の土坑と連続する土坑と思われる(佐藤1990)。この土坑は構築時期や形態を見ても静岡県初音ケ原遺跡例に類似することは衆目の一致するところである。初音ケ原遺跡の土坑は列状をなして構築されていることから、落とし穴というよりは追い込み猟による柵列と筆者は考える。打木原遺跡の柵列の土坑も同様のものであろう。約28,000年前の土坑の追跡調査に期待したい。

第9点として、約18,000年前の田名向原No.4遺跡では長径約10mの住居状遺構が検出された (麻生1997)。住居内には多量の炭化物が散在し、10本の柱穴、2基の焼土址、外周円礫

がめぐり、住居内と外を境としている。出土遺物は多量の石槍と少量のナイフ形石器が出土した。この住居状遺構は相模川の縁に立地しており、当時は水辺に接するような場であった蓋然性が高い。そうであるならば、漁撈に関連する作業小屋の可能性もあろう。縄文時代草創期の東京都前田耕地遺跡ではサケ科の鰐歯が多量に出土し、この遺構の性格が類推された(加藤1985)。田名向原MA遺跡の石槍の系譜上に前田耕地遺跡が存在するとするならば、この住居状遺構も漁撈に関連する施設と考えられる。多量に検出される炭化物片も魚を加工するための燃料の可能性もあろう。

以上9点について相模野台地における石器群の評価を行ってきた。相模野台地における旧石器時代の検出遺構や出土遺物は層位的出土例をもって特筆される資料が多いことは事実であろう。しかしそれをもって相模野石器群を唯一のものとして他の地域性や歴史を無視してはならない。相模野旧石器編年の到達点も重要だが、それは相模野旧石器研究27年の成果の一つであって、今まさに研究史を振り返り、今後の研究の方向性を模索しなければならないであろう。

### 註

(1) 相模原市横山坂遺跡の発掘調査によって、荒屋型彫器が出土している点を安藤洋一氏からかってご教示いただいたことがあった。石器を実見していないので、明らかではない。

### 参考文献

相田薫・小池聡 1986「第Ⅱ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書21

麻生順司 1997「相模原市田名向原No.4遺跡」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

安斉正人 1988「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行-前・中期/後期旧石器時代過渡期の研究-」『先史考古学研究』1

安斉正人 2002「後期旧石器時代開始期前後の石器群」『考古学ジャーナル』 495

安藤史郎 1984「遺構と遺物第1節第1文化層 (b)」『一般国道246号 (大和・厚木バイパス) 地域内遺跡発掘調査報告 告Ⅲ』大和市文化財調査報告書17

五十嵐彰 1992「第Ⅳ章 第Ⅳ文化層」『湘南藤沢キャンパス内遺跡2 岩宿時代』

織笠 昭 1987「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』13

織笠 昭 1989「尖頭器文化とは何か-文化、考古学的文化、石器文化-」『長野県考古学会誌』59・60

岡村道雄 1972「石子原遺跡出土石器群」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』47

内川隆・高橋真実 1993「第4節縄文時代草創期」『勝坂遺跡第45次調査』

加藤暁生 1985「前田耕地遺跡出土の魚骨鰐歯について」『東京の遺跡』

かながわ考古学財団旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1996「旧石器時代後半にお ける石器群の諸問題」『かながわの考古学』研究紀要1

栗原伸好 1999「相模野第Ⅲ期と第Ⅳ期の石器群の連続性の存在に関する考察」『神奈川考古』35

小池 聡 1990『長堀北遺跡資料編』大和市文化財調査報告書39

小池 聡 1991『長堀北遺跡本文編』大和市文化財調査報告書39

小池 聡 1995「旧石器時代の調査」『大和市県営高座渋谷団地内遺跡』

小池 聡 1998「相模野の有樋尖頭器-月見野遺跡群上野遺跡第10地点資料とその他の出土例から-」 『神奈川考古』34

### 相模野台地における旧石器時代の成果と課題(白石)

佐藤明生 1990「先土器時代の遺構と遺物」『長井台地遺跡群』横須賀市文化財調査報告書20

佐藤明生 2002「横須賀市打木原遺跡」『第8回石器文化研究交流会発表要旨』

佐野勝宏 2002「北方系細石刃石器群を残した人類の行動」『考古学研究』49-1

白石浩之・加藤千恵子 1996『吉岡遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告7

白石浩之 1996「中期旧石器時代終末から後期旧石器時代にかけての石器群に対する新視点」『神奈川考古』32

白石浩之 1998「第3節 B1層下部」『吉岡遺跡群VI』かながわ考古学財団調査報告39

白石浩之 1997「第IV章 旧石器時代B2層」『吉岡遺跡VI』かながわ考古学財団調査報告21

白石浩之 2002 『旧石器時代の社会と文化』 日本史リブレット 1 山川出版社

鈴木次郎・矢島國雄 1979「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」『神奈川考古』6

鈴木敏中・伊藤恒彦・前嶋秀張編 1999『静岡県三島市初音ケ原遺跡』

砂田佳弘 1986「先土器時代」『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センタ-調査報告11

砂田佳弘・仲田大人 1998「B区旧石器時代L1H層」『吉岡遺跡群V』かながわ考古学財団調査報告38

諏訪間順 1998「相模野台地における石器群の変遷について-層位的出土例の検討による石器群の段階的 把握-」『神奈川考古』24

諏訪間順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考古学 会考古学講座

堤 隆 1984「上草柳第1地点遺跡」『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告 II』 大和市文化財調査報告書15

堤 隆 1984「遺構と遺物第1節第1文化層 (a)」『一般国道246号 (大和・厚木バイパス) 地域内遺跡発掘調査報告Ⅲ』大和市文化財調査報告書17

堤 隆 1986「第3節第Ⅲ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書21

中村喜代重 1979「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『ナイフ形石器文化終末期の問題』神奈 川考古7

橋本勝雄 1986「東日本の細石器文化―東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究動向―」『考古学 ジャーナル』306

矢島國雄・鈴木次郎 1974「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1

吉田政行・栗原伸好 2001 「吉岡遺跡群 B 区と用田鳥居前遺跡との遺跡間接合」『第7回石器文化研究交流会発表要旨』

# 時間軸としての編年の可能性

御 堂 島 正

平成12年度神奈川県考古学会考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」(神奈川県考古学会2001)をみると、編年の用語は、二重の意味で用いられているように思われる。一つは、時間軸として、もう一つは時期区分として、である。前者は、時間的指標とするために石器群を継起する順序に整理することを意味する(たとえば、諏訪間2001:1「最も精緻な地域編年」)。後者は、ある視点に沿って、石器群を時間軸上に区切ることを指す(たとえば、諏訪間2001:16の「遺跡構造編年」「社会構造編年」という考え、白石2001:92「画期として捉えたもの」など)。両者は混在して用いられているようである。

まず、前者の意味、すなわち時間軸の設定という意味で考えてみる。

相模野台地の旧石器編年は、「編年の構築の際に石器群の層位的な出土例を基本とし」、「新出器種の出現を基準にするものの、その器種が出現する背景としての石器製作技術総体(技術基盤)を構造的に捉え、その変化を編年の基準としている」(諏訪間2001:1)。あるいは、「層位と遺跡分布を把握しながら石器組成や石器製作技術およびその構造的特質の検討によって、編年がなされている」(織笠2001:55)。現在、5期区分(鈴木2001)、それをさらに細分した形の12段階変遷(諏訪間2001)が提示され、細部に異論はあるものの、概ね他の研究者の支持を得ているように見受けられる。

編年は、考古学研究の基礎をなすものであり、できるかぎり正確に、細かく行うことが考古 学の進展に貢献するものとなるという考えには原則的に異論はない。

さて、相模野旧石器編年は、冒頭に示した現在の手続きでどこまで精細に行うことが可能であろうか。現在の方法でさらに推し進めるためには、次のような問題点や課題がある。

### 層位区分の問題

相模野旧石器編年は、石器群の技術的構造を考慮するとはいえ、基本的には層位的出土例に基づくものである。相模野台地の立川ローム層区分は、原則的に黒色帯を目印にして行われているもので、これ以上細分することは、個別の遺跡では可能な場合もあるかも知れないが、困難である。現在 AT 下位については、石器群の発見例が少ないが、AT 上位では各層位に対応してどのような石器群が出土するかはほぼ把握されている。とくに AT 上位では、新たな層位的出土例が加わる可能性は低い。

### 出土層位認定の問題

石器群がどの層位から出土したかの認定は、微妙な部分がある。黒色帯と黄褐色ローム層と

の境界は漸移的であり、厳密に各調査者が同様の分層をするのは難しい (小池2001:34)。また、黒色帯の成因にも関わるが、土壌化の進行度合い、地形等によるローム層の堆積状態、堆積した土の流出等により、堆積層は遺跡ごとに一律ではない。出土層位はともかくとしても、その上面か上部か(あるいは中部か)になるとかなり不安定なものになる。

### 遺物の上下移動の問題

土中の石器群は、上下方向に分散して出土することが知られている(小池2001:33)。石器群が埋没した後、凍結融解作用などの自然現象によって、本来同一面にあったものが移動したと考えられる(御堂島・上本1987)。

石器群の垂直分布を調べ、最も石器類が集中する深度、または石器群と関連する礫群の深度を基に、接合資料等を検討し、重複する石器群を分離することが行われている。しかし、石材がほとんど同じで、深度差が小さいものであれば、個々の石器類の上下方向への移動のために、正確に分離することは困難となる。

### 石器群の重複の問題

旧石器時代の人々は、移動生活を送り、遺跡に回帰すると考えられている。その結果として、時期の異なる石器群が重複・混合することになる。一般的には、その石器群間に間層が形成されていない限り、分離することは難しい。

### 石器群の技術構造変化の問題

一遺跡の一石器群にすべての技術が現れているわけではなく、複数の技術的レパートリーの中から、経済的・機能的・集団的要請によって技術が選択されるものであるとされる(佐藤1988)。また、石器群は組織化されており、石材環境、食物資源環境、活動内容、移動形態、社会関係等によって変化するものである(阿子島1989)。そうであるとすれば、大きな時間的流れのなかで、時間の変化に応じた器種組成や技術構造の変化を知ることは可能と考えられるが、時間幅が狭くなれば、器種組成や技術上の変化が時間の変化に対応したものかどうか判断するのは相当難しいし、そうでない可能性が高い。

以上の諸点を考慮すると、新相模野編年誕生への期待(白石2001)にも関わらず、現在の方法による時間指標としての編年は、ほぼ限界に達していると思われる。ただし、今後も、発見例の少ない層からの出土資料の増加等により、部分的な追加や細部の修正が行われることは予測される。また、各段階細分の仮説が提示されることはあると予想されるが、多くの場合、前述の理由で層位的な裏付けをとることは難しい。併せて、段階を細分する場合には、時間的変化以外の要因ではないことを示さなければならない。

旧石器時代の数値年代は、まだ確実ではないが、現状でもっとも可能性のある年代として、

後期旧石器時代の開始を35000年前、終末を16000年前とすると、その間は約1万9千年間となる。これを単純に12で割ると、諏訪間編年の一段階は約1600年間である。研究の目的にもよるが、時間的な最小単位が1600年間というのは、かなり大きい。もともと、器種組成や技術構造が数十年単位で、しかも我々に認識可能な程度に、変化するほど時間に対して常に敏感とは考えられない。厚いローム層に恵まれた相模野台地といえども、旧石器時代という長期に渡る年代幅からすれば、他の堆積層の薄い地域と同じ問題に行き着くことになる。

では、どのようにしたらもっと年代幅の小さな編年が可能だろうか。

一つは、テフラカタログ (Yナンバー) に基づく層位区分 (上本ほか1994) が有効かもしれない。現状の土層区分よりさらに細かな区分が可能になるかもしれないからである。しかし、上下移動はテフラにも起こりそうであるし、誰でも同定が可能というわけではなく、編年基準としての有効性がいまひとつはっきりしない。

もう一つは、自然科学的年代測定による方法である。14C年代測定とその較正は、相当程度正確な年代値をもたらす可能性がある。もし、石器群に伴う汚染のない十分な測定試料が得られれば、較正暦年代をもとに編年することができるだろう。しかし、まだ、較正曲線は整備途上にあるし、固有の誤差も考慮する必要がある。また、有効な測定試料を採取する努力も必要となる(御堂島2001)。

一方、時期区分としての編年の場合は、異なる視点の導入によって新たな編年が提示される可能性が高い。この意味での編年の場合、画期とされたものが何を意味しているのかが説明されなければならない。白石(2001:93)が指摘するように、石器群の技術構造による区分と自然層による区分が入り混じったものとすれば、画期の意味を失うことになる。

以上に述べたことは、編年研究を行っていない者のいわば感想である。このようなことは、 すでに承知の上で研究が進められているのかもしれない。先学のご教示をお願いしたい。

### 引用文献

阿子島香 1989『石器の使用痕』、ニュー・サイエンス社

上本進二・上杉 陽・由井将雄・米澤 宏・中村喜代重 1994「南関東の立川ローム層と考古学土層」 『神奈川考古』30、159-175頁

織笠 昭 2001「相模野ナイフ形石器文化の終焉」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考 古学会考古学講座、55-72頁

神奈川県考古学会編 2001 『相模野旧石器編年の到達点』、平成12年度神奈川県考古学会考古学講座

小池 聡 2001「相模野台地の立地と文化層」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考古学 会考古学講座、21-34頁

佐藤宏之 1988「台形様石器研究序説」『考古学雑誌』73-3、1-37頁

白石浩之 2001「相模野編年の問題点」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考古学会考古 学講座、91-100頁

鈴木次郎 2001「ナイフ形石器文化前半期の様相」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考 古学会考古学講座、35-54頁

### 時間軸としての編年の可能性 (御堂島)

- 諏訪間 順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考古 学会考古学講座、1-20頁
- 御堂島 正 2001「相模野旧石器編年の年代観(14C年代と暦年代)」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考古学会考古学講座、101-108頁
- 御堂島 正・上本進二 1987「遺物の水平・垂直移動」『神奈川考古』23、 7-29頁

# 相模野旧石器編年研究の到達点と未到達点

伊藤 健

### 相模野編年と武蔵野編年

相模野編年は、何に到達し何に到達しなかったのだろうか。本評は、講座で講演された方々に代表される、相模野台地においてなされてきた編年研究、及びその研究史に対するコメントである。なお本稿は、当日の講座においてコメントした内容を下敷きとしていることをお断りする。

さて、講演後の討論では、講演者が講演順に壇上の下手から並ばれた。細かいことは覚えていないが、上手側の白石浩之氏と織笠 昭氏、下手側の鈴木次郎氏と諏訪間 順氏の間で意見の相違があり討論が交わされた。このことは、実は編年研究の歴史を象徴している。というのは、講演者は相模野台地を主なフィールドとされているが、下手側の諏訪間氏、小池 聡氏、鈴木氏が相模野台地でその研究のほとんどを培ってこられたのと対照的に、上手側の白石氏、砂田佳弘氏、織笠氏は研究の前半生を武蔵野台地で活躍されたのである。両者の意見相違は、相模野台地での研究と武蔵野台地のそれとの相違を如実に表すものだったと見ることができる。

相模野台地と武蔵野台地。今でこそ武蔵野編年が使用される機会は少なくなってしまったが、1970年代、武蔵野編年は相模野編年とともに日本における後期旧石器時代研究を代表する編年研究であった(小林・小田ほか1971、白石1973、織笠ほか1976他)。その武蔵野編年は、石器の技術的構造を念頭に、石器器種の変遷もしくはナイフ形石器の型式学的差異によって区分されたものである。そこでは時期区分の枠組みを示すというよりは、石器群の変動を明らかにするという側面が強い。

### 相模野編年の功績と問題点

一方、相模野編年は、鈴木氏と矢島國雄氏による相模野台地編年と諏訪間氏による「諏訪間編年」に代表される(矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978・1979、諏訪間1988他)。この相模野編年は、石器の変遷だけではなく、石器器種組成、石器製作技術、石材環境あるいは遺跡の多寡などの諸属性を網羅的に捉えることでなされている。加えて、層序を時間的様相に照射するものとして重視していることも特徴である。その意味で、相模野編年は時期区分の枠組みを明らかにし、画期を確定するという側面が強い。

この辺りの研究史は筆者の旧稿に触れているが、武蔵野編年が杉原荘介氏、芹沢長介氏らに代表される示準石器編年観の流れを汲んでいるのに対し、相模野編年が組成論編年観に拠っており、背景からして違っている(伊藤1991・1999、杉原1953・1956、芹沢1954)。

さて、相模野編年の功績は次の二つである。第一は標準化である。そこでは石器群をカタログとして示すことによって、編年研究を誰もが理解できる研究にすることができた。それによって、研究の裾野を広げる効果がもたらされたのである。

第二に、列島各地の旧石器編年の代表例となり、列島内の編年比較上の標準資料となった点である。列島内の各地域の編年にあたっては地域性を重視するため列島全体との比較を避ける研究の方向もあるにはあるが、列島全体の編年の中で各地のそれを捉えようとする際には、多くの場合で相模野編年が全体編年の標準となった。

一方、誤解を恐れずあえて相模野編年の問題点を指摘すると、次の三点があげられる。第一に、カタログ化と時期区分の枠組み作りを特徴としたため、時代観の把握が些か静的になった点である。そこには、諸属性相互の関連に注目し、石器群、遺跡群の構造ひいては人類社会の様相を明らかにしようという方向性は明確ではない。社会構造への言及となると編年研究の枠を超えるという考えもあろうが、諏訪間氏が指摘するように遺跡構造編年、社会構造編年へ昇華していく視点が不可欠である(諏訪間2001)。

第二に、相模野編年に欠かせない層序の、編年研究における位置付けについてである。層厚の厚い相模野台地においては、層序をどう捉え、石器群をどのように層序に対比させるかが重要である。しかし、縄文土器編年が基本的に出土層序の前後に拠って編まれたのではないことからも明らかなように、層序は編年の必要条件ではない。近年、絶対年代への注目が集まっているが、多くの石器群の暦年代を年代測定法によって知ることが可能となったならば、編年研究における層序の役割は変更を余儀なくされるであろう(御堂島2001ほか)。編年研究における層序の役割を客観的に見つめ直す時機に来ている。

最後に、相模野編年が、列島全体の編年の標準として扱われることの意義である。このことは、本来相模野編年に限らない編年研究の全体の問題でもある。誰も相模野編年を明確に列島全体の編年の標準にしようと画策したわけではないが、多くの研究者が列島各地の石器群を相模野編年のいずれの段階に相当させるかという議論を重ねてきた。国府型ナイフ形石器や角錐状石器が列島内に広く分布することを考えれば、地域間の対比は当然の帰結であり、何らかの目盛りを持たなければならない。しかし、各地域の独自性を鑑みた場合、各地域の編年と時期区分が均しく対応するのかどうか何も分かっていない。その際、相模野台地が対比の標準である必然はほとんどない。特に確証があって記すわけではないが、列島において大陸から最も遠い相模野台地(南関東地方)よりも、近畿地方こそが、対比上より標準的な地域ではあったのではと考えている。

諏訪間氏は、段階Vを約4,000年間、段階VIを概ね1,000年以下の期間とされている(諏訪間2002)。各期の時間幅が一定ではないことが明白となった現状にあって、短期で変化したり長期間継続したりする要因を明らかにしたうえでないと、各地域の編年対比はあまり意味がないと考えるべきである。

### 編年研究の定点

恐らく、編年研究を時期区分の枠組み作りと捉え、その部分に対してのみ論評するから、以上のような問題点が列挙されるのであろう。編年研究は、既に遺跡構造あるいは地域社会の構造の研究とともに、より関連付けられた研究分野として確立されつつある。ただ、相模野編年研究は編年研究として特殊化することで世界に冠たる業績を積み重ねてきたからこそ、そこに一定の到達感を感じるとともに、看据えてこなかった研究感があったのだと感じるところである。

筆者は、相模野台地と対峙されてきた武蔵野台地をフィールドとする研究者の一人である。 武蔵野台地で、研究者のネットワークを構築して編年研究を発展させることができなかったの は、筆者を含めた武蔵野台地をフィールドとする研究者の痛恨事である。しかし、編年研究か ら次第に遺跡構造研究へ比重を移していったのは、相模野編年研究とは裏返しの、筆者自身の 研究の問いかけである。

### 参考文献

伊藤 健 1991「ナイフ形石器研究の視座と定点」『東海史学』第26号

伊藤 健 1999「地域区分論」『石器文化研究』7

織笠 昭ほか 1976「埼玉県における先土器時代編年の概要」『大古里遺跡発掘調査報告書』

神奈川考古同人会編 1979『神奈川考古7 ナイフ形石器文化終末期の問題 特集』

神奈川考古同人会編 1980『神奈川考古8 特集 ナイフ形石器文化終末期の問題 (Ⅱ)』

小林達雄・小田静夫ほか 1971「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4

白石浩之 1973「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」『物質文化』21

杉原荘介 1953「日本における石器文化の階梯について」『考古学雑誌』39-2

杉原荘介 1956「縄文文化以前の石器文化」『日本考古学講座』3

諏訪間 順 1988「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24

諏訪間 順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」 『相模野旧石器編年の到達点』

諏訪間 順 2002「相模野旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』72-6

芹沢長介 1954「関東及中部地方における無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『駿台史 学』4

鈴木次郎・矢島國雄 1978「先土器時代の石器群とその変遷」『日本考古学を学ぶ』 1 (旧版)

鈴木次郎・矢島國雄 1979「相模野台地におけるナイフ形石器文化終末期の」『神奈川考古』7

御堂島 正 2001「相模野旧石器編年の年代観」『相模野旧石器編年の到達点』

矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1

# 相模野旧石器編年における 王子ノ台遺跡出土石器群の不可視性

五 十 嵐 彰

■「論文というものは、テーマに見合った資料を集めて、自分の立てた説の正しさを主張すればいいのだから、裏を返せば都合の悪い資料は必要以上に取りあげることはしなくてもよいし、その責任もない。」(阿部2002)

本当にそうなのだろうか。後に都合の悪い資料を指摘されて論が崩壊するような事例は論外 として、都合の悪い資料を必要・不必要の区別なしに取りあげ、なおかつ「自分の立てた説の 正しさ」を主張するのが科学的な手続きとしてのあるべき姿ではないだろうか。

■「社会を動かしている力の多くは、それぞれの主体に固有な -この言葉のあらゆる意味における- interest (利益=権利=関心=所有権など)ですが、そうした interest によって動機付けられた自己を他者の方へと開いていくこと、他者の interest との調停へと向かうことが大事だと思います。そのとき、そうした対話を導く原理のひとつは公正さです。公正さは、自己と他者のあいだの関係における実践的な意味での一般性です。それは「正義」という理念ほど強力ではありませんが、しかしそれだからこそ、いっそうその場その場における対話を導く原理として有効です。そして、公正さのセンスというものも、学問の行為を貫くきわめて大事なファクターなのです。先行する諸論文に対して公正であるかどうか、あるいは、扱っている対象に対して公正であるかどうか、自分の勝手な思い込みから相手を誤解していないかどうか・・・学問をするということは、そうした公正さへの不断の気遣いを実践することでもあるのです。」(小林康1994)

こうした基本的な原則の上で、日本旧石器研究で現在なされなければならないのは、何が扱われているのか何が述べられているのかについて議論するのではなく、むしろ何が扱われていないのか何が述べられていないのかについて、その理由を冷静に考究することである。

- ■「日本の旧石器時代に石鏃ありという提言は石器単体のみならず、それを活用する道具立て、動植物の様相、対象獣の限定、狩猟法の開発、ヒトの集団と居住のあり方など、当時の環境・生態系そのものを根底から考え直さざるを得ない一大パニックと言えるのである。その意味でも日本における旧石器時代の石鏃はあまりにも唐突すぎる。」(砂田1997)
- ■「相模野旧石器の編年の網の目は、繕いつつもどのような石器群が出現しようとも、直接的にその編み目に投げ込むことが可能である。」(砂田2000)

相模野旧石器編年の最大の問題点は、平塚市王子ノ台遺跡出土石器群を意識的にあるいは無 意識的に回避していることである。そうした意味で、王子ノ台遺跡出土石器群をどのように評 価するか、否、視野に入っているかどうかが、相模野旧石器編年の試金石となる。その答えが、 欠落・無視・排除・忌避あるいは結果としての黙認であるならば、現在の研究枠組みの何処か に何らかの問題があるのだろう。

王子ノ台遺跡出土石器群の何がどのように問題なのかを、整理してみよう。

第一に石材の産地について、北海道白滝産という点である。それでは、例えばその石器が長野県霧ヶ峰産であれば、どうなのか。第二に石器形態すなわち「石鏃」に類似するという形である。それでは、例えばその石器が「ナイフ形石器」であれば、どうなのか。第三に石器群が出土した層位(B2L 層最下部: Y-123)である。それでは、例えばその石が縄紋時代の包含層から出土したならば、どうなのか。

こうした考古資料が有する三種類の属性(産地・層位・形態)について、以下のように組み合わせた資料が平塚市王子ノ台遺跡から出土した場合を考えてみよう。

ケース1:白滝産の石鏃がローム層から出土した。

ケース2:白滝産のナイフ形石器がローム層から出土した。

ケース3:白滝産の石鏃が黒色土から出土した。

ケース4:白滝産のナイフ形石器が黒色土から出土した。

ケース5:霧ヶ峰産の石鏃がローム層から出土した。

ケース6:霧ヶ峰産のナイフ形石器がローム層から出土した。

ケース7:霧ヶ峰産の石鏃が黒色土から出土した。

ケース8:霧ヶ峰産のナイフ形石器が黒色土から出土した。

関東地方においても同じ様な事例が存在する組み合わせは、ケース6・7・8である。ケース1・5は、「ローム層から石鏃が出土した」という問題(石器編年)である。ケース1・2・3・4は、「関東地方に北海道産の石材が運搬された」という問題(石材流通)である。そしてケース1は、石器編年と石材流通の二つの問題が複合している当該事例である。

「一大パニック」と評されたケース5はもとより「驚天動地」のケース1ですら、何らかの説明は可能であろう。なぜなら表面採集された縄紋石器群が東アジア前期旧石器編年の枠組みで説明されてきたし、「性交を通した祭祀が行われた」という「石器埋納遺構2」についても認知考古学から何ら異議は唱えられなかったのである。

- ■「しかしながら、実をいうと、集会を終えた今になっても、あの小さな石器の位置付けについては、確たる結論を得るにはいたっていません。」(西秋1997)
- ■「かつて、東海大学湘南キャンパスの発掘調査で、北海道産の黒曜石、そしてその黒曜石製石鏃がL3層(丹沢パミス混じりのテフラ)から出土して、旧石器研究者は驚天動地の思いをした。そして、周辺の研究者グループは検討しつつ、その問題点を分析し、現在は出土した事実が、そのままヒトの歴史的事実を意味するわけではない、という大体そうした認識に落ち着くに到っている。」(小林2001)

「石鏃様石器」には、褐鉄鉱の線状痕跡も黒色土の残存も認められない。発掘時のローム土に記された雌型も現在では確認できない。発掘区周辺に残された部分の発掘もなされていない。「出土した事実が、歴史的事実を意味しない」とは、どういう意味なのだろうか。そしてどのような「論理」によって「そうした認識に落ち着く」に到ったのか、論証過程は不明である。

■「われわれの最終的な目的が、事実もしくは真理そのものの発見・追求にあるにしても、現実にはつねに「学問的真実」を「論理」によって確認するにとどまることは、考古学のみならずすべての学問の歴史がしめすところである。とすれば、われわれが論理の操作・検証をわがものとしていないという事態は、われわれ自身の学問にいまだ未熟なものがふくまれているということであり、さらにその事実に大多数の研究者が目をむけないとすれば、それはわれわれの学問に病的な傾向が潜伏しているということである。」(林1971)

日本旧石器研究における未熟さと病的傾向は、30年以上の時が経過しても一向に改善されていない。研究対象について「本物」と「偽物」を判断する能力は、モノを扱う学問の基本的要件とされている。モノを研究対象とした諸学問の一つである「考古学」は、実はその識別能力という点で、重大な欠陥を有しているのではあるまいか? というよりは、むしろ「本物」と「偽物」を判断する手法が学問という営みにおいて「基本的要件である」という言説自体が問われるべきであろうか。これは、「恐るべき知らせ」である。しかし前期旧石器遺跡を主とする捏造事件が明るみに出した事柄には、考古学に限定されない学問的営為そのものが内包する本質的問題が含まれている。

相模野旧石器編年における王子ノ台遺跡出土石器群と同じように、私たちはその点について も目をそらし続けるわけにはいかない。

■「学生に向かって歴史的、経済的状況を現実に即して語ると、彼らはよく怒り出す。裏切られたような顔で教師にこう切り返すのだ。「ではどうすれば良いんですか。解決策もなしにどうしてそんな話をするんですか。」これまでずっと彼らの教育はいつも最後に幸せが約束され、どんな問題も「進歩」が解決すると教えられてきた。きまりを破るようなものは教えられてこなかったのである。しかし学者はそのようなきまりに縛られない。だからこそ真の学問は知性ではなく知的勇気が問われるのだ(入試でこれを試しはしないけれど)。私たちの宇宙船は航行を続けるかもしれないし、航路を見失うかもしれない。窓の外にはプラトン(あるいはマルクス)が描いたような秩序と真理と正義の世界が急速に近づいてくるのがみえるかもしれない。あるいは宇宙の虚無しか見えないのかもしれない。学問する者は前方にそのどちらがあるかを知らずに、カーテンをあけ外を見ようとする。もしそこに虚無を見るならば、彼は引き返し、人々に外を見なさい、この世界は虚空のただ中に漂う人工の宇宙船だと分かるでしょうと告げるのだ。そしてもし人びとが、何故このように悲惨な、恐るべき知らせをもたらすのかと問うたら、彼は何と答えるべきか。答えはいくらでもある。自己を認識することで人間は強くなるかもしれない。社会に新しい概念・つまり可能性と共同行動・をうみ出す力となるかもしれな

い。人びとが真の状況を理解すれば、苦境から抜け出す道も見出せるだろう、少なくとも希望のある方向へ一歩を踏み出せるだろう。このように彼は好きな答えをすればよい。その答えは、当たるかもしれないし、外れるかもしれない。しかしこれらは彼の第一の答えではない。学問する者として彼はまずこう答えればよいのだ。「なぜなら事実その通りなのだから」と。」(C・ダグラス1982)

### 引用・参考文献

阿部芳郎 2002『縄文のくらしを掘る』岩波ジュニア新書、33頁

小林康夫 1994「学問の行為論 誰のための真理か」『知の技法』、13頁

砂田佳弘 1997「関東ローム層出土の鏃形石器」『東海大学校地内遺跡調査団報告7』、137頁

砂田佳弘 2000「編年研究の現状と課題、おわりに」『かながわの考古学 研究紀要5』、17頁

西秋良宏 1997「第2回ラウンド・テーブルに寄せて」『東海大学校地内遺跡調査団報告7』、94頁

小林達雄 2001「前期旧石器問題の意味するもの」『日本考古学協会第67回総会 研究発表要旨』、205頁

林 謙作 1971「旧石器時代」『考古学ジャーナル』55、5頁

C・ダグラス・ラミス 1982 『影の学問、窓の学問』 晶文社、28頁

# 相模野旧石器編年と層位

栗 原 伸 好

相模野台地は、富士・箱根を供給源とする火山灰に厚く覆われている。今回の考古学講座で取り上げられた後期旧石器時代の遺物の包含層である立川ローム層も例外ではなく、他地域に比べ極めて厚く安定した土層の堆積状況が認められる。また、立川ローム層中には複数の暗色帯が観察できるため、1遺跡内あるいは複数遺跡間における石器群の時間的対応関係を把握するには極めて恵まれた地域である。このため、諏訪間順が指摘するように、本台地は旧石器時代研究における格好のフィールドと言えよう。特に今回対象とした編年研究は、層位的出土例に基づいていることもあり、他地域における編年研究に少なからぬ影響を及ぼしてきたものと考えられる。

しかし、本台地上における編年研究の大前提とも言えるこの「層位」については、小池聡が 指摘するように、些かの不安定要素が存在しているということも十分認識しておく必要がある。

本台地上の土層の堆積状況は、前述の通り厚く安定しており、台地のほぼ全域で同様の層位認識をすることができる。このため、各遺跡間における層位名も基本的にはL1S・BB0・L1H・・・という同一名称で表現されている。しかし、この様な同一名称で表現された各層位は、本当に「同一の層位」なのだろうか。

確かに相模野台地上は、これまで述べてきたように土層の堆積状況が極めて良好であり、複数の黒色帯の存在も確認されている。しかし、1遺跡内における土層の堆積状況を観察すると、各層位間の差異が比較的小さい場合も多々認められる。特に暗色帯については、BB0・BB1・BB5の3層は黒色化が不安定であり、場所によっては確認が困難であるという指摘が既に相模野旧石器編年研究の初期段階である「相模野台地における先土器時代研究の現状」の中で矢島國雄・鈴木次郎により指摘されている(矢島・鈴木1976)。つまり、相模野台地における暗色帯には、従来から認識されている上下の層に対して黒味が増す、いわゆる「暗色帯」と、黒味は確認できないが、色調以外の諸特徴から他の遺跡の暗色帯に相当すると考えられる「暗色帯相当層」が混在しているものと考えられる。但し、これらは基本的に両者の内容上の対応関係が1対1であるならば、1つの層のバラエティーと考えられ、特に問題は生じない。しかし、実際の調査上では、調査地域の広域化や調査および調査担当者の多様化という問題等もあり、必ずしも同一名称で表現された層位が、他の遺跡の同一名称の層位と明確な対応関係を示しているかという点にはやや疑問を感じざるを得ない。

筆者が数年来発掘調査を担当した藤沢市北部に位置する用田バイパス関連遺跡群は、調査範囲が東西約2kmにおよび、計5つの遺跡の調査を実施することができた。ローム層の層位区分は、基本的に各遺跡とも同一担当者(筆者)があたったため、各遺跡(各地区)間における層

位認識上の差異は比較的小さいものと考えている。しかし、この様な認識を得るまでには、例え同一担当者であっても調査開始から一定の時間を必要とした。特にBB0層とL1H層、BB1層とL2層、L2層とBB2層の層位区分は調査開始当初は極めて困難であり、地点が変わるごとに試行錯誤を繰り返した。この結果、本遺跡群中におけるこれらの各層位間には、上下の各土層の漸移的な内容を持つ部分が存在しており、これをしっかり把握していないと、例え同一担当者であっても、ある地区ごとに各層位の範囲が上下しかねないという結論に至った。このため、本遺跡群中では、この様な漸移的な部分の存在を明らかにするとともに、この部分を単に上下どちらかの層位に振り分けるのではなく、敢えて1つの層として提示することにより、本台地上における層位認識上の問題点の一視点を明らかにした。

しかし、本台地上の層位は、堆積状況の良好さから長所のみが取りざたされてしまっているのが現状のようであり、このため、やや固定的に捉えられ過ぎてしまってはいないだろうか。 1つの例としては、実際の層位区分時に本台地上の既存の層位あるいはそのイメージが良くも悪くも調査担当者の意識に上がり、最悪の場合「〇〇層の次は××層」というようなあたかもそうでなければいけないというような判断基準を自らが事前に設定してしまっているということはないだろうか。この様な先入観が仮に存在しているとすると、調査・調査担当者の多様化に比例し、各遺跡間における同一名称の層位の対応関係に少なからぬ影響が与えられてしまっている可能性も危惧される。

本来、各遺跡の層位区分は、出土遺物の内容に左右されることなく実施されるべきであり、その後、「本遺跡のどの層位が既存のどの層位に対応するのか」ということを把握する段階で初めて出土遺物の内容が検討されるべきである。しかし、本台地上であっても、各層位間の内容的差異が小さければ小さいほど、層位区分そのものの根拠を遺物に求めてしまうという危険性も十分に考えられる。また、調査遺跡数の増加やこれに伴う調査および調査担当者の多様化、調査地域の拡大、調査期間の差異等、様々な要素が存在する中、例え同一人物であっても常に同じ基準で層位区分を実施することは、極めて困難と考えられる。

つまり、相模野台地上の各遺跡の層位の堆積状況や各層位の認識は、大枠ではほぼ一致しているものの、細部にいたってはこれまで述べてきたような課題がまだまだ残されており、決して絶対的なものではない。例え同一名称で記載されている層位名(L1S・BBO・L1H・・・)であっても、その層位区分にはあくまで各遺跡間ごとにある程度の「幅」が存在しているということを調査担当者も報告書を利用する者も十分認識する必要がある。これは、単に異なった調査担当者間で区分された層位についてのみ言及できることではなく、同一人物が区分した層位であっても、同様のことが指摘できよう。

相模野台地の層位については、その利点のみが広く理解されている傾向があるが、それと同じくらい気を付けなければならない要素(不安定要素)が存在しているということを同時に認識する必要があろう。

# 地域研究と時間軸

仲 田 大 人

### 時間の多層性

舊石器時代、新石器時代、青銅器時代および鐵器時代を、地質學者のいう時紀(エポック)のような絶對的な時期と、みあやまってはならない。ある地域―たとえば南部イングランドとか、エジプトにおいては、事實各時代が実際に歴史的時間という一定の時期をもっている。そしてすべての地域において各時代はおなじ順序で、互いにつづいているが、この時代は全世界にわたって、同時にはじまらなかったし、またおわらなかった。世界史の一定の瞬間において、天上ラッパがなりひびき、それにおうじて、中国からペルーにおよぶ各地の狩人が武器やわなをなげだして、小ムギとかコメとか、トウモロコシを栽培し、ブタやヒツジやシチメンチョウをかいはじめた、と想像してはならない。

チャイルド、V.G. (ねずまさし訳) 1951 『文明の起源(上) [改訂版]』、岩波書店。

ある地域における「時間」の長さを理解することは、同時に、この考古学的時間の相対的な性質をみとめることに等しい、とゴードン・チャイルドは述べている(チャイルド1951:75)。 考古学的な時間がけっして絶対的時間にはならないことを説くものとして、あらためて「時間」と「時代区分」を包摂した、「編年」について考えてみたい。果たして、それは「到達」したのであろうか。あるいは「到達」するものなのであろうか。

編年とは、歴史科学の方法による世界認識のありかたである。考古学における「編年」とは、考古資料をメタファー(隠喩)として制作された時間ともいえる。われわれは、考古資料を個別単位で理解しているというよりは、ある種の系列(Series)のなかに位置づけることで、それを捉えている。これによって、個別事象ではなかなか見出しがたい変化も、時間的な奥行きをもたせ、長い系列に整理することによって、段階的な画期を設定することが可能になると考えているからである。こうした方法は、型式学的手法として、考古学における基本的な作業であるし、層位的出土例を参照することによって、相対的な考古資料の序列をつくりあげるうえで不可欠な手続きであるといってよい。しかし、そうした考古学的手法に基づいて構築された時間のメタファーは、直線的・単系的な時間軸を構築することと、暗黙裡に強い関係におかれているようにも映る。だが、こうした捉えかた以外に、途はないのだろうか。

「時間」や「編年」などにかぎったことではなく、概念とは、いったんそれが共有されるようになると、あたかも客観的事実であるかのような幻想として、われわれに迫ってくる。より 考古学にひきつけてみれば、「編年」として共有された認識は、時間が定向的に前進するとい う線形時間という思潮(これこそが近代の産物なのであるが)と融合し、拡大解釈された概念として再生産されることに、誰しも気づいているだろう。線形時間は、それじたい深層において発展段階論的な歴史のみかたと抵触しているが、それと同等に、あるいはそれ以上に、「進歩」という歴史意識と密接なつながりを有しており、線形時間によって区切られた時代や段階は、一貫して前進し、発展する過程として位置づけられてきた。〈もの〉の文化史的な復原を命題としてきた考古学では、こうした進歩史観は非常に受け入れやすい概念であったわけである(ボウラー1995)。

しかし実際には、あらゆることがらの全体性のなかでの「変化」という問題を考えてみても、 そのスケールや速度、持続時間などは実に区々である。進歩もまた、一律に前進してゆくもの ばかりではない。フェルナン・ブローデルが、歴史を長期的な時間の幅において捉えることを 主張したことはあまりに有名であるが(ブローデル1989)、実際に彼は、日常生活の平凡な事 件や出来事などの「短い時間」が、あらゆる持続のなかでもっとも気まぐれで、歴史学者たち がもっとも騙されやすいものであると述べている。むしろ、時間的な厚みのない描写よりも、 歴史の表面にこそあらわれないが、深部において長期的に持続する現象、きわめて緩慢な変化 しか示さない現象に注目することを主張し、それを歴史における「構造」とよんだ。誤解のな いようにいえば、長期変動によってとらえられる構造―人口、社会、親族、心性、身体技法、 言語など―が、歴史の本質だということではない。それよりも、奥行きの深い歴史的時間では、 多層的な時間の諸相がいろいろな組み合わせをもって存在しているということを了解し、それ がある時点のうちに、いったいどのような相互連関のありかたをもって全体を構成しているの か、そうした質的な転換と画期を見出していくことが歴史学全般にとって重要なのだと、彼は 指摘したのである。このような立場をみとめるのであれば、考古学における「編年」という問 題もまた、どのような問題を考察するための時間的枠組みの設定なのかを意識化したうえで、 あらためて、どのような視角にもとづく「編年」なのか、問われなくてはならない。

シンポジウムの表題は、相模野旧石器研究の到達点であった。どうやら、編年は「到達」するものとして捉えられているようだ。ここに線型時間の片鱗を見てとるのは、果たして評者だけであろうか。

### 空間の多層性

編年は、時代区分の問題とともに、地域区分という空間的な歴史単位の設定とも緊密であることはもっと強調されてよいことであろう。考古事象という<もの>がくりかえし生起する以上、それは事相として空間世界とはけっして切り離して考えることはできないからである。これをよくあらわしているテクストとして、「相模野」という枠をめぐる小野正敏の示唆的な記述をとりあげよう

ところで、相模野では、こうした地域社会が少なくともⅡ期の頃よりみとめられ、時期ごとに姿を変え

### 地域研究と時間軸(仲田)

つつも、地域としての均質性を確認できた。しかし、V期にみられたそれまでと異なる遺跡分布の変化や、石器文化の複雑なあり方を前兆として、つぎの段階には、この相模野から遺跡群が消滅し、周辺の丘陵部により多くみられるのである。これは有舌尖頭器とともに土器がもたらされた時であり、相模野というこれまでの枠をはるかに越える大きい変動であった。それは、先土器文化の中に存在していた「相模野」が崩壊したこと、そして、先土器時代そのものが終わり、新しい時代の始まりを意味しているのである。

小野正敏 1988「先土器時代の遺跡群と集団」『日本考古学を学ぶ(3)[新版]』、有斐閣

ここでは、「相模野」が、いわば象徴的な空間として捉えられている。それは、われわれが認識しているような、単なる地理学的・地形学的な空間として画定される、それ以上の意味が与えられているようでもある。つまり、「相模野」を象徴的によみかえる背景として、時間の場合と同様に、その時代の社会構造と空間がかなり密接に関連していることが指摘されているのである。この視点は、ある地域をとりあげて遺跡の分布、遺跡数の増減、石器群のありかたなどを仔細に調べあげ、遺跡の編成や石器群の構造を理解することが、相模野の歴史性にとどまるだけでなく、より広汎な社会の全体構造を理解するための重要な手がかりを提供することにもつながるという、当時のリサーチ・デザインを端的にあらわしたものとして、いまだ聴くべき内容が多いものである。しかし、同時に看過してしまうことのできない内容もまた、ふくまれている。つまり、「相模野」という表現からもわかるように、われわれは「相模野」をもはや自明のものとして扱っているようだ。ただし、自明といえども、それは個々人の捉えかたが反映されているにすぎず、それが共通の俎上へと止揚されているとはいいがたい。ここで小野が述べる「相模野」とは、どのような歴史性と有意味性、さらにいえば地域としての広がりや、包括性をもつものであるのか、必ずしも著明なわけではない。この点が「相模野」という地域研究が依然として抱える、重要な問題なのである。

そもそも、地域研究とは、対象とする地域をどのように定義するのか、という問いかけをもつことによって成立している。つまり、地域とは何か、地域の範囲はどのように決定されるのか、ということがくりかえし論議されるべき性格のものなのである。その意味において、従来から先験的に措定されている地域概念が有効なのは、特定トピックの比較研究、単なる地形区分としての相模野の事象研究、といった便宜的な枠組みでの地域研究でしかありえない。このレベルの研究は、研究の初歩にある比較研究でしかなく、その背後に潜んでいる歴史性や構造性などが物語られているわけではない。

「地域」の評価とは、あるべき単位にラベルを貼って、範囲を決めるというところにある。 そのための然るべき手続きとして、先験的な地域をこえた、質的構造の同質性においてこそ、 単位は設定されなくてはならない。そして、その最終的な結果として、分析的な「地域」が導 出されるという手順が必要になってくる。にもかかわらず、データの集積、研究の進行と組織 を制定してゆくまでに、仮説としての地域単位を用意せざるをえない。そこに、循環論的矛盾

が胚胎されることになる。立本成文は、本来、述語的に決められるべき地域を、主語的に仮定せざるをえないジレンマを評して、「主語的分別」(立本1999:34)と言いあらわしている。これに倣えば、「相模野旧石器編年」という用語も、依然として主語的にわけられた「相模野」が対象となっており、「社会構造編年」「第四紀総合編年」という魅惑的な謳い文句を打ちあげたところで、静態的な地域編年の枠を何らのりこえるものではない。

さきに、時間の多層性についてその一端を触れた。しかし、それは空間(もちろん「地域」という概念もふくめた)にもあてはまる見方である。つまり、旧石器考古学における「相模野」の空間的な多層性の認識こそ、いま、問われているのではないだろうか。同時にそれは、主語的な意味における「相模野」を相対的な視野からみつめなおす契機にもつながるだろう。いわゆるシステム論的アプローチが、システム内部での変化と間システム的な枠組みそのものを変動させる変化があることを明らかにしているように、空間には着眼する等級によって多様性と多層性がある。述語的に統合される「相模野」が、主語的に捉えられた場合とおなじ範囲の広がりを示す等級もあれば、範囲を大きく逸脱する等級もみえることだろう。しかし、いずれにしても多様性・多層性で認識される空間の関係網のなかで、「相模野」という枠組みはいったいどのように位置づけられるのかという問題は、いつまでも未踏の課題なのではないか。そういった意味では、時空間を統合した研究上の文脈において、「相模野」旧石器編年とは、改訂と創成をたえず余儀なくされていると考えねばならない。

コメントという体裁上、なかば独白的な印象が強くなったようだ。つぎの引用で締めくくる ことにしよう。

歴史学が混沌とした対象全体からの、研究者による「選択」と「切りとり」であることは、民族学と一般である。自然の一部でありながら自然を対象化する意思をもつようになった人間にとって、しかも自己をとりまく外界にたえず共感一嫌悪や憎悪も含めて一を抱き、意味を与えつづける人間にとって、人間の営為も含めたすべての事象を自然史のなかに解消させて、それを対象とする「一つの科学」をつくりだすことは、原理として不可能であるだけでなく、不必要でさえあるだろう。

川田順造 1976『無文字社会の歴史―西アフリカ・モシ族の事例を中心に―』、岩波書店

### 引用文献

立本成文 2001 『地域研究の問題と方法(増補改訂)―社会文化生態力学の試み―』、京都大学学術出版 会。

ブローデル、F. (井上幸治訳) 1989「長期変動―歴史と社会科学―」『フェルナン・ブローデル〔1902 -1985〕』、新評論。

ボウラー、P.J. 1995『進歩の発明―ビクトリア朝時代の歴史意識―』、平凡社。

#### 執筆者紹介 仲 田 大 人 (国学院大学) 田 村 大 器 (野上建設興業文化調査室) 渡 辺 外 (かながわ考古学財団) 大 上 周 三 ( 同 上 ) 井 関 (同上) 文 明 小 池 聡 (盤古堂考古学研究所) 諏訪間 順 (小田原市教育委員会) 鈴 木 次 郎 (かながわ考古学財団) 織笠 昭 (東海大学) 砂田佳 弘 (かながわ考古学財団) 之 (愛知学院大学) 白 石 浩 御堂島 正 (かながわ考古学財団) 伊 藤 健 (東京都埋蔵文化財センター) 彰 ( 同 上 ) 五十嵐 栗 原 伸 好 (かながわ考古学財団)

目 次 英 訳 宗 基 秀 明 (鎌倉考古学研究所)

編 集 委 員 大塚真弘、諏訪間 順、田村良照、依田亮一

### 考古論叢 神奈河 第11集

平成15年4月25日 印刷

平成15年4月30日 発行

編 集・発 行 神奈川県考古学会

事 務 局 〒251-0043 藤沢市辻堂元町4-17-4

やよい在102

郵便振替 00240-9-71208

神奈川県考古学会

印 刷 (有)湘南グッド

〒251-0001 藤沢市西富1-3-16

電話 0466(25)2151

# KOKO-RONSO KANAGAWA vol.11

### **CONTENTS**

Hiroto NAKADA Technical Structure of Sagamino Micro-blade

Industry

Daiki TAMURA Disordered Pottery Types in Middle Phase of

Middle Jomon Period, and it's Potteries in South-

West Kanto Area

Gai WATANABE Long-necked Jars and "Stone Hoes"

-Chipped Stone Axes in early to middle Yayoi

Period from Kanagawa Prefecture-

Shūzō ŌUE Granaries and Warehouses under the Ritsuryo

System in Kanagawa Pref.

-focusing on "Odawara Chronology" Period IV-

Study on the Excavated Ceramics from Odawara-

jo arround 17th Century

Satoshi KOIKE A Excavated Copper Coin Hoard from Obunemori

in Odawara City

Jun SUWAMA Satoshi KOIKE Jirō SUZUKI Akira ORIGASA Yoshihiro SUNADA

Fumiaki ISEKI

Hiroyuki SHIRAISHI Tadashi MIDOUSHIMA

Ken ITOU

Akira IGARASHI

Nobuyoshi KURIHARA

Hiroto NAKADA

Comments on the Symposium "Present Comprehe nsion for the Sagamino Palaeolithic Chronology